

柏崎週報社刊

柏崎百年

笹川芳三著

柏崎週報社刊

柏崎百年

笹川芳三著

目次

承前 夜明け前 百年史以前の柏崎形成の風土……………1
起後 百年三期 最初の地図と三期区分……………4

第一期 郷土の夜明け

一 風雪の朝……………7

- ① 戊辰の嵐 内戦にまきこまれる
- ② 鯨波口の戦い 柏崎の不安動揺

二 官軍向き……………13

- ① 広い世界に 官軍民宿・秀通と藤兵衛
- ② 名利を求めず 星野藤兵衛の功業

三 浮沈無情……………19
無情の波 だんな衆の実力・名家没落

四 教育の門を開く……………22

- ① 行政施設の第一号 柏崎県学校の規模
- ② 師の志をつぐ 柏崎学校の新風 寺子屋と夜学塾

五 文筆開花……………28

六 青雲の志

- ① 自学自習の意気 街の新学徒、桑山直二郎と尚商館
- ② 日本最初の雑誌 出版活動、雑文の雄松村操
- ③ 新興文芸へ 越山による気運、文芸活動
- ④ 近代的なセンス 新聞誕生、出版活動の展開

38

七 騒動一過

- ① 学モン成ラズンバ 少年久寛の立志
 - ② 不毛の思想を排す 青年久寛の刻苦と知見
 - ③ 独立自尊の命脈 与助と常次郎、こう然たる青年群像
- 騒動の真相
- 米騒動のあらまし、果して政争の具か
- 深刻な不安から 騒動の真相
- 人間への目ざめか 過去の騒動と比較して

46

八 縮布挽歌

- ① 細かくは見るが 縮の鑑定と柏崎人の目
- ② 生活権を守るために 十組の市場支配との抗争、解放
- ③ 縮商いの衰退 これまでの原因説の修正
- ④ 意味のない原因 水路利用も鉄道開通も
- ⑤ 綿布がダークホース 綿作の普及と綿布の生産、国民衣料の交替
- ⑥ 綿布の市場進出 自給的生産用具のいざり機、專業的生産への高機
- ⑦ 農民的生産の縮布 農工未分離と農工分離の問題

53

九 教育問題補稿

- ⑧ 開国のおよぼす影響 輸入綿による市場の分断、産業構成の変化
 - ⑨ 大勢決す 新政府の殖産興業政策、在来産業の余命
- 明治元年の創設
- 柏崎洋学校の推移
- 柏崎洋学校と新小学校、洋学校閉校
- 柏崎県校と新小学校、洋学校閉校
- 柏崎県校と新小学校、洋学校閉校
- 官費にならず 柏崎県学校の推移、官費不支給の理由
- 行政変動のなかで 県学校再建費のねん出
- 一万石につき一石五斗 官費支出の算定基準、出石資金の方法

第二期 生活の近代化へ

一 水泳場史

- ① 清風陣々として 海水浴場出揃う
- ② 体力づくりには 泳法指導の普及、地の利に甘える

二 余話一束

- ① マッタ無し 郷土出身柏戸三代
- ② 新しい灯 ランプ出現、ランプ取扱布告
- ③ 二つの厄介物 田代父子新技術の工夫、揮発油と重油
- ④ 代替地はヤブ砂原 大火対策 不具となった柏崎

100

05

三 悲願五〇年……

- ⑤ 神器未熟 自転車、電灯の普及のテンポ
- ⑥ 未熟をのりこえて 電話の普及テンポ、民力未熟の原因
- ① 根強い形態から 在来産業の苦境打開の四方向
- ② 科学的な思索こそ 勝海栄治郎十八才の発願、洋式織機
- ③ 心の構えが 柏崎女紅場の実績、綿か絹か
- ④ 工夫に工夫を 栄治郎の三つの願い、集団による基幹産業へ
- ⑤ 悲願に燃える 洲栄工場の盛況、夢水泡に帰す

四 石油開眼……

- ① 近代石油産業発祥 製油積み出しの盛況
- ② 自力振興のたくましさ 製油輸送法の海陸交替、港町の活力
- ③ 技術進歩の開幕 日石海外技術の導入、技術革新
- ④ 不屈の構え 世界最初の人工島、広瀬貞五郎と石坂周造
- ⑤ 生きがいを求めて さく井機械の工夫、新方法の採用、創造性の開発
- ⑥ 千差万別 粗悪品の代名詞、乱立業者の無責任
- ⑦ 体質改善 インターナショナルの出現、製品の改善、製油技術の研究
- ⑧ 置き去りにされた原因 その一、日石創設の舞台、改進黨グループ
- ⑨ 置き去りにされた原因 その二、経営主体の確立、株券熱
- ⑩ 無計画性の悲劇 油の町の裏側、無惨な低落
- ⑪ 中隊長格までは 体質的な悲劇、大洲地区の職業動態から

五 振興ムード……

新工夫活発 興業活動展開、新名物、新事業、刈羽鉄道問題

六 青年讃歌……

若々しい力 青年集団が町づくりの中核となる

七 新工業躍進……

- ① 新産業の第一走者 理研産業団における柏崎工場の意味
- ② 試験工場の役割 理研柏崎工場の推移

八 上水道十九対六……

- ① 全町の二〇％ 上水道竣工までの大要
- ② 空前の大事業 上水道工事の大要
- ③ 反対の根拠その一 柏崎の地域的水質
- ④ 反対の根拠その二 大工事に目をまわす、深刻な不況
- ⑤ 論争の火の手 増税可か否か
- ⑥ 一歩あやまれば 愛町公債論、寄付金募集問題
- ⑦ 火に油をそそぐ 水道料金問題、各町会議、反対町民大会
- ⑧ 見捨てることができるか 党争化、えんえんと続く反対運動
- ⑨ 六〇倍の躍進 上程町会、工事着工、影響圏

九 統制期資料……

- ① ほしがりません 昭和十五年～十七年の資料
- ② ひたむきに信じて 昭和十八年～二十年の資料

十 開拓団柏崎村……

- ① 理念に燃えて 転業開拓団、前田義三郎氏の熱意
- ② ことの重大さに 柏崎村建設期成同盟会、訓練開始
- ③ 一切は自らの手で 先遣隊壮途につく
- ④ 寒気はげし 入植地の概観
- ⑤ 新しい土 入植当時の記録
- ⑥ しかも果敢に 柏崎村の経営規模
- ⑦ 烈々たる斗魂 村づくり、小熊団長死す
- ⑧ 二〇〇戸の夢が 柏崎村の生活、構成

第三期 新柏崎の建設へ

一 生還の記

- ① 暗雲重し ソ連軍侵入と現地の事情、根こそぎ動員の柏崎村の事情
- ② 米がつきる 大古洞集団所で越冬
- ③ 脱出二七〇キロ ヘルビンへの道
- ④ 垢だらけの手に 花園難民収容所での生活
- ⑤ 生死の谷間から 泥招の四〇〇日、病死一〇〇名

二 新生期資料

- ① わびしい平和 終戦時の柏崎の街
- ② 休校三日 ニューヨーク部隊柏崎に駐留
- ③ がまんできない すべて不足、自家製塩、学校菜園

三 食糧危機

- ④ 人間不信の 学校盟休統発
- ⑤ 焼石に水 総合切符による家庭配給
- ⑥ 座して待つよりは 悪と善と、柏崎市生活必需品消費組合の活動
- ⑦ あてつぎの洋服で 需給のバランスくずれる、露天市場、文明開化以前
- ⑧ すべて行列 燃料不足と生活の危機
- ⑨ 半身不随 ガスストップ、石炭不足と生活の危機
- ⑩ 最低生活で 闇価格と家庭経済、新田登場の及ぼすところ
- ⑪ あすを信じて 新憲法公布の日を迎えて

四 徒手刻石

- ① いものシッポもなし 二十年の凶作と供出難行
- ② たけのご生活 野草食、悪疾、闇ルート、干天の慈雨
- ③ 叫喚と怒声 初のメーデー、強権の発動
- ④ 兄弟を見殺しにするな 飯米危機対策、救援運動

五 子どもへの構想

新しい生命に 日本児童文化研究会、子どもタイムス

六 教育復興

- ① 新たな構想 新潟短期大学、県立柏崎養護学校
- ② 荒野をひらく道程 柏崎小学校、比角小学校の教育実践



- 明治44年 3月28日 柏崎市田町にて出生
- 昭和 5年 3月 新潟県高田師範学校卒業、教職につく
- 昭和44年 3月 柏崎市比角小学校長を退職、小学校教員40年に終止符をうつ
- 著 書 「子供の世界」(昭23, 牧書房, 共同)
「学習評価の方法と実践」(昭24, 牧書房, 共同)
「子どものための柏崎物語」(昭35, 柏崎日报社)
「続柏崎物語」(昭38, 柏崎日报社)
- 現 在 柏崎市文化財調査委員, 柏崎市綾子舞後援会理事、柏崎保育所長

七 アンブル精神……
開拓者の気概 市民生活のとほしき、電力事情、スト事情、業界自主開発
「柏崎百年を終わって」……

書かれるべきものが実現した

西 卷 達 一 郎

笹川先生によって「柏崎百年」が柏崎週報紙上に書かれるようになったとき、私は、先生によって当然書かれるべきものが実現したとの感で一杯であった。というのは、先生は数年前に「こどものための柏崎物語」を発売された。このとき、先生から、子供という対象のために使用しなかった資料や、未整理の資料が手元に残されていること、そしてそれ等を整理の上発表する機会を持ちたいと聞かされていたので、この日のあることをひそかに期待していた。

しかし「柏崎百年」は決して簡単に生れたものではない。先生にとってかなりの労作であったに違いない。先生は校長という責任のある立場にあって、なかなか自由の時間を持ち得なかったろうし、気を配ることも多かったであろう。と共に、特に身近な郷土史の場合、偏見や独断をつとめて避けなければならぬだけに、百年という歳月はあまり長くないし、現在の私達の直接に結びついている事柄に対する配慮も必要以上にしなければならなかったであろう。また、案外に滅失とか忘却という部分がありながら、多すぎる資料の取捨選択に苦しまれたことであろう。そのような苦心は「柏崎百年」の中に数多く感じさせるものがある。

そのような中において「柏崎百年」を読んでも思うことは、郷土柏崎に寄せる先生の愛情が常に背景となつてこれが書かれているということである。時に冒険と思われるような解釈がされるときさえも、郷土への愛着が脈々として貫かれ、その所論を納得させずにはおかない。

先生の静かであるが郷土を語るときの熱っぽい口調を想いおこさせもするのである。先生は、かつて子供達に自分の郷土を見つめさせ、柏崎の灯を高くかかげる誇りを持つとうと呼びかけられた。いま、私達に郷土の百年を語ることによって、更にその灯を郷土の将来に明るく輝かせてほしいことを希っておられるのではないだろうか。

(柏崎市文化財調査委員長 柏崎商工会議所会頭)

笹川芳三

承前 夜明け前

「北越の文柄、柏崎によりて握らる」と評された例に、文久二年(一八六二)妙行寺に開かれた書画の会をみると、星野鏡里、原修斎等十五名が柏崎側の幹事で、県内だけでなく江戸からも参会する雅客二十九名を数えることができる。「以て知るべきなり」とは「三四郎柏崎」の表現。柏崎の文人といわれる人を十二家三十人はらくに列举できるのだから、まさに旦那衆の学風によって文化的風土を形成していたというべきかもしれない。

こうした旦那衆が柏崎に富を将来した系列は

- 1 宿駅に由来する旅宿を中心とするもの
- 2 新田開拓による不在地主の地位を拡大強化したもの
- 3 縮布行商。近江商人を相手にして商圏を確保し、江戸十組問屋を相手にしては四十年にわたる訴訟事件にひるまず。幕府の援護を受ける大問屋に対して在郷商人の勝訴となるリーダーは柏崎人だった。
- 4 廻船問屋。寛文五年(一六六五)船役を業とする納屋町(港町)の戸数は、全町七四七戸の一九%。同一四年

の記録では二百石積以上の穀は柏崎一二、宮川六、椎谷四。柏崎浦浜六二そう。慶応三年（一八六七）出船一五そう、入船七〇そう、取扱三万七千両。廻船雄飛といたい。

5 酒造業、薬種屋、米穀商、塩釜の賃貸業ナベ屋、民間金融兼業等のもの。

こう分類してみると、開拓者精神に撒していることに気づく。

「外」に出るのをオクタクがらない気風が生れたという。

着物の美を競うのではない。「茶の味」を楽しむおだやかな物腰が身についたという。いつも細部を見ていて大局を丹精を鑑別する深みのある目が縮布屋にそなわったという。しかし、その目はまた、いつも細部を見ていて大局を見るのが弱い住民根性につながった。いつも旅にむけられていて、郷土の向上には関心がうすい気風ともなった。あわせて、文化年間、焼けた柏崎神社を下浦町（旭町二丁目）から現位置に再建した大半の力は廻船、米仲買の西巻庄左衛門。真応尼に不求庵を贈ったのは生薬屋山菫の主人静里。西光寺を大久保に建立したのは大天屋市川与三太夫と指を折ってみると、柏崎を支配した五本の支柱から発する市民性の源流を思わずにはおられない。柏崎百年の自己形成は、この採長補短変容を課題とせざるを得なかったのではなからうか。

幕末期の柏崎人の精神的緊張は、また休む間もなかった。

「家の軒下冬もれんじ雨戸はなく雪払いをかけ、よしずを引き廻しておく」町家の生活程度で、飢饉ともなれば「クズの根をくい、こどもを川に流し」と記録される。生田事件の発生は天保八年（一八三七）の六月。万の墓の横の草茂るなかに地藏や石塔が六塔ならんでいたが、左端の塔には「天保四年の凶作で窮民数百人、病死三十人ばかりあったので、天保六年墓を建て祭之」と書きまれている。右から三番目の線彫り地藏は天保八年四月、加藤のばばさん

が餓死者のために建てたもの。しかも、この年二月には中浜は火災で全滅、七年後には広小路おとい火事で二百十一戸を焼き、更に十五年後には鶴川の大洪水とコロリ病の流行で恐怖に包まれ、更に八年後には米価高値で人心動揺しているとして盆踊禁止の布達がでる。

天保十五年（一八四四）には異国船防備指令が出て、「納屋町裏に、みの笠山刀鎌銘々勝手に持参の事」となり、青海川笠島鯨波に砲台ができ、星野氏の大砲献納は、佐久間象山の指導を受けて原琢斎が鋳造。急迫感にかりたてられる。領主からそのための冥加金を徴されて八百七十七両一分を献納する。星野藤兵衛、普請御用掛となって剣野山に御殿造りの陣屋非常立退所を建築する。費用七百五十両のうち藤兵衛の出金五百五十八両。藩主が京都所司代となったので献金を命じられ、百両二百両と「冥加寸志献納之儀」となる。

そして、慶応三年（一八六七）には「京地の御入用莫大におよび、殊に昨年桑名表御領分大凶作、之に加ふるに江戸表御屋敷御類焼、御家中多人数引越に付、御長屋建方並に御軍器御手当等臨時いやが上の御大用に有之」というわけ、莫大な臨時御用金が賦課された。実に二千八百五十両という大金だった。

こうしたなかで、星野、原の両家塾を軸とした私学にエネルギーが注がれ、茨目の算者村山禎治の算数教授も特異な存在であり、半田の阿部新左衛門による石油製油法の発明、製油所創設（一八五二）は新産業の芽となるものであった。

柏崎百年の素地は変革はげしい時代に対応しようとする夜明け前の期待を秘めている。

起 後 百年三期

百年の第一歩を踏みだす柏崎の地図は、駅通りは山田小路と呼んで、大八車がくると、よけるに溝に足を落さぬ用心が必要で、加納書店のあたりがハズレ、遍照寺を「地外の寺」と呼び、その外側はジブジブ田圃。間光寺の御拝のうしろがハサ場、今でもその名残りのハンノ木が規則正しく並んでいる。その外側は湿田。この一線で住居帯が画される。

山々と呼ばれる砂丘線が一段高く、港町を日かげの街にし、本町への通路は、どの小路も見上げるような坂道。えんま堂の裏手はヨシやぶの土手、旧商高校あたりは砂山の起伏がつづき、緑八丁の松林、諏訪町は風よけの砂山を背にし、文化劇場のあたりも砂山つづき。この点をつないだ線の海側はすべて起伏の多い砂浜、海浜植物の宝庫。グラウンドは巨大な砂山でハマゴウとグミ林で足の裏が痛い。そのかげに川尻の名残りの大きな池があって「田の頭（ガシラ）」と呼ぶ。

古見野一帯の荒地は団子山まで続いて、浜と呼んだ。グミ山とネムの林、松の緑、表通り筋の人家の裏側には、いくつかの沼があって、ヨシのしげみがつづいている。

この骨ばった地図の上に壁画が描かれようとしている。

三期に区分して概観してみたい。

第一期三十年

「郷土の夜明け」

伝統を守ろうとするものと、新しいものを取り入れようとするこの緊張の表現といえることができよう。ここに柏崎の進歩的な意義を見いだすことができる。

普通には「縮布のまち」といわれているわけだが、精神生活の角度から視点をあてて、柏崎百年の初期を見直してみたいと思う。

第二期五十年

「生活の近代化へ」

「石油のまち」「工業のまち」と区分されている時期をひっくり返って読んでいこう。

この期のテーマを集約してみると、「生きるため」の創造でなく「生きがい」を求めようとする創造の壁画。そう設定できるような気がする。

たしかに、この期の根底に、自ら耕やさぬ便乗的性格が横たわっていたということもできよう。「おくれてしほむ柏崎」の可能性が支配的であったかもしれない。しかもなお、この壁画がわれわれに告げようとしている開拓者精神に耳をかたむけたいと思う。

第三期二十年

「新柏崎の建設へ」

いうまでもなく戦後の柏崎二十年史である。郷土じしんの歴史が既にきりひらかれたしている。それはお互に実感しているところ。

「強固な自主への意欲と、大胆な近代化への意欲」を希求する新しい進歩の立場から、とテーマを設定しての歩みではなかったらうか。

この期については、本稿で多くを語る必要はないようだ。お互いに呼吸している世界のことであり、土器に種油を盛り、灯心による行灯を囲んだ時から、電灯一九二、九六九灯、電力契約二八、五六一キロワット（昭和三八年）の今日では、考察領域が分化していなくてはならない。

江戸まで七日、京都へは十四五日を要した時から、明治三十六年「沼垂東京間の列車日着は七月一日より実施す。

沼垂午前六時五分発は午後十一時二十分に上野に着するものにして、長岡の一、二番と直江津の一、二、三番とは当日中に東京に着するを得る訳なり」

（中越新聞）

と、その日に着くことが出来るようになり、今日では日帰りすらできる。こうまで生活条件が高まっているからには、専門分野からの考察でなくては意味を見出すことができないのではなからうか。

そこで一、二のエピソードを綴ることで責めをふさぐことにしたいと思う。

第一期 郷土の夜明け

風雪の朝

慶応四年、これが百年のスタートをきった年号で、九月八日に改元されて明治元年となるわけ。この最初の日に郷土をゆすぶったニュースが「領主松平越甲守定敬が一月三日から六日にかけて鳥羽伏見口で破れ、朝敵となられた」というもので「此の里も如何になりゆくらんと人心きょうきょうたり」と書き残される事態となった。

一月十五日

「不穏な世態に有之に付、小路小路は成るたけ切にいたし、通路の無い場所も夜分は切に取りはからうことよごものの宿泊でうるんの者は吟味せよ、怪しき儀候節は取敢えず注進の事。夜中の無提灯は不相成」と戸毎に口達される。

二月六日

昨夜、鉢崎御泊の御勅書が雨降りの中を柏崎通過、この日は椎谷御泊。

勅書入りの唐びつ持四人、台持十五人、駕籠二挺、目付二人、徒士十人、足軽三十三人、上下八十人、宿人足六人

の一行を大庄屋や町年寄役が麻上下で先導。組頭、門前頭は股引羽織で小路小路にて送迎する。

三月晦日（三十日）

晴天、中将様（松平越中守定敬）御儀昨夜石地御泊、今昼荒浜に而、末の刻半（午後三時）頃御着被遊候。

星野藤兵衛が命を受けて作っておいた剣野山の御殿は謹慎中であるからというので使用せず、勝願寺に入られる。

勝願寺が本陣となり、百余人の兵士は西光寺下の広場に仮営する。

四月三日

家老吉村権左衛門、大久保村二ツ井戸附近にて暗殺せらる。

那代平松多門、郷土星野藤兵衛等と力をあわせ、苦心惨胆匡救の誠をつくした結果、恭順と決したが、このために水泡に帰して官軍に抗戦することに急変する。

四月十一日

脱藩して江戸で抗戦氣勢をあげていた一行が、薄暮柏崎に着き、即時中浜勝願寺に至り君公に謁す。

四月十四日

いくさ始まりなば町家は皆焼かれんとて、家財を荷送り、背に負い、たんす夜具などは馬にて半田枇杷島村など四方の村々へ持ち運ぶを町口の見張番所に止めれば、山の道や浜てを行くもあり、昼頃よりはおびただしき事にて、彼の見張番所にもとどめ得ずとなむありける。

このさわきが二十日頃を最高潮として「市中道具の往来にて火事有之がごとし。実に前代末曾有の事也」と鏡月堂日記に記された。

四月十六日

晴天。中将様今朝、抗戦指揮のため加茂町へ向って御出発。北条を通り小千谷へ御越しになられ、それより加茂町へ御越しと申す事也。

同日

歩兵組五百七十人、今朝出雲崎を出て柏崎泊り也。行列立派なり。

はたご屋では夜具不足で大きわざ、町々から借り集め、町頭や組頭ははたご屋詰め、出迎見送りの駅場係や案内係を差し出す。

四月十七日 はたご町の歩兵組出陣

四月二十七日 飯山戦争の一件、高田方面の動静が伝わってくる。

官軍と東軍、鯨波にて激戦。柏崎町民は兵火をおそれて皆近在に隠れ、壮者のみ留守居しいたり。

東軍は柏崎を本営として分隊を半月前から鯨波に出し、各要地に番兵を置いた。この分隊が例の脱藩江戸組で、主戦派の精鋭六十一人だったという。

四月二十八日 歩兵隊のものが信州路から追々引返してくる。昨夜は三十人余、本日は五十人ばかり。

柏崎百年の第一頁に記録されたものは、古きを死守しようとするものと新秩序に生命をかけようとするものとの内戦による流血であり、それに巻きこまれた柏崎人のいいようのない不安動揺、てんやわんやの混乱であった。

陣屋支配ののどけさをなつかしむ情を心の底に残して、百年史以前に生じた精神的緊張を更に硬直させざるを得なくなり、そのことが柏崎人の順応性をいつの間にか高めるものになった。

寿命の縮む思いの数か月。いやがおうでもそれを呼吸しなければならなかった第一年は、百年史で唯一回の貴重な体験であつたはずだ。

誰しも、いいようのない不安におののく時には、自分の生活を守りたい 助かりたい。

縁板根太まで在方へ送るもの、運ぶ間もないとて穴蔵はもろんのこと、手当りしだいに穴を掘って、器物、着物類をつめこんで上に砂をかぶせてかくす。二十日の夕方から流言がとび、こよい町がみな焼かれるといい騒いで、いやみの暗いなかに荷を背負った老人、足弱のもの、さてはこどもたちもまじえて右往左往、在方へ逃げて行く。「其の騒ぎ言わむかたなし」風雪の猛威にも似た異常な危機感にしめつけられる。

引き続いて更に経過をたどってみたい。

四月二十七日

仏暁、高田を根拠とし青海川に兵を出して、鯨波出はずれに布陣して東軍に対峙していた官軍が行動を起す。

官軍は薩州一小隊、長州二小队、加州一小隊、砲二門、高田兵は援隊。東軍は薩長に押され、人家に次々と火を放って退き、鯨波の嫁入坂、小河内山に陣を備える。

村の人の話によると、向山・ホテルの山、御野立公園の出つ鼻にも大砲を据えつける。本物が二門、あとは木製の見せ筒だ。坂ののぼり口には西側に壘を高く積みあげ、まん中を一枚通りだけあげた関門を作り、崖の中腹には幾段に

も穴を掘って隠れ、上ってくる官軍を片っぱしから切りおとす。

大砲をドーンと撃つと、人夫たちにワーツとトキの声をあげさせる。声がうまくでないというので叱られる。笑い話みたいただが、この十人余の人夫たちにとってはそれどころではない。強制徴発された村の人なんだ。

この日大雨如傾、溪水暴漲、官軍地の利なく苦戦。官軍参謀の山県有朋が「何分嶮岨ニテ一騎当千ノ処」と嘆じ「薩長勇進、其山ヲ奪ヒ、直ニ万神堂ヲ攻メントス 加州勢続カズ、且日没ニ及ンデ兵疲ルルヲ以テ 鯨波ニ引揚ゲ候」と「越の山風」に書いている。

官軍討死十一人、手負三十九人

東軍討死一人 手負三人

四月二十八日

東軍小千谷口利あらずの急使来り、末明、鯨波、黒岩の兵を引きまとめ、柏崎をすてて妙法寺に向う。

午後、星野藤兵衛、中村雄右衛門兩人にて塔之原迄官軍の出迎え。柏崎まで案内してきたところ、東軍の歩兵一人が早駕籠で問屋場まで来かかり、官軍を見て逃げ出す。よって官軍は町方に宿をとらず、中浜下宿に陣取りとなる。

四月二十九日

巳の刻（午前十時）水藩の人数が押し来て鵜川橋あたりで官軍と撃ち合いとなり、市中大騒動となる。

昼近く、下筋より浪人三十人ばかり襲撃、官軍出動して追い払う。この時、悪田部落焼かれる。砲声しきりに聞える。

きょうの市街戦で市民の犠牲者は即死七人、手負六人。

五月六日
 椎谷にて戦争、椎谷焼かる。
 曾地村、花田村砲火にて焼かる。

五月十一日
 諸方へ逃げ散ぜし町民、西より東より我が家に帰り、久々に親子兄弟顔を合わす。
 穴から隠匿家財をほりだしてみたら、十数日の雨や湿度で多くは使いものにならず、その上、官軍の人夫にほり荒
 されて貴重品は大部分盗まれ、星野藤兵衛や小熊六郎のおかげで町は焼かれませんが、実際は全町半焼の損害
 だといわれる。

さて、柏崎町にては町家を借りあげた野戦病院もでき、官軍の止宿を家毎に申しつけられる。軒毎に夜具の徴発が
 おびただしければ口説小言八百にて町役人も立往生（煮出した茶のみ、店頭ののれんはむしろを下げ、縄のすだれ
 を下げ置く当時の柏崎生活で、夜具にゆとりのあろう筈がない）官軍衆の宿の申付け方は、薩藩など刀を抜きかけな
 どしておどしければ、せんかたなく宿をつとめる。

その中へ妙見の戦に傷を負いて来るもあり、死骸を持ち運ぶもあって其混雑たとえんかたなく困る事度々なり。
 然るに小前の婦人共は追々当所へ入込みし官軍の暗などして多分の賈いあり。婦人共は大政官札を手づかみにして
 着物反物諸品等の買物に歩きけり。

長かった極度の緊張がようやくゆるみはしたが全くの解消とはならず、貧しい市民にブームに乗ったアンバランス
 な浮動的な生活様相が現われさえするが、風雪の中で用意された、個人への目覚めの第一段階というべきかも知れな
 い。

官軍向き

七月十六日 長州干城隊下陣六人
 八月 四日 富山藩隊長副役上下三人
 八月十二日 土州植田竜太郎様上下六人
 九月十三日 高田御用宿七人
 十月 十日 長州奇兵隊六番小隊上下八人
 十月十五日 芸州要撃隊四分隊上下七人

これは本町五丁目泉三右衛門（東本町一泉金物店）の諸藩宿陣帳にあるもので、越州大砲隊、加州五番隊或は輜重
 護衛小隊、小荷駄方、病院隊、薩州十番隊など見えて、七月から十二月までその数二十五夜一二九人に及んでいる。
 翌明治二年は二月まで八夜四〇人となっている。一町家の民泊記録である。

なかなか落ちつける日がこない。然し、居ながらにして諸国の人々と交流できた民泊が郷土に与えた影響は大きか
 ったにちがいない。明治の変革を実現しつつある庶民的な原動力に直接触れることになったわけだし、土地のうちだ
 けを見ていた世界が垣根をはらって、もっと広い世界に目を向けることにもなったろう。回船、縮で諸国に視野をひ
 らげていたといっても、それは問屋グループを主軸としていたもの、多くは内に暮らして外を見ずに一生を終える原

則に立っていた。その市民の狭いからを打ち破る役割を荷なつたと考えられないだろうか。何となく現状が不安である。そこから外を見る好奇心と活力を持つような時がきていたのではなからうか。

「沢采女こと越後より会津の方へ参り候節次男茂作と申す人、若党に上り候由の義、始めて承知申し候ところ、采女ことは末だ帰国に相成り不申（中略）幸次郎（采女の下僕として同行したもの）一人帰国申し候えども茂作の義少しも話いたし不申候事甚だ不審の事に御座候（中略）水谷藤七（采女の家来）事は兼ねて函館の名前にも拝見につき茂作事今に帰国不仕候と承り候ては、さてさて不安心の事に御座候」

丸田桜隠から大久保村治三郎に宛た明治二年十月三日付の手紙である。治三郎の次男茂作が桑名の御政事総裁沢采女について会津へ行ったきり、函館の戦も五月にすんだのに音沙汰がないが、采女の養父であるあなたに何か連絡はないかと問い合わされたことへの返書で、哀切なエピソードとなったが、若者の気風がこんな形でも高まっていたというしるしとも見られよう。

こうしたなかで市民が大きな柱として頼りにしたのが星野藤兵衛であった。

第三頁に書いたように、藤兵衛は、領主来柏の時の非常用として普請御用掛となつて剣野山に御殿を建てた。（結局は、藤兵衛が買取つて自分の別荘にし、庭に旗亭川内屋を設けたりしたが、星野家没落の時、この御殿は屏町に移された。）他の旦那衆同様に領主、陣屋の支配に協力しなければならぬ。然し、藤兵衛が内部に感していたものは、古い時代から新しい時代への、名分に対する洞察があった。

鯨波の戦の六年前に、藤兵衛方に草鞋をぬいだ近藤芳樹という歌人が四か月滞在した。この近藤は長州藩士で、和歌の遊歴とは表面、目的は別にあつた。桑名藩は藤兵衛の動静に注意し、すこぶる警戒を加うとある。

近藤来柏の一年前、谷根慈眼寺に住職として十七才の秀遍が大和長谷寺から入山して、若者たちに四書五経などを教えていた。ところが門弟の小俣新十郎の日記に「秀遍は時世物騒に付東奔西走せられ学ぶこと困難にて」とあるような活動ぶり。実はこの人、修業時代に京都の仁和寺で宮様の侍僧か何かをしていたらしい。仁和寺宮様とは会津征討越後口総督として七月十五日、妙行寺に宿陣された小松宮嘉彰親王のこと。だから秀遍は親王来陣以来、親王と行をともしして土地を去つた。官軍坊さんと呼ばれるゆえんである。この坊さんも藤兵衛とつながりを待っていた。藤兵衛の番頭をしていた鯨波の日吉屋佐兵衛は、南面を習うということと谷根とゆききしたという。秀遍の画や書の才は、すでに円熟の域に達していたといわれている。

こうして藤兵衛は心に深く期しながらも、陣屋支配下の立場は微妙であり、積極的に桑名協力の態度をとりながら大乱のきざしに対する布石の苦心があつた。町を災厄から救うための大きな努力ともなつた。庶民に対する深いいたわりの情として発想することもあつた。

明治に入る十一年前、藤兵衛三十才の時のこと、凶作で米価が一、五倍となり「窮民飢餓に苦しむ」を救うために自ら米三百俵をだし、更に他にもすすめて三百俵ださせたところ、流言をとばされて数百人の暴徒と団体交渉ということになり、みな、その徳に服したということがある。藤兵衛の一面を知ることができる。

いよいよ風雲急を告げるにいたつて、星野藤兵衛が大久保村小熊六郎（後官吏に登用され、刈羽郡役所主席書記で終始し、当時異常の出世と目せらる）とともに、町を兵火から守る努力をしたことは高く評価されているが、「誠意浅からず心労祝着に候」と北陸道総督副将の朱印をもらった内容をみたい。

一つは官軍に対する糧米差し送りの功に対してであって、実に独力で九十二万食を提供している。

一、兵糧三八一、三二七飯 六月二十八日より八月三十日まで諸藩への締高
 一、兵糧三〇〇、〇〇〇飯 宮様御滞泊十日間御本営へ差送るノ高
 一、兵糧二七、〇〇〇飯 七月十一日新潟表へ軍艦御廻送の節積込候分
 一、兵糧二八、三〇二飯 九月諸軍御帰国の節下宿へ差送り候
 一、兵糧一八五、〇九五飯 焚出人夫一昼夜一人五飯宛
 合計 九二一、七二四飯 白米 二、七六五石一斗七升五分
 外に白米一〇石四升八合 三病院五月二十日より七月二十九日迄差送候分

これに対して御下渡米は七一石五斗三升でしかない。更に藤兵衛の目録はつづく。

一、人夫三七、〇一九人 この日料一人十二銭
 一、酒一二三石四斗五升 値段両に一斗八升
 一、割木六五〇棚 一棚一円十二銭五厘
 一、味噌 四、二〇〇貫 一両に十四貫目詰
 一、梅漬 三七〇、〇〇〇粒余 一粒十四文替
 一、にしん 七二、〇〇〇本 九文二分替

一、あらめ 三二俵 一俵四貫入両に四貫五百
 一、干小鯛 三五、〇〇〇枚 一枚六十七文替
 一、茗荷 一三五、〇〇〇個 一ツ十四文替
 一、干鳥賊 三五カ 一カ八十把入五兩二分替
 一、水こんにやく 六三、二〇〇枚 百枚に付三貫文替
 一、奈良漬 一二、八三〇枚 一枚二百七十二文五分替
 一、茄子漬 一五八、〇〇〇コ 一ツ十三文八分
 一、しょう油 八五樽 一樽八升入五百六十文替
 一、草鞋 一二、〇〇〇足 一足三十五文
 一、胡瓜漬 七、七二五本 一本二十七文五分
 一、空俵 三、六七六枚 一枚四十五文
 一、縄 八二束二把 一把三十文替
 たいへんな数量なのに驚く。これを白米分も含めて計算すると二万九百六十五円九十四銭九厘となる。

これに対して御下げ渡しが米七百十一石だから金額にして三千五十円位でしかない。忘庵さんは藤兵衛の出費を、今日の金額に換算すれば数億円ということになろうといっている。

それにしても、これだけの数量を調達するには近在からかき集めるといふ忙しさはもろろんだらうが、平素の

準備がなければできないことだ。富刀あればこそではあるが、先見のちえというものはかくも鮮かに局面对処できるものなのか。舌をまく思いである。

「糧食兵器は海防令によって蓄積し、一方鶴川より剣野山に至る道を開き、港を築く工事従事者に供する為と揚言して、莫大の米穀副食物其他を倉庫に充実す」

星野家は陣屋の非常立のき所として御殿を作る以前から剣野山に別荘を持っていた。御殿建築の前年の八月二十六日、妙行寺会場で内外の文人を迎えて書画展の大雅会を開いた折、来会の墨客を招待して九月十三日、剣野山の別荘で観月の宴を張った記録があることからもうかがわれる。

忘庵さんは、星野の婆アさんから、土蔵にドッシリ中味のつまった千両箱が何十となく積み重ねられていた話を聞いたという。

藤兵衛の子どものお相手をして成長されたという小熊さんのお婆アさんの話に、穴蔵の中に火薬がしまっていてそこへ行くモグラ道は迷いやすいようにいり組んでいて、トテツもないところへでてしまふ。療養所の東門側の沢ッコあたりに、そういう出口穴がいくつもあったもんだ。蔵はいくつもあったし、別荘の仕事やお客のある時などのために職人長屋もあった。ということなどを教えていただいた。

さて、十指にあまる旦那衆のなかでひとり気を吐いた藤兵衛に対して「官軍向きさ」、ということばがあったという。書画骨とうを評する時に「これは官軍向き」というと、きらびやかな派手なものをさす。藤兵衛の趣味が金に糸目をつけない豪壮であったことをあてこすったものらしい。

桑名藩との庇護協力の長い因縁をたちきれず、古い伝統になすもうとするのは人情であろう。他の旦那衆がはげしい変革のなかで踏みきれず、成り行きを傍観する形になったのは責むべきではないが「官軍向き」という柏崎だけのことばに、新しく脱皮しようとするものとの精神的葛藤が吐きだされていたと見ることができよう。

浮沈無情

大 関 小熊武右衛門・松村季一郎
関 脇 星野 藤兵衛・山田為四郎
小 結 西巻 庄五郎・小林長八郎
前 頭 市川与三太夫・広川善四郎

天保五年（一八三四）の金持ち番付で、大小熊と大松村を筆頭にして、為四郎は山甚家、庄五郎は今の西巻家の先代、市川は大天屋のことで、このほかに上の市川、下の市川、上中村、下中村などの名家があった。

奈良屋市川下山田 星野

星野のドブ酒三杯飲んででは色にだす

三階節にみる旦那衆で、奈良屋松村をはじめ、いずれも酒造りの家。

シャミヤタイコでのぼせる船は

越後山田のケイジョウ丸

これは下山田の千石船、これらの家々はほとんどが船を持ち、海を舞台の回船で大をなしたといわれている。十指

にあまる豪勢さである。

徳川幕府は既に倒れ、政治機構が変わったにはちがえないが、藩はまだ廢止にならず、手足のない藩がその維持に困窮したことは想像にかたくない。そんな桑名藩の借金申込みに大小熊では五万円だった。回収の見込みのないところに、今日なら数億円に相当する現金を投げだす。小熊家の富力の程も知れよう。驚くばかりのキップだ。こうした実力をたくわえていた旦那衆である。

来診の町医者にも時分時であれば酒肴を用意する。ほとんど毎日のように来客で、毎日のように来客にお膳をだす。仕出し屋のないころだから、台所は大料理に応じられるように広い。自然、その家々の流儀による特別食品がたんじょうする。卵の味噌漬のベッコウランとかコハク漬、西巻家にはカキ餅があったというし、石地内藤家のイワシアラレは子どもたちに喜ばれた。

然し、大部分の家風は恭儉己れを持すということだったという。しもた屋西巻の主人庄左衛門が一本のキセルのラウを十三年も使いつづけたという話がある。かげではシワ左衛門で通じたというが、彼だけが儉約家であったのではない。茶の間では座布団は使わない、慶弔の包み紙はたいい二度のつとめ、歳暮の贈り物がまわりまわって最初の贈り主に戻ったこともある。到来物の菓子折りも、古くなって味が変わりかかり、進物にしかねるようになって始めて箱に手をつける。柏崎のことばの「ネーツエ」はこんなことからたのことも知れない。有名な「勝田の天神こたつ」は一月の天神講がすむと、こたつを片づけてしまうことから名がついた。

それが出すべき時には驚く程の気前よさで大金を投ずる。星野藤兵衛にそれを見る。また柏崎神社拝殿前の石燈籠は右が「文化二乙丑七月」とあり、左は「元治元甲子年七月再造」とある。これは西巻庄左衛門が献じたもので、文

化の年に下浦町から今のところに神社を移した時、この費用の大半を庄左衛門が持ったらしい。大小熊は極楽寺の釣鐘を二度も寄進し、生田万の桜園塾は下山田家で世話をし、柏崎の学塾の双壁と称された原松洲塾三代の生活費は一切を山甚家でまかした。青山瀬兵衛の藤井堰の工事費は市川善七郎がもった。或は独力で一カ寺の開基となるなど、みごとといわねばならない。

ところが明治政府の成立と同時に、この富力源に対する事情が急転した。藩を背景にして雄飛していた事業が一べんに吹きとんでしまった。民間にあって藩の年貢米を取扱ったり、御天領の米を大阪方面へ運ぶ仕事もなくなり、威風をきかせた「御用達」も自然解除となっては、収入のみちを大半そがれたにもひとしい。銀行の取りつけ騒ぎに近い運命にさらされて、軒並に没落のみちをたどった。あせった事業に失敗して根こそぎ産を失なうもあり、奮然北海道に移住した家もある。当時の末開の地であり、旦那衆の生活になれた身には決死的勇氣といわねばならない。奈良屋、市川、下山田はいずれもそれが報いられた例というべきであろう。

功によってすすめられた官職も、素志にあらずと固く辞した星野藤兵衛の没落は事情がちよっと違っていた。兵乱のため蚕糸が売れず困窮していた奥州の百姓を救済するため、官府の内命で藤兵衛が乗りだしたが、買い上げて横浜に送った蚕糸は糸質不良で効果をあげることができず、その上約束されていた官金の融資を不能にされて数十万円の大穴、家産を投げだし、什器競売で債務を果さねばならなかった。

無情の風にさらされた郷土であった。

教育の門を開く

明治二年二月、陣屋旧邸に始めて学校を開き、柏崎町を始め村落より生徒を募集す。職員を置くこと左の如し

教師 原理左衛門

助教 西巻喜仙二（平井村人）

主附（学校取調方主附）兼助教山田波之助

（大正四、一〇、九 柏崎日報）

鯨波の戦がすんで十カ月め、まだ官軍の民泊がつづき、物価暴騰、流通しはじめた大政官札が正金百両につき札百二十五両通用となったり、百二十両通用となるなどの値下げ布令がでたり「そのため町民に浮沈あり」デマがとぶ。諸事混乱のさなかに、始めて耳にする「学校」というものが開校された。

原理左衛門は「たんぼの先生」二代目の修斉のことで、この時、六十四才、門弟には山田霜均、松村文次郎、西巻永一郎、中村篤之助等があった。何れも柏崎の進運をひらいた秀才で、百年史の初頭に活躍している。

第一次柏崎県の廃止が、この年の二月二十二日で、その県庁跡となった陣屋旧邸に、水原に移っていた越後府が建てたのが、この学校。百年史第一号の行政施設というべきだろう。

この年の同じころ、長岡でも小林虎三郎、三島億二郎が焼けた土の中で、無収入となって生活苦にあえぐ士族の子弟を集めて国漢学校を開いた。寺の本堂を借りたものだが、翌三年に、有名な「米百俵」で新校舎をたて、国学、漢学、地理、科学を教えたという。

柏崎の学校は士族教育でなく、生徒を町や村から募集するという、近代的な性格を考えたところに特長がある。ところが、この学校開店休業だった。学資不給を以て中絶、と書かれている。

明治六年になると、町や村に小学校ができるが、そのために明治五年に差込まれた文書にこういうのがあつた。

（教育問題補稿参照）

「恐れながら書きつけを以て願ひあげたてまつり候」という見出しで

今般、当村にても御趣意に基づきたてまつり、自費を以て学校子弟の教育、あい始め申したく

というので、町村費で経営するのが「自費」官費によるのが「学資」とすると、越後府は学校を開校しただけで、学資不給、以後の経費はださなかった。それで中絶してしまったことになる。これについて柏崎の知名人の関心がなわけてはなかつた。規模と性格に大きな構想を持ったふしがある。

二月に廃止されて八月に第二次柏崎県が発足するや、且那衆の学校資金への献金が集められる。そして、明治三年十一月、陣屋の下長屋に柏崎県立学校が再興された。

権典事兼学監 金田清風 校 長 山田 錫

教員首座 青柳博愛

皇学教師 加藤弥三郎 高岡四郎太

訓 導 松村 操

漢学教師 水落雲濤 星野介堂 原修斉 原道太郎 遠藤軍平 小林恒蔵 藍沢千逸郎

算術 村山禎二

句読師 久家仁作 石山登 山下雄太郎

英語訓導 牧野煉次郎

雇 五十嵐麗景

舎長 田中謙吉

會計幹事 松村文治郎 市川敬二郎 山田八十八郎 西巻永一郎

筆道世話係 山田為四郎

柏崎の二横綱星野塾と原塾の統合だけでなく、中央に重きをなした学者もあり、学風を伝えるトップクラスで指導陣をかためる。集まる生徒も新濁、佐渡にわたって、その数二百人余。親子入学もある。「入門入塾致したきともがらは父兄村役人連印の書きつけを以て願いいずべき事」「二十二日より日講（夜学ではない昼なかの講義）これ有り候条有志のともがらは身分にかかわらず聴聞（聴講）勝手たるべき事」という柏崎県庁の布告で集まってきた生徒である。希望する者は誰でも入学できる。新しい学校を誕生させた。

明治の新風がはげしい革新の波をまき起していたとはいえるものの、地方の町で、これは何という壮観であろう。柏崎の伝統が新しい途を開く弾力性を示したしるしともいえるべきであろうか。

やがて分校を持つようになつた。

小千谷町分校 教師山本比呂伎

長岡町分校 教師兼学監三鳥億二郎

川浦村分校 教師笠松健吾 品川莊吉

糸魚川町支校 教師小林亮（本校より派遣）

長岡の分校というのは「米百俵」の国漢学校のごとで、明治四年の長岡藩廃止で柏崎県の管理に入ったからである。

柏崎県立学校から、後に町村や業界の指導者となる人がたくさんでた。たとえば

僧了寛、佐渡の人、明治記念堂を設立

神戸豊太郎、高田在の人、刈羽郡の郡長

牧口義方、荒浜の人、代議士

内藤久寛。石地の人、代議士、日本石油会社創立

関矢儀八郎 剣野の人、代議士

佐藤貞雄 北条村の人、代議士

という人々の名が見える。

学校は今の小中学から高校、短大程度に迄及び、下級では経書の素読を授けられ、上級になると諸子百家の講義がある。校舎は陣屋の下長屋（下級武士、足輕、ちゅうげんなどの住んだ長屋）利用だから、粗末な木造の平家。一部分を講堂にし、他は寄宿舎になっている。夜はまだランプもないころだから、四角のアンドンにカワラケをおき、それに種油を入れ、燈心（トウスミ）に火をつける。一つのアンドンで四人でかこんで読書していたという。

校舎は貧弱であっても、ここに集まった青年書生の抱負は極めて大きく「天下国家の重きを以て自ら任じ、書を読めば発奮感激し、詩を吟ずればこころがい悲憤し、常に元氣うつぼつとして当るべからざるものあり」とは、内藤久寛の思出話である。明治五年の夏、八坂神社のけいだいに始めて写真屋ができたので、十二、三才の生徒が写真をとりにいく時、なかまが持っていた旧与板藩主井伊侯が「報国」の二字を書いた扇子を次々と借りてポーズをとったという話にも、当時の少年の気風がのぞいている。

その青少年の師が、内藤久寛の思出話によると「あまねく経書史籍に通じ、しかもいわゆる尋常章句の徒にあらざして、経国濟世（国を背おい、社会につくす）の志深く、人材を養成するを以て自己の任となし、まことに高風したうべきところあるの人」たちで、師の志をつぐ、そういう師弟関係をしょうずる熱のこもったものだった。

そのかげで援助を惜しまなかった柏崎の指導者の層も厚い。それだけに精神生活の深まりも深かったわけで、深ければ深い程、新しい動きにも敏感となり、自力更生をめざす新しさを開拓しようとし、郷土に浸透してきた明治維新と文明開化の波を、その姿勢で誠実をこめて次代の人に伝えようとする努力ともなる。やがて、次にくる小学校を育てる近代的な考え方への伏流でもあった。

同様の一群がもうひとつあった。門戸開放の先端となった寺子屋、夜学塾の活動を見落すわけにいかない。

大洲では田代、原仙、原伝左衛門、下宿屋安藤甚左衛門、下のかじや宮川平右衛門、原甚右衛門、柳橋の長倉才助、旧本町三丁目お家流小路に名を残した習字塾、同じく小町へ入るかどの沢田折枝、比角では山崎新兵衛、原小路の師匠船田伊泉等枚挙にいとまがない。

それは、書いた上にまた書き書きピカピカに光らせる手習草紙や、ブリキ板の習字練習板だけに意味をおくのでなく、「名がしらみょう字づくし」とよんだ「源平藤橘」「町名」「人名」から「いろはづくし」「山高きが故に貴からず」の実語教「庭訓往来」「商売往来」「名物往来」「消息往来」「古状揃え」さらに福沢諭吉の「世界は広し万国は」の「世界国づくし」また四書五経の素読にいたる。この指導に、これらの師匠の精神生活から発した文化的エネルギーがはじきだされていたことに注目したい。

いわば、下から盛りあがる熱情に燃えていた指導者の層が、重層をなしていたということが郷土の積極的な姿勢となったことを読みとるべきではないだろうか。

明治五年十月、柏崎の有志、長岡の三島億二郎、稲垣林四郎等と資本金をだしあって柏崎、長岡にそれぞれ洋学校を開設する願いを出す。

柏崎洋学校の開校は翌年一月。教師は長岡藩士で、県立学校の英語担当の牧野煉次郎、始めは生徒数名で振るわな。さらに福沢諭吉門下の青柳逸之助、藤野善蔵を長岡とかけもちの教師としてまねき、規模を拡張する。

生徒は二、三十名にまでふえたが、せっかくの施策だったのに「柏崎町は申すに及ばず、刈羽一郡土地がせまく、人民まだ洋学に従事するの気性これなく」で、しばらくしてしまったのは惜しい。

その頃、開校になった小学校が借家ずまいで、資本金も不十分なので、これを拡張、充実するために、遂に明治九年六月閉校することになった。然し、世はまだ新風になじまず、生活動揺の時だった。そういう時なればこそその活動であったことに、貴重な意義があるといいたい。

文筆開花

「ぬしは漢学（寒）陰気で寒い。わたしや洋学陽気で花が咲く」明治初期柏陽文壇の逸材松村操がシャレをとばしたが、郷土開化による個人への目ざめが、多年培われた旦那衆の学風を温床として、一般町民の読書好学の気風となつて湧きあがった。

県立学校、寺子屋はおろか、夜学塾にも行くことができない奉公人（店員、小僧）は自学自習で、自分の方法をあみだす。懐中玉篇というような小型辞書をふところにしたたり、小づかいをためて版本を求めぬ。矢立ての筆をなめなめ本を書き写す。さいだんくずの紙を利用してメモ帳を作りもする。

ここに広小路小嘉さんの奉公人が書いた懐中日記帳がある。たちくずの生紙をコヨリでとじ合わせたもので、表紙に明治二己巳年正月大吉日とある。日記となっているが矢立筆で書きつけてあるものは

「今、谷根炭金一分ニ付キ七俵半替ノ時

金三兩一分、錢三百二十四文、両替六六デ、炭ノ数何程ト問ウ

答テ九十八俵九分七厘ナリ

術ニイワク、七俵半ニ四ヲ掛ケ、一両金ノ当リ三十俵ナリ。コレヲ法トシテ右ノ金子（きんす）兩ニシテ三二九九

ト成ルヲ掛ケレバ知ル」

「今、平坪ノ積二十八万八千三百六十九歩有リ。コレヲ四角ニシテ何間（げん）四方ニ成ルゾト問ウ。

答テ五百三十七間四方ト也。

術ニイワク、積ヲ置キ（そろばんで図解）位ヲ見ル時、千ノ位ハナシ、百ノ位ナリ、先ズ六百間四方ト見テ六六三十六万歩ハ無シ、故ニ五百間四方トシテ商ニ五ヲ立テ、五五二十五万歩ノ積ヲ引キ、残り三万八千三百六十九歩ナリ、コレニ次ノ算ヲ施スナリ……」（そろばん図で四段階の解法図がついている）

というように両替の算法、青学や真綿、村上茶等を題材とした量目、代金の算出法、運上金歩合算、乗法除法等の算法例解のメモである。「何角トテモ、カクノ通りニ掛ケ合ワセテ知ルナリ」と十角形までの坪算出法、また、円法ノ覚エとして円の求積定法も見える。

位付秘法から開平法術、開立再乗九九、開立開様、鼠算覚エ、杉形算、亀算算、鯨尺曲尺の換算法、八算（歩合）総マクリと、百二十ページ分びっしり書きこんである。この人、この時、四十の手習いである。

裏表紙に、こんなことが書きつけられている。

「欲の一字、よ季（き）運のさまに心を暗ます種となり、終わりハ身を失ない、家をも失なうにいたるべし。

心を直に悟るなら現在未来の仕合わせあり、子と孫茂（も）栄ゆべし。

ほめ屋さまハ仇なり、えみこ藤（と）さまハ師匠なり。

只々一心正直なるべし、深実（真実）をつくすハ身乃（の）守り、この言、夢々忘るべからず」

当時の街の新学徒の心意を語るものであろうか。

新政府がいちはやく設けた裁判所の給仕をしながら夜学塾に通った者もあり、仏檀屋のむすこが昼は仏檀作りに専念、夜は塾で勉強して、後に独学で手工教授法を研究した若者もある。長倉塾から東京済生学舎で苦学、二十才にみ

ために医師の免状をとった人もある。家業が豆腐屋、毎日未明に起きて豆を煮、その日売りさばくだけの豆腐を作って、印刷業の開拓に骨身をけずった人もある。

間光寺大門に古本屋尚商館ができたのは明治二十六、七年のころらしい。桑山直二郎が二十五才で、月刊「越山」を発企したのが尚商館開店後になるからだ。貸本屋第一号でもある。後に柳橋（現酒造販売のあたり）に移って、益々油ののった活動をするのだが。

この尚商館、青年のクラブのような活気を持っていたという。本とケースを別々にならべて二冊に見せたり、文房具、マッチもあるナンデモ屋ながら、桑山式新機軸がラクガキ帳にあらわれていた。古い法令全書とか廃本にした部厚いものを、来客のラクガキ自由にまかした。ゴシップ、人物評、即興詩から風刺、時事談議とバラエティに富んだラクガキに人気が集まる。青年の出入りで、間光寺大門の人通りが急に多くなったという。若者による文芸復興の一つの渦となった。この動きが明治二十八年の月刊「越山」の誕生となって、論陣をはることになる。

江戸行き飛脚でも、新潟県令永山盛輝としきりに和歌の交換をする。たんざくは粗末な薄いものだが、上下のへだてのない交流がうかがわれ、新風土形成の気運を読みとることができる。

明治五年に、荻原嘉平、内山友吉の兩人が「随聞雜誌」をだした。柏崎県から版權御免を受けていたもの。明治二年、同四年に「柏崎県職員録」「柏崎県管内校舎概略」の木版ものが発行されていたが、町民に呼びかける出版は、これが百年史の第一号、しかも、江戸時代の一枚チラシを飛躍させた「雑誌」という新機軸で誕生させたのだから驚く。

明治五年というと、二月に東京日日新聞が創刊され、九月に新橋横浜間に鉄道が開設されたという年で、新式郵便も前の年一月に東海道に開かれたばかり。そういう文物草創の時に、越後の片すみから「雑誌」が飛び出したというわけ。忘庵さんの話によると、雑誌の先駆は明治六年に東京ででた「明六雑誌」ということになっているから、柏崎の「随聞雑誌」はそれより一年早い。日本で初めての雑誌が柏崎で出現したことになる。

ていさいは、これも忘庵さんによれば、西山紙と呼んだ半紙判を十二枚とじたもので、表紙とも二十四ページ、巻頭の方は硬い文字をつらね、巻尾は柔かい記事がおさめてあったという。東京日日の創刊号は木版で、片面刷りだったそうだが、こちらは今の四号活字位の大きさと組まれており、しかも田村愛之助さんによれば、活字の風が異様で、銅活字らしい。明治十二年のころの本に銅活字によるものがあるが、この雑誌も銅活字とすれば印刷史の上からも貴重なものであろう。柏崎県が廃止になると共にやめたということだが、それまでに四、五冊発行したらしい。

明治十年には、松村操が「小学文典小解」を出版する。この人、この頃「劇場新報」というものを発行していたという。明治十一年に、扇町牢小路（公会堂附近）に新扇座という小劇場が、初めての定舞台として新設されたので、その劇場ニュースや劇評を中心にしたもの。五十七号の内容紹介が、葉月、三四郎の「柏崎」にのっているから、そうとうつづいたものと思われる。

「小学文典小解」は、明治八年、柏崎小学校の教頭となって生徒のために書いたものが、十年に本になったもの。十年に上京「娯多娯多新聞」を編集しながら盛んな文筆活動を始めた。酢屋火事で九八〇戸を焼いた十三年に、「近世先哲叢談上・下」同じく続篇上、下を出版。山陽言行録とか象山言行録というようなものを内容としている。翌年には田舎者の目にうつった都会の風俗気質を書いた「東京穴探し合本」をだす。更に翌年「東都八大家戯文上下」「実

事譚合本」を送りだす。十六年には馬琴の「質屋の庫」の向うを張るような「昔語古物会」で、小説にたくして博識ぶりを發揮。「水許伝講義巻一」も書く。十七年にも「金もうけ金だめ百カ条」出版。このほかに「明治外史」「東洋立志編」などがあるという。勝田さんが雑文の雄を評されたのもうなづける。

十四年に医者の方代文郷が「改過治心篇」を出版。この人は木版活字を数万個買入れていて、時々小さな「養生法」という冊子を作って頒布していたという。この活字は今でも中村文庫に保存されている。

十五年には関四郎太(守雄)の「日本書紀訓考」がでる。六十余巻出版の計画で上京したが、木版印刷九巻迄を實現。この人の遺稿「こままくら」が本になったのは十八年。

十六年、酔花情史(関栄太郎)「越柏新誌」

十七年、徳井豊七「北越柏崎夕開都々逸狂歌」

二十一年 村山延長「空谷遺稿」

二十四年 地田多作「お七吉三くどき」

二十六年 金子謹三郎「新潟県刈羽郡小地誌」

「刈羽郡へ越後国十五郡ノ一ニシテ」と書き出すこの本は、四ッ谷麗生書房(金子書籍店)の蔵版で、海岸通、上条郷、鯖石郷、小国郷、内郷の五つに分けて案内している。

漢詩文芸から、こうした散文活動を経て新文芸がおこるのが明治二十七、八年ころからといわれている。

二十七年以降の出版活動も大正までに、二十氏二十九種目、三十五冊の図書に及ぶ。ここにも若い柏崎の誕生があった。

特筆すべきは、関甲子次郎と中村藤八の人間味溢れる事績であろう。

前者は著書出版もさることながら、フィールドワークを重ね、足で書いた資料豊富な「柏崎文庫」を今日に伝えている。

後者は新進業界人として活躍しながら、街の新学徒に温かい庇護の手をさしのべ、郷土資料の集大成をはかり、保存に力を入れ、驚くばかりの量の、しかも貴重な「中村文庫」をわれわれのために残されている。

柏崎新興文芸のはじまりは、明治二十八年の雑誌「越山」の発行が、その期をなしたといえることができるのではないだろうか。

二十才そこそこで自営の尚商館を開き、店は貧弱でも、今までに見られなかった進んだ方法を考え、独創的なラクガキ文芸に青年が集まる。桑山直二郎の独立自尊の姿がそこにあった。

小学を中退で下町の岩下紙屋(今の山崎洋服店の所)の小僧となり、「太閤(たいこう)さん」のアダ名をもらった程の手腕を買われて、奈良屋市川が紙店開業とともに、その番頭になる。数年にして市川は閉店、北海道へ移住。このため「太閤さん」は失業、上京したが脚気で帰郷。そして開店したのが尚商館ということになる。

ラクガキにあらわれた人間模様が直二郎をしげきして、生活苦にあえぎながらも新企画へとかりたてる。そこへ参画する青年の面々は田尻方面から前沢伍七、片桐秀治、高橋友次郎、阿部八十彦、同八百彦、柏崎では内山東洋、関甲子次郎、布施禎二、小竹忠三郎、上条方面の武藤喜一、加賀幸三、曾田文宗等。協議して「越山会」を組織する。これがまた会員制という近代的方法、会費は普通会員年一円、特別会員年三円というもの。こうして「月刊越山」

の発行となる。直二郎二十五才の旗上げである。

編集と校正を担当したのが、当時まだ二十才にもならない勝田忘庵、やがて忘庵上京遊学につき武藤喜一にリレー。紙代や印刷代も支払えない危機にも際会する。短歌あり、句あり「更科日記を読む」の論文があらわれて、まだ幼稚であった柏陽読書界を驚かす。若者の論陣活発で時事を論ずる。しばしば注意を受けたが意とするところではない。若さに溢れた活動だったけれども、言論が政治にわたったというかどで発行を禁止されるまで三年程つづいた。

「越山」は消えたが「越山」のおこした文芸活動は、とうとうたる気運となってひろがっていく。新聞による言論活動となり、歌壇では柏崎歌会が組織され、葉守会がうまれる。俳壇では「歌謡の国、俳諧の国」と呼ばれた瀟月会が活動し、柏汀会が組織されて新勢力となる。史学評論がで、郷土史研究の公開論争が試みられる。僅かに数字で倒れたが、玉井幸助等の雑誌「海南」は特筆に値するものであったという。

「越山」があらわれる十二、三年前に「宝草紙」が誕生したことがある。その頃、設立された柏崎活版会社が発行したもので、俳句や都々逸等の娯楽的な雑誌のていさだったという。この活版会社は関常次郎、中沢宗治郎等による資本金八百円、松村文次郎を社長に、渡辺慶三郎を支配人として、明治十五年五月に発足したもので、柏崎日報の前身となるものである。当時の職工、つまり柏崎で初めての印刷技術者は松原庄兵衛、山田丈之助、松村辰造の三人だったという。その後、役員に變動を生じ、二十一年には竹内庄右衛門が支配人であった。

葉月三四郎の「柏崎」によると、この活版業のデビューを動機として飯塚彦次郎、中沢宗次郎、洲崎伝吾、関栄太郎、関常次郎、入沢市郎、竹内庄右衛門、渡辺慶三郎等が発起人となって、花田屋の同意を求めて「商家のフラフ毎五広告」という新聞ようものを発行したとある。毎月五日、十五日、二十五日の三回発行というわけ。ところが経

験にとほしたために思うよういかない。とうとう世間から「いつか出るやらマイゴの広告」と軽口をたたかれるしまつ。その後を引き受ける人があって「便利月報」と改題。こんどは月一回の発行、事業も拡張。これは相当の好成績をおさめたように思われるということだった。

その当時、県内で発行されていたこの種の新聞を、新聞年表のなから探してみると、

米価新聞（十一年十一月創刊、新潟）

北越物価新聞（十六年一月創刊、新潟）

の二つがみえる。これから見ると、当時すでに広告紙のアイデアを持った柏崎のさんしんさがうかがわれる。商店案内、商品案内、店頭ニュース、商況ニュースというような性格で企画されたということは、高く評価されていいものではないだろうか。

面目一新して町民の手にわたったのは、小田金平編集発行の「柏崎商報」で、明治三十年十一月の創刊。一部の代が七厘だったという。

加えて、石油事業の勃興で新聞発行の気運が盛りあがることになる。

このタイトルでの話は、すでに柏崎百年の第二期にはいっているが、文芸活動の主脈を見る必要があったからで、言論活動への発展として、もうすこしつづけることにしたい。

新聞発行の気運が盛りあがって、その準備がはじまるころは出版活動も盛んであった。

三十二年には、地田多作の「小栗判官二度たいめん」「宮本佐門誉物語」がで、桑山直二郎の第一回目的「柏崎町

鑑」が一部十五銭で発行される。当山亮道の「古事記通解上、中、下」は多くの人に理解の便をはかろうと努力したものの。翌年には関甲子次郎の第一作「柏崎三十番神堂の記」がでる。大正まで二十八八年間に五十九冊の出版活動となった。

こうしたなかで、前記活版会社による竹内庄右衛門、西巻又太郎、内山真吉等による新聞計画がすすめられる。一方、職工を養成し、工場事業所まで用意したものの、御大将牧口義方物故で発行不発となっている原吉郎、小竹忠三郎、有坂房之助、関栄太郎等の派がある。ここに中村藤八が両者の間にはいって両派連合となり、三十三年五月「柏崎新聞」の発行を見ることになった。

そのころ県内で発行をみていた新聞は、新聞年鑑によると、新潟に新潟新聞、東北日報、新潟日報、万調報、佐渡に佐渡新聞、長岡に長岡日報と一カ月二十五銭の越佐新聞となっている。その大部分が政党の機関紙に近いものだったという。一朝事があると、我田引水の論を掲げ、反対党の非をならしたものだという話がある。だから世間でも地方新聞に厳正中立を望むなどという風はなかった。

そんな時に、政党政派に偏せずを標ぼうした日刊新聞があらわれた。それが柏崎新聞だった。ぜひとも日刊がほしいともっとも熱心だった中村藤八は、当時、改進黨の幹事長格だったが、この問題では政党を超越していた。誰彼の区別なく、熱のこもった勧誘をつづけ、資金集めに奔走された。そして中立日刊紙を誕生させる。教育問題といい、たしかに柏崎のセンスは近代的なものであったということができよう。それが百年史の初期から発現していたということは貴重なことだと思ふ。

資本金一万二千五百円、株主百八十名の柏崎新聞の当初は社長山田順一、支配人竹内庄右衛門、主筆は東京からまねいた早稲田出身の長谷川良輔、編集長は武藤喜一という陣容、植字工は新潟からよんできた武藤京三郎、落谷寂雨の二人。東京で機械を見つけるのに一苦労。ようやく中古品を買ってきたところ、いざ試運転となると、すこし刷りだしたところでストップ。全く役にたたないことになってしまい、竹内支配人が動かぬ機械の前で大粒の涙をポロポロ落したというのも、……ここまでの苦労が並々でなかったからだ。大さわぎの末、どうやら代りの機械をいれ、五月十日の発行日に間にあわせる。すべりだしにすぎがたっただけに、植字工の二人を除いては全部しろうと、営業も編集も印刷も、そして社内調整、津設維持もすべて難渋することばかり。それでも好調時には千九百部を発行し、天長館号は五十六ページものを発行したりする。当時の東京新聞の間でも増ページが流行してはいたものもせいで三十二ページ位だったのだから意気さかんなものがあったというべきだろう。

三十五年十二月には週刊「中越新聞」が出現した。当時どこでも週刊は育たず、創刊しても三号雑誌で消えるのが常だった。東京では博文館が「太平洋」という週刊をだしていただけ。これもニュース詳報に力をおかず、読みもの本位のものであったという。こんな時に柏崎で週刊が生まれたのだから、たしかに記録に値する。

桑山直二郎が牧口義矩、原吉郎、猪股雷道、丸田尚一郎、勝田加一等と中越社を組織。二十三日に第一号が創刊されている。毎日曜日と大祭祝日は翌日発行。定価一部二銭。直二郎三十二才の時、編集は越佐新聞の編集をしていた勝田嘉一（忘庵）。鋳銅器で名人気質を発揮した大声の硬骨漢村田六太夫（聴泉）が編集兼発行人の名義人となっている。

論壇寄稿が多かったが、六百字から七百字のニュース詳報で（三六・一・三石油概況、同、三、一大洲村漁民の不穩等）指導性を發揮し、時には千四、五百字に及ぶ記事で（三六、一、三、柏崎の売出し）人気を集める。

三十八年十二月、柏崎新聞と合併、三十九年元日号から「柏崎日報」と改題、日刊紙としての言論活動の再発足となった。

越後タイムスは勝田嘉一を中心として、四十四年五月二十日創刊、独特のスタイルを創造することになる。庶民性をもった文筆開花のかけには、多くの先覚の苦勞がにじんでいた。

青雲の志

「母方の実家なる新道村の飯塚弥一郎氏に一泊して祖母初めそれとなく暇ごいをなし、翌日柏崎を経て上京の旅路についた。書生の旅として身じたくもいたって軽く、わずかにコウモリガサ一本と小さな風呂敷包み一つをたずさえたのみであったが、柏崎をはなれる頃雨が降りそうになってきたので、町はずれの柳橋でゴザ一枚をあがない、鯨波、青海川を経て米山の峠を越えんとして上輪辺にさしかかった頃から非常の暴風雨となり、全身まったく濡れてコウモリガサは破損し、身体まで吹き飛ばされそうになって、ひとかたならず困難した。しかし私は前途の艱難に比すれば風雨の如き何かあらんという意気込みで、勇を鼓して疾風強雨とたたかいつつ、米山峠を越えて鉢崎に一泊した」

明治六年九月、満十四才の内藤久寛が単身上京の旅についた第一日目の記録である。十二才の時から柏崎県立学校に入学していた久寛が、苦難の旅を自ら選んだのは、青年教師小林亮（恒蔵）の師魂によるところが大きかったと思われる。「わたくしが一片報国の志をいだいたというのも氏の教えにもとづくものが多い」とのべており、その動機については次のようなことばがある。

「当時わたくしは『育英新編』なる書を読し、それにより非常のしげきを受けた。これを読んで一層外国の文明を景慕するとともに、書中人物の事績に傾倒し、或は発奮感激おくあたわざるものがあつた。加うるに国論の沸騰は一段のしげきを及ぼし、わたくしも志を立てて国家のためにむくゆるとともに、家道を興し祖先の名をはずかしめざるようにしなければならぬと、深く心に覚悟した」そのために上京遊学したいのだが父は許してくれない。益休みが終わって、九月上旬に帰校することになって意を決する。「その時にわたくしの世話を頼みある柏崎の久我昌一郎氏（家君（父））より渡すべき金七円を預つたので、わたくしはこれ幸いとその金を持って、東京へ出奔することに決心した」

こうした悲壮な一人旅も「学モシ成ラズンバ……」の一念でコワサを覚えない。長野までは上輪の老婆の情けにつつまれ、ウスイ峠では恐ろしいけんまくの馬子殿に追いかけられ、子どもの一人旅は、泊められぬと宿屋にことわれ、しかたなく村役場に泣きついたりして、九日目に横浜に着く。

せっかくだどりのついに「無断で逃亡してきた者の世話をすることはできぬ」とつきはなされ、旅館に泊まれればゴマノハイと個室となったり、飛脚をとばして父の許しを求め、ようやく高島学校に入学することができた。

当時、高島学校は英学を教える学校として、東京の慶応義塾、共憤義塾と肩をならべていた学校で、米人ブラウンを教頭に、外人教師が四、五人おり、生徒は約二百人、階上の一部を教室にして、あとは寄宿舎になっていたという。久寛は着たきりスズメの遊学だったから、だんだん寒くなるにつれて着るものに困った。そこで新案の冬着物を考へだした。夏ハオリとヒトイモノに裏地をぬいつけて冬を過ごしたという話が残っている。

これほど意気さかんであったのに、翌年二月、健康を害して帰郷しなければならなくなった。途中発熱がひどく、

佐野町の作り酒屋越後屋の二階に運びこまれたが熱がなかなかさがらない。一カ月ほどでようやく快方にむかったものの歩行が自由にならぬ。さらに一カ月静養して帰郷。

帰郷したもののブラブラ静養。やや落着いてくるとじっとしておれない。八月には新潟の英語学校に入学、マクライン夫人の担当クラスに編入される。

こうして熱望した道も断念、暮れには退学しなければならなかった。大区長をしている父であったが家業は火の車だったからだ。急転であった。親類の力にすがって家政整理をするようにすすめる者があっても「いっさい他人の世話にならず、自分の働いで借金を返す」ことを決心し「はやく起き、おそく寝て、酒造の若い衆等とともに、両方の手のひらにタコができるほどいっしょうけんめいに労働した」衣食ともに質素の上に質素。封筒は買わず、すべてよそからきたもので裏返し封筒を作って間に合わせたという。へいなどの破損も十分な手入れをせず、裏の石垣が波にさらわれてくずれても修繕はあともなし。「人が何といおうとかまわぬ。自分は自分だけの見識で押しとおしていこう」と覚悟し「水火の中でも忍耐する」気持ちで働きとおす。

なお余暇あれば独学したいと、寸陰を惜しんで書を読む。今も残る長屋門のそでにある物見と称する一画が、その居室であったという。

だれもが石油王としての内藤久寛をいう。近代石油産業の父としての久寛をみる。その輝かしい業績は不滅のものであるが、その前に見つめねばならない沈黙の世界がある。それは音と音の間の沈黙に似て、はげしくかきたてられた雄心のひびきというべきかも知れない。

この第一期のころは石油は手掘り、その井戸掘り稼業(かぎょう)を「草生水(くそうず)屋」とか「石油師」とか呼ぶのが普通だった。たぶんに軽視するひびきがこめられている。投機事業として見られ「山師のすることサ」とノーマルでない人の仕事とされた。他の人と立ち話でもしていると「人間と石油師が話をしている」と、ささやきあっても不思議でなかった。

尻込みするのがあたりまえの石油掘りを、当時全国にいくつもない資本金十五万円の大株式会社を創設して、石油産業を開発しようとする発企がどうして生まれたのか。その知見がどこで鍛えられたのか。そういう見方をすることがこの百年史の意義ではなかるうか。

「家道の退廃しているのを気の毒と思う人はなく、かえって『内藤は貧乏した』と好個の話題にしているにすぎず。東京に遊学せんとして学資はつづかず、さりとて金を貸してくれる者もなく、せっかく学問を修めたい志をいだきながら、ついにその望を達することができなかった。わたくしはますます世間はたのみ難いものとし、他人に依頼せず、自ら自己の境がいを開いていこうと覚悟してこれを躬行(きんこう)し」

久寛が十四才で見せた立志は、ゆとりがあつての道楽ではない。真剣な生き方から発している。泣き言がない。泣き言は自分の責任を他のものに転嫁させることで、思想として最も不毛の思想である。泣き言には反省がない。反省のないところからは何の創造も生まれえない。働く、書を読む、諸費を節する。しかも、日新の学問への志向おさえ難く、独学の業すすまずして心のみあせる。しきりに県内や東京方面の有志と手紙の交換をする。ニューヨークの友人をとおして海外事情に目をそそぎ、問題を提示して詳細な報告書を入力する。まことに、その生きる構えが知見を啓発したというべきであらう。

石油産業への出発は明治二十一年、柏崎百年の第二期を画するのであるが、その時、久寛は二十九才であった。「わたくしはしばしば尼瀬に遊んで石油かぎょうの状況を見たが、その結果石油なるものが将来非常の発達をとぐべき可能性を有するを感じ、もしこれを堅実なる組織により開発するにおいては」との初発の事業にそそいだ若々しい情熱は、刻苦してみがいた知見による深いどう察にささえられていた。

これより二年前の明治十九年に、これまた全国ではじめての水産組合というものが郷士に出現した。漁業を生命とする海岸地区なのに漁民が自らを組織していない。青年久寛が漁民に呼びかけて、石地に設立した豊野浜組合というのがそれである。

漁業権を守り、振興をはかろうとするもので、規約を作って農商務省の認可を受けた。当時、国内で規約をもった水産組合というものはなかった。豊野浜組合が第一号ということになる。この規約は官報にのせられて全国の水産業者に示されたから、これから各地に組合ができるようになる。県下でも各地に設立され、やがて連合会へと発展し、久寛がその会頭になる。そして二十四年七月には陸奥農商務大臣に水産局の設立を建議する活動をおこす。

こうしてみると水産日本への最初の一石を、正確にパチッと打ちこんだのは、郷土の活動であったということができそうだ。青年の思想のゆたかさにうたれる。

この年は農作も不出来、水産も不漁で困窮の年であったという。何か生計の助けにする方法はあるまいか、若い久寛はそういった面でも実行力を發揮するのだった。

郷土の高塩浜(たかじお)で、昔は製塩したものだという伝承から、それでは今でも製塩できないことはあるまい。そう思った久寛は、近くの山田海岸で製塩している人について実地指導を受け、同所で熟練している婦人数名を

雇入れて、土地の人に小規模ながら製塩事業をおこしてやる。久寛は夫人とともに世話をする。一時は相当の生産もあったそうだが、夏季二、三カ月の操業であることと、塩の価格が低すぎたために、二、三年で中止しなければならなかったという。

青雲にたくした希望は、たえず足もとを見つめ、小事であっても独創的な苦心となって羽ばたいた。

番神堂のけいだいから柏崎港の空遠くを見つめている銅像のあるじ、与助道路に名を残している五十嵐与助が日本水産界の巨星として、大きな業績を残されたことは多く語られている。

その与助の出発は明治十九年、九才で大洲小学校をやめさせられ、中浜の漁師小山和吉の手伝いに奉公した時から始まる。「わたしの道をゆくのだ」という十八才の決意は、転々とした逆境のなかで固まり、仕事のあいまには本屋の店頭で立読みをし、夜は帰ってそれをまとめ、誠実と奉仕に徹する形成へとすすんだ。

十二才、桐生の桶屋に奉公。下男ばたらきに近く、コゲメシのにぎり飯で腹ごしらえをしてすこす。

十五才、同じ桐生で年期のすくない桶屋にうつるが

十五才。足利の「つむぎ織屋」にかわる。

十六才。足利の酒屋清水屋に奉公。

十六才。同じ町で精米所に奉公。

十六才。更に穀屋にうつる。

親方と奉公人のちがえ、奉公人が人間以下に扱われることの不思議さが身にしみながらも、「ただ忠実に」と自分

を見つめる。

十七才。東京にて一カ月一円七十銭の米つきをする。

十七才。日本橋で米屋の小僧。

十八才。同じ日本橋の遠洲屋の小僧。

十八才。人力車の車夫となる。

十九才。病氣帰郷。やっとためた百円を持って、七年ぶりで帰柏。砂の積み入れや、れんが焼を手伝って手間賃をかせぐ。

十九才。京橋大根河岸の青物問屋に奉公。給料一カ月一円八十銭。朝くらいうちから天びん棒をかついで売りあるく。

二十才。やお屋開業。もとの三円五十銭で独立。親方からの祝儀は天びん棒とかご。もっぱら振り売り専門。朝早く市場で仕入れて売り歩く。朝早いから、市場へいく前に近所の道そうじを必ずする。はじめのうちは変わりものやお屋といわれたそうだ。

二十二才。京橋にやお屋の店を開店。始めて店らしい店を持つ。「よい野菜」をかんばんにして非常な信用を受ける。

二十四才。同じ京橋で間口三間の店を借りて引越す。

二十八才。借りていた店を買取り、始めて自分所有の家を持つ。このころから慶応大学の食堂に野菜を納入する。

二十九才。馬場金助に株屋をさせて協力。これが縁になって日本漁業株式会社の再建に力を入れるようになる。

これから与助のはなばなしの活躍が展開されることになるのだが、ここでは今日的意義を、その立身出世のパターンに見ようというのではない。心に何を持っていたかである。その歩き方である。

流浪に近いなかでも真澄の心を宗とし、十八才で不屈の教えを身をもって知り、いばらの道をふみながら「われ、自立の気宇高し」と自分の体であかしをたてようとする、若者の気骨が郷土のページに厚みを加える。

青年関次郎は初めての金融会社の創設に奔走した。努力は関忠左衛門、関栄太郎、吉田友之丞、前田忠兵衛、今井茂作、先代二宮伝右衛門、青海川の片山忠八、上輪の八木喜作、刈羽の安沢泰正等の顔をそろえ、厚信社を起す。これが明治十五年三月のことであった。

「事務を新助町中村市左衛門店にてとりしも、いくばくもなく南片町田尻屋栄蔵退転跡へうつり、明治二十年大久保屋火災後関忠左衛門退転の跡に移る。株式銀行（資本金十二万円）にして頭取牧口莊三郎、副頭取関栄太郎、支配人関次郎なり」これが柏崎銀行（現四銀支店）の前身である。

二十年三月、初めての倉庫業を開業したのは、常次郎と同年輩の関栄太郎。浦町とり屋の息子中沢宗次郎は旧本町五丁目に移り、大々的な洋品店兼洋服店を開き、下夕風の店に十人近くの洋服裁縫師や見習いが陣取り、盛んに見えたが大久保屋火事後北海道に渡り、室蘭で地歩を占める。

「売上帳、大福帳の一家事のみ終り果つるはいかにもなげかわしき至りなりと思うて明治十七年十一月八日、郷土に取りまとめたる記録なきを思いだして、それより心を起し気をはげまし、商業の余暇をもってしきりに材料を集めるに……」関甲子次郎この時二十一才。一生をかけた甲子楼文庫である。

「文筆開花」でも見られたように、こう然たる青年群像。独立自尊、知見開発、実践きゅう行、刻苦精励の命脈が

こんとんとして流れだしている。

騒動一過

明治二十三年六月二十六日、柏崎に米騒動が起きた。維新後の米騒動では全国最初のもので、千人余の群衆が荒れ狂った大事件である。

いったいこれはどうしたことだろう。それを考える前に、まず事件のあらましを目撃者の談によつてたどつてみよう。忘庵氏の談話である。

「夜中に祖父に起されたら、続け打ちの鐘の音が聞える。浄土寺の鐘らしい。旭小路の家を飛びだし、鐘の音の方へと御家流小路を駆け抜ければ、毎日のように遊びにいらっている海津書店の前には胴みのを着て手拭ではおかむりしている人たちがたかっている。店内では同級生だの手代などが、書籍を振りかざして『ここは本屋だ本屋だ』と叫んでいる。飛びこんで本屋だ本屋だを叫ぶ仲間入りをし、必死になってチン入を防いでいると隣りの物産会社にはいった群衆が、片ッ端から器物をこわす音が物すごく聞え、物産と書店との中仕切の壁が破られた。電燈など無論なく、危険だから石油ランプもつけないため、真ッ暗なのでチン入者は物産の押入れからクズぶとんを引っ張りだし、中庭でそれに火をつけカガリ火とした。物すごい光景であった。

海津書店は格別の被害もなく助かったので、納屋町へ走り品川仙之助回漕店がやられたのを見てから、役場の前へいった。ここには役場だの町の有力者だの高張ちょうちんが十張り以上並んでいて明るかった。その明りで『津止

め』という文字を大書した紙が貼られているのが目にとまった。十四才だった小生はこの文句が何の事かわからなかったが、わきたっている人たちの声からそれが米の積み出しをしないという意味だとうやくわかったころ、松村文治郎が津止めの張り紙の前に現われ何事かを云った。小生のそばにいた一人が『松村さんが保証するなら大丈夫だろう。引き揚げよう』と云ったら、これに和して一同が退散した。

原田警察署長が警官に抜剣を命じようやく退散させたとき書いてあるものがあるが、それは品川仙之助方を襲った一隊を抜剣で西の方へひかせただけであつて、ほんとうに一同が納得し退散したのは役場前の『津止め』の掲示と松村文治郎の宣言によるのである」

たまたまこわしにあつたのは西巻時太郎、物産会社、改進黨刈羽クラブ（同好会事務所）品川仙之助、二宮伝右衛門中浜の綿屋回漕店、その他に四ッ谷方面の米屋の大手もやられたという評判であつた。

この騒動を、愚民が政争の具に供せられたものだとすることが定説のようになってはいるが、これはちょっとふに落ちない。

たしかに改進黨と自由党がしのぎを削ぎつづけていた。県議会も明治十一年に初めて開かれた時から両党の抗争がはげしく、紛争がたえず、時には議場殺氣にみちみちというような事態が起つていた。二十年前後は条約改正問題で国論が沸騰し、そのため二十一年には改進黨の大隈外相が片足を失うというテロが発生する。柏崎でも二十二年に両党の政争のため町長がなかなかきまらないというさわざ。そしてこの二十三年は初めて国会が開かれる年で、騒動が起きたころは、その第一回衆議院議員選挙の運動がエキサイトしている時だった。改進黨は県首領である小国の山口権三郎を、自由党も県首領格である柏崎の松村文治郎を、それぞれ中心にしてはげしくせりあつてはいる時だった。

そんな時、暴徒が改進黨の選挙事務所になっていた刈羽クラブをたたきこわしたのだから「春以来米価は高騰、ために人心おだやかならず……政客がこれを利用して貧民をあおり……」と書き残されたのであるが。

そういう流言が飛んだのは事実だ。「柏崎近傍の細民が海浜に集合して、一揆（き）を起し市中の重立った家をこわす相談をしているというウワサが飛んだ。刈羽クラブを破壊するという風説も伝わったので、わたくしは何かの変あるべきを思い、クラブに宿泊している者に、もし暴民が乱入しそうならば抵抗せずに引きあげるよう云い残して書類を携え旅館東京に帰った。果して夕刻より市中はだんだん物騒になって、夜に入りて西巻を襲うたとか、中村物産をこわしたとか、警部某を突き倒したとか、刻々に伝えてくる。」内藤久寛の思出話である。

物産会社は中村藤八の経営で、米・塩・石油等のとん屋と回漕業を兼営しているもの。中村藤八は改進黨刈羽支部の幹事長格で、店が旧小熊家の跡であった関係から、刈羽クラブを小熊家の下小屋敷においたわけで、これがソバツエをくって、政争の具うんぬんとかの流言の種となったものと思われる。

「改進黨の事務所が襲われたので、政党の争いに原因を帰そうとしたのであろうが、真因はもつと深刻のものであった」とする勝田忘庵の言に注目したい。

襲撃を受けたのが、主として米の移動に関係のある商売屋であった点がそれを証明しているのではないか。西巻時太郎、品川仙之助は回漕業の大手すじだった。この西巻はアタラシヤ西巻で、しょう油西巻と区別してシマイ西巻と呼んでいた。今の柏崎日報社から数軒分を裏の道までブツ通していた邸宅だった。品川は港町天屋の前がわで、日石社宅街となっていたところ、海を相手の回漕業者としては最も盛んに活動していた。中村藤八の物産会社も回漕業兼

営だった。

電燈はまだない。ひるまからの不穏な空気に、どこも石油ランプを消していて真ッ暗やみのなかへなだれこんできたのだから、壁ひとの仕切りになっている隣の海洋書店がソバツエをくった。物産側から壁を破って天びん棒の先がニューッとでてきて、たてつづけに突き破られる。同様、反対がわの隣にあった刈羽クラブもソバツエをくったのだとも云える。

政党に無関係の二宮伝右衛門宅がやられて、その近所にあった改進黨の熱心な活動家関栄太郎や関常次郎宅は何ともない。改進黨の有力者内藤久寛が選挙運動中は天京を宿にしていることを知らぬ者はない。当夜の久寛の思い出にこんなくだけがある。

「天京（当時の天京は今の中村昭三さんの家のあたりにあった）の老婆があわただしく飛びこんできて、今クラブをこわしている。お前さんもここにはあぶないから早く逃げなさい」という。しかし外にではかえって危険だと思ひ、二三の人とともに灯を消して表二階の雨戸を細目にあけて外のようにすをうかがっていると、群衆が勢いすさまじく殺到してきた。息を殺して見ていると、天京へは手をつけずに、そこへきた巡査を倒して二三間も引きずっていった。身に寸鉄もおびず、多くは素はだして、こん棒一本くらい携えて押しかけてくるだけであるのに、その勢いがなかなかものすごい。一揆（き）はそれより鶴川橋を渡って、勝願寺に到り鐘をならしたが、もはやそのころはだいぶ勢力が衰えていた」

引揚げ途中とはいえ、まだ興奮しきっている群衆が政争の具ならかつこうの目標となるべきところを素通りしている。どうやら、周囲が、風評におびえさせられていたのではなからうか。

刈羽郡内における両党の勢力配分は、村部は改進黨有力、柏崎町は圧倒的な自由党の地盤だったのだから、せりあっているにしても、「改進黨に属する豪家又は事務所に暴民が乱入し」というような無暴な挙にでるとは常識でも考えられない。

なにしろ選挙の運動員はピストルや短刀をふところにしはせたり、運動にでる時は斉戒もく浴、死を決して出掛けたものだそうだから、選挙界そのものが不気味な空気につつまれていた。そこへもってきて「納屋町の人々先ず騒ぎたち、それより新町の豊屋藤十郎同平田佐吉の両人が下宿中浜を扇動し、浜辺にたむろし不穩の挙動を呈したので警官説諭すれどもきかず」で、白昼おっぴらに物騒な相談をすずめるだから気味が悪い、

何かある、だれもがそう思うであろうし、計画らしいことも漏れてくる。回漕がやられる、中村物産もあぶないぞ、精力的な活動で名のひびいている中村藤八となると、即改進黨と目されているほどだったから、ここで風説のスリカネが生じる。改進黨が襲われる。至極もつともらしい自己流の憶測をつけたして得意気な流言屋が走りまわる。流言が真相とすりかわってしまった。

「春以来米価は高騰」というが、これについて忘庵さんの話がある。

「当時の高等小学は唯一の刈羽郡立で寄宿舎が設けられ、寄宿料が一月一円五十銭だった。寄宿舎にはいり切れずに街に下宿して、下宿料を物納すると白米一俵であって、偶然にも一俵が一円五十銭であった。

米一俵一円五十銭の線は、多少の高低はあっても久しい間動かなかった。それが明治二十三年の春から騰貴し始め、一俵四円二十銭になった」

久寛の記憶では一俵五円位だったという。三倍以上の暴騰では買米生活の町民は「人心不穩とならざるを得ない」

そこへ天屋下に汽船がはいってきていて泊した。米積み出しの回船出入は今にはじまったことではないが、この急場であノ汽船一ぱいに積み出されてはたまらない、死活問題だと暴発してしまったのが騒動の原因であった。

明治五年にも騒動があった。それは白根、吉田、地藏堂、寺泊方面の百姓が起したので、六千人余がみのかさを着て、むしろ旗を押したてて柏崎県庁へ上訴しようと寄せてきた。四月四日のことだった。とりしずめようと騎馬でかけつけた県官が荒浜で馬から引きずり落される。わらじ組とか大根組とかの組編成の大集団が続々とはいって来る。

県立学校の生徒も避難の用意で混雑となる。小林先生は自分が説き伏せて退散させてやる。お前たちはさわぐなと鶴川の橋に仁王立ちで待つ。県庁は飛脚を長岡へとばして士族兵隊五十人の応援をもとめる。然しこの大集団をくいとめ、説得し、寺々に分宿させ、県庁に平穩のうちに仲介の労を果したのは大久保の小熊六郎（二十八才）と下宿の後藤泰之丞（二十六才）の二人だった。

然し、米騒動は当時の東京の雑誌には「柏崎の乱民二千余人はうきす」と書かれるものだった。

これより五十三年前の天保八年六月一日の生田万事件の時はどうだった。十数日前に広小路の四ツ角に生田の落し文と称される壁新聞があらわれ「中浜方面のものは三石に集まれ、納屋町方面の者は浜に集まれ、浦町柳橋の者は西光寺下へ集まれ、四谷方面の者は悪田へ集まれ。ここに至れば必死だ。」と呼びかけた。そして、その日未明に悪田の渡しをこえてから「天命を奉じて……」と「……窮民を救う」の二本の旗を押したてて、いわば柏崎の町を東から西へ突っ走り、回船操業の関係で中浜下宿に情報が伝わりやすい納屋町にも寄って、午前六時ころ大久保の陣屋に切りこんだわけだが、柏崎人は動かなかった。

天保四年以来つづいている冷害凶作。米価の変動ははげしい。毎年十一月に柏崎陣屋役人と町役人、回船とん屋等が立ち会って値をきめる御入札、いわば公定相場だが。天保三年には十両につき二十三俵九分九厘だったものが、四年には十五俵六分、五年には二十三俵一分六厘、六年には十九俵六分六厘、七年には十二俵一分九厘、八年には十七俵一分、九年には十二俵一分。これは玄米納入の場合で、消費者への白米小売の値段は更に開く。七年十一月の立値は十二俵一分九厘であるのに、八年の四月下旬には消費価格が六俵八分という暴騰である。そこへ江戸から仙波太郎兵衛という御用商人が米の買出しで船を持ってきたのだから人心動揺も無理ではない。

今の生田万墓のそばに立っている地蔵や供養塔を見ると、天保六年にたてられたものには「天保癸巳年（四年）窮民数百人、病死者三十人……」ときさまれており、地蔵は生田万事件の二カ月前にたてられたもので「餓死諸霊のため」とはられている。「草の根などを食い、子どもを川へ流し」はこの時のことである。それでも柏崎人は生田の旗の下に集まることはしなかった。

生田事件の十四年前に春日に義民騒動が起きた。かん臣汚吏の暴虐を糾弾して決起、ホラ貝を吹きならして大挙春日陣屋襲撃のようすを見せ、柏崎陣屋からの援隊と悪田小路をはさんで対抗した事件である。犠牲者をだしたが平井のテングさん事高野和七郎の奔走が功を奏して、悪代官の追放を実現した。

この三年前には石地にも米騒動があった。

こうした事例を見ていると、飢えに苦しみながらも人間的な忍従をとおした。

北条の田中平左衛門の覚え書のなかに、維新直前のころの米価の記録がある。

柏崎御入札（十両につき）

文久三	亥年	十三俵九分二厘
慶応元	丑年	八俵二分五厘
二	寅年	三俵四分九厘
三	卯年	四俵六分三厘

右の年米高値の事前代末間の事筆紙につくしがたく候

右は米ならびに諸品高値の事おびただしき事に候えども下、万民事のはか穩に御座候 まことに唯不思議と申すべき事也

この状態でもこらえた。それが、あとにもさきにも柏崎人による唯一回の暴動となったのはどうしたことだろう。縮訴訟事件では、天下の大とん屋を相手にして生活権を守るために、奉行所で堂々の論陣をはった柏崎人四十年のねばりが、自由民権のはげしいあらしに触れて変容したひとつの断面であろうか。若々しい情熱で展開されはじめた人間への目ざめがこうした一面を持ったことはやるせないことだ。人間不信の恐ろしさを身をもって知った一日であった。それは柏崎百年が人間信頼の課題を栄光への重荷として歩かねばならない踏みだしでもあった。その可能性を松村文次郎の一言がはやりたつ千人の暴徒を納得させたという一幕が雄弁に物語っている。

縮布挽歌

昭和三十五年刊行された松坂屋五十年史の「江戸から明治へ」の項で、小千谷、十日町の織物老舗の方々の座談

記事のなかに、こんなくだりがある。

「伊藤家（松坂屋）からの仕入方は、柏崎の笹川五郎松という人を同伴されて、縮の値定めをされた。その頃、伊藤さんの値がきまれば、十日町の値段がきまるといふ風で、仕入れたものを十日町の角屋、小千谷の小鶴屋で晒（さら）したり、仕立をしたり、値札までつけて発送したものだ。その間二、三カ月は滞在された。毎年の相場は、伊藤さんの値がきまらねば、問（とん）屋も仲買も手を出さなかったものだ。」

この五郎松、本業はローソク屋だった。ローソクを売り歩きながら在の女ゴシユが冬仕事で織りあげた縮も買い集める。いわば、ついで仕事をしているうちに一反八十文から一両にも及ぶ縮の等級を見分ける力ができてしまった。松坂屋の縮仕入れは五郎松の、この目の力をたよりにしたのであり、十日町の縮相場は柏崎人の正確な鑑識眼によって成立したということができる。五郎松は本町六丁目の縮商半田屋（現東本町一丁目、高忠商店の所）に出入りしていたが、本職でなくても縮鑑別の目をもっていたということは、縮が柏崎人の体臭のようなものになっていたしるしである。

葉月三四郎の「柏崎」に花田屋さんの話がおさめられている。

「越後縮布は雪の中の副業です。娘をもった親ゴシユの自慢は機織の技量であります。どこそこの娘は心掛けはよいけれど機はヘタだ。なんかんといったものでした。」

「嫁さんが小姑と二人で機を織りましては市場に持ちだしましたが、小姑の機はいつも二百文がた高く売れるのでした。このため嫁さんは家に帰ってから姑ににらまれるのは何よりもつらいのですから、いつも実家に寄って足し錢をもらっては姑のきげんをとるといふようなことがあたり前の事でした。」

「こんな風だから娘たちが機に一身をこめた事は知らない人たちには想像がつきません。しようことなしに精を入れる仕事です。製品が精練されるのは当然の結果です。」

「百しようの副業ですから一定の機屋がないのです。それだから機を集めようたつてだめです。二十反を集めるにも二日も三日も気長に待たなければなりません。まして、そるい物なんて望む事はできません。」

「これを持ちだす商人の眼識が発達したのは当然でした。この機はあぶらっ気がない。この機はあぶらがのっている。一目で織り子の老若を知ったものでした。不思議の事には、この機は、とほめられる程のものは二十才前の若々しい娘でなければならぬのです。」

「越後縮布は丹精を売るので、なかなかしろうとは鑑別がつきません。」

「柏崎人は縮布の集散者であったために、ばかに細かく物を見るようになった。しかしそれがために大体を見る事ができなくなった。縮布の五円と十円は縮布屋さんの目のほかわからない。ただ糸つかえ位の相違だから、それを一目で五円といい、十円というのみか、二十才前の娘と老女のそれと見分ける柏崎人だもの、細かくあらいは仕方のい事です。」

「畑の者がグルグル巻にして、ふんどしよりきない生機を持つてくるのに、愛きようをいいつつ一口で値段をつけるのです。五円、七円と一目です。七円で思いきらっしゃい。そのかわり一杯だすから、なんて台所は来る人に酒をだしています。」

「一見して、この機は人間臭い。なんかとかいで見るのです。その意味は、その品がよそで値をつけられたが折合わず、持ちまわってきたんだという事なんです。そんな事が魔術師でない限り当たるはずがないというでしょうが、

それが不思議に当たるので。」

道楽や遊びでできた目ではない。苦勞した苦しい息が、火吹き竹からもれてでる、経験に経験を積んで体をはって得たもの、みずからの手で鍛えあげたものだった。

ただ、指摘されているように「細かくは見るが大局を見れない」をどう受けとめるか。縮布行商数百年の生きるみちを背負って、百年史第一期のはげしい社会変革の渦に巻きこまれた、柏崎の試練に耐えようとする一つの断面ではある。然し、ここにも百年史の課題がひそんでいた。

明治維新と同時に、柏崎の東京行縮布行商は江戸十組問屋の市場支配から解放されることになる。これは夜明けを迎えた思いだったにちがえない。

何しろ、江戸幕府がその政策として、商品生産の発展に対応した、生産地をつなく独占的な集荷機構をつくりあげようというので、つとめて特権化をはかろうとした十組問屋である。幕府にとっては全国市場の形成をねらうだけでなく、物価政策を推進する機構ともなり、市場支配組織を強化するための仲間株の立て方となり、十組問屋から吸い上げるべく大な冥加金は有力な財源となる。あわよくば全国経済の掌握、貿易独占による幕権の強化をはかろうというものである。

こうした強大な老中政治の所産である十組問屋を相手にして、柏崎組を中心とする在郷商人が文化十一年（一八四四）から安政六年（一八五九）にいたる四十五年間、七回の訴訟事件で法廷闘争をやったのだから大変なことだった。相手には幕閣の後ろだてがあるが、在郷商人には代弁者すらない。まったくの徒手空拳、独力で勝ち抜かねばならぬ。

らない。

「越後縮の儀は国もとのものどもご当地へ直稼（じかかせぎ）に罷り出で候者共、近年勝手のままに殊のほか相増し、右は越後国辺の百姓稼ぎ仕り候もの共、農業を捨て置き、商人体に相成り、在方よりご当地へ自分稼ぎに罷り出で候。……取りしまり仕法相立て、ご当地直稼相止め候よう仰せつけ下されたく……」こんな書きだしではじまる十組側の訴えは、のっけからかさにかかってくる。

「わたくしども往古よりご府内へ罷り在り国産の縮売冗仕り候儀は他国にまれなる大雪国にて、十月初旬より二月迄の間は日々雪降り積もり、大風雨荒れ、天氣の儀はまれにて他出も相成りがたき程の極難の土地柄……田畑みのりよろしからず、ぶじきは勿論、お年貢等も引き足り申さず、これによって若者共は九月より十月頃に相成り候えば関東筋へ酒造方、または日雇稼業等に罷り出で候えども、女共は外稼ぎ方もこれなく候につき有徳なる者共羽州米沢、最上辺よりからむし買取り、村々へ貸付け、これをもって女の手業と致し、糸に取り、ようやく一カ年三、四反ずつ織り立て候を買取り、ご当地持参売りさばき来り候儀は寛永年中頃よりの儀にて、従来ご府内にて素人直売り仕り以ってお年貢に足しあい、親妻子を扶助致し来り候ところ……今更家業に相はなれ候ては家内営み方にも差しつかえ候儀眼前につき、幾重にも問屋方の慈愛をもって、これまでの通り家業永続相成り候様内談致しけれ候様、ひたすら相欲し候……」

あくまでも低姿勢で事情をうったえ、話し合いで処理しようと努力をかさねる。相手は政治問題にしてくるが、こちらには生存競争として思つくひまもない。

とにかく、行商することだけは確保したので、経済史の上では特権的大問屋に対する力のない在郷商人の勝訴とさ

れているが、行商の人数を制限されたり、持ちこみ千五百反以上は上縮一反につき銀四分五厘、代銀十匁以下の品は一反につき一分五厘の口銭を十組におさめばならぬ。後には口銭として一カ年百両、十組の手代へ三十五両おさめることになる。反数も制限される。それどころではない、持ちこんだ縮を全部問屋に納入して、そこからかつぎだす形にさせられる。きびしい照合ときびしい罰則がつきまとう。

十組問屋——地方問屋——仲買——直接生産者という統一的な集荷機構が成立したようなものだ。これは幕府の意図した全国市場の統成方式の完成を示すものだ。封建社会での専売商品に見られる特色は、とくに農水産加工品や手工業品の比重が高くなっているが、縮行商も奇妙な形に追いつまれて例外ではなくなっていた。

それが「明治四辛末三月、東京民政局ヨリ御呼び出しニ相成り、株式御廃止ノ旨、組中ノ規約ヲ取り結ブ儀ハ勝手タルベキニ付キ、国産物イッサイ盛大ニ相成ルヨウ注意致スベキ旨仰セ渡サレ……」となったのだから、もう十組問屋の独占機構になやまされることはない。

ところが「株式御廃止にも相成り候に付、諸事みだりに相成る儀もこれあり」仲間でないものが新規渡世を始め、国産の名をけがしては困る、ということになった。明治五年の東京行縮布商組合規約は「新出府者に名前を貸すことは堅く相成申さず候。もしそむき候者は仲間相除き申すべく候。」新加入の加入金は五両、それで承知しない場合は「親友なりとも売買いすたまじく候定め」とうたわざるを得なくなった。セクツ的になったのも、独力で生活権を守るために長い間の苦勞をかさねたからであらう。

明治十四年三月、通商講が組織された。

これは明治五年、新事態に対処するために東京行縮布商組合規約を作って、東京組を組織していたが、その後、関東各地への行商者がふえてきた。すべて御一新ということになると勢いということであらうか、布商、誠義、隆産、精叢、栄産と呼ぶ五組が誕生して、それぞれ組合規約を作って活動するようになった。しかし、これでは「五組ニ区別シ適応構則定ムトイエドモ其ノ旨趣ノ異同ニヨリ不都合ナキ能ワズ、ヨリテ五組及ビ東京組ヲ併セテ……」ということで大合併「通商講ト称シ同盟結約スル事」となったものである。

この時の各組の名簿を見ると、東京組六十四名、誠義組五十名、布商組三十七名、精叢組十四名、隆産組二十六名、栄産組九名で合計二〇六名となる。更に足跡西国に及んだ関西方面に対して上方行室栄講があった。この講員八十六名を算するから、柏崎の縮布行商の名義人は実に二九二名となっている。

この当時の戸数は柏崎一八六〇戸、比角地区四五八戸、大洲地区七八二戸、枇杷島一三五戸で計三三三五戸だからその一割近くが縮屋さんであったわけで、これに関連する職人、行商人を数えればほとんど全町に及んで、その盛況おして知るべきである。

宮川さんの「柏崎ちぢみ史」には「柏崎縮布行商人概算数は営業主として、江戸、京阪、一般地方に向いた首脳陣は約五、六百名、これに従属した番頭や手代、臨時備員を合すれば千五、六百名を算し、約二千名を上回る大行商団であり、その規模の雄大と地域販路の広範さにおいて、このような大集団の行商は史上未曾有に属するのである」と、まさに「縮のまち」の面目躍如たるさまを述べていられる。

ところが明治五年の事情を甲子楼文庫はこう書きとめている。

「越後縮布産額十二万反、全盛はこの年をもって、最一となす。これより縮は肌に適せず不衛生なりとの説行なわ

れ、加うるに原料工賃高く収支償わず追々衰微となる」

「肌に適せず不衛生なりとの説」は裏返せば縮布の特性を語っていることであって、新しく生じた問題ではない。「原料工賃高く」も今更始まったことではない。「追々衰微となる」の原因は別にあると見なければならぬ。このことについては後段で追跡してみたい。

とにかく、封建領主による運上金はなくなり、口銭だ、制限議定だと壁になっていた十組問屋の鎖はバラバラになつて、自主組合による営業権確保ができることになつたのに、業界不振のきざしがあらわれてきたというのである。

織出産反数の推移をみてみよう。天明年間（一七八一—一七八八）は二十万反にも及んだが、天保の改革（一八三八）のあおりで激減、安政年間（一八五四—一八五九）にようやく盛り返して十万七千反となつていた。そして明治五年（一八七二）が十二万反で、最一といわれるにいたつたが、十四年は十一万反、十五年九万反、二十年七万五千反、ついに三十三年には三万五千反となつてしまつた。

自由化競争で商人多数となつたのに、取扱ひ反数激減となつてしまつた。かつて「東京行の多くは一年のうち三、四カ月行商するのみです。二千か三千のあきないをして、家族五人が富裕に暮らし、蔵までできるのは越後やさんです」と語つた縮屋さんが「縮屋で産を成すナンテことはウソのコケだ。あとの半年を寝てくらすわけにもイカンスケ、帰ってくる時ニヤ小問物ナンカを仕入れてきて、店ならべたモンダ」と話されるような事態になつてしまつた。

しかも、縮あきないは柏崎組（明治二十二年頸城組も含む）のほかに小千谷組（堀之内組も含む）十日町組があるのだから、三万五千反は一営業主あたり何反の取扱ひとなつたものか、想像にかたくない。

衰退急テンポである。かつては、五月の節句には寒くても麻を着て登城しなければならぬとされて「菖蒲帷子」（しようぶかたびら）の別名ではやされた縮布であつた。「ご本丸納め」とか「大奥納め」「ご所廻り」と称する御用縮となり、武家式服縮となつて、たかだか数百反の生産から二十万反という飛躍的な生産を示した性格から、一新と同時に武家が一掃されたということは、一挙に大口得意先を失つたことになる。大きな原因にちがえない。

しかし、明治十四年でもなお十一万反の需要を見て、幕末以上の生産であつた。ジリ貧とならざるを得なかつた要因は他にもあるとみなければならぬ。

宮川さんの名著「柏崎ちぢみ史」が縮布行商の経過を説明されている。ここでは別の指標で考えてみたい。

忘庵さんは「これは北越鉄道が通じ、産地と大消費地たる都会の商人とが直結し、柏崎商人の手を待たなくなつたことが、そもその初まりで、縮布商売が全く成り立たなくなつた主因は縮布というものが、以前のようにできなくなつたからである」こういつていられる。

松坂屋五十年史にはこんな記述がある。

「明治時代には信濃川を船で盛んに上り下りしたもので、小千谷がその咽喉部になつて、荷物や郵便などがここから運ばれるようになるとともに、海の方の柏崎がさびれてきて、小千谷が金融の中心にもなり、たとえば、上方で商売をした代金をここで取るといったような、手形の役も果すようになった。そして上越線の開通を最後に、柏崎は全く置き去られてしまつた」というのだが、ちよつとおかしい。

小千谷は安永七年（一七七八）には既に、十日町、堀之内とともに流通機構としての縮御運上三市場の地位を確立

していたのであって、ことさらに柏崎問題を考えるポイントではあるまい。なるほど信濃川は流域面積一二二六〇平方キロ、長流三六九キロの日本一ということになると、その水路利用はもっともらしく聞えるが、関東地方とは三国山脈を壁にして、その源流は長野県にある。縮行商の水路にはなり得なかったものだ。柏崎とちがって陸路によらねばならなかったから、東京行の行商で上州路の安全輸送がおびやかされると信州路迂廻（うかい）を考えねばならず京、大阪行の荷駄に不祥事がおこると、北陸海岸回りを考えるというような苦心をせざるを得なかった。「小千谷の荷主、幸領で道祖神講を結成し、中山道の定宿を統一し……道中奉行に訴えて、日ノ荷物として優先輸送するよう懇願し」というのも、その例である。「船で盛んに上り下り」というのは、縮に関するかぎり三市場間のことでしかない。

しかし、縮行商で川の水路を利用しなかったわけではない。嘉永七年の十組問屋との訴訟事件のあとで、呉服問屋行事（代表）近江屋清三郎と縮出稼ぎ五カ組総代の柏崎町百姓亀七との間にとりかわされた済口証文（議定書）のなかに、次のような箇条がある。

「一、縮荷物入津の分、陸荷はもろろん、上州倉カ野より舟廻しの分は呉服問屋手付きの舟積屋へ水揚げ、そのほか背負い風呂敷包みの反物とも漏らさざるよう呉服問屋へ買入れ候」

三国越えて背負いだした荷物を高崎の南郊外にある倉賀野で舟に積む。倉賀野は利根川の船問屋の所在地十六カ所の一つで、ここから荷物は利根川を下る。途中、関宿から江戸川に乗り入れて江戸に向う。この水路利用は江戸まで一四〇キロ、ちようど中山道と同じコースだ。江戸に着くと、十組問屋の設ける縮荷物着荷改所で検印を受け、仕切勘定の上、荷を出稼人に渡す。そういう形だった。

「上越線開通を最後に」も縮に関してならおかしい。上越線の開通は昭和六年九月一日のことで、ここに持ちだすにしてはいささか調子がはずれているようだ。

しかし、忘庵さんのいうように、鉄道の開通が縮出稼ぎに影響を及ぼしたことは事実であろう。柏崎の回船もまた影がうすくなってくる。たしかに鉄道の出現は生活革命を呼んだ。

ただ北越鉄道の汽車が始めて柏崎に姿を見せたのは明治三十年八月だった。長岡まで通じたのは翌三十一年十二月だったので、当時既に縮の織りだしは三万反台に急下降していたのだから、鉄道開通と縮出稼ぎの関連性を考えることは、そう意味のある仕事ではなさそうだ。

倉賀野から船に積んだ上州路、中山道コースの方を見ても、上野熊谷間の日本鉄道開通が明治十六年七月。前橋までの延長が翌十七年の八月、輸送の便はグンとあがったわけなのに、縮の産反はついに十万台をわって、七万台にならうとしていた。

生産者と都会商人の直結という点からは、商品流通の原則から更に需要は増大し、越後の女ゴシユは伝統の技術をフルに發揮せざるを得なくなり、増産をせまらなければならないのに、事実には産反シリツポミにツボンでしまった。農家の生活が副業を必要としなくなったのではない。明治の農家経営は長塚節の「土」が語ってくれている。三百五十年織り続けてきた技術の後継者がなくなってきたのでもない。縮行商の衰退は縮生産の衰退と表裏をなしており、そして、それには根本的な問題があったと見なければならぬ。

結論をいそぐと、縮が以前のようにできなくなったのではなくて、需要がとまったから副業として成り立たなくな

り、自家用に織り出す程度になってしまった。それは、縮が持っていた宿命的な性格であったかも知れない。生産機構が在来産業から近代産業へ変身できにくいものを内包していたというべきかも知れない。

すこしさかのぼって考えてみたい。

江戸の経済学者佐藤信淵の「経済要録」（文政十年一八二七）にこういう一節がある。

「天正、文禄（一五七三—一五九五）の頃までは、富貴なる人は絹布を着するが故に軽暖なりと雖ども、貧賤なる者は皆麻布を以て製したる刺子（さしこ）を着て嚴寒をしのぎしをもつて、すこぶる難渋なりしことと思われ、毎年春暖を催せる時分より夏の半ば頃に至って疫熱大いに流行し、下賤の者あるいは大患にかかり、死亡なせる者幾千万人ということを知らずと諸記録に見えたり、今時に至りても陸奥、出羽等の偏土にては、刺子を着て嚴寒をしのげる貧民数多有りて、年々疫熱のために斃るる者少からず、寒氣の人をいためるも甚しきものなる哉。

しかるに草綿種子の世に出るに及んで、卑賤な下民と雖も、綿布の温袍を着するときは、寒氣極めて粟烈たりともここにいためらるる患いあることなし」

生活と衣料の問題に一つの解決点が見つけたされたきっかけである。始めて木綿（もめん）の種を朝鮮から伝えたのは慶長三年（一五九八）で、秀吉が死んだため、朝鮮から外征諸將が引揚げてきた時である。

麻布は「糸性みな麻なれば上品下品とも着ごころは汗をはじき、べたつく事更になし」を特性とするものの、「草綿は実の下民等が身体を保全すべきの至宝にして、欣戴す可きの最上なり」で綿布普及の時がやってくる。そのため当然、全国的に縮布の生産が減少するので、越後縮布が特産の地位を明瞭にする結果を生むわけだが、国産縮布の世界が動きはじめたということは重要な問題である。

大阪の医師寺島良安の「和漢三才図説」（正徳元年一七一）に最高の綿布として「勢州松坂を上となす」とありまた縮布産反の主要なものとして「撰津五万反、河内十万反、和泉二十万反」とある。江戸時代の初期には、綿花のまま綿入れ用として、防寒に使用される程度であったものが、庶民衣料として相当に普及しはじめたことがわかる。絹織物や麻織物にくらべて、はるかにおくれたいた織布技術がだんだん追いついてくる。

こうした綿織業が展開されるには、必要な綿作が普及していなければならない。元禄（一六八八—一七〇三）の、「農業全書」によると、綿作は「南北東西いずれの地にも宜しからずという事なし。その中に付て、河内・和泉・撰津・播磨・備後、およそ土地肥饒なる所、これをうえて甚だ利潤あり、故に五穀をさしおきてもこれを多く作る所あり」として記されている。伝来して九十年、生駒山、金剛山の山麓地帯河内地方、撰津・和泉の海岸地方から播磨、備後の瀬戸内方面に綿作が広がっていた。撰津平野郷の宝永三年（一七〇六）の作付け状況は、三六三町余の耕地のうち、米三四パーセント余、綿は六二パーセント弱を占め、畑地だけでなく田の半ば以上にまで綿が植えつけられていたという。

平織り白布（たぐり）であった麻布が寛文年間（一六六一—一七二）に、明石次郎（堀次郎正俊）の手法で緯糸（よこいと）に強くヨリをくれた糸を織りこみ、ヨリ糸技術とネリの技術の巧みな配合で縮布となって名声を高めたわけだが、これと前後して国産新繊維の綿布がダークホース振りを発揮してくる。

最高の綿布と記された松坂木綿というのは元和（一六一五—一七三）に縞木綿を織りだし、寛文（一六六一—一七二）には柳条木綿がで、須川木綿、黒部木綿を送りだした。尾張西部に棧留縞がでたのは、明和（一七六四—一七九）年間で、二十年後の天明には美濃に寛大寺縞が出現する。広く知られた久留米の紺緋（かすり）は寛政十一、二年（一七

九八・八〇) ところで、伊予絣は文化年間(一八〇四—一七)の工夫だという。

天保八、九年(一八三七、三八) ころから急速に発展した下総の結城綿は、細口の木綿に絹糸をまぜて、九〇〇—一〇〇〇本のオサを打ちこんで織られたという。その原料となる木綿糸は、北陸の越前、加賀の商人の手を通して、紀州日高郡地方の日高糸が使用されていた。これは柏崎商人による青苧(そ)と縮の結びつきと似ているが、全国的な社会的分業の形成にまで進んでいたことは注目すべきことだった。

「布 二一五、二五一反

白木綿 一、一七八、三九一反

縞木綿 三二二、七六三反」

これは元文元年(一七三六) 諸国から大阪に集荷された諸品明細のなかにあるものである。白木綿は米、材木、紙について入荷品目の第四位で、抜群の地位を占めている。それにつづいて京織物、絹、唐織物の順となり、布は八位になっている。「布」というのは「延喜式」の記載例がそのまま使われているので、麻や苧(からむし) 楮(こうぞ)を原料としたものをさすのだから、越後縮はこのなかにはいる。

当時、大阪は豊臣政権時代に諸国の蔵屋敷が置かれ、徳川幕府がまた全国市場の結節点に育成したので、「天下の台所」と呼ばれるほど、安定した中央市場として全国の商品流通の中心であった。そのことは諸藩の領国経済がまったく全国経済にまきこまれることになり、蔵屋敷は年貢米や特産品を貨幣化するための設備であった。大阪には五〇藩の蔵屋敷が設けられていたという。

もう一つの中心円に江戸市場があるわけで、麻と綿のせりあいを見るには、ことに麻関係の主産地は江戸市場圏に多く、綿関係の生産地は畿内、瀬戸内沿岸に集中しているのだから、江戸、大阪の両市場を見なければならぬが、元文中の越後縮の生産はまだ二十万反に及ばない頃なので、綿織物との比較には大阪市場の資料で大勢をうかがうことができよう。

布二十一万五千反の産地は加賀、越前、近江、豊後、周防、越中、山城、越後、但馬となっている。白木綿、縮木綿合して百二十一万一千反。麻織物の六倍。長い間、衣料界で顔なじみであった麻織物は全国的には減産傾向となり僅かに夏服として用いられるにすぎなくなり、農民自給衣料の原形へ戻りはじめる。

それから五十年後、天明六年(一七八六)の調べによる諸国から大阪への白木綿上せ高を見ると、次のようである。

「播磨七〇万反、淡路・備前・周防各々四〇万反、和泉二〇万反、河内・伊予・安芸・出雲・土佐・豊後各々一〇万反、阿波・摂津・讃岐各々五万反、合計二八五万反」

驚くべき躍進である。庶民待望の期待にこたえて商品流通の王座に迫ろうとする。この頃、越後縮は生産二〇万反の頂点に立っていたわけで、ひとり御用縮、上層縮として気をはき、農民的商品生産の順調な展開を保持するかに見えながら、実は歴史的宿命ともいべきものを内包していたと見るべきであろう。

ここで、もう一つ考えておきたいことがある。縮布は自給生産の昔から、過重な貢祖の負担にたえかねて困難な生活を打開する方途として、必然的に農村家内工業の展開となった時も、貢祖の金納化によって商品化を一層促進させて問屋制家内工業を形成するにいたっても、終始いざり機(はた)によって織りだされていた。

いざり機は長さ四尺五寸、幅二尺七寸、高さ二尺五寸の簡単な機具で、多く各自の自作によっていたという。日常用の自給的生産用具だから、足指に引き綱を引っかけて二本の綜統（そうこう）を上下させて杼（ひ）の道を作って緯糸を通して足の引き綱をゆるめ、同時に経糸を整えるオサ打ちをする。これを繰り返す最も単純な織機である。

綿織物もはじめは「いざり機」によったが、やがて「高機」を導入して飛躍することになった。高機は踏木を六本ないし八本にふやして、これを二本ずつ任意の組合せて踏むことができる。その結果、いざり機では経糸緯糸一本ずつ交差する平織しか織れないが、高機は経、緯二、三本をこえて交差できるので、綾織りのような変形織りができ、縞、紺などの複雑な製品ができる。絹綿の交織ができる。その上、いざり機で一反織りあげるに十日から二十日かかるのに対して二倍の能率を持っていたという。高機の導入は専門的生産者の層を厚くする可能性を持っている。

ところが縮布は「北越雪譜」がいうように「およそ織物を専門とする所にては、織人（はたおり）を抱えおきて織するを利とす。縮においては別に無き一國の名産なれども、織婦を抱えおきて織らず家なし。これいかんとなれば縮を一反になすまでに人の手を勞する事かぞえ尽しがたし。なかなか手間に賃銀をあてつもの事にはあらず、雪中にこもりおる婦女等が手をむなくせざるのみの活業（いとなみ）なり」このことは縮布機業に関する限り明治にはいつでも変らなかつた。

「織婦を抱えおきて織らず家なし」というように、資本家的マニファクチュア生産を阻止したものは、縮布独特の機織工程そのものの中にあつたというべきかも知れない。

「北越雪譜」のこぼをかりると「僅に一尺あまりを織るにも九百二十度手を動かす。ここをもって一反を二丈七

尺としても二万四千四百八十四度手をはたらかせざれば反をなさず。これはその凡そをいうのみ。（ちぢみはくじらざし三丈を定尺とす）績み（うみ）はじむるより織おろし晒しあげて反になすまでの苦心勞繁おもいはかるべし」という複雑な工程である。

「村里の婦女が雪中にこもりおる間の手業なり。およそは来年売るべきちぢみをことし十月より糸をうみはじめて次の年二月なかばに晒しおわる」のであって「苧（お）を女房、嫁、娘迄昼は農隙の間にうませ（うむ）というのは糸を細く長くつなぎあわせること）夜は宵より四つ時分迄（午後十時）うみ申し……夜なべ仕事に男手伝え右のうみ苧をつむにてゆりて、かせにかけ、これを灰汁にて煮る。一日程にして取り上げ申し候。紺にいたし候分はまたぞろ夜な夜な灰汁に浸し雪にて晒し、右のごとく二十日程にして晒しあげ、横苧はつじ晒と申してうみ候ままなるを灰汁に浸し日にさらしつむにてゆい、夏縮に致しながら横苧は苧にて晒し置きうみ申し候」という農村の内部での苧績み、機織、晒し上げの諸工程が結合された小商品生産であつた。

「そもそもうみはじむるよりおりおわるまでの手術（わざ）すべて雪中にあり、上品に用うる処の毛よりも細き糸をしじめたりのべたりしてあつかう事、雪中にこもりおる天然の湿気を得ざればなしたがたし。湿気を失えば糸折れる事あり、おれしところ力よわりきれ事あり、この故に上品の糸をあつかう所は強き火気を近づけず……雪中に糸となし、雪中に織り、雪水にそそぎ、雪上にさらす。雪ありて縮あり」雪と人の気力によるとする。

「さらすは正月より二月中のしわざなり。この頃ははまだ田も畑も平一面の雪の上なれば、たはたの上をさらし場とするもあり、さらし場には一点の塵もあらせざれば、白砂の塩浜のごとし。さて白ちぢみはおりおろしたるままをさらす。余のちぢみは糸につくりたるをかせにかけてさらす。白ちぢみは平地の雪の上にもさらし、また高さ三尺あ

まり長さは布ほどになし、横幅は勝手にまかせ土手のように雪にて作り、その上にちぢみをのばしならべてさらすも
あり。かくせざれば犬など踏みこえてちぢみをけがすゆいなり。

さて晒しようは縮にもあれ糸にもあれ、一夜灰汁(あく)に浸しおき、明(あけ)の朝幾度も水に洗しほりあげ
てまえのごとくさらすなり。灰汁にひたしてはさらす事毎日おなじ事をなして幾日をへて白々をなしたるのちさらし
おわる。「一口に晒すといつても手のこんだ仕事になる。

織る作業も、いざり機にとりかかっているようすを見ると、腰帯(しばき)の両端を鳥の口(布卷)の両端に巻き
つけて織手の腰につけている。経糸を開口させる時は腰を前方に出し、緯糸を織りこむ時は体重を後方にかけて経糸
の張り方を加減する。このコツを「ケン」の呼吸という。緯糸を通す杼の道をあける時には、足にひっかけた引き綱
をひっぱる。ゆるめてオサ打ちをする。足と腰で地合のいい物を織りだすことになる。「ケン」の呼吸如何で横むら、
縦むらあるいは斜模様に不同ができる。織手の巧拙はかかってこの点にあったので、長くこのいざり機を捨て去るこ
とができなかつたともいわれている。

こうした農民的商品生産が本格的に展開されるようになったかげには「高山谷間深く、雪積もり候村柄にて、米穀
とほしく、金銭の出方はもちろん、外稼ぎとても御座なく候。雪中は縮布相稼ぎ、翌四月中に売り払い、御年貢御上
納、並作ぶじき(食)相求め、渡世営み」という越後農民の生活があった。これは「年々お願い申し上げ、御年貢金
の過半は翌四、五、六、三カ月へ御繰越下しおかせられ」という状態であった。「百日余も相かかりの極めて薄利の
手業に御座候えども営むべき業これなく、山中の村々は耕作も不熟につき御年貢も金納に仰せつけられ、年中縮布代
金をもって細々なりとも露命つなぎおり候場所も数多くこれあり」でいざり機と生活をともにする。

農工末分離であった。高機導入の綿織は農工分離の時が早く来て、專業的織屋の輩出を見ることになる。これに對
して縮は工場制工業様式には移れず、明治に入つては、ますます一種の名人芸として高級品化し、特殊な客筋に依存
しなければならなくなった。

明治七年の府県物産表をみると、一群の商品のなかで織物の地位かひじように高い。その織物内部の比率を計算す
ると

綿織物	一一六九万円	六三・三%
絹織物	四八三万円	二六・七%
絹綿交物	一四八万円	八・〇%
麻布その他	三七万円	二・〇%

既に需用度において大きな格差が生じたことを認めざるを得ない。

この表で、関連原料と製品を含めた生産価格から重要度(全生産物価額に対する比)をみると、綿作、綿業が抜群
で六・〇%、二位は養蚕、製糸の三・三%、麻、麻織物は〇・五%で八位となる。明治初年、農民を商品流通に接触
させる最大の契機は綿作、綿業になっていた。

この年の綿織物の輸入高は国内消費高の三三・二%になり、輸入綿糸は六六・四%にもなっている。輸入総額二、
三四六万円の時である。七年前の慶応三年の輸入状況では綿織物が二一・四%、綿糸六・二%だったから、輸入綿糸
による在来綿織物業の発展を反映していることがわかる。反面、貿易の展開が、繊維産業の在来の構成を大きく変化

させたことを語ることになる。

輸入規模の増大

明治 元年	一、〇六九万円
二年	二、〇七八万円
七年	二、三四六万円
二〇年	四、四三〇万円
二八年	一、九二六万円
三三年	二、七二六万円
四二年	三、四一九万円

開国の事情から倍増線をあらわすのは当然のことながら、内務卿大久保利通が「各官省ノ用度ヨリ人民需求スル所海輪船載ニ係ラサルモノナク、購入日ニ窮リナクシテ、毛糸、綿糸、糖、鉄、民間ノ供用夥多ニシテ……」と国策樹立の急務を説かざるを得ないほど、開国のおよぼす影響は大きかった。生活衣料としての綿業は飛躍的にのび、麻業は急速に客を失う運命にさらされる。

綿業界とても波乱がなかったわけではない。主として先進国イギリスからの綿糸、綿織物の大量輸入にともなう経済的混乱はさけることができない。

良質で安価な綿糸の流入は、局地内生産の綿を原料とする機業地の、綿作農家と綿織物生産者との結合した市場を分断することになり、局地的市場は分解していく。品質の斉一な綿糸だから、農間余業的な生産を主とする国内の手

紡生産を解体させもする。

柏崎でも、早くから縮商が帰り荷として、大量の古着を関西から仕入れてきていたので、その古着綿を更生加工した打綿を扱う綿問屋が十数軒活動していた。綿打ちの下請けをする職人の多かった納屋町は綿ホコリで白くなった家が目立っていた。糸綿などを山ほどに背おった綿屋サンの近在を行商する姿は特異なものだった。ここに大きなおりがやってくることになる。綿問屋の倒産がつづき、綿打ち職人の失業となる。柏崎にとってはショックだった。

藤田観光の小川社長がこんなことをいっている。「五トントラックが一日二往復して、一カ月二十五日間のべつ働いたとしても、一人で一カ月に運べるジャリの量は二百五十トン、一年で三千トンだ。出光丸はベルシャ湾と東京湾の間を、一カ月一往復で二十万トンの石油を運んでくる。船員は三十人だから、一人一カ月六千トンだ。運賃をくらべると、ジャリは隣の埼玉県からもってくるだけで、トン当たり千三百円、石油はベルシャ湾から運んできてトン当たり五百円でしかない。

米国のピッツバーグの製鉄所へ、米国内の鉄鉱石が陸路で運びこまれるより、日本へ外国の鉄鉱石が、船ではいって来るほうが安い。いわば日本は世界じゅうの資源にいちばん近い国なんだ。

明治の日本が繊維王国になった。その原料の綿や毛が、日本でできなかったということが逆に王国になった原因だった。日本の産業で国際規模のものは、日本の資源を相手にしてはいない」

資源が少ないから、安い資源が手にはいるというのだが、この当時、機械製大量生産の輸入された糸価は、日本綿糸より、はるかに安価で品質がすぐれていた。

明治七年（一八七四）

百斤につき輸入綿糸は二九円六六銭

国内綿糸は四二円七〇銭

明治十一年（一八七七）

百斤につき輸入綿糸は二五円四六銭

国内綿糸は四五円

かくて、市場構造の変化にしたがって、分業化が促進されていった。

もう一つ、知っておきたいことがある。

「民産ヲ厚殖シ、民業ヲ振励スルコトニアリト信ジ、体裁ノ虚文ヲ講セス、奇功ヲ外事ニ求メス」大久保利通建言書の一節であるが、明治新政府は殖産興業政策の樹立を急務とした。そして、それは官営事業を中心として展開された。

四本の柱がたてられていて、国民皆兵に対処する産業、産業近代化の前提となる企業の創設、基礎的な条件としての企業などとともに、民間産業の育成、保護を目標とするものも、その一つであった。

この民間産業の保護育成については、二つの方法がとられた。

- 1 民間産業の近代化を促進するための手段を提供する官営工場。
 - 2 特定産業に近代化の模範を示す目的で設立される官営模範工場。
- 1に当るもの例には、明治五年、旧薩摩藩宮の堺紡績所を継承した官営工場がある。

2の例は、明治十一年、英国製ミュール精紡機四台を中核とする二〇〇〇鍾紡機二基を購入して設立された。愛知広島両紡績所がそれである。

輸入綿糸を完全に防止するには、この工場が二五〇カ所は必要だったといわれている。それで、政府資金でこれと同型の機械を十基買入れ、無利息十カ年賦で民間へ払い下げることもした。これで九紡績所が誕生する。

後日のことになるが、これでも規模過小の経費倒れになりがらだったことと、川の水流を動力としたために水量による操業制約をよぎなくされたことや、技術者の欠乏、出資者の資金不足等が原因して、明治十八年には気臭えんえんの状態になってしまった。

この時、抜群の成績をあげてきたのが、政府奨励策のワケ外で誕生していた大阪紡だった。明治十三年、資本金二五万円で創立、蒸気動力でプラット社製ミュール一万五千鍾で操業開始が明治十六年、一日二交代制で機械をフルに運転して、生産を倍加することで資本の効率をたかめる。半期の平均配当率一割六分五厘という好成绩で世人を驚かし、二十年から二十三年にかけての企業熱が紡績を中心にブームをまきおこすキッカケとなった。

別に政府はまた、民間産業の水準を引きあげることに着目して博覧会、共進会方式もとった。十二年には輸出品としての糸繭、茶をとりあげ、十三年には輸入の影響の最も強い綿、砂糖をとりあげたのはその例である。

こうして在来産業の基盤に立った技術や経営の現実的改良策を進める契機がつけられていった。一方、新鋭織機が続々と輸入され、改造、国産化への努力が進められ、生産用具の側からも近代化がはかられていく。明治三十年には豊田佐吉の動力織機の発明をみるにいった

国内織物生産額

明治二八年

絹織物 四、六四七万円(四八%)
 絹綿交織 一、〇二八万円(一一%)
 綿織物 三、七〇八万円(三九%)
 麻織物 二〇二万円(二%)

明治四二年

絹織物 一〇、〇二三万円(三九%)
 絹綿交織 二、四一八万円(九%)
 綿織物 一一、六四一万円(四五%)
 麻織物 三八三万円(一%)

国の殖産興業政策が着々と成果をあげてきている。この麻織物はカヤ、カヤ地、漁網、麻ロープ、畳糸、畳ヘリ等をふくめているので、しかもそれが三八三万円の八一・五%を占めているのだから、麻布は七〇万円ていどということになる。大勢はこうして決してしまった。

大正四年の柏崎刈羽の物産表をみると

綿織物 八六九反 八三八円
 麻織物 二〇〇反 一〇〇〇円

那産麻布は余命を保ちながら高価商品になっていたことを知る。しかも、なお縮行商屋さんは「柏崎に現在二百戸

の東京行があります」と語られているほどだった。当然「縮一品では商売が苦しいとあって、いろいろのものを売り始めました」となり、「越後の紺紺」もその一つで、これは伊予紺を仕入れてきたものだという。

明治八年、加賀越中産物を取扱う柏崎共和組かできたのも、十一年に同じ目的で柏崎大益組が組織されたのも、新局面を開こうとする動きである。早くから行商の帰り荷に持ってきた小間物、古着類、呉服太物の専門店に変わっていく。古着は江戸時代から回船が裏浜に入港すると、魚沼方面から仕入れにやってくる程で、綿の育たない郷土に古着問屋が軒を並べることになった。

教育問題補稿

ここで補正しておきたいことがある。

前述の「教育の門を開く(一)」が掲載されたころ柏崎日報の山田良平さんであった。良平さんの助言で、つれだつて柏崎図書館へいき、部厚い新潟県教育史を再読することになった。

この本は六年余の年月をかけて昭和二年一月三日に発行されたもので、飯塚知信さんを会長とする新潟県教育会の事業として、中野城水著作の本県における権威のある書物である。

その上巻三九一ページに、次のように書かれているところがある。

「柏崎の洋学校は明治元年第一柏崎県当時明善館と号し、県庁構内に建設したのがその起源である。この学校は柏崎県変じて越後府分局となりし際も、そのまま存立したのであるが、第二柏崎県の時、官費経営は不可とあっていっ

たん中廢……(中略)……五年十一月柏崎洋学校と改称し、六年一月仮規則を制定し、十五日開校式を挙げた」
 数年来、良平さんと第一次柏崎県立学校はいつ、どこにたてられたかと、さぐっていたことがこれで水解除するかと思われたが、この記述にもふたつの疑問がある。

ひとつは、柏崎の「洋学校」は明治元年第一柏崎県当時明善館と号し……という点。

もうひとつは、五年十一月柏崎洋学校と「改称」し……という点にかかる。

これについては、こんにちまでに明らかにされ、語りつがれてきた資料でも解答はだされるのだが、公用記録か確実な原典資料で答えるのでなくてはならない。再調査、資料さがしにあくせくするが思うようにならない。

ふた月ほどして偶然にも柏崎県の公用記録に接することができた。柏崎日報に「柏崎県史」のタイトルで集録されていた。大正七年四月八日号から政治部記録が三回、同四月十二日号から制度部関係記録が七回にわたって連載されている。そして教育関係記録は「明治元年、柏崎県創置より六年廢県に至る苟も学校教育に関する事を収録して、この篇を作る」として同四月二十一日号から七回に分けて掲載してある。

これによって、右の新潟県教育史のあやまりがはつきりした。また柏崎百年前述の内容について一部訂正し、補筆したいことも生じたので、これからこの柏崎日報柏崎県史資料によって補正してみたい。

この資料の最終回に「明治六年七月、これよりさき本県既に廢せられ新潟県に合併す。ここにおいて旧来人民保育の業官費の外をもって挙行せるものを」新潟県に引きつぎのため申し送りをした文書がある。官費によらなかつた事業の申し送りで、柏崎権参事石川昌三郎柏崎県参事鳥居断三の連名による「柏崎学校外七件申送」となっている。七件というのは柏崎学校のほかに長岡洋学校、長岡小学校、高田学校、長岡旧政庁、長岡会社病院、旧長岡領五個組郷

学があげられている。

その柏崎学校の項を見ると、

「第一柏崎県の時明善館と号し、御構内に一校を設け、第二越後府分局の節も、そのまま存在これあるところ、右は官費にならずの趣につき、第二柏崎の時いったん中廢……(後略)」

とあって、はつきり「柏崎学校」であって、明治九年五月、山田八十八郎が五等警部熊谷宮門にあてた文書のなかには「県学校を庁の近側に建設せらる。普通の漢学校なり」とあるのがこれである。

新潟県教育史が「柏崎洋学校は第一柏崎県当時……」といっているのは明らかだが、「柏崎学校」と「柏崎洋学校」が混同されている。

だから、五月二十八日の越後タイムス紙に

県立図書館内の新潟県教育百年史編さん室から「柏崎高校の歴史は、どう見ても八十年―九十年になると思われる」という問合せの手紙が二回もはいつてきている。柏高側では「そうではない」と理由をつけて回答してやるが、編さん室のいい分は「柏崎県庁が柏崎にあったころ、県立柏崎洋学校というのがあった。これか柏高の前身ではないのか。柏崎洋学校廃止ののち、新潟洋学校の分校が柏崎につくられている。これも貴校の前身ではないか」というわけで、柏高の高木校長はこの珍説に首をひねっている。

という記事がでてくることになる。

これは教育百年史編さん室か昭和二十一年版の「新潟県教育史」を基本にしているから生ずるのであって、まず、

この県教育史を訂正していただかねばなるまい。したがって、第二の問題点「改称し」も訂正処理は自明のことになる。

新潟県教育史が「柏崎洋学校」として採りあげている内容は「柏崎学校」のことであった。訂正していただくと同時に、柏崎洋学校については新たに項を設けていただきたいものである。

柏崎洋学校については、すでに記述したのであるが、もうすこしつけ加えることにしたい。
明治五年十月、洋学校設立について陳情。同年十一月、次のように許可の文書あり。

今般柏崎町長岡町有志の徒より資本金差出し両地において洋学校開設の儀願いて候につき聞き届け候、不日教師下向の筈に候条子弟これある向きは入学致さすべく、もっとも入学手続き並びに月謝等の儀は両校幹事に差しだすべきものなり。

壬申十一月、柏崎県参事鳥井断三

六年一月十五日 開校式

この時のようすは県参事鳥井断三は烏帽子直垂（えぼしひたたれ）、柏崎学校の学監金田清風と長岡分校の学監として参列した三島億二郎（長岡洋学校の設立者）は袴（かみしも）姿であったという。青柳剛斎、遠藤軍平の記念講義がある。「いずれも有名な学者であるから敬服した。遠藤氏は根が士でないから、講義がすんで自席にもどる時、腰の物を忘れるというこっけいもあった」当時の思いで話である。

洋学校の教師には柏崎学校の牧野煉次郎がまわったのだが、開校式の花形が全部、柏崎学校の教師だったのは、次のような校舎事情があったからであろう。

校舎は山田八十八郎の書いたものによると

「洋学を開くに及んで県庁に請い、仮りに県学校建物の内を区別し、これを施行す」

となっている。県学校の建物については後でふれるが、洋学校は県学校の校舎を間借りして開校されたわけだ。そして「はじめは微々たるもので生徒僅かに数名」というところから、いわば、県立柏崎学校に併設されたような形になったものらしい。

こう見てくると、柏崎学校と洋学校は別個なものであることは明瞭なのだが、当時の風習から、両方をひとつにして柏崎学校と呼んだり、柏崎学校といながら洋学校のことであったりで、どちらにも通用したと思われるふしがある。町の有志から募集した基本財産まで、両方ひっくるめにしたようすがある。柏崎学校も県立学校とか小学校とか県校とかの呼び方を持っていた。

さきほどの八十八郎さんの文は、更に次のようにつづいている。

「六年六月廢縣の後、県学校位置の不便なるをもって、これを本県（新潟県）に開陳し、柏崎元町会所に移す。すなわち現今の分校これなり」

明治九年五月三十日の記録である。この短い記録のなかでいくつかの事を調べなければならぬが、「現今の分校これなり」は、柏崎県廃止新潟県となった時、洋学校は新潟県の所管に移されて新潟洋学校の分校となったことをさす。正式には新潟学校第三分校とよぶ。

「柏崎元町会所に移す」この時に、親学校のようにであった柏崎学校（前出のように県立小学校とも呼んだ）に大きな変革が生じた。その前にもうひとつの資料を見ておきたい。柏崎日報柏崎県史記録の「柏崎学校外七件申送」柏崎

学校の項の後半、すこし長いが次に書き抜いてみる。

「しかるに学制（明治五年八月二日新学校令公布）仰せだされ候前は郷学助成のため御付托に相成りし一万石に付き一石五斗も廢せられ、学資不給紛勞となり、柏崎町有志の徒を募り、本年（明治六年）より明後亥年（八年）迄毎年金數円宛を出さしめ、且かねて学校へ献する所の金千円（創立の時、町有志から）県庁にて取扱ひこれある分も下付あわせて金四千円は資本として營繕その他諸般の出納共に、ことごとく当校幹事即ち柏崎町戸長一同へ委託し、県庁においては濫費を防ぐため毎月の出納簿を検するのみにこれあり、但し、庁下の学校と管内諸学舎の則を取る所につき、時々常員のうち十三等出仕青柳剛齋を派出し、教授のかたわら学事を監督せしめ置き候事」

「一万石に付き一石五斗」は説明を要することかもしれないが後日にゆずることにして、青柳剛齋伝で柏崎学校は柏崎県廢止まで続いたと書かれているのだが、廢県一カ月後の文書では、剛齋はまだこのように柏崎学校で仕事をしている。

しかし、新潟学校の分校となつ洋学校を、旧町会所に移すことになった時には柏崎学校の名がでてこない。学制実施による第四中学区私立第五番小学第三十七私学校の誕生と関係がありそうだが。

第四中学区私立第五番小学第三十七私学校という長い名の学校は、学制公布による柏崎町立学校の一番手で、今の柏崎小学校の前身である。創立が明治六年十月、場所は柏崎今町旧町会所内であつたことに注意したい。

廢県は六月、七月には具学校の基本財産を確立、十月には新柏崎小学校の創設。こう見てくると、長岡で学制公布によって、長岡学校（柏崎学校の長岡分校）が二つにわかれて、第三中学区第二十番小学校坂之上校と第三中学区第

二十一番小学校（表町校）となつたように、同じことが柏崎の場合でもなからうか。第四中学区第五番小学校は高畑校ともよび、第四中学区第六番小学校は諏訪新田校とよんだ。この二つが柏崎学校の発展的解消した姿と解される。

それで高畑校が旧町会所に設けられたので、新潟学校第三分校となつた洋学校も、柏崎学校の基本財産を引きつぎながら同所に移ってくることにしたのである。

この高畑校は、柏崎県立学校の先生だった原道太郎が教師になって、生徒三十三名で開校したもの。七年には生徒が九十名。こうなると洋学校と同居の町会所は狭くてかなわない。そこで下浦町聞光寺を借りて移る。分校が二つあって、一つは沢田織枝を句読師とする小町校、他の一つは徳原鹿之助を句読師とする徳原校と呼んだ。

町会所に残つた洋学校も生徒二、三十名であつたが、やがて閉校の時がくる。明治九年六月十二日付で、小五、六区總代二十人、戸長九人の連名、学区取締松村文次郎、小五区小区長西巻永一郎、小六区小区長山田八十八郎が名をつらねて、新潟県令永山盛輝に差し出した願書がある。

「追々衰微の姿をあらわし候故柏崎町人民においても若干の資本を醸し、到底振起せざるの洋学校に備える事を遺憾に存じ候折から先般新潟本校学則御改正の沙汰分校に波及し、生徒においても退校せんとする状態に相見え、いよいよもつて分校永続の目途これなく候。ついで同町五番小学本校（高畑校）のごときは家屋手ぜまにして、追々入学これあり候え共、これをいゝるの席なく、かつ借家（聞光寺）のごと故、家主のつごうにより時々休業いたし候等の差支えもこれあり不都合すなからず、かつ五、六番小学校共資本不充備にして年々負債あいかさみ、これをささおるの目途これなく、困却まかりあり候儀に候えば、右第三分校の儀は当分閉校にいたし、五、六両小学校本校高畑校、諏訪新田校を接続し、第三分校の地へ引き移し、一層小学校を拡張つかまつりたくと存じたまつり候。

洋学校を閉校にして、そこを高畑、諏訪新田の統合校舎にしたいというのである。洋学校を閉校にすると、県立学校として引きついできた基本財産四千円の処分が問題になる。そのことについて願書はこうつづく。

「かつまた、昨年八月柏崎町病院設立いたし候え共、その資本てうすにして、器械等の買入れに差しつかえまかりあり。次に柏崎町授産所の儀、有志の輩、自力をもって設置まかりあり候え共、その仕法相立てかね候次第もこれあるに付、かたがた右資本のうち、左の通り区内別し、それぞれ分附つかまつりたく存じたまつり候。

一金三千円也 柏崎町有志募金

右は両小学連接学校資本につかまつりたく

一金千円也 元柏崎県より御下附金

内

金五百円也

右は病院資本に御附与く下さられたく

金五百円也

右は授産所備金に御附与く下さられたく

この願い出に対して「閉校の儀は当分聞きとどけ候」と新潟県令の御指令がでて、ここに柏崎洋学校は閉校されることになった。

以上みてくると、柏崎学校は洋学校の前身ではなく「県学校建物の内を区別して、これを施行」したものであること。明治五年十一月に県学校を洋学校と改称したのではなく、「洋学校開設の儀願出候につき聞届」で新設された

ものであること。また、柏崎県廃止と同時に柏崎洋学校も廃止されて、新潟洋学校の分校がおかれたというのは、かつて廃藩によって長岡学校が柏崎県校の分校と改称したようなもので、新潟学校第三分校と校名を変更したものであること。これは閉校にあたっての基本財産の処分法をみてもうなづける。柏崎学校は学制公布と同時に、新小學校に生まれかわる運命を持ったが、およそ一年間、洋学校を併設していたことなどがはっきりするようである。

柏崎日報柏崎県史記録によって柏崎県学校のことがややはっきりしたので、前述の内容についての訂正、補筆を次にすすめてみたい。

前面に引用した「七件申送」書をもう一度くり返してみる。

柏崎学校

第一柏崎県の時明善館と号し、御構内に一校を設け、第二越後府分局の節もそのまま存在これある所、右は官費にならずの趣につき、第二柏崎県の時一旦中廢、庚午年（明治三年）に至り、同県において尚復、戊辰以来雜物売りはらい代金の内をもって、旧脇野町庁の一半を移し、旧桑名藩長屋跡高内引きの地に再造す。今の校舎これなり。

この資料は貴重なものだった。

1 「第一柏崎県の時明善館と号し、御構内に一校を設け」

これが柏崎史誌年譜の「明治戊辰越後府これを建てしも」の柏崎学校であった。越後府は明治元年六月におかれ、柏崎県は同七月におかれたもので、この時はまだ戊辰の戦場は長岡城を中心にして激しい時であった。

七月二十五日の夜、長岡城は河井継之助に奪い返され、二十九日、砲八十門の反撃をうけて再び官軍の手に落ち

る。西郷隆盛が別軍をひきいて新潟に上陸する。八月、戦線は村松まで押され、会津の降伏を九月にみて、ようやく越後に新政が行なわれるようになる。

この九月に越後府は新潟府となって柏崎をはなれるのだから、「越後府これを建て」の柏崎明善館学校は動乱のさなかに誕生したものと思われる。新行政の第一号施策が、この学校開設であったということは特筆すべきことであろう。

その場所について甲子次郎さんの大洲村誌稿では「陣屋御蔵（西光寺山下の日石本社があったところ）の跡地に柏崎県学校を置き」と書かれているが、これは何かの思いちがいではないだろうか。十六カ村のねんぐ米をおさめたこの郷倉が、この時点で廃止になったとは考えられない。

資料も「御構内に一校を設け」だから陣屋門内と見るべきであろう。「陣屋の御蔵」というと、この郷倉をさすのか普通ではあったが、陣屋門内にも御蔵が七つあった。そのうち四つは大役所と棟を同じくし、一つは大役所の附設建物。あとの二つが別棟になっている。甲子次郎さんは「御蔵のあと」と聞きとっていられたのだから、このどちらかではなからうか。

2 「第二越後府分局の節もそのまま存在これあるところ」

「第二越後府分局の節」というのは、九月に新潟府となったものが、翌二年二月、県内の所管地域を二つに分けて一つは新潟県、一つは再び越後府を復活させた事をいうので、この時、柏崎県は廃止になって、水原の越後府に合せられることになった。

柏崎県は廃止になったが学校はそのまま続けられたということで、前に書いた「明治二年二月、陣屋旧邸に始めて

学校を開き、柏崎町を始め村落より生徒を募集す。職員を置くこと左のごとし……」は、この時のことにあたるものであった。そういう意味で読みなおしていただきたい。

3 「右は官費にならずの趣につき、第二柏崎県の時一旦中廃」

二年二月に廃止になった柏崎県が、八月に再び置かれることになったので、第二柏崎県ともいうわけで、この時、学校が一時中止になった。学校管理のための官費がだせなくなったのが、その理由である。

前述した、このため開店休業の学校だったとしたのは訂正しなくてはならない。およそ一年近くは開校していたわけで、臨時休校にはいったのは第二柏崎県になった時だった。

官費の支給をとめられた理由は次の資料でうかがうことができる。これも柏崎日報柏崎県史記録からである。

学校の段欠くべからざるものに候とも先般、朝廷の御学校制いまだ定まらず候故、しばらく休廃いたし候ところ、今般、東京において学制則概略定まり候えば、不日に全く御決議にも相なるべく候

よって仰せだされ次第、当庁においてもすみやかに再建すべく候条、その大維はもとより御規則を遵奉さる事に候えども、土俗人々時宜によりて出入すべきものも多くこれあるべく候えば、それぞれ見る所さまつの事にいたるまで、すべて心づき候義はあます所なく申し立てすべく候なり。

右の趣もれなく触れ示すものなり。

午（明治三年）六月十三日、柏崎県庁

教育制度がきまるまで待てということであつた。土俗民情に適せんことを願っていた。

4 「庚午年（明治三年）に至り、同県において尚復、戊辰以来雜物売りはらい代金の内をもつて、旧脇野町庁の

一半を移し、旧桑名藩長屋跡高内引きの地に再建す。今の校舎これなり」

これが知られている再興柏崎県立学校である。再興されるまでに明治元年、世相動揺、人馬のいななき血なまぐさい中で創立された明善館（校舎は陣屋構内の御蔵）、明治二年二月、第一次柏崎県廃止に伴う学校体制のたてなおし（校舎は陣屋旧邸）同年八月、第二次柏崎県誕生とともに休校と、三年間に四段階を踏んだことになる。めまぐるしいことだった。当時の行政機構がめまぐるしかったので、五年までは二転三転というありさまだった。元年には新潟裁判所、佐渡裁判所で出発したものが佐渡県、越後府となり、一カ月後には柏崎県、新潟府となる。二年にはいると間もなく越後府と新潟県となり、佐渡県、水原県にかわり、水原県から柏崎県がわかれ出る。三年には新潟県と柏崎県、佐渡県の三県となり、長岡藩を柏崎県にあわせ、四年にはいって他の十藩が十県となり、四カ月後には新潟、柏崎、相川の三県となる。まことにややこしい変動であったが、こうしためまぐるしさのなかでも、教育だけはたちきらないようにしようとする努力がつけられていた。

「戊辰以来雑物売りはらい代金の内をもって」

陣屋整理の売り立てでできた資金のうちから学校再建費がねん出された。雑物というには大物だが、史誌年譜にこんな資料がある。

奉差上御請一札之事

御下長屋、内外御払イノ分

落札代金五百二十兩一分二朱ト銭百文

右ハ今般、郡町へ入札ヲモツテ御払イ仰付ケラレ、前書ノ金高ヲモツテ入札ツカマツリ候トコロ私へ落札仰付ケラ

レ有難ク存ジタテマツリ候然ル上ハ代金上納ツカマツリシダイ書面ノ御払イノ品才渡シサゲ下サラレタク候

コレニヨツテ御請ケ一札差シ上ゲ奉リ候トコロクダンノゴトシ

明治二己年五月

買受人 啓三郎印

同前 庄屋豊蔵印

営繕方御役所

陣屋の門外にあるものを下タ長屋と呼んだのだが、極楽寺大門に接して、陣屋の高台下の一段低いところに八棟あった。これを払いさげたものらしい。

陣屋大役所の玄関の図を見ると大砲がかざってある。正面に向かって右に二門、左に三門おかれている。これも払いさげになる。

古流大砲相払イ申スニツキ入札ノ儀申シ渡シ置キ候トコロ明後四日開札イタシ候条ソノ段申シ渡スベク候 モット
モ開札ノ節入札人同道シテイズベク候モノナリ

己六月二日 民政局

郡中総代

町年寄

こうした財産整理が学校建設に役立つことになるのだが、「旧脇野町庁の一半を移し、旧桑名藩長屋跡高内引きの地に再建す。今の校舎これなり」で、建物はわざわざ脇野町から持ってきている。

甲子次郎さんの大州村誌稿では「明治三年十月二十二日、長岡藩を廢して柏崎県に合す。十一月、県立学校を下長屋に開く」となっている。「旧桑名藩長屋跡高内引きの地」というのは下々長屋の跡である。前年五月にすっかり売り払ってしまったあとだったが、さいわいに柏崎県管内の脇野町陣屋の建物にゆとりがあったので、その一部を移築したわけである。大八車ではこんでできたものであろうから簡単な仕事ではなかったろうが、当時としてはたいして苦にもならなかったのかもしれない。

「明治三年十月、さきに羽羽柏崎町において建築に着手せし小学校落成せしをもって、この日、有志の徒をして就学せしむ」とあって、次のような達しで開校となる。

今般、柏崎表において小学校營建、来る二十日、開館候条入門 入熟いたしたき輩は父兄、村役人連印の書付けをもって小学校へ願ひ出申すこと。

一、二十二日より日講これあり候条、有志の輩は身分にかかわらず聴聞、勝手たるべきこと

庚午（明治三年）十一月 柏崎県庁

粗末な木造平家建てながら、一部を講堂にして、他は寄宿所とする意気さかんな学校となっていた。県内に正式の学校は他に一つもない時であった。

「然るに学制仰せだされ候前は郷学助成のため御附托に相成りし一万石に付き一石五斗も廢せられ、学資不給勞となり」

この「一万石に付き一石五斗」の問題を前に残していた。これが学校開設に対する官費支出の算定基準であった。

「当県小学校取立てに付いては学資の儀につき、昨秋以来、度々あい何い候ところ、追って一定の御規則あい立て

候までまず高一万石に付き現米一石五斗充用、度々あておき候よう御下知のおもむきかしこみ奉り候」

これは柏崎県大参事南部広矛、柏崎県権知事新莊厚信の連名で、政府弁官にあてた。辛未（明治四年）五月十日付の手紙の冒頭のことばである。前年十一月、柏崎県立学校を再興したのは、この暫定的な教育費が認められたからだが、柏崎学校が陣屋の財産処分によって建設費がまかなわれ、柏崎町有志の強力な支援、構想によって勇健な態勢が整ったことを思うと、反面、創設当時の公費としての一万石につき一石五斗の教育費では、やりくり困難なものであったことが想像される。

当時、柏崎県の管轄高は三十七万五千三百余石であったから、算定基準による教育費は五十六石二斗九升六合であったという。およそ百四十俵分ではあるが、これだけの年間教育費で頸城、古志、刈羽、三島、魚沼の管内諸郡の教育振興をはからなければならぬ。学校建設費は地元負担としても、学校管理費や教育振興費をまかなうには大変な苦勞をしなければならぬ。だから、明治の郷学は町村に先覚的な知見と、物心両面にわたる熱意がなければみられなかった。

（四年十一月には十藩十県が廢されたから、柏崎県に高田県や与板県、椎谷県等が含まれることになって、その管轄高は五十四万石余になった）

教育公費の増額運動や補助金獲得運動がなかったわけではない。そのことについては後述したいが、新政府としては秩序の回復、財政の建て直し、殖産興業と大問題が山積している時だった。柏崎県の場合でも動乱のちまたとなった長岡を中心にして民生の安定をはからねばならない。長岡城下三千戸の八十五%が戦火で焼失、近郷の被害も大きく、六百数十人の死傷者をだし、職を失い、衣食に窮する苦しさは想像をはるかにこえていた。そして、この時ほど

自力更生を強く求められたこともなかった。そんななかで柏崎庁は長岡の殖産興業に二十万円を投じ、資金を貸与する。

こうした時に教育費の自主財源を生み出すということは夢のような話になるわけだが、さきほどの四年五月十日付文書のつづきをみよう。

「然るところ 先般も申上げ候とおり 遠僻の土地がら故 教化の道開かず頑愚固陋の風習にて自己の知識を開く第一の学校なるを、官にて御世話あれば、その費もまた官費と心得おり、いまだ下民申合せ相設け候はこびにいたりかね候ところ」

こういう実情であるが、だんだんに理解も深まり、県内有志の者と語り合って、教えさとして官費に依存しないようにしむけていく見込みもついてはきた。然し

「さしむき一万石に付き一石五斗にては何分にも成功おぼつかなく、何とか良策もこれなきや、県官一同思慮つかまつり候儀に御座候。ついでには昨年、伺い立て候出石三百二十四石余の分を年割納になしだされ、この納め方の儀は当県支配高三十七万五千三百余石に当る学資高一カ年五十六石二斗九升六合をもって、当末年（明治三年）より差しつづぎ返納のつもり、お聞きとどけくだされ候よう願上げ奉り候」

出石三百二十四石余という八百俵からの米になる。これは、年貢米はまずめを多めにおさめるのが普通で、これを役所で処理する時に正確にはかかっていくと余分の米が残る。これが出石で、一年間に余った分が八百俵余になったから、これを教育費として使わしてほしい。その分は年賦で返納するという陳情で、これが二回目。しかし許可にならない。

三回目の陳情は五年正月二十五日付で、柏崎県参事鳥居断三の名で大蔵大少丞宛。

「（去る明治三年の出石分は小学校入費として備えたいと申し立てても御採用にならないが、民風が高まってきているので）一日は一日だけ進歩に相成り候に付、前条出石払い代金一八五八両一分、永一三九文一分の内をもって、日新の書籍買い渡しおき」

と、返納は年賦でも月割でもよいからと申請して始めて許可をとった。三年目である。

明治八年三月、新潟県令楠本正隆が新潟学校の基本金十万円を作ったのも、柏崎県の出石資金と同じ方法だった。

明治二十一年五月、陸軍軍医総監松本順来柏して布施静雅堂に滞在し、海水浴の効能をさかんに唱導す。

これから海水浴を健康法としてとりいれる人たちが増したと書かれている。大正ッ子なら誰でも耳にしたシウトウジ（汐湯治）である。

二十七年一月には桑山孫太郎、井倉善六、池島豊吉、三宅元右衛門、片山長太郎等が世話人となって、納屋町から本町通りへの新道を開通した。元の中央公民館前の道である。「山山」と呼ばれた砂丘の背を切り割ったあとを今も見ることができが、この道は海運道路だった。それが不動院下（天屋下、今の中央海水浴場）に海水浴者をさそう道にもなった。

三十年八月、春日新田を起点として二年前から始まっていた北越鉄道の工事が柏崎まで開通、生まれて初めての汽車にびっくりするのだが、十一月には北条まで運転、翌年十二月には長岡まで開通。これがまた海水浴を普及することになる。鯨波より番神が先ず脚光を浴びる。

第二期 生活の近代化へ

水泳場史

三十一年に北濱館が番神の鼻に出現、三十二年の町鑑に、北濱館のこんな広告をのせている。

本館の位置は風光明美をもって県下に随一たる下宿番神の岬にあり、眺望の佳絶なるは日本国中の新聞紙口を極めて賞賛し……(中略)……夏時に在りては海水浴に便ならしめんがため、海中に柵を結び、浮樽を流し、いかなる老幼各位といえども危険なからむ。これに加うるに常に衛生顧問の設けあるをもって、万事衛生上に注意なしおるは本館特色中の特色にして……。

海水浴客のための第一号旅館としての工夫である。既にそうとうの利用者があったとみえて「本年のときは不本意ながら宿泊おことわりの止むなきに至れり」それで来年は一大高樓を増築して受け入れ態勢を整えようというのである。資本金七千円の株式会社となって大増築、史誌年譜はこの時のことを記録している。

鯨波への外客誘致は、三十五年に当初の蒼海ホテルが前川の西側、砂浜の土手の上に建てられてから本格的になる。鯨波駅が四月十五日から九月三十日までの季節駅として、ホテルの裏側に設けられるようになったのもこの頃からで、三十六年四月十二日の中越新聞にこんな記事となってあらわれている。

長岡の有力者主となりて発起し、昨年より建築にとりかかりたる蒼海ホテルは、風景佳絶の地を占めたることとて遠近の視聴をひくこと多く、創業の去年にてさえ予想外のはんじようを極めしをもつて、ことしは更に規模を拡張し、増築をなし、また来遊者の便利をはかり西洋料理をもあわせてなすよしなるが、すでに東京、信州、蒲原方面の人にて滞在の予約を申込みもの多しという。

日ならずしてホテルは現位置の山上に新建築をして本店とし、浜の建物を支店とする。

蒼海ホテル、本支店あり、客室本店二十三、支店十室、本店玉突場、浴場ありて海抜二百尺、蒼波一望、佐州指呼

の間にありて、普通客一泊二飯付にて一円位、滞在客は三飯同値なりという。柏崎までの車賃は昼間三十銭、夜間三十五銭なりという。(大四・五・二三 柏日)

このホテル本店で最初の大きな会が開かれたのは明治三十九年七月二十二日、東郷上村二將軍が来柏された時だった。車をつらねて柏高へも訪問されたのだが宿舍はこのホテル。郡内各町村の代表が集まって盛大な歓迎会が開かれた。町の芸妓五十余名が揃いの衣装で、三階節を庭前でおどる。

海のリセプションのはじまりというべきだろうか。

四十二年の柏崎華街志によると

阿部楼、近年にいたって海岸近くに海月という料理を兼ねたる旅館を新築したが、海水浴客の来ること実に多数なものである。(後に大火後、二丁目の天屋京兵衛がこの海月に移る。今の天屋旅館である)

三ツ石、夏の海水浴には最も適している。(ここに臨海館ができる)

これで、だいたい柏崎の海水浴場が全部顔をならべる。このころになると鯨波に浪花屋、若松屋があって何れも十二室、一泊五十銭から八十銭、月ぎめの客も扱う。「趣味ある滞留をなさんと欲する人々は藻汐焼く漁夫の茅屋に入りて自炊するこそ面白かるべし」で、民家借間が一室月二円から三円。舟による清遊は船夫一人一隻一日の借入料が六十銭から一円。番神にも「三角壁の突端に瀟洒な客室、清風陣々としてつくるを知らず」の岬館もお目見得している。海水浴ムードは明治にして既にできあがっていた。

健康法としてデビューした海水浴を、より積極的な身体づくりとして展開したのが、当時の柏崎中学校だった。柏

高六十年史をみよう。

明治三九・七・二七 夏季に約三週間の水泳練習を開始し、爾後、毎年の例となす。

同年八・一〇 水泳部開設

同四一・七・二三 職員生徒一同、番神岬まで水泳遠足をなす。

同年八・一七 番神岬まで遠泳、二八名中成功者一〇名あり。

これが柏中、柏商の連合水泳会になっていく。

柏崎中学校及び郡立商業学校連合の上、今二十八日より二週間、水泳会を開く由。水泳教師は柏中教諭中島清人氏にして、教授を受ける学生は中学生八十二名、商業生四十名なり。当分、中学生は午前九時より十一時まで、商業生を午後三時より五時まで練習する予定にて、水泳場は浦浜なり（大三・七・二八 柏日）

柏崎中学、郡立商業連合の遠泳大会は昨日午前八時より開始したるが、泳手の健児総勢七五名三列となり、三隻の護衛船にて番神が鼻より柏中浦目がけて海中を一直線に泳ぎだし、十時十分、先頭の泳手前田、沢吹、蠟山、石黒、土田、小熊、伊藤、宮川、小越、栗林以下六五名、無事水泳場へ到着したり。なお、同所より鱒石川、荒浜新田まで泳ぎ続けし猛者は柏中二一名、柏商一一名にして、無比の好成績をしめたり（同年八、一一 柏日）

この年汽車を利用した鯨波の避暑客は、七月二五二六名、八月四六〇四名だったという。寂然とした漁村、北越の寒駅が美しい風趣と、空と海の青さに注目を浴びてきた。

柏中・柏商の水泳練習は年々本格的となっていく。大正七年の進級者は柏中六六名、柏商五一一名を数える。この時の納会に生徒がひろうした泳法をひろいあげてみると、式泳、平泳、横泳一段のし、同二段のし、互抜き、片抜き、

早手抜、諸手抜、片手日傘、諸手日傘、潜水十五間、同二十五間、競泳、跳込直跳、同平跳、同逆跳、手足からみ、前鴨後鴨、果実献上、水書、浮身、雁行等おどろく程多彩である。これは浜っ子の水泳ぎをしげきすることになり、後年の水泳協会の活動を誕生させることになる。

水の犠牲も大きかった。

長野、東京、長岡方面より毎日海水浴客来着し、鯨波及び下宿その他の海辺旅館は活気を呈しおるが、柏崎警察署にては海水浴期に至れば年々溺死するものが多数あるをもって、これら海水浴者に対し充分警戒すると。ちなみに昨年、自殺その他にて溺死せるもの二十三人なりと（六七、六、三〇 柏日）

毎年のように溺死者があるので、泳げる子を一人でも多く作ろうと、日本赤十字社新潟支部が天屋裏に日赤水泳場を作った。大正十四年八月十三日の柏崎日報の記事に「去る二十日から開設されて今月三十日閉鎖の予定。指導者は柏小第二部の内藤訓導と北条第二校の宮川訓導。午前八時から午後六時まで。午前は百名から百五十名、午後は急増。十六日、競泳大会の予定」というのがそれで、この施設は大正十二年から始められた。自由に泳ぎにいく子どもに、いつでも希望するものにコーチをするというしくみであった。

もう一つ、水泳技術の指導を目的として水泳協会も発足した。場所は天屋下鶴川寄り。

一昨日、発会式をあげた柏崎水泳協会は昨日から練習を開始した。会員二百名、小学生が六、七割をしめ男女青少年の加入多し。教師は増田郡長をはじめ十数名なり。毎日正午から午後五時までを練習時間とし、八月三十日までを期間とす（大一一四、七、二四 柏日）

教師十数名は、かつての柏中柏商合同練習の猛者連であり、増田郡長は「三十九才にして、本県下の運動郡長の異

名あり、水府流に長ず」という水府流教師の免許をもっていた。水泳技術指導の功労者であった。

泳法指導が普及していくにつれて、水泳場が集まる人々も多くなっていく。昭和六年九月十三日には、鶴川尻の港橋の竣工式があげられる。柴野与一郎団長を中心とする港町青年団が独力で建設したものである。

そして戦後、急調子で海水浴場は人々の集まる場所となった。浜電話が番神で六本、鯨波で十四本、浜茶屋もにぎやかにふえた。土木工事もすすんだ。ただ、百年史をながめて思うことは、地の利、自然条件に甘えるだけで、水域施策の改善については百年一日の感があること。営利本位の浜茶屋はないほうがよいという声が起きていること。医学百年の進歩に対して、キリキズ程度の処置準備しかないこと。そして水泳思想の近代化がおくれていること等についての不思議さである。

余話一束

いよいよ第二期の問題に取組む時になって、のっけから余話では恐縮だが、当時の雰囲気のようなものに触れることができたという意にほかならない。

1 柏戸三代

今、人気を集めている横綱柏戸は九代柏戸であるが、郷土出身の柏戸が三代続いたということなのである。

五代柏戸 上小国上岩田の出身、本名は渡辺弥八の三男寅治。七代目伊勢海五太夫を継ぐ。

六代柏戸 中鯖石善根の出身、北村郡平の二男、本名は忠之助。八代目伊勢海五太夫となる。

七代柏戸 東頸城郡大島村の出身、本名を江口富太郎という。八代伊勢の海の近親である善根村松家の子弟として八代伊勢の海に入門。九代伊勢海五太夫となる。

大正四年の葉月、三四郎の「柏崎」にこういう記事がある。

「現今人気力士の一人たる柏戸は、本郡善根の出身で伊勢ノ海五太夫の世継になるという評判である。もとは高田市の信慶商会で樽拾いをしていたがその時は身体も普通の小僧で力士になれそうもなかった。それが二十才過ぎてからムクムクと上へも横へもぼうちようして、七不思議の国だけに一の奇跡をあらわし、兵隊さんとなり入営しても軍服が着られぬという程で、背の高さ六尺三寸、大兵肥満の大男、本人の希望もあり賛成する人も多く、伊勢ノ海部屋へ申込み弟子にしてもらった。

三役は大丈夫と師匠の保険付きもあって、八国山の名で本場所に突きだされ、土俵のはたき振りは相手嫌わずのマツタ無し、剛勢な相撲振りだった。相撲も巧者となって四年前の本場所からトントン拍子の全勝、一場所で十枚以上乗越して去年の春場所にはとうとう小結と昇進した。」

これは七代目柏戸のことである。明治四十年暮下に付け出され、四十三年入幕と同時に柏戸と改名。猛烈な突きだしを得意としたそうだが、身体の調子をくずしたり、温和な性格から小結三場所つとめたものの休みが多く、力が強い割に見栄えのしないことになったのは惜しかった。

引退は大正七年五月、三十七才だったという。幕内取組総数八二、勝四〇、負二九、預り四、引き分け九。

昭和に入ってから柏崎出身力士番神山も、一時は郷土人をうならせたが、当時、七代柏戸とともに人気のあった郷土

力士に浦ノ浜という人があつたという。柏崎日報社近くの小料理屋藤野屋ではたらいたり、中浜臨海館で料理の手伝いをしていた色白の小男、誰もがスモウトリになるなどは予想もしていなかったという。荒浜の牧口旦那の世話で浦風部屋に入門。小男でも相撲は巧者、三年たためうちに十両となり、やがて前頭三枚目までこぎつける。東京力士五百人中、男振りのよさは五指の第一とはやされたとか。しかし後段は病氣勝ちで気の毒なことだったという。

六代柏戸宗五郎は明治元年初土俵、藤ノ川を改めて柏戸となったのは、十四年一月東方前頭三枚目に上った時。翌年六月前頭二枚目にあがったのが最高位だった。

四十一才で引退するまでの幕内取組総数は一六九、勝五八、負七〇、預り八、引き分け三五。引き分け相撲が多く大剛梅ヶ谷とも二度の分け相撲があったという。八代伊勢ノ海としての部屋育成の力は大きく、その手腕は世間の評判になるほどであった。

五代柏戸は初め鯨ノ海を名乗り、猫又となり、更に荒飛甚太夫と改めたが、天保十二年一月西方前頭四枚目になった時に狭布ノ里と名をかえた。この時三十八才。柏戸宗五郎となったのは同十四年十月。最高位は前題筆頭で三役には入れなかったが、四十四才で引退して部屋経営にのりだしてから、俄然頭角をあらわして角界に君臨するようになった。

当時衰微の角界を背おい、よく伝統を維持して後世に残した功績は高く評価されているものだという。明治十九年七十九才のとき帰郷の途次三国峠で倒れ他界した。

江戸飛脚となった大久保の石塚久造に御所車の名をつけ、免許状を与えたのはこの人である。免許状の文面はこうなっている。

「そこもと儀相撲熱心に付この度相改めわが門弟に相加え置き候ところ実正なり、しかる上は何国迄も紛れこれ無き者なり。右候えば、御公儀様御法度の儀は申すに及ばず相撲場所は勿論、平日もみだりなる儀決して致さざるよう相つししみ申すべく候よって免状くだんのごとし

江戸相撲年寄 式守七代

伊勢ノ海五太夫長広」

2 石油余話

柏崎では、まだ料理屋などにてローソクをつける習慣があるが、石油地に似合わぬことだ。アンナものはよすほうがよい（新規生）

（明治三六・三・一五 中越新聞）

ランプが柏崎にはじめて紹介されたのは明治六年、当時としてはひじょうに高価なものだったがそれにしても三十年を経過して、なおこんな投書が新聞にあらわれる。

柏崎県の南部氏が東京で求めてきて、半田製油所の阿部新左衛門にみせ、石油をいれてとすことを知ったのがはじまり。このランプの価が一円二十銭から三円五十銭だったという。当時、一円で買えるものは米なら二斗九升、塩なら四十二貫匁、以下ならべてみると、みそ十二貫五百匁、酒一斗、油二升五合、白砂糖一貫二百匁、小豆一斗三升というのだから、新器具ランプの高価さに目をまるくせざるを得ない。

柏崎で始めて街燈のできたのは明治六年で、白石正利が柏崎取締所長時代に要所要所に置くことにした。石油を用

いたのだとある。

(忘庵 古柏集)

ランプにヒントを得たカンテラ風の工夫だろうと思われる。ランプは高価であっても、だんだん実用化されていくことは自然の理であった。夜の火として重宝なものになると同時に、新しい問題をともなってきた。

明治十三年八月八日午後八時、本町二丁目(当時長町)貸座敷酔屋事地田チト方より失火し、折柄の焼けこむような炎天続ぎに乾き切ったる事として火勢一時にひろがり、翌午前十時までに焼失家屋九九〇戸を延焼したり。原因ランプ。焼失地域本町二丁目の一部、二丁目、三丁目、四丁目、鷺川町、島町、広小路、旭町一丁目、同二丁目、八坂町、港町一丁目、同二丁目、同三丁目の一部、住吉町、小町。損害およそ四十二万四千円。

(大六・二・九 柏日「柏崎火災史」)

原因不詳の大火もあり、またランプが原因というものばかりではないが、火災におびえるのも無理はなかった。

- 明八・三・一四 大町の火事 三〇戸
- 明一三・八・八 酔屋火事 九九〇戸
- 明一七・三・末 妙行寺門前出火 一三戸
- 明一七・五・一八 市川新田イチカジ火事 五〇戸
- 明二〇・三・二七 下町大久保屋火事 五四〇戸
- 明三〇・四・三 扇町日野屋火事 一二三六戸
- 明三四・四・二五 挽木町火事 四〇戸

明三一・五・一五 荒浜新田火事 五〇戸
 明三五・一・一九 下宿上の山火事 二一戸
 明四二・四・九 荒浜火事 八五戸
 明四四・三・二七 広小路チンコ大工火事 四二戸
 明四四・一・一三 長町桐油屋火事 六二三戸

これでは町が立ち直るひまがない。防火施策は項を別にするとして、ランプ使用と防火に関するものに、こういうものがみえる。

本町は明治四三年、左記の印刷物を調成し全町各戸に配布し、各戸見易き場所に貼付せしめ、火災予防の一端となす。

防火予告

毎年四月一日より一〇月三十一日まで(風なき雨降りの日を除く)その他暴風に際し、組合員は輪番にゲキタクをなしつつ組合内を夜警巡らなすものとす。

暴風の際は左記の通り実行すること。

- 一、夜間は各戸において家族一名ずつ不寝番をなし、自衛上時々家屋の内外を巡視すること。
- 二、組長は木札を組合内に順次迅速に通達せしむ。

右木札を回送し来る時は各戸一斉に一斗以上の用心水を門口に出し置くこと。

イ、ランプつばは大小共金属製のものにあらざれば使用する事を得ず。ガラスつばを使用することは県令によって

厳禁せられたり。

ロ、ランプに石油を注入するは成るべく午前中になし、夜間点灯後、石油の取扱をなさざること。

石油とマッチの置場を区別し、各一定の置き場を定め防火の用意をなすこと。

ハ、煙筒の設けある家は毎月三回以上、必ず煙筒内のすすを払い、破損したる箇所あらば、直ちに修繕をなすこと。

同様のランプ取扱布告を、東京府では明治五年にだしていた。ランプヲ掃除シ油ヲツグハ屹度昼間ニ致シ置クベシ。夜火ノ近処ニテ取扱マジキコト。ということに三十八年間のへだたりがあったとは。

田代孝氏談話

柏崎地方の石油熱はすばらしいもので、三二年から三三年にかけては大小の製油所が四〇以上五〇近くあったでしょう。新田附近（諏訪町）はこの製油所でいっぱいでした。

重油のあとしまつに困り、二斗二升樽につめて停車場までこんで、ただの五厘などという驚くべき捨て値でした。この重油を北越鉄道が買って、しばらく機関車の燃料にしていました。私はその頃、日本製油の名で北越鉄道へ一カ月千石宛納め、四千石売ってやりました。僅か二銭五厘の原価が一円位になりましたからボロイ。

今でも諏訪町三丁目附近は夏になると水が硫酸臭いといわれるようですが、製油所の悪水はエンマ堂の附近まで流れて来たものです。諏訪町一丁目裏に池があって、ここにも悪水が流れこむと苦情がでて、江筋を作ってカネ四の脇から田圃へはけさせた事もあります。

諏訪町附近の地代は当時一坪七銭五厘、木羽ふぎの建家が一坪六円でできたものです。坪七銭五厘が小倉製油ができた頃には一五銭まであがりました。

柏崎駅前の宝田会社に、私が退職するまで社宅としておったところは、今、日石の食堂になっているようですが、当時畳建具付き一坪一五銭でできました。何しろ職工の賃金二五銭という時代です。（昭三・九・九越後タイムス）

北越鉄道が重油を使ったということについては、明治三四年発行の北越石油地誌にこんな広告がのっている。この本は高田新聞主筆をしている関美太郎の著で、印刷者は荒浜村の品田重太郎、印刷所は柏崎町株式会社活版印刷所となっている。

北越鉄道は官設信越線の終端直江津駅に起り、柏崎長岡三条等県下著名なる町村を経て新潟港に至る唯一の交通機関にして、開業線路は八五哩、機関車燃料には石油残滓を用い、更に煤煙噴散の憂いなく、沿道沃野禾穀熟し、百二の山河名勝多し。米山の天険、塚山の難関、信川の溶々、舟江の七二橋、その他飛瀑かかり、名刹存し、鉱泉出で石油湧く。若しそれ厳冬のこうに至れば、乾坤一白、満眸銀のごとく、千態万状ほとんど指顧するにいとまあらず、まことに本邦有数の豊饒区たり。

今日への重油燃料のあゆみがこうした形ではじまる。新技術に寄せる大衆の驚きに対して広告価値がたかかったのであろう。

たしかに、数年前までは厄介千万な品物であった。石油精製が盛んとなるにつれ、副産物の揮発油と重油は、始末に困るものだった。気違いクソウズといわれた揮発油を安全灯油にかえたのは、田代虎二郎の苦心研究によるもので明治一七年のことだった。引火点が高く安全率の高いものだったから、石油を危険視していた官民の蒙をひらくこと

にもなった。イギリスからの輸入灯台油は、一箱(十ガロン)二十五円内外だったのを、田代は四円内外で納入できたのだから、外油の輸入抑制にも成功した国産技術であつたわけだ。

馬鹿クソウズの重油は、底無しタンクの万年桶に捨てこんでみても始末に困り、うっかりすると周囲を汚濁して農作物を害する。田代孝(虎二郎の養嗣子、後の宝田柏崎製油所長)の工夫は、鉄製の皿をカマの中に置き、小鉄管で外部から徐々に重油を注入する装置を考えだした。これで石油精製用燃料とすると、十石の原油を蒸溜するのに、石炭五百斤(この代金二元)を要したのが、重油六斗ですむ。価格十二銭分。長岡中の製油所は全部この方法をとりあげた。ところが、町の中は煤煙おびただしく、町民に大反対の声が起りということになってしまふ。この公害に対して「ムラ(重油のこと、表面に紫色の光をあらわすので)、ピッチを燃料に供するものは違警罪に処す」という新潟県令で差止め処置となる。

そこで、田代孝の苦心は吸入器からヒントを得て、蒸気で重油を噴かしながら燃焼してみたところ好結果。これが県下一般に採用されるようになる。これが二十七年五月。北越鉄道のコマージュルが煤煙噴散の憂いなくというのはこの方法によるものだ。便利であり、経済的であり、業者だけでなく、一般市民の感謝も集まり、古志郡長、長岡警察署長、県知事の激賞を受けるにいたつた。

二つの厄介物を父は安全灯油にかえ、子は重油燃料使用のはじまりを画す。今日への基礎を作つた技術であつた。

3 大火対策

名物大火のために、昭和十四、五年ころでも「柏崎の火災保険料は他市より高い」といわれていたことは柏崎の笑いぬ一面を語っている。

それだけに、対策に集団移転のような思いきつた方策も実施された。大正元年までの期限つきで、二丁目の貸座敷二十戸を取りはらうことにした。代替地は東端の砂浜だった。これが今の新花町になるのだが、この代替地は整地して提供されたといっても、たいへんなものだった。

一番最初に移転された森さんの話はこうだ。

昭和荘の附近に石油会社らしい小屋があつて(これが日石が買収したイントル送油所のと)そこだけが地ならしされており、その北側は大きな砂丘があり、そのかげから今のコンピラさんのほうにかけては凹凸のはげしいところだった。もちろん北園町あたりのところも小さな砂丘がいくつも重なりあい、ココの木が多い原っぱだった。町が作つてくれた道というのも、栄町の一番そとの浜側のも一本だけだった。

町が日石から譲り受けた時は坪一錢八厘とかで、新花町にするために整地し、引き移りを開始した時は坪三錢にはねあがつた(整地したといっても前記のようだから、当時の仕事はよほど大ざっぱなものだったらしい)それでも市は売ってくれなかつたので、州崎市長時代までは市からの借地だった。

家を建てた裏側(東栄町方面)にはいくつかの製油残り粕の捨て穴が大きく、砂丘のかけにあつた。ココの木などのかげに汚ないピッチがたまり、その上に砂ぼこりが白くかぶっていた。うっかり踏みこんだら大変なことになる。冬、穴の上に一寸あつさ位の氷がはると、かっこうのスケート場になる。下駄の裏に竹を打ちつけて子どもが滑りに集まる。氷が割れて落ちた子の衣類のしまつに困つたことがある。

まったく大変な場所だ。移転者が名実共に町づくりをしなければならぬ。今の新花町や、その周辺のようにすを見

て、この最初のころの苦勞が想像できるだろうか。

ごっそり引越された二丁目のほうも問題だった。大正四年八月六日七日の柏崎日報に、こんな記事が見える。不具となる柏崎

明治四十四年十一月までは二丁目の別名として新町と称した。貸座敷二十戸、その他の諸商売いらかをならべ、紅灯の下絃声巻に溢れ、周囲三百余戸の住民またよって衣食飽くの時、一夜同町の冠頭に一点の怪火現れ、歡樂境を一過たちまち灰塵と化するに至る。大正元年を限り貸座敷全部、市外の浦浜に移転を命ぜらる。

変体化せる町

貸座敷十五戸移転、二十戸のうち二戸廢業、千種屋は茶間屋、高橋屋、桜屋は料理業に転業。他町内から移転するもの大小の料理店、開業、約二十戸に及ぶ。

今の二丁目

全町八二戸のうち、商店二〇、料理店一三、芸妓待合数戸、人力仕立所三、湯屋二、理髮床二、見番一、大弓場一、玉突場一、

無数の空地

一丁目の一部と二丁目で十五、六カ所、二五〇〇坪以上。長町扇町の部だけで九カ所、二丁目のみで空家三、売家三、貸家五。山口俊治空家と柏崎座、天屋旅館の空地は广大で往時の盛時が偲ばれる。

天屋旅館の復帰を切望する。

扇町時代、天屋京兵衛で多くの上中流顧客を有し、郡県外の学生旅行団体の半ば以上はこの館に宿り、常に同町の

商戸を賑わしたものの。貸座敷業者に先だつこと一年、現地に旧海月を増築したるが、幾千坪の空地はわが柏崎町の体面上放棄し置く能わず、復帰を望むこと、ひとしく町民の口にするところなり。

異様な町なみが異常ないたでを語っている。そして対策はすすむ。

明治四十四年の大火災後、左の経営設備をなすにいたれり。(大正六年二月柏崎日報)

- 一、屋上制限規則。四一年四月県令にて発布。瓦またはトタンにふきかえる。
- 二、消火器、各町備付け六二個、個人設備のもの七七個
- 三、非常用水溜、容量十五石のもの公設三三、私設七。一四〇石のもの一二。
- 四、消防線 五間から七間幅の道五本。柳、桐、ポプラ、常盤木等を植栽。
- 五、消防組合、四部編成、一八七人。
- 六、消防ポンプ。一部用フランス型三一五円、二、三部各ドイツ型。四部用蒸気ポンプ二五七五円。

4 神器 未熟

わが家ではようやく人並に三種の神器を備えることができたどホットしたのに、昨今ではカーだ、クーラーだと神器の銘柄が変わっている。それどころではない。十年後を目ざしてビデオテープ、別荘、ブォイッチ(海外旅行)の三Vに入っている。更に十年後には庭園、プール、航空機の三P神器だろうという。気が遠くなるような開化速度だ。

百年当初の神器は自転車、電灯、電話といったらおかしいだろうか。

八坂神社近くの瓢宅が鉄輪の三輪車を持ってきて、貸自転車を始めたのは明治三十二年ころだという。前車が大きく、後車が小さいのだが、「アッチへ行っちゃアブナイヨ、コッチへ行っちゃアブナイヨ」とはやされながら、一時間いくらの賃貸しが人気を呼ぶ。やがて空気入りタイヤが出現して、いち早く買い入れて乗りまわしたのが荒浜の牧口義矩、四ッ谷の近藤友一郎の大家だったという。

駅前旅館の第一号を承った若戸屋主人中野平右衛門の「人力車一台でも二十五円で買える時に、長岡の三条屋から自転車を買ったら百何十円、表向き四十円で買ったことにしていたがあとでばれてしまった」という話も、そのころに近いのではなからうか。

さて、その普及のしかたを次の表でみることにしよう。

	人力車	自転車	戸数
明治四四	二八〇	二七五	一六九七
大正 元	二七三	二八七	一七七二
二	二六〇	三四九	一八二五
三	二三八	四八〇	
四	二四七	五七八	一八六五
五	二一〇	六六九	
六	二〇三	七一一	
七	一八七	一〇八五	

八 一九一 一三〇七
 九 一九三 一七四一
 一〇 一八六 二二一六
 一一 一七二 二九二一

十数年で六戸に一台ということか。明治五、六年ころ自転車渡来というから、それから数えると四十年かかって、ここまでこぎつけたことになる。

電灯がはじめて柏崎についたのは明治四十年の一月、北越水力電気会社柏崎出張所最近の調査という「柏崎の電灯需要数」が次のようだった。普及率一二・二％。

大正四年七月三十日の柏崎日報に、北越水力電気会社柏崎出張所最近の調査という「柏崎の電灯需要数」が次のように発表されている。

柏崎	三、二六五灯（一、二三九戸）
比角	七五六灯（二七〇戸）
枇杷崎	六三六灯（一七四戸）
大洲	四九四灯（二六二戸）
下宿	七二灯
鯨波	五二灯
長浜	二二灯

西中通 四八灯
荒浜 一二三灯

柏崎一戸当り灯数は一、七五灯

長岡一戸当り灯数は二、二灯

他に動力

柏崎 一三馬力(八戸)

比角 二三馬力(一二戸)

枇杷島 四九馬力(二〇戸)

大洲 五三馬力半(六戸)

動力需要の多数を占むるは米商(精米商)なり

およそ十年を経過しているのに柏崎の普及度は六六・四%、他地区についても当時の現住戸数に対して見ると、比角は六九七戸に対して三八・七%、枇杷島六一一戸の二八・五%、大洲は六四一戸の四〇・九%になる。つましい生活ということになるが、高い民力でスタートしたとはいえないようだ。

この時の一戸当りの灯数を見ても

柏崎 一、七五灯、比角一、〇八灯

枇杷島 一、〇四灯、大洲〇七七灯

であって、長岡の一戸当り二、二灯に及ばない。この年十二月二十七日の柏日記事の

最近、西山高浜方面に電力供給をなし、該方面に益々拡張を試みつつありと、ちなみに同地区における電灯使用者は二九〇戸、五九一九灯にして、平均一戸につき十燭二灯の割なり、

とくらべあわせても、停滞を感じざるを得ない。高浜、西山が油田ブームの震源地としての華やかさを語るにしても、柏崎のおくれについては考えさせられるものがある。

電話はどうだろう。電話所が開設されたのは明治四十年九月。電話加入者数を大正五年の「刈羽郡勢一斑」はこう記録している。

明治四四年 二五九

大正 元年 二八五

大正 二年 三六一

大正 三年 三七三

大正 四年 三七七

自転車、電灯にくらべれば、これは性質上多くならないのが当然かも知れないが、それにしても十年を経過して二〇・二%の架設では伸びがゆるやかすぎる。

柏崎郵便局去月中の市外電話は合計一八七四通にして、この料金四五七円六〇銭なり。これを前月に比すれば一七五通話八五円六〇銭の増加を示せるが、加入者市外対話地左のごとし。

長岡四九〇、見附三一、関原一、新潟四九、東京五四、小出六、直江津一六三、出雲崎九二、吉田三、高田七七、

六日町五、新発田八、新津五九、今町五、村松七、長野二九、与板一〇、地藏堂二二、十日町一七、寺泊一四、豊野二、小千谷二八、加茂三、岡野町三五、三条三二、栃尾八、鯨波二、石地一、北条五、関山三、宮川一、新井三、松代一、田尻一〇、塩原三、糸魚川四、中鯖石四、中田一〇、新道五、片貝一（大四、一〇、五、柏日）

当時の交渉地域の関連度をうかがう一つの資料になって面白いが、一加入者当りの一カ月市外通話が四・九七通話では、別の意味からも考えさせられる。

こうしてみると、神器三種とも充足度が緩慢であったということはどうか。民力がまだ熟していなかったということなのだろうか。百年初期には伝統的に蓄積されてきた活力が、伝統を守ろうとするものと、新しいものを取り入れようとするこの緊張のなかに、いきいきと表現されていた。民力未熟に逆転させるものがそのあとにきた。

明治十三年八月の酢屋火事から四十四年十一月の桐屋火事まで、三十年間十一回の大火で三六九〇戸を灰にしてしまった。これがその大きな原因ではないだろうか。それに在来産業の苦悶がかさなる。

大火のあとは職人賃金や諸物価が値上りする。建築用材は高騰するだけでなく間に合わない。大部分が古家を買ってきて移築する。桜屋さんは新潟から大きな家を買ってくる。山留さんは出雲崎で買って船で運んできて七十五円ですんだ。田町では二階建て建坪二三、五坪の家を枇杷島で買って、解体、運搬、移築で百二十円を要した家がある。たくわえのない蠟燭職人の家の例である。

こうした資金の造成は、大方は借金か無尽によらねばならない。家無尽、屋根無尽の通りことばがうまれた。屋上制限規則で屋根は不燃質材料を使用しなければならぬ。瓦かアタンでふくには独力ではむずかしい。そこでアタン無尽で協力を求める。これがいくつも重なる。

近頃、大阪無尽とやらいう高等乞食が流行して困る。ついこの間も某方の無尽に出席した所、ある人が「こう無尽が流行しては助からぬ。われわれのような者でも通帳が十四冊ある」といったら、別の一人が「君は十四冊で幸だ。僕は二十五冊ある。きょうも、これから三軒行かねばならぬ」といいながら袂から通帳をだして見せた。（明三六・

一・二五 中越新聞）

家を建てても、それから数年は利子と返済の重荷に苦しむ。災厄のほんとうの苦しみは事件のあとに数年間つづく。この繰り返しは三十年を四十年五十年の苦しみにする。

大正三年にこんな事があった。「電気会社の横暴不遜の振舞を慨し、これが反省を促すとともに、七、八両月間は停電また停電、ために甚しく執務に支障を来したる件に関し、動力および電灯料共割引きなさしむる件」で実業協会、町内有志者、青年会、各総代それに新聞記者団が町役場楼上で会同、決議事項をもって電気会社と交渉する。交渉は二カ月かかって料金一割引、設備の改善、燭光に相当する電力の供給、電球の無償取替え等を約束させる。こうした出来事もきりつめた生活の断面を語るものであろう。

また、大正四年の柏日に「驚くべき電灯の盗用」という記事がある。申込の数倍燭を使ったり、孫電灯をひいていたのが四割一分にもなっていたという。笑えないナンセンスだ。進学志願者も極めてすくない。

しかし、この頃、長岡本社管内の動力モーター一六八〇の二一％を柏崎で使っていたということは、神器未熟をのりこえて、生きがいを求めようとするあらわれであった。

悲願五十年

第一期でみた在来産業の苦境をどのように打開するかが、いわば第二期の課題ともいべきものだった。

「人物百年史」が語っている牧口義方の事業、明治十八、九年頃、長岡の糸屋、福原庄七と組んで店を東京に開き当時紀州で生産されていた綿ネルを販売したという、これも一つの方向であった。

綿織物が大衆衣料として急速に伸びてきたわけには、各生産地が特有銘柄を案出して、自給綿による加工商品経済で優位に立とうとしていた。紀州綿ネルはこうしたなかで、明治四年にデビューしたものである。しかし、これも農閑の余業としての副次的な地位から脱しないかぎり、あるいは専門的な生産者に転化していても、大量に流入してくる安いインド綿にはたちうちできない。これを原料綿とするマニファクチュアが形成されていくことと並行して小商品生産者の分解がすすむ。そこへもってきて明治二十三年、各地に米騒動続発、紡績第一次操短というような姿に見られる恐慌がやってくると、ひとたまりもなく席捲されてしまう。会社がつぶれる。商店が破産する。牧口さんが手いたい損害を受けられたのも、この自給綿による小商品生産に資金を投入されたからである。

二は縮布行商の帰り荷として扱った古着、小間物等の専門店に転業する。同様の形で薬店にかわる。

三は長年にわたって培ってきた行商への意欲を持続するもの。これは根強いものであった。

取扱う品物に綿製品、絹製品がウエートを占めてくる。塩沢方面から仕入れてくる「木綿白緋」それに伊予の「緋緋」十日町の絹物などに力がむけられる。

木綿緋は畑織（はたけばた）草織（くさばた）と呼ばれたそうだが、上天気の日をえらんで四日間くらい、毎日午前中の作業で三回くらい水洗いをしてさらす。天候の関係で仕事が間に合わない時は、海岸にて二日間くらい海水でさらしたという。これは大だらいの運搬や塩分抜きなどでひと苦労する。さらし終ると、白米の粉で作った糊で糊付をし、たたんで仕上げとする。

伊予緋は地のし、藍落して一日かければよかったそうで、これに越後緋の名をつけて行商に持ってでる。一反三円五十銭から四円七、八十銭で仕入れたものが、七円から八円五十銭くらいの好評で売れたという。

十日町で縮にかわって登場したのが「透綾」（すきや）、明治二十五年で縦横絹糸で五丈もので羽織が二枚とれる。つづいて「壁透綾」、横に壁糸を入れたもので、大正のはじめまで、それに代ったのが「明石」ということになる。

十日町に高機が導入されたのは文政十二年（一八二九）、宮本茂十郎による西陣系統の技術移入であった。はじめは絹糸を緯とする絹縮交織の工夫だった。長年月にわたる縮布製織によって会得した薄物製織の手練を活用して、高機による透綾機の隆盛に向った。その製織工程や染色、意匠に改良考案を加えたものを、柏崎商人も行商に採りあげていったわけである。

明治二十五年八月の記録に「壁透綾」「透綾縮緬」は明治二十三年に始めて十日町において製造す。爾来夙夜に種々の工夫をこらし、日に月に幾多の経験を積み、遂に同二十五年にいたる三カ年間に技術大いに進歩し、一の産物と成すを得たり。早くもすでに粗製濫造品を見るにいたれり（中略）これが矯正と物産の永遠に盛ならん事を期して「議決した縮商規約」というものが見える。真剣な行商態度であるが、この議決書に連記した年行事に、小千谷、十

日町年行事とならんで、柏崎町年行事として三井田重五郎、林長二郎の名がなっている。

明治三十年に、柏崎組縮布絹織物商改良組合規約制定書に加盟連記してある数は百名におよんでいる。このなかに比角の行商者が三十二名見えるが、昭和十六年企業整備令が施行された時の比角の旅行呉服行商者名簿を見ると三十一名である。縮布行商は第一期で終わったが、行商による活躍はずっと続いてきたことを知るべきである。

こうしている間にも、手織機の減少→機業戸数の減少→零細工場の脱落および大工場への吸収合併→力織機の増大、という現象が大正から昭和にかけて進行している。

四はこの渦の中で、何とか自分たちの手で織物生産を実現しようとする。数百年来、他地域での製品を中継してきたが、柏崎の生産品を持ちたい。この悲願に一生をかけた代表的な人が勝海栄治郎だった。

大正四年の「刈羽郡勢一斑」をみると、工業製造品のうち織物については次のように記録している。

	数量	価額
絹織物	一三、七七七反	一〇二、七〇九円
絹絹交織物	一九反	三八円
綿織物	八六九反	八三八円
麻織物	二〇〇反	一、〇〇〇円

当時の工業製造品のうち銅器の二七万円には及ばないが、ガラス製品、瓦、はき物、建て具、さし物、菜種油、いわしのしめかす等を含めた総額が四九五、七八四円であるから、織物は全工業生産の約二一%をしめている。これはまた、当時の新潟県の織物産額の十分の一にあたっている。

十五、六年前までは柏崎産の織物は皆無にちかかったのだから、これは驚くべき努力の結晶というべきかも知れない。その主要な事業所が比角の洲栄工場（スのエイ）であり、その枢軸となって活動した人が勝海栄次郎であった。

生前、勝海さんが語られた話は満十八才の年からはじまる。明治三十年である。発願の転機となったのは、四月三日、一、二、三六戸をなめつくした日野屋火事であった。島町の自宅も焼けた。焦土と化した柏崎復興のエネルギーを何に求めるべきか。ジリ貧状態の縮布行商の苦悩は身にしみている。地元産業をおこさねばならない。柏崎人の手で織りだす自分たちの織物を持たねばならない。その道をきりひらこう。長岡の呉服店に奉公していたが、焼野原に立った栄治郎十八才の立志であった。

この決意は単なる思いつきや、その場しのぎの間に合わせではできない。山師的な思わくでなかったことも、以後の栄治郎の行動が実証している。誰もが口にしなげら踏みこむことをしなかった道に、新しい世界をひらくこうとするには科学的な思索にもとづいた確信があってこそ、本物になる。十八才までの栄治郎の生き方が、物ごとのみつま方が、それを育てていたというべきであろう。

「わたしはそう思った」という勝海さんの十八才当時の思い出話を総合してみよう。

農工分離でなければこれからの産業に脱皮していけない。十日町が文政十二年（一八二九）に高機を導入して、しかも、この機台を先進地から搬入するのでなく、土地の機大工に作らせてまで高機に転換する努力をしたから、製織法に改新がもたらされ、絹縮が発明され、今日の明石織の先駆となる透綾織に方向をかえ、十日町の専業機業として一新紀元を画するようになった。

これがよいしょうこであって、縮布のように農家の副業的産業ではやっていけない時代になっている。それに、明

治にはいつてからの外綿の大量流入、庶民の需要という点から見ても、縮布の時代は終わっている。しかも、棉花の栽培に不向きな越後で、外綿産業にたちうちするには地域事情をいかした絹産業をおこすよりない。これは原料系の輸入による市場混乱がおこることは先ずない。

更に注目しなければならないものに、明治にはいつて輸入されて話題になっている洋式織機がある。明治二十五年五泉にボタンがきた。これは広幅物の製造を可能にし、製織能率は一人の生産額を三倍にするという。(五泉は羽二重生産をボタンで機械化し、三十五年には本家西陣を圧倒する勢を示した) ジャカードという機械は、多くの手数を要せずに多数の経糸を自由に運動させて大きな模様を織ることができる。複雑な紋織でも総統数の操作が自由である。

このジャカードが二十三年に五泉にはいつて紋羽二重を織った。十日町に移入されたのは二十八年で、米式と仏式の両方はいってきた。

米式ジャカードは根津五郎右衛門が樋口常太郎をつれて機業視察で京都へいき、西陣でジャカード操作を修得しようとしたけれども不十分のまま、帰路、東京蔵前の東京工業の木村先生の指導を受けることになり、呼びよせた青山門太郎、滝沢伝次郎といっしょに使用方法を研究し、米国式桐生産のジャカードを購入してきた。

仏国式は佐藤忠平、中林甚十郎が西陣の染織技術を視察してジャカードに目をつけ、帰郷後、二人の使を桐生に派遣して、村田式六百口ジャカードを購入させて、透綾への応用を研究した。村田式は刈羽郡鏡里の村田兵作が桐生で職工をしながらの苦心作であった。

こうした動きを目にし、耳にするものは多くても、心の構えが受け入れ方を左右する。栄治郎の一念発起の核心には、大勢をすどく見つめる準備が積まれていた。

「洋式織機」を導入した十日町、五泉、見附、栃尾の動きを、勝海さんは長岡にいて見つけていたわけである。明治政府の殖産興業政策と業界の大勢、市場流通の動向に深い関心をもっていた。ことに、伝統的な越後織物が変革をせまられている事態を「これは大事件だ。しかし、いま飛びこまなければ汽車に乗りおくれる」そう見た。

「七つ八つのころにあった女紅場、柏崎での織物生産の近代化を試みた第一号だが、高機を導入しての綿織を主にして成績をあげたにしても、これからはあの形ではだめだ。縮を作った優秀な技術を生かして、柏崎の織物にするには洋式織機を使いこなした絹織よりあるまい」

十八才の心の構えは、そうした深い観察と洞察によって準備されていた。その姿勢は、これから三年間、十日町小千谷での修業という真剣な研究によって育てあげられていく。栄次郎が期待したように、この洋式織機は高機と結合して、紋織等の複雑な織物についてより高度の技術をあらわし、製織工程における一連の技術的変革過程に諸々の革新的業績をあげることになったものである。

少年期の記憶として、栄治郎にヒントを与えた女紅場は、明治二十年の大久保屋火事で類焼、中止になったものである。新田表具屋さんからいただいた新資料「女紅場出納総計表」によって、その事業規模をのぞいてみよう。監事山田八十八郎、司計掛洲崎清作の署名のあるものである。

柏崎女紅場の開場は明治十年二月二十六日となっているので、十二月までを明治十年度とし、それから五年後の十五年十二月から翌年十一月までを明治十五年度として、その両年度の精算表を次に対比してみる。

納の部

(明治十年度)

(明治十五年度)

御下ケ金	六五二五円〇〇〇〇	二七二五円〇八二
元受ケ金		
事業収益	一〇三七・四二六四	一八八五・一七八
内綿売捌金	九八七・四九九	一八一六・〇六九
仕立賃料	三〇・四〇五四	五三・四六二
紅縮売捌		一〇・一五
雑 納	一九・五二二	五・四九七
雑収入	五二七・二八〇	四二〇・三四四
計	八〇八九・七〇六四	五〇三〇・六〇四

初年度で綿の生産は一五七一反、売捌いたのが一二三〇反で、この収入が九八七円四九銭九厘とでている。五年後には、織出しものびて八四%の売捌増となっている。

設備投資も、初年度は九年九月から準備がすすめられていて

営繕・修理費	八九三円五七八九
機械買入費	四三・七九五五
賄具・夜具買入れ	一〇三・一九七八
借地料	一五・六四

と見えており、機械購入には毎年四〇円近くが支出されている。

仕事に支出された経費をみよう

(明治十年度)

(同十五年度)

事業費合計	二、一五九円五一六三	一、九一一円三八〇五
内洋糸買入	八六六・三二五三	五五〇・八六五
和糸買入	一三八・八三二	三二七・五七一
出シ系代	三四九・三八七	
煉系代	四〇・三二六	
機入費	七四・七五九	三六・四七
糸染出シ代	四九七・九四七	七一二・七四
生糸買入		一一・九二五
織子その他賃料	一九一・九三九	二七〇・八三八

五年後に絹織にも手を染めたが、仕入生糸の二・五%、三十三銭分を使っただけで商品にはならなかった。しかしこの年の繰越し金は二三七九円一銭二厘となっている。

合理化をめざして給料の半減をめざしたり、生徒の織賃増から賄は自炊にきりかえ、学費の支給も廃止するなどの苦心がにじみでている。

「十日町、小千谷の機屋へ習いにはいって」と勝海さんの話は淡々としたものだったが、三年後には徴兵検査がく

る。習いたいことはたくさんある。糸の吟味、機械操作の技術、織り方、染色の技術、何もかも自分のものにしなくてはならない。それを思うと、せきたてられるような気持ちの毎日だったという。

三十二年に徴兵検査のため帰郷、検査終了後の十月、柏崎神社大門に移っていた自宅で創業、機織りの第一歩を踏みだす。栄治郎満二十才の旗上げである。この時の機台数等の規模については聞きももらしてしまっただが、三年後の三十五年五月、田町のガラス会社事務所跡へ移った時はジャカード二台、高機十台、当時としては思いきった取組み方であった。

この頃から三つの願いが固まりはじめた。

一、十日町にまけない織物を生みだしたい。機械の整備はもろんのことだが、自分たちの織物を作るために、機械の改良工夫を研究しなければならない。小さな機工場にわかれていては芽をのばすことができない。大同団結して柏崎織物を市場にのばすようにしなければならぬ。

当時、勝海さんと同じ志で事業を起していたものに、柏崎織物会社と洲ノ栄工場の二つあった。

柏崎織物会社は南片町（本六）にあって、明治二十九年四月の創設。「五」の字のマークが示すように前忠、花田屋、朝倉、半田屋、二宮の五店共同の事業だった。ところが翌三十年の大火で焼失、再起不能に近い打撃を受けてしまった。

洲ノ栄工場は明治三十三年、洲崎栄三氏によって創立されていた。紀州、滋賀方面への縮行商の家だったが、栄三氏の弟栄助氏が十日町もの（絹上布、紹、明石）の技術陣の一人として活動していたところから、比角に工場建設の転換となった。

二、なかまをふやしたい。何といっても同業者をふやさなければ、柏崎の基幹産業にまで高めるわけにいかない。勝海さんはすくなくも十けんは得たいと考えた。

三、動力を使用するようにしたい。手織機から力織機への開発を急がねば、これからの時代をのりきることはできない。

これまでも水車の動力によるものが相当ひろがっていた。しかし、これは明治初年の官営工場でも水量による操業制約をよぎなくされた。タービン水車による発電を動力源とすることができるのでないか。

手織機と動力織機の力をくらべると九倍の能率になる。一反の織賃が十二銭くらいなのに對して、力織機は六銭五厘ですむ。それでいて職工の一日の収入は手織機が十銭くらいで、力織機だと三十四銭二厘というべらぼうなふえ方になる。

この三つを宿願として、勝海栄治郎はそのために生まれてきたのではないだろうか、と思われるほどに活動された。

三十七年という年は織物業界にとって手痛いことになった。前年から国論をわかしていた対露国問題が遂に破局を迎えて、二月十日対露宣戦布告、仁川沖の攻撃で火ぶたがきられた。この日露戦争のはじまりで平和産業にありがくる。柏崎織物会社は遂に解散、洲ノ栄工場も勝海工場もデットロックにつきあたる。そこで栄治郎は勝海工場を廃業して、機材全部をもって洲ノ栄工場に入る。柏崎織物のあとも、全部を栄次郎が引き受ける。ここでジャカード三台で仕事をしていた洲ノ栄工場は、機台数を一きよに拡大し、中枢に栄次郎という人を得て、局面を転換する努力を払うことになった。

この戦時中から栄治郎は「まるっきり那役所の間みたになつて」講習会開催に熱を入れた。輸出羽二重の製織講習では郡費千円の支出を得た。最高給者郡長の月俸四十五円の時である。小千谷からジャカード十台かりてきて、四、五〇日間の講習を二年やる。田尻製糸を会場にして染色講習も計画する。これまで鉄系統や草木染料であったものを、新しい化学染料に切りかえねばならぬ。染色技術のすすんでいる小千谷の技術をうつそうと二年連続の講習会だった。こうして技術をもった同業者の層を厚くしようという努力だった。

力織機の工夫についても、新潟鉄工所の発動機を買って、米仙精米所の動力でテストをしてみたり、一台くらいでは取付けにきてくれないので、ランプをたよりに電気工夫のまねもする。据えつけを終わっても回転がスムーズでない。羽二重織の技術者が油にまみれる。こうした苦勞で、動力織機では本県で二番めだったという。

明治三十七年、再出発の洲栄工場は柏崎における近代工場制工業の前駆形態たるマニファクチュアへ推転する第一歩を印した。

その中心軸となった青年織師勝海栄治郎はあまりにも忙しかった。数次にわたる機織、染色等の技術講習、そのための資金獲得工作、会場幹旋、機材の借り出し交渉から材料の入手PR活動等の同業拡大運動。勝海さんのことばではないが、「まるっきり小使から講師まで」を一手に引き受け、時には事業経営の相談にも応ずる。まさに企業カウンセラー活動である。工場内では織工の指導、機械の改良工夫、製織の技術改良とデザイン工夫、工場経営の研究、市場開拓、動力機への試行、これが一青年の悲願に燃える姿であった。

大正四・六・一八 柏崎日報

本郡比角村洲栄羽二重工場は設備の点で県下有数のものなるが、その生産品も優秀をもつてとくに京阪地方に好評を博しつつあるが、今回羽二重のほか絹織物も製織することとなりたれば、これが生産も逐次多額にのぼるべく、而して昨三年中における羽二重生産額は五四五九点、この価格四九六一二円七四銭（売価六万円以上）なりと。

大正五、四、八 柏崎日報

越後鉄道比角駅における去月中の貨物、發送通常扱は五七七六九斤、貸切扱三三七七、速達扱五三三二斤にのぼり到着は通常扱、三六〇三一斤、貸切二〇八七にして、貨物の重なるは發送において桐材最も多く、東京秋葉原隅田川駅行等にして、他は京都大阪方面送りの絹布は全部速達便なりとす。

着貨の重なるは新潟曾根方面より輸入する大豆を最とし、塩干魚これにつげり。（一斤は〇・六キログラム）

大正五・五・六 柏崎日報

比角洲栄にては既に四、五十名の工女を使役して三五、六台の力織機を据え、羽二重専門の織物工場を経営している。

更に一昨年頃より綾織、壁織、高貴織、縞縞等の製織に苦心し、着々成功の曙光を認めつつある。原料品は縦糸は名古屋地方より供給を受け、横糸も地方品は割合に用いざるが、一昨年の産額は反物匹物を合しておよそ六千を製出し、この税額のみにも五、六千円に達するという。

大正九・五・一二 柏崎日報

洲榮織物工場勝海栄治郎談

農繁期の手伝いをするという人には一日三十銭ずつの手当を払うことにして帰している。これが四分の一もありますか。後にまだ九五、六名はいます。

需要先は京都が主で、目下十萬円の生産額で、使用している絹織物の機械はわたしの考案したものです。京都の某大商店が莫大な給料で、わたしを引き抜いて連れていこうとしたが固くことわりました。

大正一三・四・六 越後タイムス

四月一日夜十一時頃洲榮羽二重工場から出火、機織工場、機械工場、木工場等全焼。

鋸屋根建物二八二坪、機械修繕工場七九坪、土蔵工場二〇坪、力織機四三台、撚糸整練機一三台、他工場よりの注文機械および未製品等で損害見積一七萬円。

工場裏の鼠塘の池の側に柏崎のガソリンポンプ二台、比角のガソリンポンプ一台を据え、柏崎の蒸気ポンプは比角校前の防火用水よりホースを接続し、必死に延焼を防いだ。放水のため、鼠塘の水面が一寸減った。

幸いに製品三十萬円は二、三日前に京都に発してあったので助かった。

大一五・八・二二 越後タイムス

洲榮羽二重工場

大正一三年六月、資本十二萬円の株式組織で再興。年産額五十萬円。製品の全部を京都千切屋（西村吉右衛門）に納入。一萬六千反、工場四千坪、七棟五百坪、女工九四名、男工八名、寄宿舎四〇人収容。力織機四五台、整経機二台、糸繰機一〇台、糊付機三台、合糸機四台、撚糸機一〇台、管巻機二台、二四馬力モーター。工場主任勝海氏。

こうして最盛期二五〇台に伸び、今日の規模に換算すれば資本金八千萬円の工場というところであろうが、戦時企業整備令で閉鎖。悲願五十年の夢水泡となる。所有地五千坪は油機に、千坪は理研に渡す。比角工業区の先鞭をつけながら、戦後は更に三千坪を電々公社にゆずり、別に土地を求めて再出発をはかったが、戦後の混乱はこれを助けなかつた。

石油開眼

第二期の前半を支えた基幹産業が石油事業であることは周知の事である。明治三十二年、日石がその本社を尼瀬から柏崎に移し、大洲、枇杷島にまたがる鶉川の沿岸に数万坪を求めて、当時としては規模、設備の点からも、わが国最大の製油所を建設した時から、柏崎の開眼がはじまる。

当時、尼瀬油田は二十七年の原油年産三四、二九一石を境に、漸減一途をたどり、代って東山、西山油田が勃興し始め、三十一年には直江津と新潟を結ぶ北越鉄道が全通（当時、信越線は上野を起点として直江津が終点であった）していた時だった。産油地間の連絡がよく保たれ、県外への輸送また著しく便利な地点に布石したい。八カ月の欧米

視察から帰国直後の内藤久寛が、海陸の運輸に便利な地として柏崎を選んだわけである。

柏崎四十八題に見える橋末松山「十念を松より授けつはし涼み」とあるあたり、陣屋御蔵の跡あたりがいきよにタンク立ち並び、黒煙空に尾を引き、近代石油産業の発祥の地となった。

明治三六・一・一八（中越新聞）

本日入港見込なりし威海丸（三千屯）は空缶三万五千箱、南京米千袋、外雜貨五百余個山ギ回漕店へ荷揚げする由なるが、寒中二回以上汽船の入港するは近来稀なることなり。

空缶二万は日本会社、八千は宝田会社にて引き受けるが、価格は一個五十銭なりという。

既にこの頃、日石が送りだした精製油について同年二月一日の新聞記事がある。

蝙蝠印機械油相場左のごとし

（何れも一箱正味二斗六合入の価格）

バルブ油一号 六円五十銭

二号 九円五十銭

ダイナモ油 五円七十銭

シリンドル油 四円四十銭

黒マシ油 三円六十銭

赤マシ油一号 三円十銭 二号 三円五十銭

エンジン油 三円四十銭

スピンドル油 一号 二円七十銭 二号 三円十銭
車軸油 一号 二円十銭 二号 三円

柏崎日報の記事から積み出しのようすをひろいだしてみる。

大正三年

七・四 渡津丸日石社の石油三、七〇〇箱を積んで新潟に向う。

八・八 渡津丸 日石へ空缶二五〇〇箱を荷揚げ、同社の石油八三〇〇箱を積んで下関へ回航

九・一八 第八平安丸 昨日直江津に日石製油八千箱を積み本日柏崎入港、セメント、空缶、朝日ビール陸揚げ、

日石製油三五〇〇箱を積みこむ

渡津丸、来る二一日入港の上、日石製油五千箱を積み、更に直江津で同五千箱、新潟で同五千三百箱積みこむ予定。

陸揚げ予定は官塩、空缶、桜ビール

春日山丸、二一日入港、日石製油三千箱、直江津で同三千箱搭載の予定。

竹千代丸 二五日土崎港より日石製油七千三百箱をのせ、二六日柏崎で同三千箱を積み予定。

宝山丸 あす頃入港、宝田製油一万箱を積みこむ筈。

一〇・一四 宝山丸 宝田石油六千六百箱を積んで下関へ、

一〇・二一 鎮西丸 日石製油千五百箱

- 一〇・二二 渡津丸 日石製油六千二百箱
- 一〇・二三 直江津丸 同八千二百箱
- 一一・一 鎮西丸 同五千箱積みこみ
- 一一・二 平安丸 同六千五百箱
- 大四・一・七(栢日)

大正三年度中の出入船舶、貨物数

積み出し汽船四八そう、帆船四そう、

荷揚げ汽船三六そう

石油積み出し三二五、〇〇〇箱

こうした記事が連日、きりがたいほど見出される。この反面鉄道輸送が増加していく。

大四・六・五(栢日)

栢崎駅より鉄道輸送によりたる石油は日石七分、宝田三分の比例なりと。去月中、京阪関西地方へ輸送したる数量二四九万七千箱、その前月の二五五万四千六百箱に比しほとんど伯仲。

大10・10・2(栢日)

栢崎駅石油發送取扱量

大正二年 五〇、一一〇屯

大正三年 五八・〇四六屯

大正五年 六六、三三二屯

大正六年 七六、七八三屯

大正七年 八〇、九〇五屯

大正九年 八四、九四〇屯

大正五年以降はほとんど鉄道扱となった。

大五・七・一五(栢日)

一昨大正三年末頃までには、すくなくも年三十万箱の海送をみたりし日宝両社の製油は、昨年の十萬を名残りとして本年にいたりては事実上皆無を示せり。僅かに今月上旬、日石虎丸(六百屯)の入港して、同社製油五千箱を搭載し、馬関に出帆したるのみ。

これは鉄道送りのふえたるために、栢崎駅による取扱運賃のみにも年額三十万円を称うるに至れり。同社、鉄道院と交渉して運賃割引に関する特別の協約ありと。

こうした情勢が思わぬところに問題を投げかけることになった。

船積み貨物の陸揚げ、積みこみの荷役を生業とする大半が港町の人々だったから、これは港町にとっては死活問題である。当時、港町は戸数二二八、人口一五〇〇、このうち六百人が浜荷役を職とし、小送りを業としていた。そのため港町の荷車は百台を数えるほどだった。こうした地域に仕事が無くなるということは大変なことだ。

大三・七・二九(栢日)

港町、かつては毎年、日石、宝田の石油箱運賃のみでも解人夫が一カ年三十円から四十円の賃銀を得ていた。こと

しはまだ二、三円位しか得ていない。

毎年三十万箱以上の石油船積みが、今夏にいたるも五、六万箱にすぎない浜出しにつき原因調査をしたところ、日石が鉄道院と交渉して一カ年二十万箱の輸送を契約していることを知り（後略）

これは製油事業としては当然のことであったが、港町の住民にとっては尋常のことではない。ほとんどが日雇稼業の世帯集団だから、しかもジリ貧どころでなく、いきなり三分の一〜四分の一収入に転落したのだからいさげべきことばもない。

ところが港町の人々には、不思議な活力がみなぎっていたことを、記録が語ってくれている。この事態にさらされる前年、大正二年の記録「町内費決算表」でも、その一端を知ることができる。決算額七三四円一二銭五厘のなかに鶴川流末工事費というのがあるが、公費補助金は五八円一厘で、町内からの持ち出し経費が一六円六〇銭となっている。

港町は砂丘の上にある。その土手下をひくくするように鶴川が流れている。冬のシケ続き、雪解け頃の増水期、そしてまた雨期ともなれば渦巻く水流が土手下をかむ。えぐりとり。屋敷地が大きく崩れ落ちて流される。これが毎年繰り返される。流末工事が本格的な公営事業となったのは大正八年からだから、災害復旧、防護工事は長いこと港町の自前工事だったわけである。それをやり抜いた人々だった。

さて、急変した最悪状態にどのように対処したか、大正三年の柏日七月二九日から一〇月八日までの記事で拾いだしてみよう。

一、小揚げ、小送りの営業を小林長七を代表とする港町の直営にする。

貨物を汽船に積みこむ、陸揚げする時の荷車運搬が小送り、浜上げ、浜下げを小揚げ小下げ、汽船までの往復を解と呼び、石油一箱を汽船に積みこむまでの運搬料を金三銭で請負う。うち一厘を組合費として差引き、二銭九厘が関係した人夫の手取りとなる。

回漕会社が日石、宝田と契約していた仕事を港町に移したもので、海運の量をできるだけ増すように要望もする。

港町に設立されていた柏崎船解会社は資本金千二百円、専務は港町の井倉善六、株主は港町の代表委員七名と回漕会社。船八隻、船頭と楫夫八八人。この定員常雇は港町の町民優先とする。

二、機織工場をたてる。

小林総代、委員の案で三井田新蔵が中軸となつての救済工場である。木綿機五台で出発、見附から教師を迎え、伝習生を三名選び、これには一日一名十五銭の日当を補給する。十一月には五十名位の工場に拡張する計画です。工賃は一日二反を見こみ、一反五銭五厘から八銭位にはなろうというもの。

三、砂利採取の共同管理

一年のうち三カ月だけ町内経営として、一日二十銭の賃銀で交代従業する。

砂利は町内道路修理に約十二坪位を使って、他は買却して町内財産に繰り入れる。これが年額百五、六十円になる。

四、救済金二百円を準備して、年末極貧者に対して一斗ないし二斗の施米をする。町費で米を買って、一升につき三銭位の損をして売る。葬費の補助をする。

新潟がまだ陸上に姿を見せぬころから海を相手にし、海運を業とした納屋町の気風が、こうした時に自力振興のたくましさを示すことになったのであろうか。

先に述べたように、日石創業史をみる時に内藤久寛の生きる構えを読まねばならない。それは今日の生活革命の夜明けを呼んだものということもできよう。

更に、石油史が久寛の後に続いて新工夫に色どられていることに驚嘆する。あたかも今日の企業における創造性の開発が技術革新となり、その開発体制の組織的確立を急務としているのに似て、八十年前の科学技術の貧しさの中で未開拓事業に取り組んでの苦斗に今日的意義が見出される。

机上でおなじみのボールペンは、外国製品にくらべて筆記距離を二割五分のばして一〇〇メートル、ボールの回転は二・二五倍の四五万回転、ボール受け座の筆記圧一平方センチ当り六〇キログラムを克服して、他国でまねのできないボールの直径〇・七ミリという小粒を実現した。わが国独自の開発で誇るにたるものといわれる、サインペンは、羊毛より細い繊維五〇〇〇本をたばねた中シンを吸蔵体とし、繊維束のペン先には毛細管の空間を均一にし、筆記圧と紙との摩擦に耐える硬さを与え、インキに対する耐性も考えられたという。化学の進歩、高精密度の工作機がそのかけにある。目立たないところにも多くの技術発展が支えとなっている。石油開発のちえはこれにまさる苦斗であったにちがえない。

日石は海外の新技術の導入に積極的であった。創業以来昭和初期までの三十七年間に、十五名の専門技術家、三装置を迎え入れている。技術家の内訳は、さく井技師二名、さく井手二名、製油技師四名、建設技師三名、建設手二名、地質技師一名、建築技師一名となっている。ロシア人製油技師が一名で、あとは全部アメリカ技術陣であった。

三装置というのは、大正四年、秋田製油所に導入した露国式連続蒸溜装置で、ロシア人技師を招いたのはこの時である。次は大正十三年のダブス式分解蒸溜装置で、これによってわが国で初めて分解蒸溜が開始される。これは鶴見製油所であった。十五年にはクロス式分解蒸溜装置が新潟製油所に新設された。これは国産原油の八割を誇っていた日石が外国原油の精製に進出し、佐渡夷港の大油槽所に陸揚げするタラカン原油を精製し、揮発油増産を目的とする装置であった。

そのころは、灯油の需要は明治四十年代を境として、電灯の普及がすすむにつれて急調子の減少となり、代って揮発油と重油の需要がうなぎのぼりに増加する。第一次大戦後、石油内燃機関の発達による航空機と自動車の長足の進歩、外航船の重油使用への転換は、大正九年の経済界のパニックにも影響されることもなく前進を続けたので、揮発油、重油の需要はめざましい増加を示していたからである。

さく井技術の導入は綱掘り機械時代の明治二十六年、次に第一次ロータリー式さく井機で西山油田伊毛に開坑した時である。四十一年の宮川後谷の噴油を頂点とした第一期盛況が減産一途となった時だ。綱掘り機械での採油は三百間内外のところが限度、この機械で深掘するには一井一カ年以上かかる。減産は深度三、四百間の油層を汲みつくしたとも見られる。

四十四年カリホルニアで新式ロータリー掘さく機械が成功した。日石では四十五年一月伊藤、渡辺両技師をアメリカに派遣、現地調査の上直ちに購入、四月五日から伊毛で使用開始となった。この威力は綱掘りで一年から二年かかるところを二、三カ月で掘る。ロ式の最初の伊毛七十四号井は四百八十間（六月二十三日）で日産百石の噴油。次に七十七号で成功。三番手七十一号は七月二日開掘、九月十九日深度四百六十四間で大音響とともに噴油、十八間のやぐら突き抜いて高く自噴、日産六百石といわれた。ロ式の導入で伊毛が全盛を迎え、滝谷深度五百間内外で続々と

石油、北越油田中の花と呼ばれるほどになった。宝田、小倉等これにならなかったので俄然活況を呈し、実にロ式の採用は石油事業に一新紀元を画することになった。

日石が三十周年を迎えたのは大正六年だが、この時事業は北海道、秋田、静岡、台湾とひろがっていた。これまでの外人技術家は十人におよんでいる。

はじめてのガソリン・プラントが伊毛にできたのが大正三年。四十二年はじめてガスの猛噴を見たところである。

柏崎製油所に化学研究所を開設したのが大正五年。わが国石油化学への序幕となった。数年前に「夢の纖維」とさわがれたポリプロピレンの原料のプロピレンは、石油化学におけるもっとも安価な原料製品のひとつだという。技術進歩開幕の重要な意味を知る。

石油人の不屈の構え、前進してやまない姿勢、慣行にこだわらない改善意欲、どこまでも物の質をいかそうとする見つけ方には驚くべきものがある。究理への願望と体験の積み重ねによる発想こそ、現実を前向きにするというあかしを提示している。

●日石第一号井を海の中に掘る。

出雲崎の加藤直重、広川勘平の両人が、かつて柏崎県に在職した南部信近の助言を得て、水止め法に成功したのが明治十三年。「加藤の浜井戸」とたえられて、蜂の巣尼瀨の出現となったのだが、手掘井とは足の下土を掘るもの、それはいうまでもない至極当然のことであった。

その常識を破って、日石が発足第一歩に海面鉞区を設定する出願をしたのだからあきられたわけである。二十一年五月出願、六月許可、直ちに残存築堤を足がかりに埋立て、七月周囲嘲笑のうちに三坑を開坑して成功。最初の一年で十三坑を掘さく、原油一五七〇石を採油する。

やま勘での着手は許されなかった筈だ。失敗例は「山師」のことばが通用するくらいに、いやというほど見聞している。まして四年間の主張が実現した十五万円の会社をつぶすわけにはいかない。綿密な情報収集と調査、研究、緻密な計算、するどい洞察があったからこそである。

二十三年綱索式さく井機械によるわが国最初の成功となってからは、他社の掘さくもはじまり、尼瀨海中は石油井林立、世界でもはじめての人工島の壮観というべきであった。

●苦節十年の執念に燃える。

科学的探査法も、さく井技術、製油法も進んでいない時である。それらを支える基礎技術の部門も、企業経営法も未開拓に近い時代である。石油史は、石油人の不退転の執念によってつづられたということができよう。その代表的な例として、広瀬貞五郎と石坂周造をあげることができる。

周造は二十一才の時、將軍君側の奸を除かんとし斬奸状を起草し、発覚して比叡山にのがれてからは、新徴組に投じたり、生麦事件では横浜焼打ちを企てて幽囚の身となったり、維新後は山岡鉄太郎のもとに預けられるという血気さかんなものがあつた。

明治四年三十九才で、資本金七十五万円の「長野石油会社」の看板をあげ、諸華族や西本願寺派の名僧を大株主として、機械掘りの先鞭をつけた。ところが備った米人技師がマヤカンであったり、原油と粘土を混じて俵につめ、ひそかに水田中に埋めて滲出油のように見せかけたものが見抜けなかったり、鉄管皆無でみごとに失敗。尼瀨でも頓

挫。

鎌田に機械を据えたのが明治三十一年。一号、二号失敗、三号に着手した時には資金枯渇。鉱夫への給料未払い八月。逆に鉱夫ができるかぎり拠金して助けたという。そのため鉱夫は煙草を買う金がなく、タモトグソをキセルにつめてすったという話が残る。翌三十三年九月大噴油。実に周造、この道に志して二十八年めの成功、六十七才にして始めて知る喜びであった。

しかも、一生をかけて探したこの有望鉱区を、周造は門戸開放と称して割譲、共同さく井を許したので、鎌田の出油井は一カ年で四十九坑を数えるにいたった。

日石社史に「日石鉱業技師として二十五年間、油井の掘さくに従事し、経験の功績も積もりてその技精妙、入神の域に達し、斯界皆仰いで以て泰山北斗とした」とたたえられる貞五郎が、石油界に身を投じるようになったのは二十才の時であった。石坂周造が第一坑を信州で開坑するはこびになった時、大株主である西本願寺派の僧、九州の小栗憲一師の囑托を受けて、京都で遊学中の志を捨て、監督兼さく井術見習となって周造の事業に参加した時からほじまる。

周造失敗の後も初志を捨てず、手掘流行のなかで機械掘の効果信じて百方努力をつづける。使用した機械は周造の遺物、不備なものであったから苦境にさらされることが多かった。

明治十九年、中頸城郡玄藤寺に試掘した時のことである。「食品を購入する資に窮し、山間の掘立小屋に、部下七八名と梅干三個ずつをなめて、六旬の長きを送りたることあり。一同額をあつめて善後策を講ずるも、出資の途つきたれば、無念ながら、こよい限り、たもとをわかつかと、互に顔を見あわせ、暗涙にむせびいたり」言語に絶するも

のであった。

明治二十二年、日石機械掘第一号以来「機械掘りの神様」と、社内はもちろん、ひろく社外にまでうたわれたが、その前半生は血のにじむ苦斗でいるとられていた。

石油史は、どのページにもゼロからスタートして、新しいものを生みだしていくパイオニアの熱気がこもっている。今日の石油産業や石油化学時代の華麗さとははるかに遠い泥まみれの楽曲がかなでられている。更に数例を列挙してみよう。

●さく井機械に対する工夫

日石が機械掘で、わが国最初の成功をみてから五年めの明治二十七年、手掘井全盛の東山油田に国産第一号の機械が出現した。

この前年に組織された宝田会社が、東山比礼に手掘り中の共益泉に据付けた内地製蒸気探掘機がそれである。手掘りで百二十間まですすんでいたものに、九月樽立てを終り、翌年三月、百六十間で出油二十六石の好結果をあげた。この成功が創業時代の宝田の事業を順調にすすめるきっかけとなったといわれている。

日石が軽便さく井機の工夫によって開坑したのが明治二十九年の長嶺第一号。十一月十一日深度八十二間でガス噴出、更に十二月二十七日深度九十九間で噴出猛烈となり、油は霧のように飛散して手のつけようがない。翌年一月、木製ガスタンクを案出したのが成功して十二日、八十二石六斗の採油ができた。これは今までにない多量日産である。

重量級の機械を山間に運びあげる困難を打開するために、日石が改良工夫したこの可搬式さく井装置は、樽のかわ

りにT字形の一本柱を用い、スター式ともいわれ、浅層の探掘にも偉力を發揮した。長嶺油田の全盛をまねいただけでなく、新津方面の開発に大きな力を示したものである。

●機械類の自給をはかる。

明治二十八年、日石が附属事業として新潟鉄工所を起したことは、石油業発展に大きな力となった。いちいち、その機材を外国に仰ぐのでは発展を期するわけにいかない。しかし、当時としては未知の事業となるわけだから、このことを議した二十七年八月五日の臨時株主総会もかんとんに決めたわけではない。三年後の株主総会でも、株主から種々の攻撃があり、格別必要でないものまで作って損失をかさねるようではと、鉄工所の廃止説まで出るほどだったという。

鉄管の製造だけは出来なかったが、さく井ならびに精製に関する機械器具を製作し、やがて陸船用ボイラー、鉄道用貨車客車から造船にまで業務を拡げるようになる。

●新方法の採用

明治三十一年だけの日石採用の新方法を二、三拾ってみると、

ワイヤーケーブルの使用。これまでは掘網はすべてマニラロープだった。

ポンピングリックの採用。長嶺と浦瀬で試用したもので、一台の発動機で数坑の綱索を連動して、数井同時に採油する方法である。従来は一井に一個の発動機だったのだから、この方法はたちまち普及することになる。

新式タンクの築造。貯油はすべて土を掘り、木柵をめぐらし、これをセメントで固めていたが、尼瀬に五百石用と三百石用のタンクを、一分五厘の鉄板で築いた。

●タンクカーの考案

明治三十一年、直江津、新潟間の北越鉄道が全通、県外輸送の便が増大した。ブリキかんに入れて積みこんでいたが、三十二年、はじめてタンクカーを世にだした。木製長方形の槽に車をつけたもの。翌年、新鉄に鉄製タンク車を二十輛作らせる。これがおなじみの石油貨物列車である。

わが国はじめてのタンカー（油槽船）建造は明治四十年。新潟鉄工所造船部に作らせたもので、進水は翌年。総噸数九十四噸五三、長さ八十ヒート、中央二十ヒート、吃水深四ヒート六インチの鋼鉄帆走船宝国丸で、二本マストのスマートなものであった。

●製油残滓の利用

硫酸ビッチは捨て場にこまった。ブリキかんや木製容器につめても腐蝕してしまう。

ガラス製造の燃料は高熱でさいあればよいというので、明治四十年、荒町に工場をたて、社員酒井、西巻両氏に担当させたが、職工を他府県から高級で雇い入れざるを得なかったので毎期欠損。三越が一文商売をするようなもので馬鹿らしいという声ができる。

しかし、日石製品は優等品であったので、二年後に長岡ガラス組合が少額の賃借料で継承することになる。これ後に吉川常七氏の経営にうつる。

●化学研究の事業をおこす

大正五年、大久保に日石化学研究所を設置する。石油化学時代へのふみだしとなる。生きがいを求めようとする創造活動が、精いっぱいこの努力で壁面をいろどっている。

新しい油田が発見されると、そこへたくさんのさく井業者がより集まってきて、手掘、上総掘、機械掘と無数に油坑が掘りかえされ、それにつれて、その附近の大きな町に製油所が群がり起るのが通例となっていた。

明治二十三年のころは会社、共同井組合の数、二百以上にも達したが、その多くは株式の売買、鉦区周旋の間に、あくどい儲けをねらおうとす泡沫会社であった。

長岡鉦業会議所の調べによると、二十四年末の新潟県下の石油会社の数四三〇社、この資本金総計五、五三五、三〇〇円となって、これを二十一年のころに比べると、わずか三年の間に数十倍になったことになるという。

尼瀨、東山、西山、新津、頸城の各油田は、それぞれ、出雲崎、長岡、柏崎、新津、高田に数十の製油所を生み、それがひしめきあって、わずかの原油の争奪をやる。柏崎が油の町と化したといわれた三十三年の初期には、その数四十三。尼瀨の製油業も同様、尼瀨油田は昔日の面影を失し、日産わずかに二十石にすぎないのに、業者の数十七。このことについては、後段でもう一度ふれてみたいが、ここで問題にしてみたいのは、こうした結果送りだされるものが粗悪な製品であったということである。規格も千差万別。越後油とは、黒煙のはなはだしく、すすのみ飛散する粗悪品の代名詞のような定評をとってしまつては、とりかえしがつかない。乱立製油業者の多くは、砂上に屋を建てるような根柢の薄弱なもので、原料仕入の方法についても確かな成算があるわけがなく、製油所を建てさえすれば、原油はおのずから流れ込むぐらいの、極めて幼稚な企業計画であつたから、優良製品が送りだされるような状態ではない。

夢からさめたように製品改善の急務に気づき、販売機構整備の必要を感じて、対策に着手しはじめた三十三年当時「越後油は、東京方面より漸次西にはいり、京阪神戸の方面にまで送荷されるようになったが、その製品は、大設備

の会社一、二のものを除くほかは無数の小製油所によりて製出されるので、その品位規格一定せず、同一の製油所よりの品といえども値段によりて内容を変ずるといふ有様であるから、各地の市場においてすこしも信用なく、県外小売人のごときは、越後油として単独に売捌くことは絶無であつて、これを米国油と混和して売つていた」これがあたりまえというのが実状であつた。

三十三年十二月三日付「長岡商業」紙上に次のような東京通信をのせている。

さて越後油はご承知のごとく、いかなる上等品にても、小売商人はみな米油との混合物と致しおり候に付、弊店のときは、毎度仲買および小売人にも、越後上物は単独に使用するも、決して差しつかえなく、近來はおおいに改良の実をみれば、さまで危険のおそれなしと相すすめ候えども、これまでの習慣とてみなみな信用いたさず、ただ米油と同割にいたし、売りさばきおり候しまつ、よつて本日のごとき米油高値をあらわす時は、かえつて越後油安値に相なり候は、計算上いたしかたなきことと考えられ候。

こういうことになる。この時の価格は

米油チャスタ	一箱	二円九十九銭
越後石油	同	二円十 五銭
右混合油	同	二円五十七銭
露油タンク油	同	二円六十五銭

同じく三十三年十二月、新潟で発行した「自由新報」に、越後油販売について阪神地方を視察した金丸商会中山理事の談話がのっている。要約すると次のようである。

第一製油家、小製油家の割拠時代が継続する間は、とうてい製油の統一、品質の一定を望むことはできない。かかる製油家には、責任もなければ徳義もないので、越後油の将来などということには、全く無頓着で、ひどい物を製造するから、何年たっても越後油の面目をあげることができない。

第二仲買商、これは劣等と評するより、むしろ無資格、無信用、無規律である。これらが阪神地方の商人と取引きするのだから、苦情百出、安心して取引きできない。

第三問屋および銀行 このため問屋および銀行が仲買を信用しない。荷為替にその半額の金さえ貸出さない。仲買は何とかごまかそうとする。たがいさいぎの目で相対している。

第四阪神地方の仲買、彼等是一種の詐欺を働かんために越後油を買い入れる。外油にまぜるためである。越後製油家のつけた商標ははぎとられ、名もなき浮浪の石油となる。ただ奸商が不正の暴利をむさぼる。

自分から京阪へ持ちだしても、客は越後油を知らぬから、すて売りとなり、自分で値をたてることもできず、買手次第となる。

まことにみじめなことであった。

「越後油に対する市場の信用がない」とがく然となった時は、郷土の石油企業がすべりだして十年を経ていた時である。尼瀬手掘りブームのころから見れば、既に三十年近い年月を経ている。この長い期間を、粗悪品の代名詞となるまでに安居していたのは、ただ、産油量の増加にのみ目を注いでいたからでもある。明治初年以來登場してきた外国石油に対して、三流品、四流品の格付けに甘んじなければならなかったということは、泥まみれの苦斗を続けながらも、新興産業として、体質改善の大手術を必然とする問題を内包していたからでもある。

外油は値上げになっても越後油は据え置きか、時には逆に引き下げにありたりすることの不満、市場視察の結果等から、品質向上の必要に気付きはじめたのだが、これに決定的なショックを与えたのが、外国資本による巨大な会社の進出であった。

スタンダード石油をバックとする資本金一千万円のインターナショナル石油会社の出現である。この時、国産油の双壁と称された日本石油の資本金が百二十万円、宝田石油が百五十万円であったから、インターの出現がいかに世間の耳目を驚かしたかは想像にかたくない。明治三十三年、はじめ柏崎に建設する予定であったが適当な地所を得ることができなかったため、直江津郊外、黒井海岸から保倉川沿岸に接する十一万坪を入手、一日の製油能力二千五百石という。当時としては類のない大設備で建設された。

規模の広大、設備の完全だったこともさることながら、ここから精製油が送りだされると、粗悪な越後油などたちまち圧倒されて、市場から追い出されてしまうことは、火をみるより明らかである。ここで各製油業者は、インターの製品が出回らぬうちに、製品の改善をはからねばならぬと、しんげんに製油技術の研究、向上にはげむことになった。長岡の製油業者は、株式会社長岡製油所を起し、製品の検定、規格の統一をはかることにして三十四年一月操業開始。検定不合格品は市場に出さずに再製油。原油も一括買取って、加盟製油所に能力に応じて配分製油させる。その製品も検定の上、市場にだす。原油および製品の相場変動があっても、各製油業者は直接損得を感じないようになりいわば各加盟者は下請製油所になる方式であった。製品の改善向上をはかる方法として、当時では機宜を得たものといふべきであらう。

精製工程でも、これまでは原油の成分など考えることもせず、灯油分を多くとることだけに熱心で、それ以外は加

工せず、一種の粗製品または残滓物として、すて値で売払うというやり方だった。ところがインターは徹細にわたって残滓物を処理して、すこしも無駄のない精製法なので、他社より一、二割方高い原油を買入れても、結構ソロバンが採れると聞き、各業者も、以前のように残滓物を軽視できなくなり、副産物によって相当の利益をあげるような傾向がでてきた。

同時に、製油技術の研究に対する要求もたかまり、平沢繁太郎という化学技師が、石油残滓物からイヒチオールの製出法を発見したときその例である。従来イヒチオールはドイツからの輸入にたより、非常に高価、大学病院のほか二、三の病院で用いるにすぎなかったが、この発見によって、数年後には、ひろく薬局に用意されるようになったという。

早くから良質油で気を吐いていたのが宝田、日石であったが、日石は高野新一を欧州視察に派遣し、三十四年二月帰朝の上は製油技師長とし、さらにペンシルバニア州クローザースのワシントン会社技師フレッド・シー・チャイルズを二カ年契約で招いて、製品の改善研究に当らせた。

日石は尼瀬創業時代から本格的な製油所を建設し、三十二年には東洋に誇る最新の製油所を出現させるほどであったから、その製品は特筆すべき価値あるものと評されていた。宝田が、合同に合同を重ねて大をなしていったのも、製油法の改善に効果をおさめることになった。二十六年に資本金一万五千円で創立されてから、三十二年までに十五社を合併し、三十四年に十六社、翌年三十社、三十七年十九社、三十九年二十六社、四十年十七社を併合、資本金一千万円とふくれた。

製品に対する啓蒙、販路拡張の新施策は、三十二年、日石が京橋に設けた東京販売店となってあらわれた。更に二年後には、日石は隅田川の油槽所も建設した。三十七年には、日石宝田共同で国油共同販売所を設立、本店を柏崎に出張所を東京、大阪、下関、敦賀、新潟および大連に設け、各地に油槽所を設置した。これが、また委託製油の方法で、品質の改善、統一をはかることにもなった。

今日の石油産業は、八十年前、その源を郷土に発している。しかし、八十年後の今日、日石の門標を郷土に見ることができない。柏日柏崎抄で指摘されたように、たしかに歴史では食えない、事業はなりたたない。はるかなる回想として、郷土人のなかに残す墓標にしか過ぎないものであろうか。柏日紙はこの点を突いている。日本式製油法発明の苦心がしみついていて、わが国最初の製油所の工夫がしみこんでいる柏崎である。近代石油産業発祥の地としての郷土である。今日の意義を各人の胸によみがえらせる時、新しい、今日的施策が進行するのではないだろうか。

日本石油会社は郷土を舞台にして躍りだした。郷土は石油景気で活況を呈した。しかし、その火力は西山高町油田の盛衰と運命をともし、昭和初期には火勢もつきた。ご本尊の日石は、今日もなお陸々として資本金百億円、子会社九社の日石グループ（資本金合計百二十一億円）をようして君臨している。石油の消費は、①エネルギー源として石油が経済性、効率性の点ですぐれ、②技術革新と経営合理化をすすめる産業全体の要求をみたし、③科学技術の進歩による石油化学用原料としての需要の急増等から、戦前最高の昭和十二年の十八倍、九千万キロリットルに達し、さらにとどまるところを知らない。

郷土は石油産業をスタートさせながら、どうして今日までのマラソンについていけなかったのだろう。日石重役陣

に列することもなく、石油將軍の輩出もなく、石地小学校の全校舎を寄附した石地山岸喜藤太のような例もみることがなかった。これはいっただうしたことなのだろう。

日石設立当時の事情からみてみたい。

調査研究の結果、石油業について信念をかためた内藤久寛から最初に賛同を求められたのは、明治十九年、山口権三郎、牧口莊三郎の両氏であった。更に、この秋三人で手掘石油地の新津を視察して、近くの本間新作を勧誘、賛意を得たが、この年はまだ新事業をおこすところまでにはいかなかった。

二十年、内藤久寛、山口権三郎、牧口莊三郎、本間新作、久須美秀三郎、岸宇吉、山口万吉等長岡で会合して、米国石油事業について事情聴取。翌二十一年一月、これらの人々によって殖産協会が長岡で開かれ、石油会社設立の議がおこり、当日欠席していた内藤久寛に招電がとぶ。翌日風雪のなかを到着した久寛を中心に会社組織を議し、社名を日本石油会社ときめ、即座に定款の起草に着手する。

この結果、一株千円百五十株、全額を一時に払込ませるというものになった。当時としては、大金であったわけだが、協会出席者と長岡の有志で満株になる。

このように設立の舞台が長岡であったので、その時点では、柏崎は圏外であったということなのであろう。

それに、この顔ぶれはもう一つの視点からみることができると、「春風秋雨録」によると、久寛は明治十八年、二十七年で県議員に当選。県会は改進黨、自由の二大流を生じ、両者の間にはげしい抗争をくりかえすにいたった。久寛は改進黨首領山口権三郎派に属し、同志のなかに久須美秀三郎、本間新作の名がみえる。この年の議長は改進黨樋口元周だったが「反対派の議員が議長席に迫り、ついに辞職せしめた。その時は議場の形勢殺気に満ち、今にも一大騒

動が起りそうなので、多数の警官場外に詰め厳重に警戒した。これがために刑事問題まで起って大竹貫一外二、三氏が入獄した」というはげしさだった。

こうしてみると、日石創設グループが改進黨関係の同志であることに気づく。刈羽郡の大勢は改進黨であったが、柏崎だけは松村文治郎を総帥とする自由党が、絶対優勢を誇示している。両党の抗争は「全然黒白相容れざる関係にあり、常に紛争がたえなかつた」と回想されている。こうしたことが人間関係にもあらわれ、事業参画の大勢を決するという結果にもなったのであろう。

明治三十三年十一月五日に、柏崎下町に事務所開きをした日本鉱業協会というのがある。事務所の一部に、当時ハイカラの玉突場を設けた上流社交場（クラブ）も兼ねたが、石油業に関する問題の研究、石油業者の最高顧問機関、時事問題に関する討議、談話会、知識の交換、会員相互の親交を目的にうたっている。そうとう期待された機関であったが、大会社への合併活動がさかんになるにつれて会員もへり、やがて閉鎖となってしまった。これも主導権は内藤久寛、山田順一、片桐秀治、近藤会次郎、関栄太郎というように、改進黨系の人たちのものであった。

日本石油会社と社名をきめた風雪の日の、設立協議の席で「みだりに株式を売買せざることにし」という固い申しあわせがあったことに注目したい。

これは山口権三郎が、内藤久寛に特に指示して強調したもので、久寛も後日、この申しあわせが日石の社運をのばす基になったと述懐している。単に利益を追うのでなく「富源を開発するために」地方では、前代未聞の会社を組織し、発起人自身が一度はちゅうちよするほどの大金を投じあつての申しあわせは格調が高い。経営主体の確立となった。それだけに外からの参加がむずかしいものにならざるをえない。

当時の株券売買の実情を「春風秋雨録」は次のように述べている。

石油事業の振興につれて幾多の小会社、小組合ができたが、長岡が最も盛んで、いずれも株券を売買し、出油すれば株の価が十倍にも二十倍にもなった。これによりて奇利を博するもの輩出するにいたったので、明治二十四、五年ころの長岡は最も株券熱が盛んとなり、事業を目的とするにあらずして、株券売買を目的とする石油会社または組合が続出し、はなはだしきは無払込の株券を発行して売買するものさえあり、老若男女の区別なくこれに手を出し、遂には長岡の名物として知らるる女仲買人のごときものをもだした。

大平石油会社の株券は五円三十銭払込みのものだったが、相場は一円三十銭までさがってしまった。これがいっぺんにはねあがったことがある。明治二十六年六月二十六日午後三時、東山加坪で掘っていた第三号井が「九十九間一尺の井底にて作業中、突然百雷の一時になるがごとき地響とともに、油霧噴出し、四辺しせきを弁じなくなり」の大噴油となり、そのため生き埋めとなった坑夫の引きあげに三年かかるという一大事がおきた時、噴油というニュースで、この大平株が一躍五百円台にのぼり、一カ月延取引千円になったという。こうした石油株の相場の変動が日々にはげしく、その上、株売買の狂態にまきこまれてしまったら会社の経営の根もとがゆすぶられてしまう。日石が警戒したのはこの点である。

女仲買というのは、こんなふうに書かれている。「旅客もし長岡に入り、呉服町関東町のあたりをとらば、ここに若き女、老いたる女等が、ある者は絹のはんてんを着、ある者は木綿のすっぽを着て、三々五々大道に立ちて、何事をか語りありもあり、何物をか授受しつつあるを目撃するであろう。この若き女、老いたる女の一群は、すなわち長岡名物の一たる女仲買である」

この女仲買が株式の売買取引の仲立ちをする。「一時その数は百余名にのぼり、別に身元保証金を納むるにあらず、また何等の取締りを受くるでもなく、ただ路傍に立ちて、売買者相互の意を受け、極めて迅速に現物取引をなした。すくなきは何円何十銭より多きは数万円に至るまで、いささかの違算なくこれを取扱い、しかも手数料は極めて低廉であるため、売買双方ともこれを便利とし、かつ深くこれを信じて株式の売買を托した」二人ないし三人でグループを組んで信用を重んじ、商機を逸しないよう、客の意をみたますようにと期して「取引上の制裁の嚴重なる、法律をもって規定しても、とうていかくまで正確に行なわれようとは思えぬ程で、売買証券を交換したるものは勿論、たとえ一の口約といえども、決して後日に至りて違背することなく、寸時も仮借することがない」きびしさを各自の信条としていたという。

取引き振りはまことに無造作で、道ばたで数百円または数千円の紙幣を、渡す者はたもとから取りだし、受ける者は前掛けをひろげて受けとる。そういう情景が随所に見かけられたものだという。取引高も年々巨額にのぼり、大正初期まで二十数年も続いた。

こうした名物は、この時代の産物といふべきものであろう。後半は長岡株式即取引集合所と自称する組織となり、取扱った株式組合券は七八十種以上に及んだが、日石株だけは例外となって移動の余地がなかった。

日石の増資も事業が年々のび、インターの全施設を買収し、北海道、北樺太、台湾と舞台がひろがるにつれて増大する。明治二十七年には三十万円と資本金倍額にし、二十九年に六十万円に、三十三年百二十万円に、三十五年二百四十万円に、四十年五百万円、更にこの年一躍一千万円とし、大正二年二千万円となり、七年四千万円と、とどまるどころを知らない増資であった。これがすべて現在株主に割当増資であったから、日石創業期に地歩を築くために、

外部から事業参加するというような余地は極めてすくなくかった。

明治三十年末の長岡鉱業会議所の調査で、新潟県下の石油会社数および資本額は総計五十八会社で、四百九十万七百十円と報告されている。数年前より会社の数が七分の一になっている。一時の石油熱にうかされて誕生した泡沫会社、つぎつぎと淘汰されたからであらう。

「石油熱は下男、下女の徒にまで波及せしかば」とか「株券熱旺盛にして老若男女の別なくこれに手を出し」というのも、健全な会社株は流れず、不安定な株を中心にして渦をまいた狂騒であった。柏崎でも、この苦渋をなめた人は多い。

石油株ほど財界動揺、事業不振の影響を端的に受けるものはない。三十年頃、高津谷会社の五十円払込券が二十八円に、宝田の四十二円払込券が三十円にさがったことがある。当時、人気を集めていた高津谷、宝田の株がこのとおりだから、他の石油会社の株にいたっては無惨な低落だった。これは悲劇だ。こうした事實は、反面、石油投資への関心を低めさせ、警戒心すら助長することにならなかつたらうか。

柏崎が油の町と化したといわれた三十三年のころは、北越鉄道全通の便と水運の便を考えた日石が、鵜川の沿岸に大設備の製油所をたてており、平野製油所は市川新田に、浅野石油部は停車場の東部に、いずれも広大な地を占有して、数百石の製油力を有する製油所をたて、停車場通りの付近、市川新田から古見野方面に大小の製油所が続々と出現した。日本製油会社、小倉製油所、柏崎製油所、川佐製油所、高杉製油所、小林製油所、須田製油所等で、その数四十三、製油力三千二百石と称されるものであった。その廢液は砂中にしみこんで市川新田（諏訪町）一帯にわたって地下水の質を変え、その影響を今に残している。いたるところ大きなため池が乱掘されて、硫酸、ピッチの捨て場となった新花町、栄町辺は、今でも掘り返せば赤茶けた残滓が累々と鍍先にあたる。当時の活況をしのばせるものがあるが、実は柏崎百年の大勢を支えるにいたらない要素を含んでいた。

三千二百石の製油能力を持つ設備投資をしたのに、当時の西山の日産は千五百石前後の実情であった。しかも、その半分は日石鉱区の出油だから、この製油は他の会社へは流れない。その上、大資本系の平野、浅野の製油力はそれぞれ数百石、ことに浅野は百石蒸溜釜五基、百石洗滌槽二基を施設している。すぐれた条件整備で採油家と特約を結んで原油を吸収する。更に、秋になると長岡鉄管会社がすすめていた西山長岡間のパイプラインが完成して、長岡系の採油原油を流送する。あとにいくら残るだろう。数十の群小製油家に残されたものはそれしかない。

当時「長岡商業新報」がこの点について警告していた。「各地製油家の状態を見よ。特にこれを柏崎に見よ。その資本やその規模や、薄弱にして狭小、わずかに数千円の資本をもって、大胆にも製油業を営む。その構造や炭焼小屋もなおただならざるもの少しとせざるなり。然るに近時に至り、日本会社は大規模の下に多額の精製をなし、平野製油所は、一日数百石の製油力を有して、蔵王石油会社の採収する原油を一手に収めんと意気込み、浅野北越石油部は、今回いよいよ精製を開始せんとし、その製油力また数百石と称せらる。これら有力なる製造家が現今の原油不足に際し、高値をもって原油の買入れをなすことあらんか、泡沫にひとしき多数の製油家はほとんど死を待つにひとしく、倒産のやむべからざるに至らんは論なし」

ただ製油所を建てさえすれば、原油は意のままになると速断した無計画性から、開店廃業の悲境にみまわれ、大部分は煙突から煙をあげることができなくなった。工事なかばで身売りしなければならぬものもあり、百石内外を蒸溜しただけで終ってしまったものもある。

一方、採油活動にのりだした人々はどうだろう。次の記録はその一例である。

三十一年二月にいたり刈羽郡大洲村小熊三郎、根立元松、小山田蔵等数氏、後谷に試掘を出願し、同年十二月米山石油株式会社を組織し、上総掘にて開掘したが、一号井は不成功、二号井は百六間で噴油をみた。噴油当時の油量は不明なるも、その後数年間、一、二石の油量を保持しておった。この二号井成功の報伝わるや七円五十銭払込の同社株券は、一躍して五十七円に騰貴したという。

これは三島郡七日市鳥越油田開発のきっかけとなるのだが、すでに西山油田に機械掘りが偉力を示している時で、上総掘り一本やりではついていけない時がきていた。三十九年、遂に宝田に吸収されるにいたった。

半田の阿部新左衛門が妙法寺の西村毅一と共同して、半田にわが国はじめての製油所を設けたのは嘉永五年（一八五二）の四月。イギリスのグラスゴーより五年後、アメリカのピッツバーグよりおくれること二年。焼酎蒸溜法利用の三斗釜という独創的なものであった。世界製油所の三発祥地の一つが柏崎であるということができそうである。

いわば、柏崎のお家芸ともいべき製油業に、日石は別格として、柏崎人の雄飛を見ることができないでしまった。百年初期に、県下にその資力を誇った郷土であったが「浮沈無情」の風に、大資産家をつぎつぎに失ったことが第一の原因であろう。加えて、全市焦土と化する大火の連続が傷あとを深くした。「確たる計画もなく、小資本で大胆な……」と評されても、石油業に身を投じる人があったのは、起死回生の途を見いだそうとするあせりであったかも知れない。

資本合同による大企業化が実現しなかったのは、二百年来の伝統商法からくる体質的なものがわざわいしたのかも

しれない。これもまた止むを得ないことだった。それになお、石油業に対する「山師のすること」「きわ物買い」の考え方が、大方に根深くひそんでいたとみられる。明治二十五年の新聞に「われわれ石油なるものに関係これなく」と銀行が大々的に広告をだすような世相であった。

こうして石油業を発足させた郷土ではあったが、遂に石油將軍くつわをならべるといふ道は開けないでしまった。

ここに、こういう資料がある。前荒浜中学校長深田信四郎氏が昭和十一年十月に発表された「大洲地区の職業動態」に関する調査資料である。その一部を抜き書きしてみよう。

大洲地区の有職者（昭和十一年）	
商業	二九七人（二一・五％）
農業	三〇人（二・一％）
鉱業	一一〇人（七・九％）
工業	六一二人（四四・二％）
庶	二二一人（一六・七％）
水産	一〇四人（七・五％）
合計	一三八四人

工業と鉱業で五割二分、あとの半分は、二割一分が商業、一割六分が庶となつて、水産農業は一割に満たない。次の資料と対比すると妙である。

明治四十一年の漁業統計

下宿村 漁業専業	一三〇戸	八三六人
大洲村 漁業専業	一一戸	五〇人
計	一四一戸	八八六人
下宿村 農漁兼業	二戸	八人
その他兼業	五戸	三五人
大洲村 農漁兼業	二〇戸	一〇五人
その他兼業	二八戸	一三一人
計	五五戸	二七九人
機械器具工業	一七五人	
織維工業	一一九人	
採鉱冶金業	一〇七人	
土木建築業	九八人	
飲食料品製造業	五九人	
窯業	三二人	
金属工業	二四人	

岬町の漁業専業は当時の岬町戸数二一六戸の約六割にあたる。この漁村景観が昭和には消えて、別のものになっている。一番多くを占めている工業について細別すると

木竹に関する製造業	二三人
被服身廻品製造業	一七人
製版印刷製本業	一七人
その他	四〇人

となっていて、採鉱冶金業一〇七人というのは、主として石油工業に従事しているものを指すのであって、大久保の発展は実にこれによる。大久保の人口変遷は

寛保三年（一七四三）	四一八人
寛政元年（一七八九）	四九八人
天保九年（一八三八）	五六九人
明治十一年（一八七八）	四〇七人
明治四十五年（一九二二）	一四七二人

日石製油所が設けられてからの激増ぶりが目に見える。これがまた漁村衰微の岬町に新方向を与えることにもなった。

採鉱冶金業一〇七人の内訳は

岬町四五人、中浜三六人、大久保二六人。

で、このうち日石に通勤しているものは

岬町三一人、中浜二六人、大久保二一人。

機械器具工業一七五人も、

岬町七〇人、中浜五人、大久保四七人。

で、このうち新潟鉄工場に勤めているもの。

岬町三一人、中浜一七人、大久保二一人。

こうしてみると、石油業で将官が育つ基盤は残念ながらもなかったが、兵隊は育った。中隊長格までは送りだすことができたということであろうか。

振興ムード

中浜の念仏そば、泉屋の酒まんじゅう、エンマ裏の白玉まんじゅう、エンマ前のそばと甘酒。しょう油西巻の目薬セイキ水、先祖伝来こうじ屋目薬のシンマイ膏、「井戸へ落ちたる馬も吸いあげる」の黒崎の無二膏、「てん狂症百発百中、中風の妙薬」という罇物小熊の秘薬。

百年以前の伝承名物として、遠い郷愁に似た語り草となってしまったが、この第二期にはいって新名物が誕生し、新しい仕事がおこり、それぞれの上に新工夫、振興策の努力がはじまり、活発な興業活動が展開されていた。

石油外人の来柏をみるようになって創作された美野屋、村山の明治まんじゅう。岩戸屋主人苦心の案出にかかる鯛の子塩から。明治四十年にデビューした新野屋のあじろやき。明治二十二年に阿部次郎七が着手した新田畑の梨園。団子山の桃園開拓は次郎七によって二十七年から。四ッ谷裏から旭町裏にかけての稲作不良の湿田帯に、比角のれん

こん栽培がはじまったのは四十四年。西中通に刈羽節成きうりの採種組合が組織されたのも四十四年。二十七年には競馬会が開かれ、三十八年には比角に中越輪友会があり、柏崎に相輪会がある。岡本牛舎は大正十年当時すでに創業五十年の厚みを有し、神林牛舎は三十九年に設立、牛五十頭、豚三十頭、鯨波柏崎両駅間の鉄路両側の草を買いきる。二十年ころには大雪を利用して雪穴産業が発足する。

こうして、思いつくままにあげてみてもきりが無い。製材業、製縄業が起り、れんが工場、製糸工場が発足し、織物工場がさかんとなる。柏崎特産の織物を生みだそうと東奔西走された勝海さんについては既に述べたが、漆器業の振興について、大正四年六月の柏崎日報に次のような記事がある。

蠟色塗、上花塗、色塗のきう法(うるしぬり)をもって名のある柏崎の漆器は輪島式で、製品は膳椀家具を第一とし、これに次ぐは棚類文具茶器だ。下地の堅ろうなるは本場輪島にも劣っておらぬ。

製造戸数二九戸、職工四七名、

装飾品四〇二〇円、家具四五五〇円

飲食器七三五〇円 その他六三七〇円

合計 二二、二七〇円

在来の輪島式に、会津漆器のような塗りに手数のかからぬ方法と、素地の原料に経費のかからぬ方法を講ずるのが急務と、小山金平氏早くから着眼。昨年から組合の事業として、腕くり素地講習所を設立、県へ対しては講習所教師給を、郡へ対しては腕くり機械購入費補助の申請をしたが、どちらも無駄骨となる。

そこで、自力で鈴木式らせん盤一台を据えつけ、教師に越前の高橋卯三郎氏を同氏の手で招く。素地原料はケヤキ

ブナ、トチ等の木材で、鶺川、岡野町辺の山村に副業として有利と思われる。

従来は手ぐりで、寸法も手加減であったものがらせん盤の力で早く、たくさんでき、寸法も希望のものを、一定のものを得られることになった。講習の効果あらわれて、鶺川、岡野町はもろろん、西頸根知方面から粗げずりの素地が俵詰で送られてきて、所内工場は足の踏み場もない状態になった。教師一名と機械一台では処理しきれない。設備と多数の徒弟養成が問題である。

こうした努力が各方面でくりひろげられた。刈羽鉄道運動が起きたのもこのころで、柏崎日報の記事からひろってみる。

大正八・六・一八付

柏崎実業協会会長二宮佐右衛門、武藤柏崎町長、歌大代洲、五十嵐高田、中村枇杷島各村長、木村比角助役および中村実業協会幹事はか数氏は、昨日午後一時、目下來柏、大洲村の別邸に滞在中なる内藤日石社長を訪問し、柏崎より上条を経て岡野町より仙田を通し、十日町線に通ずる刈羽鉄道復活問題につき数刻同氏の意見をきき、援助の約を得て同邸を辞したるが、更に二宮、中村両氏は近く久須美越鉄社長を訪問して該復活問題の意見をきく筈なり。

目下、熱心に奔走中の中村藤八翁は昨日、刈羽郡内鉄道復活問題につき東京より西尾万路氏（元北越鉄道会社員）の來越を請い、種々設計等につき依頼したるが、柏崎より十日町までは資本金二五〇万円の設計見込みにて一マイル七万円を要すと。

なお、これが新鉄道計画は既に郡内有力者の賛成ありといえば、いよいよ多年宿題となり、幾度も頓坐したりし問題も本年はおおいに機運熟し、前途の曙光を見るに至れり。

大正一〇・一二・二八付

さきに仮免許状を下附されし刈羽鉄道敷設の件は、今回更に本免許状を下附されたり。

免許状

刈羽鉄道株式会社

發起人飯塚弥一郎ほか六名

右申請にかかる新潟県刈羽郡高柳村にいたる鉄道を敷設し、旅客および貨物運輸をなすことを免許す。

地方鉄道法第十三条による認可申請は大正十二年五月二十三日までにこれを提出すべし

大正十年十一月二十四日

鉄道大臣 元田 肇

これまでにいたる中村藤八翁の苦心はひとかたではなかったが、いよいよ資金造成となつてまた難関。約束していた人が石油倒産となつたり、政争がからまつたりする。上京資金調達運動中に客死。遂に鉄道は不発に終つてしまつた。日石資本金四千万円をこえていた時であつた。実現していたら港の事情も、工業形態も、道路事情も、もつと變つた形になつていたに違えない。百年史唯一の痛恨事であつた。

青年讃歌

しばしば大火で痛めつけられながら新産業への情熱や、業界振興の意欲に若々しい氣力が溢れていたことを読みと

ることができる。苦しいからはいし上らねばならない系譜であった。あせりもあり、失敗もある。しかし、そこに織りなされた種々相は活力がみなぎっていた。

新産業としての石油界が示した不屈さ、創造性の開発、技術の革新等が刺激となって、在来の気風に新風を吹きこむことになったということであろう。石油産業には置き去りにされたが、第二期テーマへの開眼となったというべきかもしれない。

ここに、盛りあがる勢力を自分のものとした人々の、自信に満ちた歌声がわきあがった。青年社長による明治三十六年の中越新聞が「鋭刀をもってはれものをえぐり去らんとする者は青年なり。陽気の発するところ、向うところ何事か成らざらん」と社説をかかけ、刈羽青年の大同団結に力をかけた動きも、その一つである。

中越新聞（明治三六・三・一五）

刈羽青年諸君に告ぐ

来る二十二日の春季皇霊祭をぼくし、柏崎諏訪大門柏崎ホテルにおいて刈羽青年大会の発起会を相催し候間、万障御繰合午前十時までには御来会下さられ度、御出席の御方は二十日までには柏崎町中越新聞社宛御申込有之度、この段御案内申上候也 会費十銭

この広告の主唱者として連名しているのは猪股雷道、泉清、原吉郎、丸田尚一郎、桑山直二郎となっている。やがて郷土の指導者となった人たちであった。この発起会のあと、北越青年会と名づけて、第一回大会が開かれたのが四月十五日、香積寺を会場として会するもの二百余名、十人の代表が熱弁を振う。幹事に小熊三郎、原吉郎、猪藁雷道丸田尚一郎、牧口義矩、片桐秀治、当山春三、武藤喜一、大塚国威、桑山直二郎を推す。豪勢な顔ぶれて、意気さか

んなものがあつた。

また、おなじころの中越新聞の記事に

片桐秀治を会長とする田尻村青年会では、基本金を作る方法として、会員たるものは毎夜三十分ないし一時間、縄をなうことにし、その代金は幹事によって銀行に積み立てる方針なるが、今、その計算を聞くに、七丈二尺の縄一束市価一銭五厘と見積り、藁代四厘を差引くも一銭一厘を得るをもって、一厘を会費にあて、一銭を十カ年百名の会員にて積み立つるときは五千余円の元利金を得る事なりという。

仲間づくりは自分たちの手で組織しようとする。そのなかに生きがいを求めようとする若い人であった。その活動面も「自己の品性を修養するとともに、社会の先達を期するにあり」との目的から合理化する。こんな例もある。

柏崎日報（大正三・七・一五）

柏崎町青年有志は日本石油会社本社東京移転問題に関し、しばしば善後策につき協議し、日石社に対し交渉するところありたるが、昨十四日午後二時より町役場楼上に有志大会を開き（百余名参集）西巻進四郎、品川豊治、江原無窮大三交渉委員が日石と交渉したる顛末の報告をなしたるが、西巻氏委員を代表して「日石本社にては郡立病院設立として松方乙彦氏邸毛ならびに金五万円寄附に対しては、全然応じがたき旨答弁ありし」と報告し、今後柏崎町の発展を期するためおよび当面の問題たる日石会社移転に関し研究を続行するため、柏崎青年会を組織する要ありとし、満場一致をもって、左の規約を可決したり。

柏崎町青年会規約

一、機関 会長一名、幹事七名、評議員若干名

- 二、集会 問題の生ずる毎に会合す
- 三、経費 必要に応じて拠出す

宣言書

新柏崎の建設は青年の頭上に横たわれる大事業なり。今や日石社その本拠を他に移さんとするを転機として偷安、姑息を排撃しもって直往邁進、青年が等しく享受せる機関の上になちて銳意時弊の打破につとめざるべからず。

すなわち町政の当局およびその他の機関と協力して、柏崎町の発展のために努力せん事を期す。

この時、会長に推されたのは二宮直二郎、七名の幹事は、吉田正太郎、西巻進四郎、品川群蔵、品川豊治、林辰五郎、三瓶直行、渡辺政三郎であった。

柏崎日報（大正四・二・一）

刈羽郡立病院設立については、さきに上京委員三名をえらび調査研究するにきまり、右委員は今回大学病院をはじめ、二三病院につき実地調査をとげ帰柏されたるをもって、取りあえず昨日午後三時、越後タイムス社楼上において調査報告をかね、この後の画策につき協議会を開きたるが、協議の結果、病院期成同盟会を設立し、広く会員を募集するとともに、寄附金を仰ぎ、予定寄附金三千円を以って適當の地所を選びて仮病院を開設し、逐次町当局にはかりて町営に改め、漸を追ひ拡張する事をもって至当の策なるべしと一決し、同盟会設立に関する諸般の準備は、委員三名に一任

委員は江原小弥太、西巻進四郎、品川豊治なり。

資本金二千万円となつて躍進を続けていた日石に、本社移転の見返りをなかなか承諾させることができません。なお、

青年運動は郡立病院をあきらめることをせず、新局面を開こうと努力を続ける。

青年集団が町づくりの中核となつて、その意気を示す若々しさがちまたにあふれていた。

新工業躍進

第二期後半を背おつたのは新興工業理研産業であった。郷土は、この科学主義工業一色に塗りつぶされ、本県新興工業の中核となり、昭和二十年前期に理研重工、理研化学興業、理研鋼材、理研圧延、理研鍛造、理研工作機械、理研鑄造を合して理研工業株式会社とした時は、その従業員総計九、五四〇名を数えるにいたつたものである。

財団法人「理化学研究所」が発足したのは大正六年。その一号館の完成は大正十年で、その時の所長は三代目で、四十三才の大河内正敏であった。主任研究員に予算を与え、研究テーマも人事も給料もすべてまかせる研究室制度にしたので、研究者の自由な発想が尊重され、研究活動が飛躍的に向上する。

理研が居を構えた駒込の土地は、松沢病院の前身である巣鴨病院の移転跡だったから、「むかし気違いがいて、いまも気違いがいる」などと陰口をたたかれたそうだが、いかにひたむきな研究活動であったかを想像することができる。

その多くの研究業績は、日本の科学を独自のものに育てあげた。戦後、米軍によって破壊されたサイクロトロンは仁科研究室が十年間心血を注いだ世界最大級のものであったという。鈴木研究室が生んだビタミンAや合成酒は、ひるく一般に顔なじみになっているものである。

大河内所長が理化学研究所の発明考案の工業化、企業化に着手したのは昭和二年、理化学興業株式会社を本郷区上富士前町に設立した時からである。この時、柏崎にも工場ができた。創業当時の業種をみるとピストンリングの試作および製造、精密機械、光学機械、レンズ、フィルムター陽画感光紙、コランダムシート、アドソール応用温湿度調整装置、温湿度調整暖房工事の請負、合成酒、ビタミンA・B、レバー、その他の薬品等、多種多様であった。この企業化を積極的に推進したので、昭和十五年には組織内の会社数六二、工場数一二一、資本総額一億五千万円という大産業団理研コンツェルンを形成するにいたった。

新しい産業を新しい方法で興すという大河内博士の確信によるもので、理研コンツェルンは理化学研究所の研究を後援する産業団であり、理化学研究所で研究発明されたものを工業化し、事業として育成し、わが国産業の振興に寄与することを使命とする産業団であった。産業団から理化学研究所に対する財政的援助は、年々増大する研究費等の八五%以上に達したという。

この産業団の第一走者となった柏崎工場について、理研ピストンリング工業株式会社の「再建十年史」（昭和三六年編）は次のようにいっている。

理研産業団の歴史を語るとき、柏崎工場は特別の意味をもっている。何となれば、理研および理化学興業の工業化の対象となった試験研究の殆んどものが柏崎工場の中で行なわれ、その成果にもとづいて独立した企業となり、新工場へ逐次移管されて、それぞれ発展していったのであって、いわゆる理研産業団発祥の地ともいべきだからである。

この柏崎工場の誘致は、西川鉄工所の先代弥平治氏力によるもので、柏崎は一躍して新工業の檜舞台におどりだした。

柏崎工場の当初の事業を「再建十年史」からひろいだしてみよう。

- 1 昭和三年十一月、比角に敷地一万余坪を求めて工場建設。西山油田から豊富に出る石油残渣ガスよりガソリンを採取する。原料の供給不円滑で中止。
- 2 同年アドソールの試作研究開始。
- 3 昭和四年、ゴム溶媒剤テトラリンの試作および製造、副産物として水素および酸素の製造。（後に保土谷化学その他へ移管）このころ既に用地は二万坪近くにひろげられていた。
- 4 同年、海水のニガリを原料とする金属マグネシウム製造開始、大きな成功をおさめる。（後に宇部へ移す）
- 5 昭和六年、満州マグネサイト鉱石を原料とする炭酸マグネシウム製造開始、副産物として保温材、耐熱用クリンカー石灰等が生産された。（後、宇部へ）

6 昭和七年、ピストンリングの製造開始、今日にいたっている。

7 同年、クローム鉱石を原料とするクロームの製造開始。採算とれず中止。

8 昭和八年、ドライアイスの製法研究を開始。（後、九州地区へ移す）

9 昭和九年、電線の製造開始、収益の高い企業となり、白根に移す。また紡織の研究も始め、後、白根に移す。先駆的な事業歴である。

理研柏崎工場は、その事業の試験工場の役割を果たしては、それぞれ適地に分岐独立させていく。さて、その試験工場ぶりを当時の新聞からのぞいてみよう。

柏崎日報（昭五・四・六）

比角に二万坪の敷地を選びてガソリン工場を設けた理化学興業会社の用地内に、昨秋来、新設された理研直営のゴム再製工場とマグネシウム工場がある。ゴム工場はまだ機械の据えつけもできていないが、来る八月頃から作業を開始しようといっている。

この工場は建物二百坪で、試験室と事務室を持っている。使っている燃料は、石油ピッチから油をとり、ガスをとり、ガソリンをとり、コークス状となったカスで作った煉炭である。この試験室で試作したもので、ピッチコークスに木炭末、白土を加えて円柱形にしてあり、火つきもよく、火もちよく、油煙なしのことである。

（炭酸）マグネシウム工場は満州のマグネサイトを粉末にし、大和のピロタイト、石炭を加えて電気炉で加熱すると硫化マグネシウムができる。これに塩素ガスを加えて加熱すると無水塩化マグネシウムとなり、これを電気分解してマグネシウムをとるものである。アルミニウムより三割も軽く、アルミとの合金を作ると、きわめて堅牢なものになり、軽金属として重要なものであるという。

柏崎日報（昭六、四、一八）

理研柏崎工場における目下のマグネシウム（金属）製造量は一カ月一トン内外であるが、いよいよ北越水力電気会社との電力購入率も特殊契約が成立して、近く配電工事も施行され、同製造工場の拡張を見るであろうが、これが実現の暁は一カ月二トンの製造量となるであろうといわれているが、同原料は海水を分解してメダレよりとるものであるという。

ちなみにマグネシウムの価格はトンあたり四千円くらいで、現在本邦は年十三トンをドイツより輸入しているが柏

崎工場で年二十四トンの製造可能となれば、全然、輸入の必要がなくなるわけである。用途は主として飛行機の製造原料であり、柏崎町も理研のおかげで国際的に存在を認められることである。

昭和七年からピストンリングの生産を柏崎工場ではじめたわけであるが、この時、女子工員数十名採用して鋳造作業や機械加工等に従事させた。当時としては女子の機械工、鋳造工は例のないことなので世人の耳目をひくにいたった。

ピストンリングの量産化がすすむにつれて、昭和九年三月、理化学興業からリング部門は独立して理研ピストンリング株式会社が創立され、資本金百六十万円、主力は柏崎工場であった。

柏崎日報（昭九、三、二五）

理研ピストンリング会社並びに理化学興業柏崎両工場の大発展計画は、去る十六日から十八日まで柏崎において開かれた両社重役会の結果、次のように内定をみた。

- 1 ピストンリングは内外向き年産二百万本製作を目標とする。
- 2 ゴム再生、炭酸マグネシウム、クロームその他の生産強化の拡大をはかる。
- 3 今秋までには女工五百名から一千名までに増員する。
寄宿舎を新築する。
- 4 新たに五階建の大工場をたてる。

こうしてますます躍進、翌年は増資して資本金六百万円と大型化していく。

昭和十二年、柏崎工場の新事業がふえ、拡張が相ついですすむ。ピストンリングの製造だけでなく、各種の工作機

械、測定器具、ドリル、カッター、チャック、鍛造品、圧延条綱等の各部門が急速に拡大される。青年男女工五千人をこえるにいたった。

農村工場がとりあげられたのもこの頃からで、外注工場の活用が活発となる。農村工場は柏崎地方だけでも五十カ所以上におよんだという。そこに農村の婦女子が理研独特の作業衣で立ち働く。

下請けの町工場も急激に増加し、工場数七十二、千二百万円の作業量となり、更にとどまるところを知らない。まさに工業都市への躍進であった。グラウンドで展開された年一回の理研大運動会は圧巻で、その歌声は活気に溢れていた。

昭和十三年、理研重工業柏崎工場となる。

昭和十九年、米軍の空襲はげしく、国内施設の破壊は電力と塩の不足が急を告げるにいたったので、柏崎工場でも千トンの設備で電気製塩を開始し、優良な成績をあげる。

こうした大躍進が二十年八月十五日の降伏宣言とともに一挙に壊滅、新たな条件のもとに再建の道を歩まなければならなくなった。

上水道十九対六

十九対六というのは、昭和九年七月十三日、上水道建設案が上程された柏崎町会で、激論火花をちらし、興奮のうずのなかで票決された数である。大差をもって可決した形にみえる。しかし、ここまでにいたる道は決して安易なも

のではなかった。悪戦苦闘、いばらの道というべきであった。「戸口ノ増加モ、諸工業ノ興隆モ、住宅地、工場地帯ノ悪用水ノタメ、ソノ発展ヲ阻害セラルル事著シキモノアルハ想像ニ難カラズ」「幾多ノ犠牲ヲ忍ビ、細心周到ナル調査研究ノ結果、大ナル確信ノモトニ之レが実現を企画シタリ」という西巻進四郎町長と、その理念を理解する少数の人々の筆舌につくし難い、身をけずるような苦心があったことを想起しなければならない。

まず、上水道竣工までの大要をみておくことにしよう。

昭三、八 町議後藤泰次より水道に関する意見書始めて町会に提出される。

昭六 六 上水道調査委員設置規定議決。

同、七 第一回上水道調査委員会開催。

調査委員

後藤泰次、松村保之助、中村三郎、吉岡熊蔵、山崎忠作、三井田虎一郎、西川藤助、原吉郎、大野忠雄、野口善

平、二宮伝右衛門

昭七、九 工学博士茂庭忠次郎来柏、水源予定地視察

同、十一 上水道調査事務所開設、茂庭博士を顧問におす。

同、同 主任技師原芳男、大内技手を迎え、水源地、給水場の基本測量着手。

昭八、五 茂庭顧問、原技師の案内にて実地踏査。

同、同 町内配水鉄管設計に関して第七回調査委員会。委員四名追加

村山元之助、堤春重郎、巻淵藤吉、桑山捨五郎

同、六 第八回調査委員会、町会協議会は六十四万五千円の柏崎町上水道創設設計ならびに同説明書につき、茂庭顧問の詳細なる説明を聞き、全員実地踏査

同、同 西巻町長、原技師とともに六日間、三条、新津、新発田、若松の水道状況調査。

同、七 高田市、長岡市の水道視察。

同、同 水道委員会に上水道財政調査の説明、各地水道状況視察報告

同、同 十八日、二十三日財政調査問題についての水道委員会愛町公債、寄附募集案を中心として議論沸騰、議場火花を散らす。

同、同 三十一日調査完了したので水道調査部を閉鎖。

同、九 柏崎小学校で町内総代会を開き、西巻町長より調査経過状況の報告をする。

全町を四方面にわけ、水道調査報告会を開催する。東奔西走、寝食を忘れ、水道創設の機運高揚につとめる。

昭九、七 上水道建設事業を、建設費五十六万七千円で施行することを可決。給水条例、事業費特別会計を設定。六十二万二千三百五十円の三カ年にわたる事業費継続年期および支出方法ならびに金五十六万五千円の起債に関する諸件を議決する。

同、九 事業費継続年期および支出方法、起債に関する件一部更正。水道使用料設定。

同、九 十九日水道建設について申請。

昭十、七 十二日附で内務大臣より認可される。起債の件も許可。

同、八 一日より臨時水道事務所にて事務を開始する。

同、十 水源を鯨波村川内に設定するため、鯨波村と契約を結ぶ。

同、十一 水源および浄水用地買収。

同、十一 水源地地鎮祭を執行。

昭十一、五 十四日、柏崎小学校にて上水道起工式を挙行。

昭十二、一 二十九日、鶴川水道橋樞体の架設完成。

同、六 水源貯水池堰堤工事は予定以上に進行し、三十日湛水開始。

同、七 九日、同所にて通水式執行。

同、八 一日より引込工事完成せる戸数約百戸に対して給水を開始する。

同、十二 末日限り臨時水道部閉鎖。

昭十三、五 二十五日、柏崎小学校を会場にして盛大な竣工式をあげる。

始めてパイプからの水を受けた数は千七十四戸、全町五千三百六十六戸の二十％であった。「コンコン碧玉ノ如キ清浄水ハ、三万町民ノ渴望ヲイヤシ、町十年ノ希望ト関係者諸民ノ努力ガ、ココニ完全ニムクイラルルニ至リ」と西巻町長の胸奥を去来するものは何であつたらうか。

順調に進行したかに見える上水道建設経過は、全町を湧きたたせるはげしさで織りだされていったものである。そのようすを見る前に、空前の大事業といわれた上水道工事の大意に、目をとおしておこう。

給水人口

三〇、〇〇〇人

一人一日平均給水量 一〇〇リットル

一日最大給水量 四、五〇〇立方メートル

(その後、一次、二次と拡張工事が行なわれ、三次第一期を終った現在は給水人口五万人、一人一日最大給水量三八〇リットル、一日最大給水量一万九千立方メートルとなっている。更に第二期工事が着手されると、給水人口五万人、一日最大給水量二万六千立方メートルになるという)

水源

鯨波前川の上流内川を水源にする。

内川の集水流域は有効五百六ヘクタールで、北東南三方の山は標高二百メートルから四百十メートル。地下二メートルから五メートルの一带は凝灰岩質の岩盤だから、雨水の地下浸透はすくなく、水源の流出歩合は良好とみる。

降水量計算は柏崎農学校が大正十年以来、新潟測候所の委嘱によって観測していたものによって、平均二四三一、一ミリとみる。

内川の流量は最大濁水でも毎秒六四リットルで、灌漑期間中以外は水道所要量より大。

内川の灌漑水田は八町八段三畝歩で、灌漑一日所要水量は二二二五立方メートル。安全率二割を加えて二五五〇立方メートルとして計算すると、過去十三年間のデータでは十八万三千二百九十九立方メートルの所要最大貯水量という結果がでる。

貯水量

標高六十二メートルを満水面として、有効貯水量は二十二万七千四百三十三立方メートルにする。前出の所要貯水量の一、二二倍にあたる。

水質

水質検査は県衛生試験所、高田警察署試験主任がそれぞれ実施。

工事方法

一、水源工事

敷地総面積五九、八六七平方メートル(一万八千九百九坪)

1 堰堤、工費七二、四六〇円

長さ一二二メートル、高さ二一・五メートル。頂部標高六四メートル、馬踏の幅七メートル。

2 取水塔、棧橋工費五、三八〇円。

取水塔、基礎は岩盤にうちこみ、高さ二一・二メートル。塔部の頂部標高六五・二メートル、引入口は内径三百ミリで上中下の三段にして、水位に応じて満開取水する。

棧橋、幅員一・七二メートル、長さ一四メートル

3 導水管 工費一、九九七円

延長一五六・二メートル、内径四五〇ミリの鉄管およびヒューム管を使用、管内に制水弁あり。

4 排水渠 工費六、九九三円

工事終了後は左半を導水管用に、右半を貯水池排泥用使用する。長さ一六一メートル。

5 余水吐その他 工費二二、六〇〇円

溢流水を内径四・五メートル深さ一〇・五メートルの堅坑におとし、内法幅三メートル高三・五メートル長さ一四メートルの放水路隧道で旧河川に放流する。

二 浄水場工事 工費五四、九四〇円

敷地面積は一五、六九二平方メートル（四、七四七坪）、地盤標高五〇メートル。量水井、ろ過池三、接合井等を設け、自動砂洗機を据え、浄砂一カ年分を貯蔵する砂置場の施設一式を用意する。

三、送水工事 工費四八、一六四円

配水池までの送水管は地質、水圧に応じて、延長三、八三九・五二メートルのうち一、九九六・八七メートルはヒューム管、一、八四二・六五メートルは低圧用高級鑄鉄管を用いる。

四 給水場工事 工費二九、五二五円

ゴロゴロ山に設け、敷地六、二三八平方メートル（一八八七坪）標高四三・五メートル

有効容量一五四〇立方メートルの配水池、塩素滅菌装置。自然流下方式であるが、火災時等に実揚程一八メートル毎秒一八リットルの加圧給水をするために、十馬力石油発動機を設備する。

五 配水工事 工費二〇九、五八〇円

総延長三七、三五八・一三メートル。管内静水圧は豊洲神社前の二二・二一メートルを最低に、鵜川橋左岸の三八・〇一メートルを最高とする。動水圧は末端で一五メートルを割らないようにし、普通二〇メートルから三五メートルとなるように設計。消火栓は間隔を約九十メートルとし、二八六コ。内地下式二七〇コ、地上式一六コとする。

以上、工事総額四九四、九七五円、事務所費六三、五九〇円、予備費八、四三五円、公債費を合せて計六二二、三五〇円というものである。

柏崎にとって画期的なものとなった上水道計画に対して、反対の火勢が猛然とひろがった。反対論には「絶対反対必要なし」と「時期尚早」とする二流が見えるが、いずれも、主張する根拠を、次の三つのポイントにおいていた。

- 1 柏崎の大部分の地域は良質水の井戸を持っている。
 - 2 大工事すぎて、町民の負担が大きくなる。
 - 3 財界不況、不景気で意気あがらない時である。
- この三点について、それぞれの事情をさぐってみよう。

1 大部分の地域は良質水だということ。
 柏崎の町は砂丘の上にてきていた。そのうちふところに広い鏡が沖の低湿地帯をかかえている。これは良質水を得られない沖積層である。だから、飲む水と飲めない水の境界線は、砂丘の山麓線がそれであった。小道一本をへだてて、片側は水が良く、片側は水が悪いことにもなる。

大八車に大きな水桶を積んで、柏崎神社角の小鶴屋床屋（現新潟相互支店位置）前のポンプまで水汲み朝夕二回を日課とする。水汲みできない地域はこし水でがまんしなければならない。日石が掘った赤坂山護摩堂沢の清水は、パイプをとおって荒町、ハネデ橋附近の生活用水となり、ナベ屋の酒作りもこの水によったという。現消防署の位置にタンクを設けた簡易水道は、広小路の人たちの自主工事。同じく常福寺裏にタンクを施設したのは、駅前の人たちに

よる共同管理。今もその水源井が二本、常福寺の境内に残っている。

こうして飲料水を得るためには、実に長い間、不自由をしのいでいたわけだが、柏崎全体としてはどうであったらうか。

論争がはげしくなった昭和八年、七月発表の柏崎町水道調査部資料「柏崎町内飲料適用井水数調査」はこうなっている。

調査数	佳良	良	不良	不良%
旧柏崎一〇四五	二六三五	四〇八	三九・四	
大洲一七一	五四	一一七	六八・四	
下宿七九	二八	五一	六四・六	
枇杷島二二六	四八	一七八	七八・八	
比角三一七	一七八	一三八	四三・五	
合計一八三八	三九四三	八九二	四八・五	

これで見ると、調査した井戸水では全町の約半数が不適飲料水ということになる。ところが使用している町民感情では、もう一つの資料をたてにとる。それは二年前に、柏崎町が全町の総代に調査報告してもらったものであった。

全戸数 四五七七。井戸の数三七〇〇本。

良質水 二六三七本、やや良四九二本 不良五七一本

やや良・不良を合しても不適飲料水は二八・七％ではないかというのである。

前者とでは数字に開きがありすぎるが、適、不適の地域比は上水道完成当時（昭和十三年）の水道使用戸数をみると推察できる。町内別に列記してみるが、各町内とも戸数―水道使用戸数（％）の順で読んでいただきたい。

広小路四〇―四〇（一〇〇） 田中二―二二（一〇〇） 半田九九―九九（一〇〇）、岩上一〇―一〇（一〇〇）
 駅通り三九―三七（九四・九） 表町三七―三一（八三・八）、新島町四八―三七（七七・一） 鏡町二四―一五（六二・五） 枇杷島五〇―四二（五二・六） 本町三丁目七一―二四（三三・八） 旭町二丁目七四―二二（二九・七） 本一、二丁目一三七―三九（二八・七） 田町一七―三一（二六・五） 南町四七―一（二三・四）
 剣野三〇―一七（二三・三） 本六丁目四四―一〇（二二・七） 島町二〇―二七（二三・三） 本五丁目七八―一五（一九・二） 本七丁目八〇―一三（一六・二） 本八丁目一〇七―一七（一五・九） 住吉町八三―一三（一二・五）
 ・七） 八坂町鶴川町九七―一五（一五・五） 岬町二七―三三（二四・九） 旭町二丁目七七一―（一四・三）
 本町四小町一三三―一八（一三・五） 学校町一六二―二〇（一二・一） 栄町三〇―一七（一一・一） 港二丁目三―一四―三二（一〇・二） 比角一―一〇―一九三（七・四） 新花町一四〇―九（六・四） 諏訪町三〇―一七（五・六） 中浜大久保七〇―二四（三・二） 合計五三六六―一〇七四（二〇・〇五）

悪飲料水がまんのできない不適地域比は二〇％とみることができる。もっとも、良質地域であるが職業関係で水道を入れた本三、本五というような町内もあるので、これを考慮して再計算すると、不適地域は一七・〇五％となる。大半は良質地域である。

だから、例えば駅前の人々が常福寺タンクを作る以前、節を抜いた竹をコロでつないだパイプラインを、小鶴屋前から今の戯魚堂さんの一角まで敷きのぼして、小鶴屋前の口元に大きな木製ジョウゴをあて、ポンプをあおって水を

送りこむ。末端の戯魚堂前のパイプ下では桶をすえて待ち構える。ひと汗かいているこうした情景も、郷土の風物として目にうつるだけであった。

その頃、新潟鉄工の尾形工場長（杵舩島郵便局前の人、めがねをかけた背の高い人だったという）が鯨波の白雲の瀆の水を柏崎にひけと主唱されても、馬鹿扱いにされるだけだったという話も残る。

2 大工事すぎるといふこと。

港町の青年が自主工事で町民を驚かしたことがある。

柏崎日報（昭六・九・一四）

柏崎青年団港町支部の港橋竣成式は昨十三日午前十時から挙行された。来賓に仁多見土木派遣所長、中村町長代理助役、洲崎郡青年団長、松村柏崎青年団長、二宮実業協会会長等三百余名を迎え、一般参観者一千余名の参集をみて……。

八坂神社下、鵜川の川尻にかけられたこの港橋は長さ三十六間、両端を更に十間ずつのぼし、幅七尺五寸、実用幅六尺、工事は森常次郎請負、八月十二日から九月五日までの二十五日間で完成。柴野一郎団長を中心とする。港町青年が二年がかりで資金を集め、計画を練ってきた事業であった。総経費一六一五円（工事請負費一〇〇〇円、土地買収費二五〇円、地鎮祭一五円、開通式二七〇円、創立費三〇〇円、雑費五〇円）のうち柏崎町費補助は三〇〇円で、他は全部、青年が足で集めた寄付金であった。（後日、町に対して寄付採納願をだしたが、昭和八年十二月、道路部分だけは受理され、橋は町に移管することを却下されてしまった）

そは一ぱい五銭のころである。町民がこの千円事業に目をまるくしたのも無理からぬことだった。月収五十円から八十円の少額所得者が多く、そのエンゲル係数は四〇・三％だったそうである。その飲食費の六三％が主食費で、三七％が副食費であったというから、名物大羽いわしが二十尾十銭のころでありながら、カロリーは米で、栄養は豆でとっていたということであろう。米は一升三十銭、仲間のつきあい、病気医薬、酒、タバコも考えて男は米二升、女は米一升が一日の暮しの相場だった。

そういうところへ、六十二万円（当初は六十四万五千円の計画として発表された）の上水道建設案が、てたのだから、町民にとっては天文学的数字に見えたのかもしれない。柏崎町の年間予算は、昭和八年度をみると、当初予算十九万八千三百九十円、ほかに特別事業費として柏小の増改築予算が六万五千円、大洲校の敷地買収費一万円、道路負担金数千円等で八万円。合計およそ二十八万円が柏崎の一年間を支える予算であった。その二・二倍の工事計画だから、空前の大事業であったことはたしかである。

3 不況の時勢であるといふこと。

世界恐慌が既に五年間もつづき、深刻さが隔々にまでしみ通っていた昭和六年には満州事変が起り、翌年には上海事変と飛び火をし、五・一五事件が町民を驚かした。昭和四年の村会で議決となったが、不況の折だから一年待ちましようとして、自主延期をした安田校の改築は何年たっても目鼻がつかなくなってしまう。師範卒業の新卒先生の初任給五十円が、四十八円になったのは昭和五年、翌年には更に四十六円となり、女子師範の新卒女教員の俸給は三十九円にさげられてしまう。その上、町村費だったから俸給運配、三カ月も四カ月も無支給になったり、俸給寄付問題まで起きる。昇給停止などはまだよいほう。

昭和七、五 社会局発表

各府県の労働賃金不払額は工場二百三万九千円、鉱山五万六千円。

同年七月、関東消費組合連盟、政府米獲得の「米よこせ会」を開く、

同年七月、文部省発表

農漁村の欠食児童二十万人。

同年九月 社会局発表

昭和六年以降、七年四月までの賃金不払い工場八百五、金額二十万八千円。

柏崎日報（昭九・一・一）

昭和四年米国の株式暴落以後、農村はただ不況の一途をたどるのみで、朝野をあげての対策もほとんどぬかに釘の有様、一般農作物の暴落は施すべき策もつきはて、農村の経済的不振は拍車に拍車をかけた姿である。

農村はどこへ行く。不安状態はホウハイとして山野にみざり、幾多の農村哀話がつづられようとしている。

同（昭九・一・一〇）

農村問題やかましくなる。負担の均衡、負債整理、ことに生糸値下りの問題と同時に反産運動もいかなる推移を見せるか。

山本内相はこれらの問題の表面化するを極度に懸念し、地方長官に内命を発し、上京者の取り締りを嚴重にしていくことである。

農林省の要求額は精神作興、蚕糸対策、農村協同組織、肥料対策、救農土木事業等で約二千万に達し、大蔵省主計局長、関係局長と交渉が開始されているが、満足な了解を得ることは困難と見られる。

同（昭九・一・一八）

柏崎女工保護組合、郡内各女工保護組合では目下製糸工女の帰郷シーズンをまわって女工慰安会を開き、約一年間の活動に感謝の意を表し、今後のことについて種々懇談をわけつつあるが、今回、保護組合の活動によって最も効果的なのは、賃金を払わぬような工場、待遇の冷酷な工場からの被害がすくなっていくことで……

「東京音頭」で好況気分を期待させた昭和八年は、三原山火口投身第一号がロマンチズムと厭世観の結合した奇妙な流行を生み、九年には「身売り防止策」を内務省が通達するという果てしない不況の連続。一方に十五年工事の丹那トンネル開通の花火があがれば、一方では青い灯赤い灯のカフェーがさんざめき、飯米要求運動が全国的に展開される。地元では安田スキー場が大活躍をしている時だった。

昭和六年、町議会のなかに上水道調査委員会が発足した当時は、一般町民はそれほど関心を示すことはなかった。七年、茂庭博士を顧問に、原技師を主任にして、調査事務所の活動がはじまって、他人事のように傍観していた。それだけ、広い底辺で反対の空気が無気味な沈黙となってよどんでいたというべきかもしれない。八年六月、第八回調査委員会で六十四万五千円の計画説明が議題となるころ、尻に火がついたように反対の声が湧きあがった。七月いっばいで調査部は任務を終了し、いよいよ町議会に舞台が移ろうとする時は「水道を建設すべきや否やの問題は賛否の両論にわかれて、今や頂点に沸騰している」という状態になってしまっ、茶の間まで論争の場になっていった。

柏崎日報に、それぞれの立場からの投書が連日のように続いて、はげしい紙上討論や「町民各位へ」というアピールが、執拗にくり返されたのもこの時であった。「柏崎銀行団の幹部諸氏は尚早論者であろうとのことである」との

観測が流れたり、「問題は時期です。この不況時に借金して土地に金を落とすというような気休め的なことに乗るわけにいきません」と意見表明があったり、「一般町民は本町将来のために苦痛を忍んで水道建設の断行をのぞむべきである」と談話発表があったりする。そして反対氣勢が急激に高まる。

こうしたなかで、町当局は町民の理解を求めようとして、計画の説明書を全戸に配布した。これまで例のないことだった。更に柏崎町水道調査部の名で、七月二十日から七回にわたって、詳細な説明を柏崎日報に投じた。柏日紙は「柏崎空前の大事業、上水道財政調査の説明」と題して、第一面のトップ記事に掲載、次のような七項目で連載した。

- 1 上水道建設の目的、国庫および県補助の推定。
- 2 給水普及の推定。
- 3 給水の方法および所要水量。
- 4 本町における火災、伝染病および火災保険料について。給水使用料および水道収入の推定。
- 5 経営費
- 6 町償還年次について。工費の総額、収入支出の方法。
- 7 財政計画書。

柏崎日報（八・七・一七）

柏崎水道問題について、今回町民一般に配布された印刷ものやいろいろの道聴途説もあろうが、先ず町費一割五分の増税ということについていろいろ誤解して、これは十円に対して一元五十銭増加するのだとか、一戸一割五分の増

加だとか、いろいろ解釈されているが、調査委員の一人は「それは違う。要するに町で徴収している戸数割六万円、国県税附加税六万数百円に対して一割五分ずつの増税で、両者合して一万八、九千円。これを四五〇〇戸としてみる」と戸数割で二元、雑種税付加税で二元、合計四円内外の増税ということになる。……」

柏日（八・七・二〇）

増税がこの範囲なら敢て過重の負担とは見ない（昭和四年は一戸当り十九円三銭四厘であったものが激減して、本年は十三円二十銭である）しかも一戸平均以上の戸数割負担者が全町に約二割、それ以下が約八割であって、なかなか五円以下の負担が五割以上を占めている現状からみれば、水道建設によりて直接間接に受くる利益に比し、むしろ安価のものと思う。

柏日（八・七・二三）

生活必需品に近い新聞すら、とり得ない者があることを忘れるな。（当時の柏崎日報の誌代は一九月八十五銭だった。）

柏日（八・八・七七）

増税十五年計画が円滑にすすむと考えるのは甘すぎる。当町の滞納者が急増している事実をどう思うか。お話にならない悲惨な状態である。

その年の納税額区分は次のとおりだった。

一円未満

三二五人

一円以上三円まで	一一六九人
三円—五円	八九四人
五円—六円六十銭	四四五人
六円六十銭—十円	五六三人
十円—十三円二十銭	二八三人
十三円二十銭—二十円	三二五人
二十円—二十六円四十銭	一七〇人
二十六円四十銭—五十円	二二八人
五十円—百円	一二八人
百円—二百円	四九人

滞納者の状況は昭和元年一〇七人であったものが、昭和七年は一三二七人、ほかに借地料滞納者八〇人ということだった。

町をあげて渦を巻きだした反対の声には、増税による負担増を必至とみての不満がみなぎっていた。大局にたつてリードすべき人が、真先になって反対論を屋開しているからでもあるが、増税十五年間の情報が流れては、振りかかると火の粉を払うにもにたもどかしさを町民におぼえさせていた。その七月、愛町公債論がでてきた。「一般の空気を緩和し、かつ庶民階級の負担を軽減する」という趣旨のものである。調査委員の中からでてきた案であるが、これがまた論議のまとなる。

「公民会では据え置き二十年三分利二十万円の公債発行せよという。また、民政党とかでは四分利云々の由。予は真に愛町公債の真意義を発揮するには三分利にて二十五年据え置きにして、三十万円を下らざるものでなくては促進至難と信ずるものである。」

「愛町公債のごときは理想にして実現は困難で、自己の発意にあらざる限り、さようなことを強要すべきものにあらず。わが柏崎町にて、三分四分の町債一万円以上応募し得べきは幾人あるか。」

一歩あやまれれば、町十数年の財政のガンになるものと思えます。」

「当局発表の年利五分五厘に対し愛町公債により何程減税されるか。二十五年間据置、年三分利、三十万円とすれば、一年の利益七千五百円。二十五年間の利益十五万三千五百円となる。一戸当りの利益を計算すれば、増税四円より一円六十三銭を減ずることになり、差引二円三十七銭になる。」

「三分利二十年据え置きなどといったところで、それはとうていできない相談である。かりに四分利とするも、二十万円の公債を募集するのは容易ならざるものがある。」

政府の低利資金五分五厘とすれば、四分利との開きが一分五厘、二十万円の一分五厘とすれば一カ年三千円の利ザヤとなる。元金償却もあるので、その半額千五百円が町民の負担軽減の資源となるわけであるが、この恩恵に何人がどのくらい浴することになるのか。

今の町費の負担状況をみると、約二割の人が八割方の経費を負担しているというから、その八割千二百円は二割の町民は恩恵に浴する。残り八割の庶民階級はわずかに三百円の負担軽減を受けるにすぎない。四千七百戸の八割三千七百六十戸の負担が三百円しか軽減されない。

一方、柏崎から二十万円の金をしぼりあげた結果がどうなるか。」
 十八日と二十三日の調査委員会で、この問題を中心にして議論沸騰したものが、このように紙上討論となり、茶の間討論となる。そして、二十九日の各派代表懇談会で、大蔵省の低利資金は三分五厘ということで、この問題は打ちきりとなる。

柏日（七・二九）

柏崎町上水道問題は、いよいよ調査委員会を終り、町会協議会に移される段取りとなっているが、洲崎議長は、その重大性にかんがみ、更に慎重に考究懇談もって問題の円滑なる解決をはかり、禍根を後日に残さざるようにと、町会協議会前に各派代表懇談会を今二十九日午後二時より、町役場楼上において開催することになっているが、懇談会の空気およびその成行きは水道成否の運命を決する上に重大なる関係を有するものとして、その成行きは町民の深き関心をひいている。

こんどは寄付金問題の投書活動が起る。

柏日（八・一）

去る二十九日、各派代表懇談会において公債問題は解消されて、五万円五年間に納付する寄付金募集が話題となりしが、その神聖なる五万円の寄付金を毎年一万円いたたくとしてみるに、増税四円中一円差引き三円となり、かつまた、五年間だけでは今や極度の不況に際し、到底町民各位のご理解は至難である。せめても十万円以上の寄付金でなくては、この難局は打開できぬと思う。故に五万円内外の寄付金問題には賛成できぬ一人である。

その当時、十万円以上の寄付金で解決せよとは、無理難題ということであろうか。火災保険料が果たして安くなる

だろうかという意見もでてくる。「現に三条町などでも交渉しているが、まだ解決されていない。」まして、暴風の多い海岸の町であるから、そう安くするはずがないとムキになる。

当時の当町の火災保険契約は東京火災保険ほか二十五会社に対して契約額百八十二万七千六百四十七円、契約戸数七百八十四戸。千円に対する保険率は木造家屋二〇、土蔵五、平均一四で、一カ年の払込額は二万五千六百四円だった。これを一割減額ならどう、一割五分ならどうと計算して、そんなことより別に方法を講ずべきだと主張する。

柏崎日報（八・八・九）

元利合わせて百万円の巨費を要する以上、いかなる論法をもってしても、町民の負担がとうてい僅少ですむべきはずがない。

愛町公債、寄付金案、焼け石に水のごとき取るにたならぬ愚案でしかないにもかかわらず、それすらだめのような現状にあって、どうして徹底的に負担を軽減する名案が他にあるであろうか。

政党的争闘を誘致するがごとき水道案はすみやかに解消すべし。

こうした投書にまじって「町の水道使用による収入計画は甘い。使用見込数に達しない場合の収入減が、また増税として加算されるのでないか。」という声まででてくる。

当局は給水見込数を一三二九戸と発表したのに対して、政友系の町議は七百から八百とよみ、公政会では千四、五百と見る。飲料水になやんだ高田市の上水道が完成したのは好況の大正十四年、しかも柏崎より千戸以上多いのに、その時の使用申込数は七九五戸であった。（昭和七年には給水戸数二一六九戸になっていた）それを思うと、柏崎ではどう数えてみても給水見込は七二七戸でしかない、という見方からである。

水道料金を水飲み料と皮肉って「一カ年一戸平均十七円十六銭に見積ってあるが、五人家族一カ月一円二十銭が身にこたえる人もある。一人増すごとに十銭増さねばならぬ。浴槽一カあれば二十銭増し、牛馬一頭あれば三十銭を増す。支栓一カつければ三十銭を増すのである。」「引き込み工事も、奥行十一間あるとして二十六円七十一銭、半額を町が持つとしても、器具代その他で十四、五円はかかる。」とアジる。「新潟は毎年十五万円の純益をあげているが、長岡は先年八十銭の使用料を一円に値上げして物議をかましたが、今なお一戸十五銭の損失を続けている。そのほか高田はいかなる行程をたどっているか。更に柏崎と同格の新発田、新津、三条の水道がいかなる内容を持っているか。」ますます火に油をそそいでいく。

町内会も方々で開かれる。その多くが反対の氣勢をあげる。八月七日夜八時に開かれた比角の総代評議員会は約五十名参集、愛町公債を条件としての賛成が五・六・十二の三区、他は絶対反対、時期尚早が大勢を支配する。その席で、当時町会議長をしていた洲崎義郎氏が「みなさんが是なりと認められることでも、私自身是なりと信じ得ない場合は、みなさんの意に添わない行動をとるかも知れない。みなさんが、それはいけないといわれても、町発展のため必要なりと信じた場合は、私は邁進するかも知れない」と発言。「それは困る」の声がハネ返るが「自分は比角のために、柏崎町のために努力してきたつもりだし、今後といえども、その気持ちに変わりはない」と押し通される一幕もあった。

八月十三日、遂に町民大会が開かれた。反対論者有志から成る町政研究会が主催。田町福蔵院を会場にした「柏崎水道批判演説会」である。午後八時の開会時刻までに「聴衆三百余名に達し、堂内も溢るるばかりの盛況」ということであった。演説七名、財政問題から論じ、水道計画の上で論陣をはる。

水道調査に三千円を空費し、今また調査報告書までに一万余円を費消しという論法から、はては、柏崎に水店が繁盛しないのは水がいいからだ。しかもタダで飲めるのに、こんどはゼニをだして飲めというのか。冬はつめたくて夏はヌルマッコイ水道が欲しいのかという漫談までとびだす。そして大会の名で決議文を可決した。

一、柏崎町民の多数の現在の町勢にかんがみ水道即行に絶対反対すべし。

一、町当局は町民総意のある処を知察して水道案を撤回すべし。
右決議す。

翌日、三名の代表が「西巻町長を私邸に訪問し、右決議文を朗読し、意のあるところをのべた」真夏の熱気がますます水銀柱を上昇させる。

柏日（八・一八）

尚早議員は演説会の相談をすすめ、本日より連夜開催、弁士には新手が加わるもよう。

その移動演説会は次のようだった。

十八日夜、枇杷島行通寺会場

十九日夜、岬町公会堂と大洲公会堂の二会場。

二十日、比角護摩堂と新花町尾上座の二会場、

二十一日、柏崎座会場

各会場とも弁士十六名。

何やらいきりたつような空気となり、議論も揚げ足とりから、はてはことばじりをとらえたり、人身攻撃をことと

する風が見えてきた。

「今だからこそ、水道を持たなければならぬと思うのです。今をはずしては二十年、三十年のさきに持てるかどうか。五十年のおくれは取り返しのつかないことになりましょう。私はおいしいからおあがりなさいとおすすめておられるのですが……」こうした渦中で東奔西走する西巻町長の苦悩は大きい。

町長の抱負を支持する少数の人たちも、柏崎の生命線ともなるべき施策だが、こうも全町あけての反対運動となつては……と、弱気にもならざるを得ない。その時、会合におくられて駆けつけた中村三郎議員が「柏崎百年の運命にかかる大事業だ。たとえ反対がはげしくても、柏崎を見捨てることができるか」と大声一番、たがいに勇気を奮いおこしたという話は、この時のことである。

八月になってからは、各派代表による円卓会議が再々開かれるが「今が時機か、時機でないかが、重点問題となつて」議論は平行線をたどるばかり。「寄付金問題も五万円とするか、六万説か、七万五千とするか」がまとまらな。民政派有志が町長宅に参集協議をこらし、洲崎議長、山崎副議長、中村議員が町長と熟議をこらせば、政友派は反対派議員宅に集合して協議をかさねる。連日の人の動きに「炎天下、柏崎の空気は騒然たるものあり」と記録されるにいたった。比角公民会六議員は十四日夜、協議の結果、それぞれの考えによって行動すべきだということで、各自由行動をとることを申し合わせた。

こうしたなかで八月九日の柏崎日報は、初号活字で「先覚者は今一段努力せよ。大衆の意見を聞くより、大衆を啓発せよ」と警告を発した。

「水道などは現下の状況よりすれば、反対の多いのが当り前である。

しかし、将来を考えた時に水道の必要を生ずる。将来の柏崎になくはならぬとすると、一日おくれれば、一日の損、一刻も早い方がよい。

町会議員は町民の総意を反映する機関であるべきだが、一面また、町民の先覚者として町民を指導し、啓発していかねばならぬ。百年の大計、十年、二十年、三十年の先を見通して、町民を指導することは町会議員の大切な任務である。町民大衆にきくより、むしろ町民大衆にきかせることに努力すべきであらう」

こうしたアピールにもかかわらず、「先覚者とはどんな偉いご仁か知れぬが」という投書が翌日舞いこむ。そして批判演説会を盛りあげる。そして憶測をまじえた人身攻撃がはじまる。

遂に二十四日の柏日紙に「問題を中心に選せ」という西巻町長の談話が発表された。

「妄断のもとに私を攻撃しようというのでは、とても正しい批判なんか期待しているのが野暮だ。水道そのものの可否なり、計画の内容なりについて批判し、論議されるのは喜んで承わりたいと思つているが、こう話の中心がはずれてきてはもう駄目だ。町民諸君の中には、この間からの新聞をみ、演説会をきき、町内会のような話を聞き、だんだん話がそれて、今では純然たる党争だと苦々しく思つておられる方も多かろうと思う。

私自身が党争の中にはいつているのかも知れない。静かに考えて見なければならぬ。問題の渦中にあるものは、えて中心をトッパズ。町民各位からも、静かにこの水道問題の姿をながめて正当な観察をくだし、問題の本質に徹して論議し、批評していただきたいと思う。」

「柏崎町民は自分の棒で自分の頭をたたいてるのでないか」という洲崎議長の談話も柏日に掲載される。「町民の一部の問題ではなく、町民全体の問題です。やはり政党的感情があるようですが、町民もすこし考えなければならぬ

です。選出する時に考えねばならんです。自分の棒で自分がたたかれるようなことになりませんからね。

町会議員さやる気になれば、町民にも納得して貰うことはできるだろうと思います。」

しかし、火の手はなかなかおさまらない。二十九日には、町長宛の脅迫状までとびだしてしまった。一町民からのペン書きの葉書で、内容は人身攻撃と不穏な言辞がちらねてあったという。

九月二日には柏小裁縫室に各町総代の参集を求めて、町長より水道問題の今日までの経過や方針について説明、了解を求める努力をする。

八月後半の柏日にあらわれた投書を挙げてみよう。

八・一九 寄付金による即行に反対す。(上下二回)

八・二二 水道問題は政党屋のオモチャにあらず。まじめに町民の声をきくべし。

八・二五 再び上水道問題の撤回を望む。

八・二七 前日の投書に答う(町長)

八・二七 水道問題につき町長に一言。

八・二八 水道案はどうしているか、町民各位へ

八・二九 寄付金問題に迷うなかれ、町民各位へ

八・三〇 投書に答う(町長)

八・三〇 簡易水道の設置を望む。

八・三一 火防問題について、町民各位

九・一 総代会に対し、町民各位(二回)

九・一 水道即行理由を批判(二回)

九・二 各町総代各位に望む。

九・三 水道問題の救済工事について

九・一八 尚早是か、即行非か(四回)

九・二一 二宮伝右衛門氏の言について

こうしてえんえんと続く。町長の回答以外は、すべて反対表明の署名投書である。

全町民の関心をこれほど集めたのは類のないことだったが、七、八、九月の異常な興奮のあとに冷静内省期がきた。当局の苦悶だけが続けられ、研究調査、ねばり強い啓蒙活動、国、県に対するはたらきかけと、一年が流れ、いよいよ昭和九年七月十三日、町会上水道布設工事予算が上程された。

その町会のようにすを当時の柏崎日報の記事でみてみよう。

柏崎日報(九・七・一四)

多年問題として論議研究され、ひいては賛否尚早即行等のために今日まで検討され、二カ年にわたる設計も原技師の手によって完成されたので、ここに最後のな決定をみるべき討議ともいわれる、柏崎水道布設事業施行の柏崎町会は、きのう午後二時十分開会。さすがに柏崎当面の大問題とも見られる水道問題の結末ともいべきものとして、傍聴者は各方面から参集し、議場傍聴席もせまいまで押しかけた。

議席数は三十、病氣その他で欠席二、出席議員二十八名。開会と同時に「昨十二日、町会協議会で継続研究すると

いうことだったが、雨のために（大豪雨だった）協議会を開くことができないままに本日となったのだから、先ずこれから協議会に入って、十分に審議してほしい」と反対派が引きのばし作戦にでる。「すでに研究もなしつくしておるのだから、ただちに本会議として審議されたい」賛成派は押しきろうと構える。最初から緊張した応酬である。二時三十五分、「多数の傍聴者にはお気の毒だが、各自の隔意のない意見を交換していただきたいので」という町長の発言で協議会にはいる。

三時半、本会議再開。第一読会の質問戦である。「町議と当局との間に、それからそれへと質問の花が咲き」果てしがない。いらだって「質問打ちきり、第二読会にはいるよう議事進行」の声がでる。「空前絶後の大問題に對して、なお質問したいという諸氏が多いから、もうすこし継続しては」の議長の発言に「動議をとりあげないのか」とつめよる。「多数をもって押しきるつもりか」と奮然と立ちあがるものあり。いったん休憩。そのあとも紛糾気配濃厚。賛成派議員から「さっきの議長の議事進行はみごと。」と力説すれば、つづいて揚げ足とりの応酬となる。柏日紙は「興奮戦を演出して第二読会にはいった」と表現している。

第二読会。反対演説には傍聴席から拍手があがる。修正案もでる。賛成演説には反論がとび、尚早論が追いうちをかける。「何故に僕は賛成するか」の意見発表中に、医師に對する中傷があったとて「取消せ」と語氣するどくせまる場面もおきる。「午後八時にいたるも賛否両論、やむなく採決によることになり、起立に問うたところ」賛成十九、反対六、中立二。一年前に票決すれば、一票差で否決になるとうわさされていたものが、ねばり強い説得運動効を奏して、ここに上水道布設案が成立した。はげしかっただけに、口角泡をとばした市井人の間には、わだかまりの空気が、しばらくはよどむことになった。

工事は翌十年から三年間の継続事業、工費は一年次十八万五千五百円、二年次三十一万九千九百円、三年次十一万六千九百五十円、計六十二万二千三百五十円であった。この資金造成方法は国庫補助金一万八千六百五十円、県補助金一万九百十円、町債五十六万五千円、一般町費からの繰入金二万一千九百九十円、雑収入六千六百円となっている。

以後、数次にわたって拡張工事が行なわれて今日にいたったわけである。

第一次拡張工事、昭和二五・三、濾過池一池増設、四百九十三万五千円。

第二次拡張工事、昭和三五・三、導水隧道二本、配水池一池増設、配水管二〇、二六六メートル、一億四千六百四十二万八千円。

第三次拡張工事、昭和四一・一二、二俣浄水場新設関係、二億五千万円。

創設当時の工費を今日に換算するとどのくらいになるだろう。二十五メートルプールが六百万かかる。ほぼ同規模の当時の濾過池は三池で三万一千六百八十五円であった。一池の工費六百倍、更に水源池工費は十万九千四百三十円、濾過池の十・九倍。水源池工費は六千五百倍、実に数十億円の仕事になる。

かりに当時、時期尚早として見送ったらどうなるか。昭和十二年、日支事変、寄付金つき愛国切手発売、国民精神総動員実施要綱発表、初の防空演習。十三年、事変拡大、国会「だまれ」事件、国家総動員法公布、綿製品の製造販売制限、物資総動員計画による失業者三十九万人、新聞用紙制限。十四年、鉄製品の回収開始、賃金統制令、米穀配給統制法、石油配給制、白米禁止、木炭配給。

数えあげるまでもない、情況は日にまして悪化していった。戦後はどうか。間借校舎で出発した新制中学校の校舎でも、一中、二中と順をおい、一番おそい三中校舎が完成をみたのは三十六年六月であった。上水道計画が見送りに

なっていたら、どういうことになったろうか。

一万六千分の一の柏崎地図の上に、三ミリの透明方眼紙をのせて作業してみた。柏崎の水道による影響圏をみよう。居住区、二次産業圏の有効地域のポイントを教えてみると、水道以前は一〇八八点、現在は二五九二点、まさに柏崎の有効圏は二・三八倍に拡大している。さらに可能圏を含めると三・三一倍である。都市の保有力の構成は、電話交換回数、資金流通高、自動車走行キロ等多様な基本指標を反映するものに地価指数があるというから、かりに二十倍とみると、当市の保有力は六十倍に発展している。先覚者を持ったことは柏崎の幸運であった。

統制期資料

戦時統制で、越後タイムスの廃刊が昭和十四年七月。柏崎日報、柏崎新聞は翌十五年七月に廃刊となった。物資節減、紙も手にはいらず、子どもの学習資料は反古紙の裏に印刷して間にあわせる。ザラ紙の吉川英次「宮本武蔵」は書店に頭をさげてようやく手にはいる。しかも、無欲無我の敢闘の姿、本質的に培えと、めいめいの内面における努力をつづけ、種子のごとく堅実に、まさに伸びんとする生命をみたせ、そう信じながら心の休む時のない月日が続いた。

この時期を無記録空白期と述懐する人もある。山田良平氏「年表柏崎の「百年」と「中央青年会史」」「三宮スクラップ」等によって、記録事項を列記しておくことにしたい。

昭和十五年

七月一日、柏崎市制施行。戸数五千五百、人口三万二千。

九月十五日、市民大運動会、各町内工夫の標識旗がはためき、グラウンドの周辺は参集者で黒山のようになる。四百米リレーは西学校町、二千六百米リレーは田町、綱引きも田町が、それぞれ優勝旗を獲得した。

隣組活動がはじまり、港町下の裏浜に狸の飼育場が出現し、電力使用三十%の制限となる。

昭和十六年

ボーイスカウト運動は大日本青少年団に発展的解消。北信越をリードしていた柏崎市少年団連盟解散。

各町内に待避所や防空壕ができ、防空訓練がさかんとする。各商店軒並みに、店員が軍需工場へ徴用される。

三月、吉田吉造、荒浜に北日本農園を開き、砂丘地開拓を計画。敷地六万坪。乳牛七五頭、豚六五〇頭、鶏一〇〇〇羽、酪農地帯の建設にふみだす。

十一月二十日、裏浜の日石十三号井、十四号井から突然熱湯が噴出。やがて十三号井の噴湯とまり、十四号井は閉鎖。これが戦後柏崎温泉をたんじようさせる。

金属回収さかんとする。各寺院の鐘楼が空屋になったのはこの時。ただ、間光寺の鐘だけは白河楽翁の銘があるので供出することを許された。

昭和十七年

煙草一人一個売りも意のままにならず、朝の店頭行列をなす。節米、代用食の奨励、菓子配給となり、一カ月一人当り三十銭から四十銭。衣料切符制実施、市部一カ年百点、村部は一カ年八十点(男子洋服五十点、オーバー五十点単衣二十四点、ツーピース二十七点、ブラウス八点、ワイシャツ十二点、スカート十二点、エプロン二点、手拭三点

等)

神社、寺院の境内、空地、軒下、校庭、砂浜と畑化し、供出ヒマの栽培から、代用食品栽培にうつり、カボチャ作り、イモ作りが盛になる。

イナゴとり、落穂拾いの集団活動活発となり、刈羽郡学童三年生以上の集計玄米四十三石三斗八升、百八俵の成績をあげる。

県民貯蓄目標三億五千万円。前年より九千四百万円の増。そのために、学用品は質素を旨として購入をつつしむこと、教科書は兄弟姉妹友人間において連年融通すべく、洋服はなるべく持ち合わせ品を継続着用のこと、というような示達が県からくる。

四月十六日、北陸馬事訓練所地鎮祭。二年前、荒浜砂丘地に九万坪を画して発足していたもの。この十九日からの訓練は第三回講習生で、山梨、群馬からの三十名であった。

ここには秋田、山形、東京、神奈川、富山、石川、福井、長野、岐阜、静岡、愛知、三重、滋賀、京都、大阪、奈良等からも訓練生が入所してきた。

更に隣接して、飛行協会の滑空訓練場(グライダー)が新設されることになる。

五月、柏崎市民食の献立発表表さる。

その一例

朝食(一人前)

おじや(米七〇、味噌二〇、煮干粉三)

おひたし(根菜類一〇〇、菜類一〇〇)

漬物または大根おろし(かつ節三)

計蚕白質一八・八、熱量三七五

夕食(一人前)

筍ご飯(米一四〇、筍一〇〇)

うど胡麻(うど一〇〇、味噌一〇、白胡麻五) 清汁(麩二〇、青菜三〇、煮干粉三)

計蚕白質二二・二、熱量六三八

市民食研究委員は次の人たちだった。

高沢二郎、布施宗一、高桑武雄、三宮とき、和田いせ、曾田柳子、佐藤とりみ、堀内潔、坂田四郎吉、池田吉太郎
相沢啓之進、佐藤仙次、丸山英一、洲崎義郎、吉浦つま、原とみ、今井すみ、近藤つな、若林はつ、各中等学校家事
担任、食料品商代表、療養所炊事主任、田辺松巖。

六月、柏崎国民学校が海洋訓練部を設け、十人乗りボートを設備し、鶴川岸に百坪の艇庫を建てる。

この年、柏崎農学校の新敷地きまる。

上越新聞(昭一七・一・一一)

柏崎農学校建設費十二万八千二百二十六円、設備費一万四千二百二十一円、合計十四万二千二百四十七円の地元負担金も柏崎市、刈羽郡、同窓会で大体了解を得てあるが、敷地一万五千坪を要するので、枇杷島城跡一万五千坪の専有者飯塚知信氏を十日午前十時、原市長、三井田助役、飯田県議、内藤久一郎町村長会長、高沢農学校長、吉岡荘吉同窓

会代表等が訪問し、寄付方を懇願したところ、同氏は快諾したので一同大喜びで辞去した。

昭和十八年

米が配給制となって、毎日オカユにしなければならぬ。芋、木炭、魚、野菜すべてが常会を通して配給になる。

女子は着物の長袖をきり、防空頭巾、モンペの常用が普通となる。

柏中生、刈羽村へ田植奉仕作業、通運へ運搬奉仕作業、新設日本油機の整地作業、西山や荒浜の整地奉仕、松根用の松の根掘り、高田村のまうね作りと、勤労奉仕の出動多くなる。

軍需工場への徴用が多くなつて、市内の商店街に閉店が目立つ。しかし、ひたむきに信じて、それを悲しむことはなかった。出征の見送りしきりとなつて、各町内に大太鼓小太鼓のリズムがひびく。ボーイスカウト名残りのブラスパンド、比角青年のラッパ鼓隊が人々の心に安らぎを与えた。

三月二十八日、柏崎銀行は百三十九銀行とともに第四銀行に合併、第四銀行柏崎支店となる。

三月三十日、石油鉱山学校が柏工校内に創立される。

六月二十七日、洲栄工場企業整備令によって閉鎖せざるを得なくなり、あとに日本油機が進出した。

昭和十九年

豪雪の新年、軍用機柏崎報国号の献納運動起きる。

柏崎高女、女子商業生徒の工場動員はじまる。一月十九日、十四才から二十五才までの未婚婦人の工場動員が全国的に開始されたものである。八月からの柏中生の学徒動員は大半を送りだして、残ったものを留守部隊と呼ぶ。

どだった。

五年生百八名、名古屋日清航空KKへ。

四年生、柿崎理研および直江津特殊製鋼KKへ。

三年生、柿崎理研、上杉鉄工、西山帝石へ。

この年度は臨時措置によって、四年生は繰上げ卒業となつて三月二十八日に挙式。五年生の卒業式は三月三十日、出動先の名古屋で行なわれた。

柏崎農業学校は校舎を日本油機に売却、七月から柏中北校舎を仮校舎とする。

柏崎商業学校は生徒募集を停止して、在學生を工業学校にうつした。

四月、教員不足のため柏崎高等女学校に臨時教員養成所が開設された。期間六カ月。

九月一日、学童疎開の第一陣として、東京世田ヶ谷、若林小学校の児童六十名来柏、天屋旅館を疎開先とする。

九月二十一日、柏崎飛行機工業株式会社創立される。資本金三百万円。社長吉田吉造。

酪農天国建設の夢をもって、十六年に出発した北日本農園であったが、県がこの事業を許可しないために助成がない。飼料の特配がない。事実をもって成果を示そうと努力されたが、ますます飼料の入手が困難となり、ついに乳牛千頭の夢ならず、飛行機工業に転身したものである。

昭和二十年

米の配給一割減で一人一日二合一勺、黒米をサイダーびんに入れて竹棒でソキ、麦をたべ、豆メシも貴重となり、スッカンポをたきまぜて空腹をこらえる。

煙草の配給は一日五本から三本になり、トウモロコシのケがよいというもの、イタドリの子葉っぱをきざんでよしとするもの、代用煙草の苦心しきり。吸いがらを拾い集めて巻き直した更生煙草は最上、その紙にはコンサイスがいちばんよいというものあり。

市民の防空演習しきりとなり、灯火管制連日、毎日のように応召者を送り、商業人の徴用もはげしく、商店の商品ケースはカラッポのままとなる。

三月、三宮裁縫女学校統制のため閉鎖。

四月、転業奨励により、市内の旅館二十軒となる。

五月、柏崎市への疎開者は戦災者を含めて千九百世帯、五千七百人となり、市は大家屋の開放を要望する。

七月、鶴川、前年につづいてはらん、浸水千三百戸。駅通り加納書店前あたりから船を押しだすさわぎとなった。

市民疎開がすすめられ、老幼、親類すじをたどって南鯖石、黒姫と、周辺部に引っこす。

建物の強制疎開でダビ小路、ゴンゲン小路の各家がとりこわされ、柏中大門と四銀周囲の各家がとりくずされる。

神社前十字路でも撤去準備がはじまる。

七月二十四日、米機B29西中通過に爆弾投下、女子二名爆死。

婦人会員の工場労働奉仕隊活発。ご飯がかたすみによってしまうような弁当をもって、霜田木工所の飛行機竜骨作りに従事する。

町内自衛部の活動のほかに対空監視隊ができ、公会堂、警察署、四銀楼上に監視員が立哨。各町内からの数すくな

くなった青壮年で組織し、控え所の警察道場にゴザをしいて幾夜も過す。

理研柏崎工場の従業員は総計九千五百四十名だったが、うち千三百名は応召、千六百五十四名は学徒動員によるものだった。

八月一日夜、長岡空襲の大型爆撃機の編隊が柏崎の上空を通過。量を積みあげた床下防空壕に待避したり、押入れの中で息をこらす。通過後、長岡にあがる一面の火の手と、焼い弾のさく裂する無数の閃光を望見する。この日より市民の疎開いよいよ急迫。

八月十五日、戦い終る。市役所職員は原市長を中心にして終戦の大詔放送を聞き、各町内は隣組毎に集まってラジオを聞いた。

この日を境にして歴史は転回する。

開拓団柏崎村

大陸で生命を燃焼された人たちで、現在も元気で活動されておられる方々は多い。しかし、その話はあまり多く語られていない。柏崎村開拓団についても同様である。

誰かに話したいことを胸に抱えた方たちであるのに、話すことに極めて控え目でいられる。語るには胸のなかにあるものを整理しきれない、死線をこえてきた複雑な感懐が、はげしい心情の起伏を呼びさますからであろうか。はかりしれない深さを持つ痛手を胸にかかえて生きてゆこうとされる。「ほんとうに身をもって行なっている人ほど、ほ

んとうに苦労した人ほど、多くを語らないものだ。たしかな自信の基盤を持ち、人間的な深みをたたえている人というのは、こういう人たちだ」と聞かされたことがある。

脈々とした雄心をたぎらせて、新しい土を求められた姿を的確につづることはできそうもないが、小熊団長のメモノートや、押見孝一郎さんが大切に保存していたださる資料と、数氏からお聞きしたメモによって記録にしておきたい。

満州大陸に渡った柏崎村建設開拓団は、転業開拓団と目されるものであった。戦時体制が長引くにつれ、日本では経済統制を極限までもっていかねばならない。産業再編成の声が上がった昭和十三年には、四月一日に国家総動員法が公布され、六月二十九日には綿製品の製造、販売の制限、七月九日物品販売価格取締規則の公布実施、十四年の四月二十日には従業者雇入制限令が実施される。次々と統制令が施行されて十七年にいたって、五月十三日、企業整備令施行となり、小売業整備要綱の決定となる。

上越日報（一七・一・二一）

転業者に暖い支給金

厚生省は予算百六十五万円による転廃業者援護案を五月から実施することになった。転改業に要する期間を最短七日、平均一カ月かかるとみて、独身者の場合は一人当り一日一円、家族三人のものは一日四円の支給となるものである。この支給金は生活程度によって多少の差あり、国民職業指導所の認定幹旋によるものである。従来は、主として工場、商店等の経営者に重点をおき、商工、農林両省の転廃業共助資金六百円支給のみであった。

こうしたなかで、柏崎に、中小企業整備のため転廃業の見通しをつけた人々によって、開拓団を結成してはという動きがでてきた。その誰にも農業の経験はない。しかし、国策の「満蒙開拓」が将来に明るい希望を持てる道だと信じ、「五族協和」の理念に美しい夢さえかけていた。

すでに昭和十年から満州移民は開始されていた。角田房子氏の「墓標なき八万の死者」によれば、この年の十月、第一次移民団四百人余りが神戸を出港している。これは武装移民で、在郷軍人会を母体とするもので、屯田兵の性格を帯びていた。第四次までは試験移民と呼ばれ、明るい見通しのたった第五次から集団移民と名称も変わり、のち開拓民と呼ばれる。こうなると、ほとんどが農村出身者で構成されていた。

開拓団は第十三次、第十四次で終わったが、これがほとんど転業開拓団であったから、第十一次の柏崎村開拓団は転業開拓団としてはテストケースとして注目されたものといえることができる。

前忠サンこと前田義三郎氏が開拓団事業の促進に、早くから精力的な活動を続けていた。前田氏の活動振りを「中央青年会史」昭和十六年の記でこんなふう書きとめている。

青壮年団の創設、警防活動の推進、満州開拓事業の促進、スポーツ体育の振興など、長岡、北条、二田あたりまで足をのばして講話を行ない。市内各所の会合に奔走すること、日に夜をついでの全く寸暇もない活動ぶりだった。

翼讀青壮年団、翼讀青少年団、翼讀会協力会議、商業青年隊、同推進隊、商業報国隊、同推進隊、体育団、歩け歩けの会、錬成会、特設防護団、自衛部、少年団興亜運動協議会、常会推進委員会等々、その一つ一つに幹部となり、寒中の海に褌をし、防空演習の入り乱れるホースの間立って叫び、毎日毎夜諸会合に出席し、いつも会の中心となって指揮し督励した。

こういう前田氏であった。三月には単身、満州開拓団視察の途にのぼる。出発の十三日の駅頭は、出征兵を送る時

よりも盛大な歓送だったという。五月帰柏するや、視察談を展開し、大陸開拓後援会を作る。

この熱意が反響を呼び、気運がたかまり、翌十七年早々に具体化していく。

前田氏と同じように奔走した人がもう一人あった。カネマサのオッチャンこと小林広吉(宏彰)氏である。前田氏は転業者の新天地を大陸に求めようと、その産婆役をつとめ、小林氏は自ら大陸の土となろうとして努力をつづけた。だから、かつての部隊長であった、もとの第二師団長荻洲中將から「しっかりやれ」と法名まで与えられたという。

商工会議所も研究をすすめる。市も真剣に取り組む。県の拓務課との連絡がしきりにかわされ、拓務省や満拓(満州拓植公社)との交渉がすすむ。そして候補地が浮びあがってきたのは、十六年の秋もなかばを過ぎるころだった。

小林氏は、冬に向かうという大陸気象では条件の悪い年末近く、上野国明氏と共に現地視察にでかける。止むに止まれない気持ちだったにちがいない。小磯大将(十七年五月朝鮮総督になる)の奥さんが荒浜牧口家の人であり、二宮伝右衛門氏とは親戚になるところから、柏崎村の団旗の文字を大将に面会して書いてもらうこともした。

団員の募集は翌十七年の声を聞くとともににはじまった。上越日報の記事でみよう。

一月六日、午後一時半から市役所楼上において新春常会開催。第四議題「満州国柏崎村建設期成同盟会設立に関する件」は協議の結果、会長に原市長、副会長には三井田、中村両助役、商工会議所副会頭巻淵藤吉、山崎忠作の四氏を、幹事には市会議員一同、商工会議所議員一同、評議員には市町内常会長等を選び、陣容を整え、着々邁進することになり、午後四時解散した。

一月七日、期成同盟会事務所を柏崎商工会議所に置く。本日、事務所開らきをしたが、開始と同時に申込みが殺到している。

一月八日、昨日より会議所藤田理事をはじめ桜井、和田、横関氏等により事務が開始されるや。二日にして申込者余戸、人数で六十名になった。第一回先遣隊送り出しの四月下旬までには相当の数にのぼるものとみられている。申込者の負担をすこしでも軽くしたいという温かい心持ちから、小林宏彰氏は本日、同会へ金百円を寄付した。

一月十六日、小熊啓太郎氏が参加を決意したといわれ、今後、氏を募って参加者が増加するものと思われる。

柏崎村開拓団長の人選について、本日午後一時から市役所において会長、副会長、常任幹事会議を開催、その結果小熊啓太郎氏と決定した。

ここに団長がきまった。大久保錫物の正統を伝える雪海さんこと小熊啓太郎氏は、諏訪健児団の団長として親しまれ、「高原の流れへ道あり夏あざみ」俳句ににじみでる人柄から信望を集めていた。

一月二十八日、柏崎村申込者の選考が本日午前十時から柏崎市公会堂において、県拓務課佐藤属臨席のもとに行なわれた。開拓団団長小熊啓太郎氏以下小林宏彰の両氏をはじめ二十八名の開拓団員が、市内における屈指の店舗工場を惜しげもなく捨て、積極的に新天地を建設しようとする意気込みに、拓務省ならびに県拓務課では大いに感激している。

一同は来る二月三日、古志郡栖吉村の県立農民道場に入所、立派な開拓民として四月、日の丸と柏崎村旗を掲げて渡満する予定である。

この日午後四時から柏崎銀行楼上において緊急役員会が開かれ、同開拓団が移住する土地は、満州国三江省通河県ヒョウロウ地区であることが発表された。

土地については次のように紹介されている。

同地は松花江沿岸、依蘭町の西北の八浪河と西の大古洞河の間にある大森林地帯で、八浪河にでるに六里、佳木斯町まで三十里、八浪河には一日七回の便船が通過し、ヒョウロウ地区附近まで八メートル幅の道路が開通しており開墾地としては最も便利な柏崎村となるであろう。

現実がこんな美文調でないことは、団員だけがよく承知していた。ことの重大さに胸を押しつぶされるような思いで訓練にいそしんだ。団長は、農事指導員として説き落した新田畑の阿部義雄氏とともに、内原の近くの茨木具鯉淵にある国立幹部研修所に入って訓練を受ける。厳冬の訓練である。理論と実習の連続、ほほにはりつく水をそぎおとして肥桶をかつぎ、一貫匁の鍬をふるう。大陸の風土地理から農業経営管理、耕作法、人体生理、健康管理、救急手当法、栄養学、開墾法、集落構成法、何から何まで一カ月そこで修得しなければならぬ。はげしい準備であった。三月には松原伍一郎、桜井会議所主事の両氏が、更に現地視察に出発する。

商業人であった人に、職人であった人に魂を掘り起こすといわれていた訓練は、さすがにきびしかった。それに不服はない。誰もが農業者への自己改造をいそがねばならない。たがいにいたわりあい、はげましあう。一身同体のきづながねりあげられていく。

今まで打ちこんできた商売関係の処理や身辺整理も急がねばならない。家をたたくまで渡満するのだから、その仕事もある。あとで呼び寄せるまでの、家族の仮の身の振り方もつけておかねばならない。まことに多事。

市もまた、いろいろな対策をすすめていた。その一例として、次のような記事も見える。

十七年三月三十一日、午後二時から柏崎銀行楼上において柏崎商工会議所第二十二回役員会が開かれた。この時の

九議題のうちに、開拓団援護について協議された事項が三題あった。

一、満州国柏崎村建設期成同盟会補助金に関する件。

二、満州国柏崎村建設団開拓民渡航費補助規程に関する件。

三、満州国柏崎村建設団開拓民待機家族援護規程に関する件。

待機家族はやがて渡満する家族であるが、柏高大門に用意された開拓寮で起居して、その日を待つ。開拓寮は第一次先遣隊員となった巻口栄一氏宅を団員および家族のために開放したもので、渡満前の家族を、收容する施設であった。将来は団員帰省の場合の宿舎にあてたり、中等学生の寄宿にする計画も持っていた。開拓団は先ず、先遣隊が最初に渡満して準備をする。村作りの第一歩として家をたてる。部落配置や生活の基本条件の整備等をすすめる。そこではじめて家族を含めた本隊が乗りこむ。目的地には新しい土地だけがある。一切は自らの手で生みださなければならぬ。先遣隊の仕事の困難さが思いやられる。本隊送付の時になっても、待っているのは文明から未開の生活への逆行である。始源へ戻って、そこから新生活を建設しようというのだから、周囲が美化して考えるような安易さは、団員にとっては迷惑であったかもしれない。骨を埋める覚悟で取り組んだ壮行であった。いよいよ出発の時がきた。

十七年四月四日、満州柏崎村開拓農民第一次先遣隊二十九名は本日午後一時、柏崎公会堂において県の壮行式に臨み、同五時二十分柏崎駅発にて壮途につく。

公会堂から駅まで隊列を組んで行進する団員を見送る。近親者や隣組常会員が、その隊列を取りかこむように歩きながらことばをかわしあう。

四月六日、下関出帆、現地に向う。釜山に上陸して、一路朝鮮半島をつきつて満州にはいるコースであった。

小熊団長は幹部研修所から一足先きに出発。その旅程はメモにこう記されている。

三月二十七日、友部発午前六・五三、上野着同九・二三、東京発同一〇・三〇、

同二十八日、下関着午前六・五〇、発同一〇・一五、釜山着午後六・〇〇、発同六・五〇、

同二十九日、新京（現長春）着午後一〇・一六、ここで四月七日まで関係公署との連絡交渉をつづける。入植地の確認、入植地仮住居や建設用材の準備、満人大工、苦力の確保状況の確認、食糧関係の手配、開拓資金の借り入れ問題等が急を要する問題であった。

四月八日、ハルビン着、拓士会館宿泊。

同九日、第一次先遣隊到着。

ようやく団員と合流できたが新京同様、連絡交渉に忙しい。

同十一日、ハルビン発、トラックにて強行軍、通河泊り。

満州で「トラックにて強行軍」といったら想像にあまりがある。水がくれば川となり、乾けば道となるといったような河原を走り、道があるかと思えばいつの間にか道の区画もない石ころ原っぱを、粉のような黄土をまきあげ、人間を荷物のようにゆすりあげてやみくもに走る。ハルビンから通河まで二百キロ。ここは柏崎村を管轄区域とする通河県公署の所在地で、いよいよ目的地近し。

十三日まで滞りして各署訪問、満拓支社と詳細の打ち合わせをすすめる。

そのころ、柏崎では第二次先遣隊の準備がすすんでいた。新聞の記事によると、

四月十一日、第二次先遣隊二十余名選考。

同十七日、本日より第二次団員は古志郡栖吉村農民道場で二十二日間の訓練を受ける。

五月十五日、第二次団員二十余名、家族十五名、柏崎神社に祈願して出発。隣組からの野菜や花の種子が荷物のなかにはいっていた。

第一次先遣隊はいよいよ入植地に向う。

四月十四日、未明四時起床、満拓支社を出発。トラックにて目的地に向う。小古洞に十時頃着。タアチア一台を伴い、山に登る。

上村氏案内、浅間にて一泊、空屋なり。

四月といっても満州はまだ冬。気温は低い。雪が降る。ギユウギユウづめのトラックで、通河から清河鎮を経て小古洞まで七十キロ、悪路の六時間はさすがにこたえる。

ここまでは松花江（スンガリ川）に沿って北上してきた。大興安嶺に発した松花江は満州を横断して北満と南満を画しているが、ハルビンから北東に流れること五百八十キロ、ソ満国境をなすアムール川にそそぐ。柏崎村は、この沿岸からはなれて北方二十四キロに位置する未開地。交通運輸の唯一の動脈をこの松花江にたよらなければならぬ。この一事だけでも、柏崎村団員の前途に横たわる苦難のみちは推して知るべきものがある。

ハルビンから通河まで二百キロ、通河から清河鎮まで六十キロ、ここに柏崎村の出張所ともいべき弁事所をおいた。本部員が駐在して連絡のかなめとなり、物資の検収にあたる。出張時の宿泊所ともなる。何しろ村から小古洞をまわって、ここは埠頭へでけると三十四キロ、一日かかるところである。船便は一日二本。ハルビンまでは川をさかのぼるから三十六時間かかる。下流の佳木斯（チャムス）までは百三十キロ、下るに十三時間だが上りは二十三時間

を要する。およそ三十キロ下流の対岸にイラン飛行場（ハルピンまで空路二百五十キロ）があるが、舟運下りは六時間、上り十七時間という。これで柏崎村とつながりを持つ各地との関係図ができてきあがる。

通河県には長野県の農民開拓団がたくさんはいつていた。小古洞も、その蓼科開拓団だった。ここから動脈路線はなれて奥地へ進もうというのだ。「山に登る」とメモされたのは台地上の起伏をふみ越えねばならなかったからだ。ヒョウロウは更に、そのさきにある。「義勇軍ならまだしも、転業サンに開拓は無理なところだ」小古洞の開拓団が心配のあまり、そう声をかけてくれる。しかし、進まなければならぬ。

一泊した浅間は小古洞から十五キロ、道路わきの小高いところで蓼科開拓団の区域。かつてその一部落が置かれたあとで空屋はその名残りを語るもの。途中左側にながめてきた山地に、同じく長野開拓団の大古洞がある。後に柏崎団員は、ここに通ずる新道路をきりひらいて、清河鎮まで六キロを短縮した近道にした。近道といっても二十八キロの起伏を縫う徒歩道路であった。

翌日、浅間を出発。日満両国旗を先頭に、荷馬車をはさんで二列の隊員は雪をふんで長い道を歩く。はるかに広く白一色の高原に通り過ぎたあとの道が長く続く。わだちが雪でぬかるんだ黒土にめりこむ。後に柏崎からの勤奉隊員がはじめ「すばらしいワ」と嘆賞の声をあげ、やがて肩にめりこむリュックをせりあげ「まだですか。まだ」と、あまりにも遠い道のりにアゴをだしたというのはこのあたりだろうか。

六キロの前方にびようぶのように山々がづらなる。ひとときわ高いのがヒョウロウ、高さは米山よりすこし低く、八石より高いと見る。あの稜線が蓼科開拓団と柏崎村との境界だと知らされる。目ざす新しい土は雪におおわれた山なみの彼方にある。満州といえば赤い夕日の沈む、こうばく果てしない平原と思いきんだけで、三級へき地に

もまさる山林地帯とあってはいちまつ不安も湧く。しかし、進まなければならぬ。そして一步を踏み入れた時、思い思いのおもいをこめて、しばらくは無言で立ちつくす。

団長はメモにこう書きとめている。

四月十五日、記念すべき入植日。隊員一同、小屋の前に整列して朝札を行なう。

寒気はげし、馬車を中心に進む。途中、小古洞の警備員にあう。

次第に展げゆく第二の郷土、一木一草にもなつかしさが湧く。足の痛みも忘れて進む。景色次第に良く、さながら内地と異ならず。正に赤倉地方の感あり。水田広く理想境なり。

警備員を交代して直ちに宿舎の準備にかかる。昨日来の上村警長訓話をする。

かくして夜、不寝番をたてて、嚴重なる警戒のもとに入植地第一夜にはいる。

点呼無事。感慨無量なり。

しばらくの間、仮の住居は満拓が設営してくれたものや、小古洞が伐採の拠点としていた時の小屋やクリーの小屋で間に合わせる。

柏崎村の地域を概観しておこう。

大興安嶺と小興安嶺が人という字のようになって、ミノボシをかぶせたように満州大陸をすっぽりと包んでいる。

柏崎村は、この小興安嶺の南端台地が流れてたぐさんの沢を作っているが、その一つの沢で、曲り部分の太い「く」の字の形をしている。沢といっても東西十五キロ、南北十三・八キロで、旧柏崎と団子山、悪田の線までを含めたものの六倍にあたる。

山林地帯が五六・二%、放牧採草地一六・五%湿地一・四%水田二・四%、畑二三・四%という土地利用の計画図になる。水田二・四%といっても幅六〇〇メートル、長さ五四〇〇メートルにおよぶ。千町歩用地と称されたゆえである。後に長野側から浅間地区までをゆずってもらったから、南北十八キロとなり、総面積百十三平方キロ、畑は二九・九%で三十四平方キロとなった。北緯四十六度、樺太の南端にひつてきし、大陸気候区のまったただなかで管農活動を起す日がきた。

長途の旅の疲れなどとはいつておれない。新しい環境にからだを慣らしてなどと呑気なことは許されない。起居するところなく、食糧もない。眼前にひろがる土地は開墾し、たがやかさねば生産する土地にならない。生産するまでの間を無収入でいるわけにはいかない。準備運動なしに、韋太天走りに走らねばならない。息切れてはならないのだ。広大な新しい土地に立った感激を氣力に転じて、電灯のない、ラジオもない毎日を、いつはてるともない重労働に明け暮れることになった。

十六日、五時半起床、朝礼の後、三十分軍事訓練をやることとせり。作業割を定める。

清水大工係外一名を残して全部山へたきぎ取りにゆく。一晚に使用する量も多ければなり。

煙草、軍手の配給をなす。

たくさん入りこんできた満人工を相手ではことが通じないが、清水団員が本職の本領を示す。与口団員は釘と食料を入手するために、浅間部落まで九キロの道を連絡に走る。移住民が新天地を作るに似て、何もかも基本設営から取りかからねばならない。全員建築作業に取り組みたいところだが、まず、たきぎの確保が急務だった。この北滿にはまだ春がきていなかった。北滿の生活で、たきぎの占めるウェートを団員は知るのだが、その資源を豊富に持つ

ことの有利さを認識することになる。

十七日、朝七時、警備に桑原、綱島を伴い山へゆく。

第三部落の予定地より山へ登り、その景色の益々優秀なるには驚くばかり、第四部落予定地のすばらしさ、広さといいい、肥土といい、景色といい申し分なし。一同躍り上る。

ゆくゆく撮影をしつつ、土産に鴨をさげて帰る。全く理想境なり。

小林、中村とともに上山、一同喜ぶ。樋口は小古洞にて休養させるとのこと、気がかりなことなり。

小林団員は団長会議に代理出席のため、中村樋口両団員は途中、病気休養のために一行からおくれていたもの。第三部落予定地は本部落から西方三キロの台地上に設定したもの。しかし、これは実現にいたらなかった。第四部落予定地は本部の北二キロの山麓地点であって、ここはやがて神明部落となって、柏崎村唯一の水田耕作集落となる。

本部落の建設に全力を傾けながら、一方では実地踏査をくり返して集落計画をたてていく。本部はヒョウロウ山を背にして、前面に高原性の畑地のひろがる台地上である。ここに個人家屋、共同宿舎、倉庫、共同炊事場等幾棟も建てねばならない。急調子の斧のひびきが連日こだまする。その上、治安がまったく維持されているという状態ではなかった。疲れきったからだで、警備にも気を配らねばならない。「隊員諸君の懸命の努力には、涙のじむ思いがある」と団長はメモに記している。ゲートルを三カ月もとらなかつた人もあるという。奥さんの心づくしの丹前を百日にやっとなつたという方もある。

野菜不足のなかで、はげましいあい、いたわりあつての建設行だった。自分たちの村の景観をしみじみとながめるの

も一服休みのひとときだけだ。山々にぐるりと囲まれたなかを、屈曲の多い小古洞川が縦貫する。光る流れをはさんで幅千五百メートル長さ八千メートルの土地が耕地となる目を待っている。北の山かけには、更に倍近い耕地が眠っている。雄心はるかに目をこらしては再び作業にとりかかる。

十八日には団長自ら食糧調達、資金借り入れ等で山をおりる。清河鎮まで二十八キロを歩く。途中、近道を作るために山を越えて大古洞に出る。卵六コを手にすることができたが、これは小古洞で休んでいる樋口団員にとどける手配をする。通河まで六十キロを歩いたり、馬車にのったりで二日めとなる。

二十日、道路問題で県公署に交渉。

二十二日、満拓と相談、馬十頭ないし十五頭の購入依頼。風邪か高熱で苦しみながらの交渉。

二十五日、満拓で種子および馬の購入、道路修理について。副隊長にも要望。

二十七日、馬鈴薯一万二千斤を舟に積む、船上寒し。裏面工作の要を知る。

二十八日、新聞、鋸購入。米馬車六台分、モミ三十三台分を舟に積みこむ。

満拓よりの借入れ八百円。

二十九日、巻口団員、荷物と共に清河鎮へ。小林団員は馬の購入に、

三十日、県公署より借入金三千百円、夕方乗船、佳木斯に向う。

五月一日、夕方七時頃佳木斯につく。

ここでは満拓需品部、開拓課、金融部との交渉、測量班派遣の要請、電話架設の要望等でかけまわる。イランを経由して帰村したのが五月十一日。この一カ月近い活動中、しばしば風邪、高熱、腹痛で苦しまれることが記録に見える。

しかし、休養をとるひまはなかった。

毎日十四、五里を歩きまわって測量、検見をし、道路発見に努力、水の取口工事、材木のきりだしと活動をつづけ新水田に始めて水をかけたのが五月二十一日。このころ本部部落も仮本部としてできあがった。苦難の一カ月。オンドルの白煙がユラユラと草の屋根をはう時、団員の感懐ひとしおのものがあつた。

やがて第二次先遣隊が到着し、六月には柏崎を八日に出発した本隊がはいってくる。新聞は本隊八名と報じたが、十二名と記憶していられる方もある。柏崎村の団旗は本隊がかかげてきた。晴れの入植式は本隊を迎えて挙行され、決意をあらたにするのであつた。

●十七年十二月現在

団員六〇名、同妻四四名、子ども五六名、その他家族二二名 計一八三名。

(子どもの内訳、十一才以上一七名、三才以上三三名、二才以下六名)

十八年二月現在

団員六八名、同妻五一一名、子ども六三名、その他家族二五名、計二〇七名。

(子どもの内訳、十一才以上一七名、三才以上三八名、二才以下八名)

十二月現在の項で、備考に次の記入がある。

幹部三名、学校教師二名、団員父一三人。母五人。

●十八年作付計画

種別	作付面積	ヘクタール当種子量
米	一〇ヘクタール	一〇〇キロ(種) 三三〇円
大麦	一ヘクタール	一〇〇キロ(種) 三五円
小麦	一ヘクタール	一〇〇キロ(種) 四〇円
燕麦	一二ヘクタール	七〇キロ(種) 一八五円
粟	二ヘクタール	二〇キロ(種) 一〇円
大豆	一六ヘクタール	七五キロ(種) 三〇〇円
包米	一八ヘクタール	四〇キロ(種) 一五九円
馬鈴薯	一〇ヘクタール	一二〇〇キロ(種) 四八〇〇円
小豆	二ヘクタール	七〇キロ(種) 四二円
飼料作物	四ヘクタール	(種) 二八〇円
蔬菜	三ヘクタール	(種) 一〇〇〇円
種子代合計		七二〇一円

●十七年開田
 開田、トラクターにて七〇ヘクタール
 畜力にて 二ヘクタール
 四五ヘクタール

十八年計画

開田 一〇〇ヘクタール
 経費予算額 二一〇〇〇円
 開田 トラクターにて六〇ヘクタール
 経費予算額 七二〇〇〇円
 畜力にて 八〇ヘクタール

●十八年加工場機器計画

種類	数量	予算額
精米機	一	一五〇〇円
粃摺機	一	七〇〇円
製粉機	一	八〇〇円
精麦機	一	七〇〇円
久保田七馬力	一	二〇〇〇円
小釜その他	二	三二四〇円
クボ田三五	一	六〇〇円
右代燃機	二	二〇〇〇円

しょう油圧搾機	一	二〇〇円
小麦粉碎機	一	二〇〇円
味噌漉機	一	一九五円
大桶三石用	一〇	一〇〇〇円
大釜	一	二三〇円
獣医機具	一	四五〇円
合計	一四五二五円	

●十八年農機具計画（各戸施設）

種類	保有数	増設数	金額
新墾プラオ	二	五	四五〇円
再墾プラオ	八	二〇	一五〇〇円
水田プラオ		五	三五五円
方型ハロウ		二〇	一一四〇円
馬鍬		五	一〇〇円
播種機		五	二六〇円
水田点播機	五	一〇	四〇〇円

カルチペター	一〇	一〇	七五〇円
同高畦用		二	一五〇円
同三畦用		二	三〇〇円
人力脱穀機	二	四〇	二〇〇〇円
唐箕	三	二〇	
大車	三	二〇	五四〇〇円
馬具	三	二〇	一五二〇円
農耕馬具	六	六〇	三九〇〇円
製縄機		一〇	七五〇円
わら切機		一〇	六〇〇円
製叭機		二	一五〇円
押切機	五	三〇	二四〇円
合計		二〇五六五円	

●家畜は初年度の十七年に次のように入れることができた。

満州馬一六、朝鮮牛九、山羊四、豚九、蜜蜂二。

十八年度家畜増計画

種別	数量	予算額
朝鮮牛	四〇	一五二〇〇円
山羊	二〇	一六〇〇円
綿羊	二〇	一四〇〇円
豚	一五	一二〇〇円
鶏	一六〇	六四〇円
蜜蜂	五	四〇〇円
兎	五五	四四〇円
合計		二〇八八〇円

この飼料として燕麥一〇〇〇キロ、飼料作物二一九〇〇キロは自給できるが、当初段階ではなお、燕麥二五〇〇〇キロ、豆板一六〇〇キロ、飼料作物一〇九五キロ、食塩二一九キロ、合計六七八六円を購入しなければならなかった。

開拓当初では十分な収益は望めない。極度に生活費をきりつめざるを得ない。しかも果敢に村の建設に取り組む。柏崎村の苦悩はこの資金繰りにもあった。

小熊団長のメモ日誌は第一年度の六月十日で終わっている。ノートに残された余白の部分には、開拓の日々に繰りひろげられた柏崎村の息つく間もない建設の営みが、無言の詩としてひめられているのではなからうか。

第一年度の十七年は三部落構成、共同管理方式で村作りの基礎をかため二年目の十八年から部落をふやして五部落

にし、団員二人組共同による組経営にはいつていく。満拓からも一年次に二十一万七千円、二年目は二十九万一千十六円の融資を受けることもできた。

女子部隊が朝食準備をしている時に、食前作業できょうの開墾予定地の灌木刈りをする。丈なすほどに生い茂っている。深い朝もやの流れるなかで割木作りもする。共同炊事で合理化をはかる。共同作業所で、種いもの揀別もすれば、農耕作業も共同でやる。倉庫から浴場まで共同管理、おやつの大マントウも炊事当番が作る。

家屋の建築作業もある。用材は山からきりだして自給できる。土をこね、枯草を切りきざんでまぶしてこねたトリス(土れんが)を積み、ヤンツオ(野草)をびっしりとしぱりつけて土をぬりこめると壁になる。土の家だ。屋根もヤンソウをたっぷりとふく。母村からの勤労奉仕隊をまじえて野菜貯蔵庫を作ったりする。幅十五尺、長さ二十五尺の穴を深さ十三尺に掘りさげて、その上に土の建物をたてる。

五部落配置にすすむと更に建築をいそがねばならない。十八年三月十八日に契約した建築計画は次のようになっている。

校長住宅	一棟	二八〇〇円
れんが地下一尺地上一メートル、天井板張、横デーシャン		
幹部宿舎	二棟	一七〇〇円
横デーシャン、うち一棟は共国宿舎火災による代償、教員住宅		
浴場	三棟	一一〇〇円
井戸	七本	二四五〇円

各井戸とも深さ十五メートル	
生徒寄宿舎	一棟 四〇〇〇円
診療所	一棟 三七〇〇円
れんが地下地上各一メートル、天井板張	
学校	一棟 二六五〇〇円
小古洞二号型、総れんが建、屋根瓦、地下れんが一、五メートル、天井板張の上土上げの事、横デーシャン、窓	
二重戸内側障子戸	
個人家屋	三〇棟 四二〇〇〇円
一間オンドル、一間板張、半ペーチカ付、天井板張	
大倉庫	二棟 三八〇〇円
小倉庫	三棟 三〇〇〇円
精穀場	一棟 二二〇〇円
建坪七〇平方メートル横デーシャン	
合計	九三三五〇円

右ノ建物ハスペテ八月三十一日迄ニ仕上ゲ完了団ヘ引渡シノコト。但シ学校ハ十月三十一日迄ニ完了引渡スベキコト、となつてゐる。

部落の配置は次のようになった。

本部部落から北へ二キロの地点に神明部落を設けたことは前に触れた。柏崎村ただ一つの水田耕作部落である。神明から更に北へ四、五キロに部落予定地を設定し、他の部落の数倍に及ぶ耕地開墾の期待をかけられるところだったが遂に実現しなかつた。本部から南南東三キロに八坂部落。ここは入植当時、長野側との境界であつたヒョウロウ山系の稜線上になる。他の部落より高いところにあつて、山の上に十数戸の家が整然と立ちならぶ。

後に長野側からゆずり受けて、八坂の南南東四キロに鏡部落、それより南二キロに岬部落ができた。ここは長野當時、浅間と呼んでいたところで柏崎村の入口ということになる。もともと、この部落は希望者があつたので試験的に設けたもの。飲料水は川の水にたよらねばならず、鏡部落寄りの水田は朝鮮人に小作させたという。やがて召集を受けるものがでて家族だけになつたので、この部落は引きはらつた。神明をのぞいて他の部落はすべて畑専門、炭焼きをやつたところもある。

郷土ゆかりの部落名を心のきづなとして村づくりにはげんだが、日常はランプ生活の不自由さに耐えぬかねばならなかつた。この油も二人家族で一カ月三合をきまりとする。物資は貴重品にぞくする。赤ちゃんにミルクなく、米をすりつぶした汁に砂糖をまぜて与える。収穫までには間があるのに、たくわえはとぼしくなつていく。心細い。山林伐採事業にきていた工藤組につかつてもらつて運搬労務に従事して手間賃かせぎもする。そして十里や十五里の徒歩連絡は普通のことになつてゐた。

そろばんで鍛えた腕に鍬を持ちかえ、各自の生活をかけて、新しい土を自分たちのものにする遅しい建設であつた。こうなればもう理屈ではない。体臭のようにまでなつた烈々たる、しかも静かなる斗魂は外部の想像を許さぬものであつた。だから、ときに理にのみ走る外来者によつて不協和音を発することがあつたとしても、是非ないことだ

った。

団員に過労の日が続いたように、団長も過労であった。再々の会議、講習、渉外でハルビン、通河までの遠いみちを重いリュックで道ばたの川水をすくっては往復する。ハルビンから、飛行機でイランまで帰り、「航空病だろうかぐあいが悪い」と清河鎮弁事所で三日間、中村団員の看病を受けて山に向う。岬で中村団員に交代して本間団員が本部まで送る。その翌日（十八年七月十六日）団長逝去の悲報に全員呆然となる。時に四十五才。

「ツオウノ」馬を走らせて見渡す限りの大豆畑をかけ抜ける。開拓団の集落配置は本部区を中心にして放射線状におく衛星型を基本としたが、柏崎村はその地形上、直列方式、十数キロの一直線上に集落を形成した。ために連絡方法には苦心のあるところだったが、時には区域内の巡検をかねて馬をとばす。ツオウ（走れ）の声が周辺はるかな山麓に余韻を伝えて丘陵をかけたのぼり、かけくだる。ヒョウロウを背にして、ツツジのムツツリ咲きこぼれる丘に三メートルの一本の墓標がくつきりとたっている。（柏崎の小熊家に病氣、危篤死去、葬儀の四本の電報がほとんど同時にはいったあの時、団長は阿部農事指導員に抱かれて無言の帰還。更に団員の要望にこたえて分骨を長女豊子さんが持ち、阿部指導員案内、二代団長前田義三郎氏とともに大陸にむかったのが七月三十一日。再び柏崎村で永眠することになった。）七月になればオトギリソウのふっくらとした黄色が輝き、八月にはハギが一面に咲きみだれる。（前田団長はその年の九月帰柏。三代団長は保健指導員の佐々木桐樹医師。佐々木団長出張中は坂爪団員が団長代理入植当時から副団長格だった小林広吉氏は熱愛していた柏崎村から通河県開拓連合会の主事となって活動していた）

「ユエイノ（左へ）」ヤンツオ（野草）を積んだ車を満州馬がひいて帰ってきたのだろう。のどかな風情である。

満州馬は二頭か三頭で馬車をひかせる。時には豆が打ちや製粉作業に使うこともある。一袋六十キロの大豆を三十袋積んで、満人のジャングイ（親方）と六頭だての馬車で運ぶ。路面から荷の高さは二間にもなろう。これを狼にとびこえられてキモをつぶしたこともある。この時から護身用に煙草をはなさなかったという。煙草の赤い火に安全をたくしたものであろう。

軍馬の払い下げを受けたのは二十頭。満拓から借用しているトラクターが開墾したあとと馬耕となる。プラオをひかせて土を起し、ハロウで土をくだけ、整地していく。うねたて、種まき、ひとつねの長さ百メートルをこえそうな畑を馬を使つての農耕である。キャベツ、ゴボウ畑は壯観であった。古い昔の遊牧の民が足を入れたところであろうか、食器のかけらがでてきたり、既耕地の跡らしいと思われるところもあったという。最初に開田した三百反の水田は反収六俵の成績。無肥料に近く、技術は内地の二分の一のにと驚かれる。美田作りの意欲が盛りあがる。ミツバチの養蜂も温順で強く、十里以内はとびまわってかせぐというイタリアン種をいれる。奇妙に家庭和合のところほど養蜂成績があがったという。一斗かんに千二百円で売れたそうだが自家用にして健康確保の資にする。

校長に浜野与三右衛門氏を迎えて学校を開校したのも早かった。三名の子どもを中心に早朝の開校式。朝日を受けて影が長く尾をひく。参列の全員は作業姿。式後はそのまま一日の作業にとりかかるのであろう。校名は柏崎在満国民学校。十九年五月、ここに教員がなくて困っていると聞いて、その時柏崎臨時教員養成所を卒業したばかりの小竹ミツさんが決意、着任された時は浜野校長は他へ転じて中山政志氏が校長であった。低学年七人、高学年六人。今当時の子どもたちにとって懐かしい思い出は先生といっしょにながめたヒョウロウの山の姿、冬から夏へ一足とびに、かわる時に一面に咲きだすスズラン、あやめ、タンポポ、桜草、名も知れぬ草花が咲きみだれるなかをともころげま

わったことではないだろうか。

小川ではドジョウをどきっと一すくいでき、小古洞川では釣りも楽しめる。竿は木の枝でも、四、五寸程度のものなら一時間で四、五十匹はらくですという話。姫鱒の大きいものを釣り上げる時もある。二メートルくらいの子を釣った時はたいへんだった。きょうは越の誉でダンスパーティーだと帰途についたら、カタネテいた竹がライの重みでボキリと折れたという。驚いたのは大熊にあった時のこと。足跡三十七センチ、牛から推定すると八十貫はあるというもの。二十名ばかりで鮭をとりいつての帰り、灌排水幹線水路のふちにのんびりしているのを見つけた。小さいものでも、その毛皮は一枚二千円で売れる。一年分の給料に相当する。これはデカイから……と胸算用。用心しながら近づくと、山のオヤジはヒョイと水路をとびこえた。三メートルの幅のある水路をだ。それと追ったがシツチボウズ(湿地の自然草)の上を十三秒位の早さでオラより早い。とうとう二千円逃がしてしまった。そういう話もある。山野を走りまわるノロ(満州の鹿)を仕止めて、晩の鍋料理に話はずんだりする。しかし、こうしたことはまれで、動物などはかまっていられないというのが本音であったようだ。

湿地帯も広く、スズランが一面に咲き、ウグイスがうるさい程になく。柏崎溪谷としゃれみる。二メートルにもおよぶヨモギの原をかきわけて丘に立てば、沃野がねむったままにひろがっている。

樹林には白樺、ブナが多く、きり倒してはいかだに組み、トラクターで引きだして運搬すれば、あとにせんと馬車道ができる。柏崎村二百戸計画の夢がかかっている大樹林であった。

一瞬にしてくずれ去る日がくるとは想像もされないことだった。

二十年八月、悲惨な運命が待ち構えていようとは。この時、本部区十五戸八十名、神明区十一戸五十一名、鏡区十

一戸四十五名、八坂区六戸三十名、合計四十三戸二百六名の構成であった。主人応召のため家族帰国というような例もあったので、構成数は減少していた。

第三期 新柏崎の建設へ

生還の記

昭和二十年八月十五日。戦争は終わった。だが、この時から、生と死の凄惨な対決にせまられた郷土人の集団があった。正確にいえば、八月九日、ソ連軍侵入によって始まった受難であり、老幼婦女子もようしやなくその渦にまきこんでいった。北滿に置き去りにされた開拓団柏崎村の人々をおそった、泥沼の四百日がそれである。

角田房子氏が、長野開拓団受難の記録を綴ってばんこくの涙を注いだ「墓標なき八万の死者」（番町書房）によって、そして、第九次農民開拓団（三島、蒲原）が一切の保護を失って、血と泥と雨の中の逃避行を続け、虐殺、暴行の地獄を彷徨し、飢餓と悪疫にさいなまれた「二竜山報告書」（当時二竜山国民学校長、前荒浜中学校校長深田信四郎氏手記）によって、更に涙なしには読みえない柏崎資料を加えて、柏崎村開拓団の「ただ、生への執着のほか何物もない」悲惨な生還の記録を互に銘記する義務がある。

八月九日、「ソ連が攻めこんできたッ」のニュースは寝耳に水の驚きだった。既に、伝え聞く南方の戦況は不利で、柏崎村からも度々の応召で働き手を三十名近くも送りだしていた時だから、不安の念にかられる。緊張した空気が

が流れる。しかし、誰の胸にも、日ごろ「無敵」と聞かされている関東軍の名が、護符のように抱かれていた。それを頼みの綱として燕麦の青刈りや馬鈴薯の早掘りをつづけ、家畜の手入もいつものようにはげむのだった。

実は、関東軍が西部国境線に配置した部隊を統括する第二方面軍司令部を、十八年十月、濠北方面に転用してから在満兵力は次第に太平洋方面に抽出されていって、戦力は二分の一以下に低下していたことや、二十年五月、ドイツ壊滅後、ソ連軍の東方移動が急に活発となった六月四日、日ソ開戦の場合、全満の四分の三を放棄して、新京（長春）を頂点に朝鮮国境を底辺とする三角地帯を確保して持久戦に持ちこむ、という最終作戦が命令されていたことなどは知るよしもなかった。

このことが、土に対する愛着とともに、開拓団の逃げおくれの原因ともなり、悲劇の要因ともなった。全満二十七万人の開拓民は、ほとんどすべてがこの放棄圏内にあった。当時の在満邦人約五十五万に対して十四%でしかないが敗戦による邦人の死亡は全満で十七万六千人、うち、その半数に近い八万人が開拓民である。凄惨さ、胸の痛む思いがする。

八月十日、朝、「柏崎村開拓団員にして在郷軍人に籍のあるものは全部、本日中の船にて牡丹江に集合すべし」せきたてるような清河鎮警察の警備電話が、受話器を持つ本都区中村団員の耳をうつ。根こそぎ動員である。直ちに鏡部落を集合地として、連絡員が各部落にとぶ。十時過ぎ、各自小銃、実弾百発を身につけて清河鎮に強行軍。夜乗船翌日佳木斯（チャムス）着。ところが牡丹江に向うどころではない。自主破壊がはじまっており、駅は。避難民で溢れ、列車のあてはつかず、街は混乱。止むなく佳木斯八五三部隊に入る。佳木斯近郊の開拓団に疎開命令がでたのは十一日。この時既に南東百六十キロ附近を、三日間の泥沼をはいずりまわるような逃避行を続けている千名の開拓集

団があった。隊は空腹と疲労で寸断され、二十人、三十人のかたまりは誰かれの区別なく、水にひたしたボロ切れのようになり、青酸加里の薬包が肌につけられていた。この日の土匪、炭鉱夫の襲撃による自決者六十人、そのあとのソ連戦車の攻撃による自決者百六十八人と記録されている。

佳木斯、通河に直接の脅威を与えたソ連軍の進路は、佳木斯の北百二十キロのアムール河屈曲部から侵入、小興安嶺をふみこえてくるものと、佳木斯の北東百九十キロの松花江とアムール河の合流点から越境、松花江に沿って進撃してきたものが佳木斯で合流、松花江沿いにハルピンを指向するものであった。だから十二、三日ころからは松花江に沿ってソ連航空機が姿を見せ、人が動き、船ありと見れば機銃掃射と爆撃をようしゃなく浴びせて飛び去った。柏崎村はこのコースのなかにあった。

根こそぎ動員で十二名を送りだした柏崎村は、団長代理もなくなった。残る二十才以上の男子は十一名。郷里から教学奉仕隊として来村していた前川貞之助氏を団長として、この危急を切り抜けなければならぬ。この時の柏崎村民の数は五十才以上男二、女五、女子の五は六十一才から七十才の人たちである。十六才から四十九才までが男十二女五十六、このほか女二名が佳木斯へいっているのだが連絡のとりようがない。十三才から十五才まで男三、女七、六才から十二才まで男十五、女二十一、五才以下男二十二、女二十三で計男五十四、女百十二、このほか伐採人夫として在村していた工藤組の人が男二、女七、合計百七十五名であった。勤労奉仕隊として来村していて、生死をともにすることにいった中通地区の女子青年七名も含まれている。

清河鎮の開拓弁事所（小古洞、大古洞の開拓団と柏崎村とで共同で設けたもの）に本団から一家族派遣してあるのだが、これとの連絡すらうまくいかなかった。まじまじしていると船を動かさなくなる。清家鎮にあった日系は、

城内に警察、國際運輸、開拓弁事所關係四、五世帯、城外に營林署關係四世帯。國際運輸の力で特別船をチャーターしてハルピンへ脱出することになったが、本団に連絡するまがない。もう船の望みはない。本団は、まだ気がつかない。暗雲が重くたちこめる。

この数年間、力の限りを尽くしてひらいた田畑を、むざむざ捨てざるのはしのびない。今はソ連軍が攻めこんできたばかりで、勢いは強いらしいが、間もなく関東軍が国境の向うへ追いつ返し返してくれる。ここしばらく危険な状態をしのげば、また農耕を続けることができるのだから。ただ、ここは国境に近く、松花江はソ連の侵入目標だろうから、しばらくハルピンに待避して時を待てばよい。

そんな気持ちか誰の胸の中にもある。生活の土台を一挙につきくずし、生命までを危険にさらされる明日が待ち構えているという事態の急変を、実感として捉えることはできなかった。無理からぬことである。

さらばヒョウロウよ、又くるまでは、そんな気持ちでなかったろうか。秋に向うからとて、着替え用の衣類が主要な荷物、それに当座をしのぐ食糧を用意、それぞれソリに積みこんで家畜にひかせる。辛苦の結果わがものとなった田畑にうしろ髪を引かれる思いで、百七十五名、一団となって柏崎村を出発した。前川先生の決意は別のものであったろうか。現在残っている「ヒョウロウ柏崎団員名簿」は、表紙に「前川貞之助所持」とあり、青カーボンで復写されたものである。戸主および妻については、本籍とそれぞれの実家が連絡指定場所として記入されている。出発にさきだって副本を作られ、所持者をきめ、記録を書きこんでいく。一部でも郷里に記録を伝えようという配慮ではなかったろうか。赤鉛筆で八月十六日から書きこみがあるところを見ると、出発は十五日以前と思われる。

屈強な者には何でもない二十八キロだが、これを歩きとおすとなると、老人や幼児をかばっての強行軍は大変な苦痛をとまなう。ちやうど東頸松代から郡境の山を越えて石黒にで、高柳を縦走して大沢、山室、西の入を経て柏崎港にでてくるのにひびてきする。ようやく清河鎮にたどりつけば時既におそく、日系は一人もおらず、ハルピンへの船の希望はたちきられていることを知る。さりとて満人部落の清河鎮にとどまるわけにもいかない。まごまごしているところをよけて、追いつてられるような気持ちで、分散孤立するよりは柏崎の開拓団といっしょになろうと、重い足を引きずって引き返す。

大古洞では各部落を本部区に集結させて、学校をその宿舍とするための混雑をきわめていた。柏崎開拓団もその宿舍に仲間入りさせてもらって、ひとまず落着くことができたが、不安は時のきざみとともにふくれていく。名簿に「別行動。八月十六日出発す」と朱記されている家族がある。父は応召、母三十三才、娘四才の一家である。がまんならず、四才の娘の手をひいて活路を求めようとされたのであろう。どこを、どう歩かれたのか。この女の子の欄に「九月十八日午前九時、大古洞集団所にて病死」と記入されているところを見ると、結局、疲れはててまた戻ってこられたのであろう。土の誓いに結ばれあった同志なのに、こうした動きが生ずるといふのは、いかに動揺が深刻なものになったかを察することができよう。

終戦を知ったのは九月の声を聞いてから。北滿の秋は短い。シベリヤ級の冬が早くやってくる。遂に、この大古洞集団所で越冬せざるをえなくなった。

鉄道の便に恵まれず、陸の孤島のな点もあって、通河県内の開拓団は、大部分が逃げおかれて現地にとどまっていた。いきおい匪賊による被害が続出した。佐賀県開拓団の女子どもの一団も、匪賊に追われて大古洞に逃げこんできた。小古洞藜科開拓団は八月二十日から二十一日にかけて、ハルピンに避難しようと清河鎮埠頭にいったが、既に舟

運はソ連軍の管理下にあった。むなしく団にひき返した人々のうち、約三百人が前途を悲観して自決した。他の県にあった開拓団は、多くの犠牲者をだしながら、なお大都會を目指して避難行を続けていた。ほとんど全滅した開拓団は十におよび、一部落全滅、十人以上の集団犠牲者をだした開拓団を含めると、その数は百に達したという。暴徒、匪賊、満系反動警官のワナ、満軍反乱分子は鬼畜のように兇暴であった。

こうしたなかで、集結のためにカラツポにした大古洞の各部落は、現地民のためにあらされはしたが、集団所に暴徒の襲撃をみなかったことは幸いであった。

ソ連兵は始めからひんばんにやってきた。彼等は団員家族の不足勝ちな衣類を奪った。時計や万年筆をとりあげた。時計の見方も知らず、地図で東京を指さしてみせてもモスコイだと答える彼等なのに、どんよくに奪いとっていった。奪うものがなくなると、彼等の所業は戦争犯罪人のそれであった。女子はイガグリ頭になって身を守った。

食糧を持たない柏崎側に対して、大古洞側はあらされた部落から大豆、とうもろこし、米、野菜等をさがしてきて提供してくれた。刈り残した遠くの水田へでかけ、仮泊を続けて脱穀、精米をして食糧確保にとめる。そのため、秋になってやってきたソ連兵の被害は避けることができたという。家畜もつぎつぎとつぶした。煙があがると、それが目印になって襲撃を受けるのが普通になっていた時なのに、まきがなくなれば家までこわして暖をとることができた。

しかし、乳幼児は病気でたおれた。九月十名、十月十三名、十一月六名、十二月一名、二月一名、計三十一名。死亡する日が三日続いたこともあり、同じ日に三人埋葬することもあった。出産四だから、五才以下四十九名のうち六十三名の犠牲であった。他に六名病死。そして、集団所生活七カ月になろうとして米がたった。

ハルピンへ出なければ生還を期しがたい。しかし、ハルピンまで二百七十キロ、この情勢下で歩きとおせるだろうか。歩きださなければ死が近づくだけだ。歩くなら松花江の水がとけないうちに。二十一年三月十五日、三十七本の墓標に悲痛な祈りをそいで出発。

この時、老人や乳幼児を含む二、三の家族が一同と別れて、食糧を残してきたはずの柏崎村へ帰っていた。行程二百七十キロの困難さを思い、一同の足手まといになることを恐れたからである。いずれが生につながるのか、誰も約束することはできないが、土の誓いに結ばれ、七カ月の不安にたえてきた仲間から、ポロリと欠け落ちて山へ戻ろうとする悲壮さ。哀切な別れであった。後日、この人たちも山を下ってハルピンへの道をたどり、通河街でたおれた人もあり、通河に住みついた人もあり、子どもを満人に托してようやくハルピンの本隊に戻ることできた人もある。通河で死亡されたと伝えられた六十四才の老婆が、ハルピンにたどりつかれて一同を狂喜させるという一幕もあった。

本隊も歩き疲れた。ハルピンまでの道は遠く、靴ずれ、皮疹、足の浮腫、それに下痢患者が続出して、先頭と後尾との間はともするとぎれとぎれになり、道ばたにうずくまってはすがりつくように仲間のうしろ姿を追う。一日の行程は日ごとに短くなっていく。老幼をまじえて百三十余名、日まじに体力を消耗して足が重くなる。

通河では、のぞまれるままに三才の男の子を満人家族として残した人もある。別に三才の男の子が行方不明にもなった。さがし求める余裕はない。おそらく満人が育てたい一念からの出来事であろう。暗い行く手にくらべれば命がらえるしあわせかもしれない。「あなた方は悪くない。メイファーズ」と民宿させてくれた満人部落もある。満人農民は開拓農民にあたたかかった。そんな時ほど、野宿の夜々に肌をつきとおした寒さが、おそろしいほどに思いた

された。あすもまた、ここえそな野宿の夜をこらえなければならぬだろう。大地は凍っていても、かたまりあって夜明けを待った。

十九才の小竹ミツ先生や二十九才の診療所看護婦沢田アヨ子さんらが、いつも先頭にたって一同を力づけた。あったけの食糧をつめたリュックは、汚れきって肩にくいこむ。満靴は水をすって重くなり、夜はカチカチにたたくようになった。松花江の水の上も渡った。川幅四百メートル、トボトボした足どりはよけいにツルツルとすべる。栄養失調と、連日の過労と冷えこみから、隊列は伸びきって歩く力も尽きそうになる。とり残されてはと、恐怖が体内を駆けめぐってせきたてるが、腰から下は切りはなされたようにいうことをきかない。

こうした避難行を二竜山の深田氏の手記が語っている。二竜山開拓団は、北安から北五十キロ小興安嶺の山中にあった。(北安はハルピンの北三百三十キロの地点にあり、北方開拓の指導基地であった)黒河から侵入したソ連軍の機械化部隊が道をうずめて進んでくる。深田氏の開拓団はその正面にあった。山へ逃げこんで北安への脱出をはからねばならなかった。

灌木の林の中を一時間もさまよって着物をポロポロにし、一丈余りの草原の中をくぐって虻や蚊にせめられて顔中ふくれあがり、一足一足すいつけられるようなぬかるみを通りました。灌木の林、丈余の草原、ぬかるみの連続でした。

大湿地は一月余の大雨のために一大湖水と化しておりました。死に追われている私たちは危険なんか省みるゆとりもなく、一人二人続々と渡りはじめました。水は大人の乳房に達しておるので幼児は頭上にのっけ、学童は小わきにかかえて渡りました。よろめきながら、つまずきながら、足さぐりで、涙と汗と泥まみれの顔で、それでもなおほげ

ましあって渡りました。生きたいという一念で五百メートルの対岸につきました。

服はポロポロに破れ、泥水でかたまり、夏衣はからだを包む事ができなくなり、冬衣はすっかり重くなって、手足の自由がきかなくなったので棄ててしまいました。履物でさえじゃまになって棄ててしまいました。水のためふくれあがった子どもの足は破れて、赤い血がポトポトと岩角や木の根、草の葉を染めていきました。精も根も疲れ果てた子どもが「母ちゃん、いっしょに死のうて」といだし、母は幾度か懐中の毒薬に手をふれたのでした。

髪は乱れ、顔は泥のまま、ポロポロの布片をまきつけたこの一団。落ちくぼんだ目、血走った目、この行列は現世における地獄の姿でなくて何でしょう。ともすれば落伍していく人々に、前になり後になり、影の形のようについでくる男子の激励のことばに幽鬼のような行列が続きました。

かたつむりのように口をしめて、ふるえながら夜を明かしました。濡れたからだに夜の寒さはこたえるけれども、火をたく事さえできません。朝の三時ごろ、ねむれぬままに行動を起しました。こんななかでお産が三つありました。草むらの中で年よりの方がとりあげました。新生児は、むしり取られた片袖の泥でこわばったままに小さく包まれました。一時間もたたないうちにみんなと行動したのです。悲惨というにはあまりに無惨で、ただ、この恐しさから早く逃れたいという気持でいっばいだったのです。母も子も生の馬鈴薯をかじり、水たまりの泥水をすくってのみ、夢遊病者のように足の運動に身をまかせせる有様でした。

柏崎村開拓民は四月一日、ハルピンについた。飢餓と悪疫がそこに待っていた。

ハルピンでは、花園小学校が難民収容所になっていた。教室にムシロを敷いて、溢れるほどの日本人がうごめいていた。田畑を捨て、家、財産を失って、各地の団から命からがら逃れてきた人々である。誰もが疲れはて、痩せさら

ばえ、汚れきっていた。不潔なおいが、建物全体に満ちている。ようやくたどりついた柏崎開拓団員には、もう床板のある場所に割りこむ余地はなく、コンクリート床にムシロを敷いてすごさねばならなかった。

ハルピンに到着したが食糧がない。申しわけない配給だけでは露命をつなぐことができない。全員が栄養失調の度をまししながら、外働きのできる者は外にでて食いぶちかせぎをする。それでも団員に十分な食糧を持ち帰ることができない。口べらしのために住み込みで働けるところがあれば、無報酬の女中であってもとびつかねばならない。娘のとつぎ先の満人家庭に同居させてもらう六人家族もあった。しかし、団員一家のかばいあいを必死となって続けても極度の粗食が続ぎ、最低の生活にあえぎながら、抵抗力が日ましに衰えていくのを防ぐすべがなかった。

柏崎村開拓民の辛酸をなめた有様は、深田氏の手記が語るそれとかわりがない。

八月二十四日夕方から北安に抑留された団員の生活が始まりました。北安日本人会の斡旋で主食が配給されたが、その主食は海軍食器に約半分位のオカユでした。しかも朝夕の二食しか配給されません。發育盛りの子どもが泣いて飢を訴えても母親としてどうしてやることもできません。

抑留者の全部がそうならがまんもできませんが、地元の北安の人や黒河の人など、魚を買い、肉を料理し、ふんだんにマントウを買い、菓子、果物を買って豪華な生活をしているのを見ると、涙がひとりりで湧いてくるのです。同じ日本人で、同じ人間なのに、彼等は被服も食糧も金銭も十分です。わたしどもは死線をこえてたどりついた人間です。死と戦いながらきた人間です。そしてこんな差別があつていいのでしょうか。

野菜は全然配給がありませんでした。しかたなく北安黒河の人たちの台所のちり捨て場から大根の切れはし、黄味がかった菜っぱ、ねぎのうわ皮などをひろい集めて、これを塩といっしょに煮て、その汁をすすっておりました。こ

じぎにも劣るまねをして、人様の前に生き恥をさらすことを心の底で泣きながらも、生きるためにゴミすてばあさりをやらねばならなかった現状でした。

しかるに、これをみていた宿舎管理人は「日本人としての体面を保て。そうでなかったら主食の配給をとめるぞッ」とわたしたちを面ばいました。くやし涙、憤りの涙をじっと奥歯でかみしめてがまんしましたが、同胞と信頼している人に、こうはずかしめられては生きていく力を失った様にすら感じました。後に軍倉庫の大豆をもらうことができたので、それをかん詰めのあきかんでいって、ポツリポツリかじりながら、とにかく空腹をみたす事ができました。あの時の惨状苦衷を無視した暴言は、今でも生々しく思い出されて、無念の涙がひとりでに流れるのです。

こんなに疲れきったわたし共に、より大きい恐怖となったのがソ連兵のりよう辱行為でした。十二月ころは、ハルピン以北は中共地区となったようですが、この時は、昼といわず、夜といわず、私共の間をぬって歩くソ連兵の、あのイナゴのような目には寒気を感じるのでした。執念深い蛇にみこまれた蛙のあわれな姿、それがわたし共の姿でした。昼も夜も、戦々恐々として生きた気持ちがいなかったのです。女子はみんな髪を落して坊主になり、顔に鍋炭をぬりました。ソ連兵や不逞満人がくると、わざと子供を打ったり、つねたりして泣かせました。子供の泣き声親の叱る声、こうした騒然たる事が彼等のりよう辱から逃れる唯一つの方法でした。

北安二十日間で、南下のために屋根なし貨車にのせられました。日中は直射日光のために頭がガンガンして、日射病の患者がで、夜はさすような冷気で体がガクガクふるえ、凍死者ができました。駅毎のソ連兵と満人の暴行略奪は阻止する方法もなく、わずか三日の旅ではありましたが、心身ともにくたくたに疲れはててしまいました。

どうしても、子どもだけは生かさねばならぬ。

内地へ帰って、この惨状を話さぬうちは死んでも死にきれぬ。

という一すじの望みと憤りが、わたしたちを死の一步手前から救ってくれたのであります。

頭髮はぼうぼうとし、入浴したことの無い身体は垢だらけで臭気を発し、ほほ骨がとびだし、目は落ちくぼみ、その奥に飢と絶望に光る目玉をみては鬼気せまる感じを与えたでしょう。ポロクソのわたしどもをみて、長春の人たちは呆然として顔をそむけました。そして垢だらけの手に、白米の握飯を一つずつのせてくれました。ガキの様にむさぼり、胸の中で手をあわせて涙といっしょにのどへ通すのでした。

九月の末から、極度の疲労とコジキの集団生活のなかに悪性の麻疹がおそいかかり、野火のようにひろがりました。親がしてやれることは麻袋をしき、自分の上衣をかけ、自分の肌着をはいでさせてやることだけです。腰巻までおしめにしました。肌着一枚で夜はコモをかぶって寝ました。子どもたちはうなされながら次から次へとたおれ、死んだ子の着ていたものは、となりの病人の着物にし、おしめにしなければなりません。気が狂いそうな、うつろな生活となりました。

深田氏は、長春でのオンボロ生活のなかで新潟県人会を組織することに努力し、個人という小さい立場から、団体という大きな立場でものごとを処理する活動を盛りあげた。苦しみ抜いた体験が共感をよんだからである。

長春についたら農耕苦力(クリー)に雇われて、農家に住みこもう、こんなことをいい合ってきましたが、時期はずれとなって、わたしたちはたちまち失業状態におかれました。その日その日に長春市民や満人から申し込んでくる洗濯や掃除、薪割り、引越し手伝い、家屋修理の労力などに雇われて、一日二十円から三十円くらいの手間賃をもらったが、それも毎日あるわけではなく、一日五人か七人くらいのものでした。これでは二百名の生命はおろか、十人の

生命を支えるのもおぼつかない、心細いものでした。

寒い風の吹く大通りにたって菓子を売ったり、すし、天ぷら、こぶまき(団員手製)を売ったりしました。よく晴れた日は人通りもおおく、たいてい仕入れただけは売れましたが、曇った日、寒い日などはちっとも売れず、一軒一軒門口をたたいて買ってもらいました。これも始めのうちで、後にはコジキにでも対するような態度ででてこられ、ののしられました。日本人会からも押し売りのような行為はやめてくれと正式にいわれました。それでも豆腐、ソース、酒などを持って歩きましたが、仕入れ方法がまずかったので失敗してしまいました。

十一月の始め、安いもち米を大車に五台ほど手に入れました。無理算段、金を借りて買ったのです。もち屋を始めたところ好評で、おかげで団員一同が正月のもちをたべることができました。納豆作りもしましたがオンドルもなければコタツもないのですから、二回三回と失敗。打ち豆売りをしましたが、越後独特のもので用法がわからないのでしょうか売れません。工場や病院のゴミ箱のなかをかきまわして、ビンを拾い集めることもやりました。雪のちらつく十二月、ゴミ箱をほじくり返す、かじかんだノラ犬です。これは資本がからなくてよかったです。一日やると五円か六円にしかありません。

鉄道線路を歩いて石炭拾いをやりました。これは比較的よい収入になりました。だが、どうしてこれで生計がたちましよう。はじめ日収の五割は団に、五割は自分の小づかいにという様にきめておいたのですが、団に六割、個人四割に改めました。それで一日三十人の働き手が最高十五円(たいてい男子は十円~十五円、女子は八円~十円でした)とみて、団収入二百七十円となるわけです。ところが最低限度コウリヤン二百斤として五百円、その他塩、野菜油代として五百円、合計一日千円なければ全団員が食っていけません。しかも冬枯れのこととて男子の仕事がだん

だんなくなり、焦燥の念にかられました。このままでいけばどろぼうをするよりほかにみちがありません。

ソ連の使役が始まるころから熱病に倒れるものが現われ、十二月の声をきくと猛烈な勢いで伝染しはじめました。いまわしい発疹チブスです。六畳の部屋に十二人から十五人、四畳半に八人から十人という生活で、炭がないからいきおいお互の体温で温めなければ寒くてやりきれません。だから一室に一人発疹チブスがでれば、その部屋の人たちは発疹チブスを抱いてねているようなものです。伝染するのが当り前で、かからないのが不思議なくらいです。

針金のようなからだをボロで包んで、ぼうぼうたる髪やひげの間に目ばかりギョロリと光らせ、壁にすがり戸につかまり、杖にすがって歩いている様子は幽霊屋敷そのものです。熱にうなされ、うわごとをいう。わめく、あばれる泣きだす、笑う。すりきれてしんが見える量に麻袋をしいて、その上にかかるので、比較的軽症な人が鉢巻をしながら悲痛な顔で看病しています。この仲間もじき倒れるでしょう。南の窓下ではパンツ一枚、モンペ一枚になってシラミ退治をしています。シラミをとることだけが、わたしたちに与えられた防疫法だったのです。

便所に行こうと立ち上ったものの、入口で卒倒したまま死んだ人もあります。団員はつぎつぎと死んでいきましました。死がいを移動すると、その人形通りにシラミが群がっていました。その病人が、朝の二時から食事の用意にかかり、よるめく足で物を売りにでました。赤い充血した目で石炭ひろいにしました。

ハルビン生活の柏崎村団員も、これと全く変りのない悲惨な毎日だった。やせさらばえて、ボロきれのようになっていく。発疹チブスは指導者前川先生をも奪った(六月十九日)アンペラの上で次々と生命が消えた。四月六名、五月九名、六月二十二名、七月十四名、八月七名。いつまでも耳に残る号泣。涙も尽きてしまった。

ここの収容人員四千五百人のうち、八月十五日の帰国命令で出発できたのは千五百人だった。無惨というよりい

べきことばがない。一体火葬するに薪代千円では手がでない。トラックで川へ運んで水葬にしたという。帰国の時がきたのに、動けない重症が柏崎組にも四人あった。バケツを背にするもの、フライパンをおしりにぶらさげるもの、味噌のはいったカンカンを手にはさげるもの、美装したコジキ部隊が行く。四百日間の死との対決から、自ら生還の日をかちとった晴れ姿である。

現地残留四十一名、行方不明二名、病死百名、十月から十一月にかけて無事帰柏したもの二十七名。三十六名の応召者中戦死六名。新生柏崎の最初の記録は、生死の谷間に展開された哀愁かぎりないものであった。

新生期資料

平和が訪れた。だが、この平和は、戦争がなくなったというだけのもので、生活の平和はまだまだ先のことであった。郷土は、力尽きた国力を映して物資は極度に乏しく、血まなこで食糧を求めている頭上に、きびしい統制を物とせざる間相場が荒れ狂った。奇妙な舞踊熱が燃えあがり、いたる所でヤクザ物が上演され、夜を徹して拍手の中で行なわれた。どんなに奇妙なことが起るうと、どんなにだらしなないことだらけで目をそむけたくなるうと、それでも戦争の空しさよりもまじったと、ムナカタ氏がいうそういう夜明けだった。

二千八百名の市勢のエネルギーが戦病死し、その家族二万人に近い人々が、心の痛手をかみしめながら迎えた朝だった。柏崎村開拓団の記録でつづられ、海外で抑留生活を送る人々の苦難の道がつづき、在柏する長岡戦災者百七戸三百六十人の悲しみがあつた。今にして思えば、まさに一場の夢としかいえない。たしかに人々の英知と努力によ

て、この二十年の間に、今日の発展をみた。その生活史の基盤に、郷土の味わって来た困苦欠乏に呻吟した生活が、柏崎百年第三期の最初の記録として横たわることを銘記しておきたい。その朝の悲痛な祈りを忘れるわけにはいかない。

夜明けを迎えた柏崎の街は、建物を取りくずした跡の空地が目につく。強制疎開名残りの跡で、次の地点である。

- 1 新潟鉄工所周辺（現新潟ウォシントン）
- 2 柳橋踏切鉄道線路両側
- 3 柏崎神社前（参道にそって右側、および高伝商店）
- 4 四銀柏崎支店周辺
- 5 茶毘小路および権現小路の西側
- 6 もと柏崎商業学校東横から諏訪町一丁目にいたる一帯（現新市庁舎東側）
- 7 理研周辺

二十年七月、五市三町（新潟、長岡、三条、柏崎、高田、直江津、新津、新発田）に建造物強制疎開強行の指令が飛んで、下旬、市および隣村の警防団員の手で、僅か二日間の作業で約百五十戸の商店住宅が、いっせいに在りし日の面影を没し去ったものだ。1と7は重要軍需工場を守るため、4は堅ろう建造物を、2は鉄道線路を防護するため3・5・6は消防道路、避難道路を拡充するのが目的だった。疎開者への移転料、立退保償費、建物買収費は何もかも含めて、坪最高六百元から最低五百円までの時価算定によったという。その跡地は、今見られるように拡張道路になっているとあるが、その直後の貨幣価値の変動で再建するにしても、現在なお本建築にならないところもある。

る。

このあと更に、間引き疎開を含めて第二回強制疎開の指令がきた。約五百戸分になる。さいわいに実施まぎわに終戦となったが、代償交渉を待っておれずに取りこわした人たちもあつた。

こうした空地が目だつ上に、転業商店に再開の情勢はまだ生まれてこない。二十一年春の話「お菓子屋の残存業者は現在、柏崎市内には最上屋、つた屋、若山、有限会社の四軒、郡部にては新道の謙信堂、南鯖石の石塚二軒でしかない」と甘覚はなげく。一部をあげてみよう。

休業または廃業

三丁目、三浦屋菓子店、滝沢荒物店、万平堂

四丁目、倉田菓子店、小山洋品店

五丁目、桑竹百貨店

六丁目 岡塚文具店

転業または貸店

三丁目 柏崎日用雑貨小売統制組合（高橋自転車店）帝国製造柏崎出張所（元商工会議所）

四丁目 日本社会党刈羽支部（松原看板店）外食食堂（三好野）帝石地質部（けんどんや）帝石東寮（新道屋旅館）

五丁目 後藤回漕店柏崎出張所（桑竹）帝石柏寮（鈴久）新潟県物資更生協会柏崎総合修理所（海津炭屋）柏崎郷

大工工事事業施設組合（山崎薬店）

六丁目 柏崎市連絡協会（竹源）柏新社（北野屋）

七丁目 柏崎石油鉱山専門学校生徒寄宿舎（大矢材木店）帝石物理探鉱室（星野洋品店）

そして失業者が多かった。柏崎刈羽の工場離職者男五三二名、女五一四名、その他を合して、一八八九名。第三期はあわれさにおののく、わびしい平和ではじまった。

二十年、九月の声を聞くころ、米占領軍が柏崎に進駐してくるのうわさが流れる。骨の髄まで鬼畜米英とたたきこまれていたのだから、このニュースに胸さわぎをおぼえる。とって食われるような予備知識を植えつけられていたのだから、加えて、敗戦国民の立場に立たされているのだから、何とも不安でたまらない。米軍が進駐してきた時、その兵舎となった理研工場の近くにある柏崎高等女学校が、臨時休校の措置をとったのも笑えないことだった。休校三日で、平常授業が再開されたということは、市民が取り戻した安心感のしるしともいえるべきであろうか。

九月十八日、スミス大尉一行三名がジープで来柏、進駐、準備の調査視察。

市では、このために柏崎市連絡協議会を設け、竹源方に事務所をおいた。原市長を会長とし、巻洲市会議長を筆頭に、六名の市会議員からなる委員会であった。米軍との直接連絡は久保田正治氏が担当。予算十五万円は有志の拠出、直営土産物店やビヤホール、慰安施設等の設定運動を急速にすすめる。兵舎となる理研工場の内部整備を急ぐ。

九月二十四日、設営隊としてハリントン中尉一行七名、午後來柏、直ちに理研工場にはいって設営準備に取りかかる。

翌二十五日、午前十時より同営舎で原市長、百川刈羽地方事務所長、大道寺事務官等と会見。サムエル一等兵、田村通訳官を介しての、なごやかな会談だったという。柏崎側の営舎準備がよくできていたので、彼等はあまり仕事がない。ジープで飛行場予定地の旧競馬場を見、公認グラウンドを経て番神堂見物、市内一巡して正午帰営。そして部隊の一部が午後三時、ジープをつらねて来柏した。鉄砲を股の間にかいこんで、チューインガムをかみながらジープを走らせてきた。

本県への進駐部隊は、北本州の総司令官グリスウォルド中将の統率下にある第八軍十一分団歩兵二十七師団で、軍規を誇るニューヨーク部隊といわれているものだった。二十四日から二十八日までの間に、県内六市に約一万名が配置されたという。

二十七日、柏崎進駐の主力午前四時五十五分柏崎駅着。ニューヨーク第二十七師団百六十五連隊第三大隊のロバート、ブエ、ジェコブス大尉以下六百四十名である。大沢柏崎警察署長の先導で、朝まだきの静かな街を徒歩で行進して営舎理研工場に向う。

こうして駐屯した米軍は全部で九百名になったという。

無理もないことであったが、戦時中の記録をあわてて焼きすてる人もあったり、学校の英霊奉拝室を大いそぎで片づけ、神棚、写真、資料等を荷造りして神社に預けるといふようなさわぎも起きた。夜の外出はなるべくしないようになどという事にもなった。

玄関口に来客らしいとでてみると、からだの大きい米兵が立っている。ドキッとして肝をつぶす。相手はしきりに手まねで何かいっている。何をいっているのかわからないが、どうやら語調におだやかなものがあると気づくまでには少々時間がかかる。その手まねは「日の丸」の旗のことらしい。だして、見せると、それをくれないかという身振り、うなづくくと「サンキュー」と笑い顔を見せて立ち去る。これだけの事でも冷や汗を流し、あとで隣近所の笑い話

となり、警戒心がほぐれていく。

進駐軍のご用をつとめてほしいと頼まれたクリーニングの名人さんがある。なかなかウンといわない。「アメさんの仕事はマッピラだ」という気骨もあったが、うす気味が悪いというのも本音だった。連絡協議会の事務所から使いがお百度をふんでも、なかなか承知しない。協議会は米軍に矢のような催促を受ける。事務所の使いに案内されて米兵がやってくる。

目下休業中で、しかも仕事場はせまくて、とても大量クリーニングはやれるものではないといえば、営舎に設備してあるからという。遠いから通勤に息ぎれがすると逃げれば、毎日ジープで送り迎えしようとする。洗剤がないと答えれば、いくらでも用意してあるとたまたみこまれる。しぶしぶ出勤したわけだが、ジープの送迎は快的であり、存分に腕をふるわれるクリーニング作業も快的。それにもまして米軍キャンプの雰囲気は明朗、食事が満点。郷土人が揃って栄養失調になりかかっていた時だった。そして隣組の話題がふえていく。学校へピアノ練習にくる米兵もあった。こうして、いろいろの話題を残した米兵も、十二月七日には柏崎を引き揚げていった。帝石本社に、資源調査のため一人残っただけであった。

砂糖の切符制が実施されたのは昭和十五年、家庭用配給の停止が十九年八月一日。そして、解除となったのが二十七年四月一日だったから、十三年ぶりで砂糖を手にもせることができた。この間、法の目をくぐって、一部の人に流れてた闇砂糖は一つまみでも貴重品となった。だが、これはがまんできた。子どもだけでなく大人も、日なたにほした数片のホシイモに希望をつないだ。ほしたカボチャの種を豆いりのようにして食べた。日本カボチャのそれはうま

かったが、西洋カボチャは胚乳がすくなくて板をかむようだった。朝顔の花をむしってその蜜を吸い、ムケゲの若い実をムザイテ、白いつぶつぶを口に入れた。一つ二つでもホシ柿にして甘さを楽しんだ。

食塩だけはがまんできない。十七年一月一日から通帳配給制になった方がいいが、配給日がだんだん延びるばかり、それにつれて配給量もすくなくなってくる。二十年にはいってツルべ落しに不足となり、八月十五日を境にして頂点に達した。

自家製塩よりない。裏浜は潮くみで一斗たるの行列。たるでかついで帰り汁鍋で煮る。泡やゴミを除きながら煮つめ、水が一割以下になったところまでざるに移して水をきる。下にニガリがたまる。一斗の海水から二、二合ほどの塩ができた。燃料はガスばかりにたよっておられず、燃やせるものは何でもかまどに押しこむ。石炭やコークスを鉄道線路や工場わきに拾いにもでた。大鍋はないから何度にも分けて煮るのだが、それでも一斗の海水を半日で処理できたら、朝くみにでて午後またくみにいく。顔なじみの潮くみ友だちができる。疎開してきた人が「こうして潮を煮ることができるので、もう柏崎をはなれることはできない」という。鯖石方面や上条口からも五斗桶のようなものを車に積んで、牛にひかせて潮くみにくる。

学校も製塩の工夫をする。柏小理科研究部は互塩田を発表して新聞人を驚かした。カンカン日の照りつける東運の大屋根に一斗たるをすえつける。これに満たされた海水は十一の小孔をつけた竹樋に導かれ、それぞれの瓦の胴を流れくだって軒端の雨樋に集まり、下の桶にたまる。これをまた大屋根のたるに移してくり返す。半復九回で一斗が一升になるというもの。燃料不要の太陽熱利用製塩法だった。比角小職員は自然浜製塩をはじめた。裏浜に三十坪くらいの塩田をつくり、坪当り一斗五升くらいに海水を桶でくんでふりまく。乾くまで水泳を楽しみ、乾くと潮水まき

の作業。数回くり返して表面の砂をかき集め、布をしいたざるに入れ、桶にのせて海水をそそぐ。次の砂からこの桶の水をそそぐから、次々と塩分が濃くなる。これで二斗くらい塩水（十五度以上のもの）ができ、六、七升の塩がとれる。なわのれん式製塩もころもみる。海水がなわのれんを伝っているうちに風力と太陽熱で水分を蒸発させる。これをくりかえして濃い塩水を得ようというものだった。

自給製塩八十キロの割当指令を受けた市は、中浜海岸に約三百坪の塩田を作り、十五名の製塩夫で作業を始めたのが八月上旬。下旬に第一回分として、十八度の塩水四石を漬物用として、市民希望者に実費配給をする。二十一年には、市からの補助金三万円で電気製塩場が番神の入り口、塔の輪よりにできる。

自家製塩を持って近村にでかけ、食糧と交換したり、魚沼まで足をのばしてジャガイモや米と交換する。タケノコ生活となった市民にとって、塩は物交の見返り品として強力であった。食糧を得るための有力な手段となった。

食糧の不足はひどかった。カボチャやさつまいものつるも残すことなく食べ、大根のかき菜を買うために、中央街の主婦たちは四谷のはずれまで出掛けて野菜売りのリヤカーを待ち受けた。野菜の統制が二十年十一月二十日にとけたからだ。気がせくままに六地藏あたりまで足のびる。それでも手ぶらで戻らねばならぬ日が多い。

県が学校に示達した八月二十四日の教学臨時措置は食糧増産を強調して、中等学校に対しては「簡易開墾に極力努力し、関係方面の要請に積極的に協力する」ことを、国民学校および青年学校に対しては「自校農業経営の拡充、開墾に力をそそぐ」ことを要望した。校地はあますところなく畑となり、荒浜の砂山に、剣野の山に、空腹をこらえて開墾作業がつけられた。九月十一日日本日までずっと開墾作業あり、十月六日生徒交代で芋見張り、十月十六日授業を休み炭材運搬作業、十月二十四日開墾出勤生徒に加配米の配給（五・四キロ）十一月二十一日高田村開墾地で作

業。柏中二十年度の記録に見える。

食べる物が自由にならぬ、手にはいらぬということは苦しいことだった。食糧増産活動は最も必要だったことにはちがいない。「増産で再建へ」の掛け声が沸きあがり、「一日作らざれば一日食わず」と掲げた学校もあるが、二里の道を開墾に通う泥と汗の畑すがたは、一本のイモのツルも奪い合う血走った目と通ずるものがあった。すべてが苦しいなかでの苦しい活動であったから、派生するトラブルを避けることができなかった。

疑心が疑心をよんで動揺する。止むを得ないことであった。二十年十月二十四日、柏農校二部二年五十九名、同三年四十名の代表六名が、午後五時、熊田校長に要求書をつきつけるという事態が起きた。

- 一、実習主任の教頭の即日引退
- 二、農作物の適正処分

- 三、生徒配給品の一斉明示

- 四、開墾動員報酬金の取扱

- 五、投書箱の設置

成長期にありながら、毎日、不十分なオカユや代用食で過している生徒にとって、農作業の労働をリードする実習主任が他人に見え、その真意をくみとり、意義を考えるゆとりがあと回しになるというのも、時が時だけに、無理もないことかもしれない。校長は直ちに全職員と協議した後、全生徒と七時半まで懇談。第二項以下は即日了解点を見いだす。第一項については二十五、二十六日と話し合いが続く。「自らもよく反省しながら、生徒諸君と膝をまじえ

て話し合ってみたい」という教頭も校長とともに、全体の生徒との懇談に力をつくした。たがいに誠意をつくした結果問題は白紙にかえり、盟休一步前で二十六日全く解決した。その二十六日には、柏中にも穏やかでない空気が流れたが表面化せずに落着いた。すべてがトゲトゲしくなっていく世相のなかで、異常な空気が生じたとしても無理からぬことのないので、仲間同志の相互信頼と学徒らしい自己統御で、生活の節度を守りとおそうとする、若いエネルギーの再発見ということがあるか。

このころ、県内各地でも同様の問題が続発した。

十月二十七日には、巻中の四年生九十名が校長の出張中をねらって同盟休校にはいった。

十月三十日には、第二長岡工業学校生が盟休にはいる。増産報奨金問題、一部教員の退職問題、復員生徒に対する学校の態度等が問題であった。十一月一日に円満解決。

十月三十一日、この日は三校に火の手があがった。

三条工業学校、五年生が集会を開いて爆発寸前。この時「学生の本分守るべし」と叫んだのが復員生徒のグループだったという。

「おれたちも学校にいたいことがある。おれたち自身も振り返ってみねばならぬことがある。敗戦国の再建はおれたちの肩にかかっているのだし、おれたちはやり直しをするために学校へ戻ってきた」熱誠をこめたことばに各自、自分を取りもどし、至情の交流が平静をもたらす。

能生水産学校、四年生四十名盟休。実習船や神社に集まって動かず。今春、北海道の開墾から帰校する時に贈られたかん詰めその他を、生徒に一個も与えないのは、職員が勝手に処分したのではないか。学校農園の甘藷を職員の家

族は無償で持ち帰っているのに、寄宿舎には公定価格よりも高く売りこんでいる。それに、予科練帰りの復員生徒を「敗残兵のくせに」と放言したとかいう実習教諭の退職を要求する。そういう問題だった。

新潟第二工業学校、学校農園を生徒に一任せよと、十一月十二日まで盟休を続ける。

十一月二日、新発田農業学校三、四、五年生が盟休。十五項目の要求だが学校農作物の処理に関するもの。六日に解決。

ただ、群れ動くだけであった戦後の食糧不足は致命的なものとなって、人々の心をすさんだものにしていく。続発した学校問題は、その表層に浮かびてたものであった。

翌二十一年五月に起きた柏崎工業学校の盟休問題は、これまでのものとは性格が異なり、後半は生徒不在となった異質のものであった。新潟の進駐軍軍政部が動き、佐藤県知事が乗りだし、東京で開催された教員組合の全国大会にまで持ちだされ、大沢県教育民生部長が解決斡旋をするというものだったが、詳細の資料を提示するゆとりがないので、経過だけ拾いだしておきたい。

十六日、第一校舎の第一本科三、四年、第二本科三年の六百五十名が生徒大会を開いて決議書十四カ条を提出。

(第二校舎は元商業学校で、ここには一、二年六百九十二名がいたが、この生徒は関係しなかった)

二十四日、同盟休校

二十七日、六分の五の生徒登校

二十九日、父兄会の前後措置協議会が開かれ、解決にのりだす。

三十日、一切を水に流して解決。

六月十五日、ふたたび盟休にはいる。

十八日、父兄会実行委員会が二十数氏によって組織される。このため、父兄会協議会と対立する形になる。

二十五日より常福寺、成田不動院、田尻地区等七カ所で盟休中の自主授業を始める。

七月二日、県教育民生部長より解決案提示。六日、解決、全生徒登校。

あとで校外授業場の借館料や教師手当、出張費等で二千八百八円三十銭要したからとて、生徒六百三十名を通じて各父兄五円宛の寄付を求められ、一方的な意志による運動なのにと、不満の声がでたという話が残る。

戦後の数年は計画経済のための配給制というよりも、混乱を防ごうとする懸命な作業であった。物資のストックは底をつき、破滅した生産機構の再建は日暮れて道なお遠く、必要をみたすにはあまりにもみじめであった。二十年、二十一年と軍の放出物資も配給ルートにのってきた。はじめて見る粉末しよ油など、こんなものが軍倉庫に用意されていたのかと驚きはする。乾パンはオカユにたきまぜて食べましたが、物資の不足は日ましにひどくなっていく。焼石に水のようにあっても、人々は配給をたよりにしなければならなかった。

二十一年の総合切符による家庭配給を例にとってみよう。

魚介類は年間二十五回の配給と記録されている。その一回量は丸干イワシ一人当二尾二円七十銭とか、シジミ貝一人当三十匁（一匁は三、七五グラム）四十銭、あるいは数ノ子一人当八匁四十九銭というものだった。四月四日にカシノメの配給が一回あった。家族一人から四人のところは鮭カンゴ（二円三十銭）五人―八人は鮭カンゴと帆立貝カンゴ（二円七十二銭）九人―十五人は鮭カンゴとミカンゴ（五円二十銭）となっている。二十五回のうち

十二回分が鮮魚であった。ニシン一人当一尾一円五十銭、これが一回分である。一人当半尾という時もあった。ニシン五回、カレイ、タラ、イワシが各二回、ホッケ一回では珍重すべきものとなった。竹輪一人当一本、二円はまだしも、冷凍ホッケはアンモニアが鼻をついて閉口した。

野菜は乾ゼンマイやタクアンの類を含めて二十三回。青菜一人百匁五十銭、これはマビキ菜であった。玉ネギ一人四十匁四十銭、ミソ漬一人五十匁一円四十銭、タクアン一人七十匁一円四十銭、こんなぐあいに福神漬、カラシ漬、梅漬などが配給された。何日食膳にそえることができたろう。馬鈴薯一人一匁四円八十銭、南瓜一人五百匁五円七十五銭はありがたいものだったが飯米を差し引かれた。野菜は隣組配給が別にあった。前年の秋は四人家族で、大根のカキ菜五十匁と飯米を差しひくサツマイモ三貫七百匁が一度きりだった。隣組にとって配給品の振り分けは大仕事だった。はかりにかけられるものはまだいい、四十五人の隣組に卵が五コでは分けようがない。クジ引きか、病人や老人のある家庭へゆずられていく。この年、青果荷受組合が集荷して隣組配給の線にのせた越冬野菜はネギ二十車、（四万貫）白菜十車（十六万貫）ゴボウ人参各十方貫、里芋五万貫、大根百五十車（三十万貫）馬鈴薯五車（一万貫）。朗報であった。

調味料はどうか。塩一人百五十グラム十五銭が十四回。ほかに漬物用塩一人五百グラム七十三銭が二回。これはガリガリの岩塩で、ゴミまじりのうすよごれたものだった。しよ油一人一合六十銭が十回。たりの筈がない。あてもので売りだされた「しよ油の素」を買ってきて水でのばす。色はついているがショッパイだけだから、配給のしよ油をまぜたりする。ミソは一人二百匁一円六十銭で七回。これでは需用をみたせない。地方事務所はしよ油、食用油を農村に特配して最低二百九十石、最高千四百石を目標の大豆供出の確保に努力する。なかには、飯米差し引き

で配給を受けた大豆をかためのオカユに入れ、塩をまぶして代用ミソを作ったりする。食用油は一合一円八銭、一人一合、二人二合、三人―五人の家族は三合というものが二回。砂糖の配給は一回しかなかった。一人―二人十匁九銭三人―十人二十匁十七銭、まことに少量。

酒は六回。一回分は成年男子二人―四人三合六円九十銭、五人―八人四合ということもあり、女世帯二合、成年男子一人二合、二人四合、以上二人増すごとに一合増ということもあった。ビールは四回。一人一本三円とか一戸一本という配給。リンク制であったから空びんを持っていかなければ配給を受けられない。この酒を飲まずにこらえて物々交換の材料としたり、家屋修理の賃金に充当することもできた。しかし口をぬらす程度の量であったから、トブロクがなかば公然と流れもした。局方アルコールを探し出す人もあった。ついにはメチルアルコールにとりつかれる人もあり、失明さわぎにりつ然とした。菓子も四回で一人十匁十銭とか、三才までの子に三十匁という配給。煙草は一月十六日から二十五日までの分「のぞみ」十日分四十グラムが二月七日に配給というぐあい。「のぞみ」は自分で紙にまいて用いるもので、巻き方のくふうがたいへんだった。鉛筆を軸にして反転巻きをやったり、煙草巻き機がエンマ市で人気を集めたりする。巻いても三つにきって、キセルですう。だれのポケットにも短いキセルが用意されていた。火鉢のなかをどうかきまわしても、使いそうな吸いがらはでてこない。畑の消毒用に集めておいた茶筒いっぱい吸いがらも、いつのまにか吸いあげてしまった。米兵の吸いがらをひろい集めて巻きなおした再製煙草が、闇市場にでていても高くても手がだせない。

石けんは三回。一人一コ七十五銭が二回、一戸一コが一回では粗末に扱えない。電力事情から必要なロウソクであったが二回配給があつたきり。一戸二本三十六銭、もう一回分は、日石からペラピン四箱の寄付を受けて作つた小型もので、七百戸の英霊に供え、残りを一般家庭にまわしたものであった。こうなると手製でいくよりない。奇妙な石けんができて、ロウソクのダラも丹念に集め、松やにを、ませて量をふやし、小型カンにとかしこんで即席ロウソクを作る。板ぎれげたも作れば、げたの緒も手作りであつた。おとなげないようだが、こんな話に人々は本気になって怒つた。

二十一年五月の町会長会での話である。最近配給された酒が水っぽく、吉野川の二級酒だというのにひどいことをする。しょう酒も水でわって配給する悪質業者が跡を絶たぬのはけしからんと二、三の町会長が発言、ついに町会長会評議員から、数名の監視隊が選ばれて不正業者を調査監督することになる。

水割の配給に泣寝入りしたり、粒にしんの配給に数の子を抜きとって配給した業者があるとか、にしんと食えない福神漬を抱き合わせて配給する業者があるとかいう市民の批難の声を、町会長会もとりあげて警告を発したものである。

うそのようだが、こんな話に人々はホツとしたものである。二十一年四月、街でひろつた話である。

越後タイムスに、子どものゴム長靴片足を落した人があるから、拾った人は西学校町の柴野方へ届けてほしい。お札に米二升を差しあげる、という意味の広告がでた。広告を見て春日の田村弘作氏が届けてくださった。それだけのニュースでしかないが、見ず知らずの人のために、自腹をきってまで新聞広告をだした柴野常由氏の篤志と、お札の米を固辞して受けなかったという田村氏の心意気に、人々はほのぼのとしたものをおぼえた。

米二升は、当時の配給量であれば大人八・六日分にあたる。食糧事情は最悪、配給はおくれ勝ち、その上代替食品という時であるから、米八・六日分の提供ということはたいへんなことだった。帰宅してから、背中におんぶした子どものゴム長片方を落したことに気づいた母親が、およそ九日間のひもじさを覚悟して片一方のゴム長をさがし求める。片足であっても、子どものゴム長は母親の空腹九日間に匹敵するねうちを持っていた。

すべて使い捨て、シャツや運動帽を忘れっぱなしにしても平気、そういうぜいたくを許されている今の子どもたちにも、この母親の気持ちを読みとってもらえるだろうか。できるだけすりへるのを防ぐために、げたの裏にボロ長靴からきりとったゴムを打ちついたりした。二十一年のチリ紙の配給はただ一回、一人から三人家族までは百枚九十銭、四人―六人二百枚、七人―九人で三百枚、これはまだいい。同じく一回しかなかった干しのり一世帯二枚半、何のたしになるだろう。三百六十五日必要なのに、十回や二十回の配給で間に合うはずがない。二十二年になると、しょう油の配給は年間六回、シソは三回だけになってしまう。

すべてが不足、ひっぱくの度を加えていくのが当然のような情勢下であって、この困窮打開は不可能に近い。手のうちようがない。しかし、座してジリ貧を待つよりはつくせるだけ手をつくしてみよう。突破口をどう設定するか、ここに市当局の苦心があった。それには柏崎と附近町村を一円とした総合的自給運営体制を整えねばならぬ。

二十年十月十八日、原市長、石黒郡農業者支部長、松村市食品小売統制組合理事長の三者が、この発想のもとに食料品組合関係五十名と会談協議。

同年十一月一日、原市長を理事長として資本金十萬円の柏崎市生活必需品消費組合発足。

ここに附近町村の生産団体、各業統制組合の積極的な協力による郡市一体の生必需品新経済体制が確立された。柏崎市は単なる消費都市的性格から脱皮して、塩の生産とか、農具の修理等によって、農村の生産向上に資する役割を担当しようというものであった。柏崎刈羽だけでなく、塚山村、米山村、上米山村をも含む地区とし、事務所を柏崎に置く。柏崎市、同市内各町会、柏崎食品組合、柏崎食品興業、柏崎菓子、北日本産業、地区内の市町村農業会、刈羽郡農会および大口消費者をもって組織、さしあたり青果物、魚介類の需給事業をすすめ、漸次、繊維製品や日用雑貨の方面にひろげていくことにした。

市内十二カ所に配給所を設け、さっそく五日にはコンブの配給をはじめた。配給といっても量目制限の自由販売である。ゆくゆくは各戸配給を目ざしているものの、当初は列を作って並ぶ。長い列となって、ようやく自分の番がきた時に品切れのなげきを味わう。その時間をはずすと手にはいらない。その時間をあきらめねばならぬ人もある。暗いうちから列にはいつて長い時間待つ人もある。地域的に便不もある。これはしのばねばならない。組合の当初の仕事は冬野菜の出回り促進に大馬力をかけることだった。

二十一年一月の実績も、総合切符配給が魚介四回だったのに対し、組合配給所の自由販売は魚介七回、野菜二回という活動。好評を受けて、三月末の組合決算では七、八万の利益をあげてはいないかとまでいわれた。

ところが苦心して集荷しているのに、販売にあたって公定価格の枠がわざわざわいした。すこしの値上げ幅も許されない。二十一年四月二十五日の商業復興柏崎地区大会における小林治助氏の演説を聞こう。

「柏崎の生必需品消費組合は時代の要請を打ちきって、なぜ解散せねばならなかったか。生産、配給、消費一体化の協同組合主義の理想も、価格の機動性を制圧した統制に業者の経験技術も身動きがとれなくなり、その活動意欲を枯渇せしめてしまった。市民もまた、育てて自分たちのものとする熱意をもたず、ただ一方的な利用のみ要求するにと

どまった無理解さを反省すべきだ」

需給両者の安心感をと願った施策も異常な事態のなかで水泡のように消えてしまった。

二十一年二月十日の越後タイムスに、こういう広告がはじめてでた。

柏崎生活必需物資相互交換会

会日、毎月の五の日、十日、午後七時開会、

申し込みはいつでも受付けます。

みなさまのご不用品と必需品との交換にご利用ください(但し、主食品は取扱いません)

会場、柏崎市西学校町柴野方、

物資の相互利用によって、すこしでも市民生活をおびやかす物資不足を補おうとする工夫である。柴野常由氏の骨折りで、この仕事のがはじまったのは一月二十六日からだった。統制の網の目をくぐって出沒する闇物資の、この月の闇価格をみるとゴム長靴が三百二十円、作業衣上下四百五十円、卵一コ三円五十銭である。この当時、教員生活十六年で月俸八百円、家族五人となると、驚くばかりのこの豪雪のなかでも闇長靴を求めず歩めない。二、三十年前に逆戻りしてワラ靴でがまんしなければならぬ。今の俸給ベースで換算してみると、このゴム長が二万七千九十円にあたる。作業衣は三万一千二百五十八円ということになり、一コの卵が三百四十三円に匹敵する。信じられないほどの高価品になっていた。いかに需給のバランスがくずれていたか、想像に絶するものであった。だから不用品の持ち寄り交換で、相互に必要を補いあうということは、市民の間にもちようほうがられた。時にはせり売りも行なわれたようだ。

配給ルートでない品物を扱う露天市場も出現した。中央青年会史に次の文がある。

第四銀行わき大道の丁度まん中に、一個のすのこ囲いの天ぶら屋が、敢然として寒風の中に旗をひらめかせたかと思えるまに、続々と後継者が現われた。さすがに道路中央はまずいと知ったか、先祖天ぶら屋も、道ばたに板囲いを作って移り住んだ。ともかく食えないことはなかるうというような品物が軒を連ねて並ぶに及んで、人はこれを闇市と呼ぶにいたった。

露天商人組合を組織して、常設露天市場としたのは二十一年二月二日。雑貨、鮮魚、農産物、青果、金物、そしてブンブンとうまさうなおいと、白い湯煙りを軒ばにただよわせる食べ物屋がならんだ。いつも人々が寄り集まっていたが高くて手がだせない。

三月になると、柏高大門から柏崎神社大門に移る計画をたて、約三万円で半永久的な露天建物三十一戸の建築にとりかかる。半ば完成しかかった時に、柏小の通学道路にあたってるところだから教育上望ましからずという学校側の意見がでて、ダビ小路建物疎開跡へ移築移転することになった。こんどはダビ小路地元から苦情がでて移転ができなくなる。結局もとの柏高大門に落ついて仮小屋三十軒を建てる。これが二十七年まで続いた名物闇市場である。くらしが苦しくなってくるにつれて人々の心も日増しにいらだつ。隠匿物資を摘発せよという声が聞えるようになったのは、中央の情勢に刺激された二十一年二月ころ。公平に分配せよ、よるとさわるとそんな声がまたにみちた。

「柏崎警察署でも摘発を企てたようであるが、市内でも相当物資を隠匿しているのが次々と発見されている模様である。

主要食糧はもちろん、なかには砂糖数十袋、ワイシャツを茶箱に三箱、ゲタを二千七百足などというのものもあるそう

だ」(二一、二、二四越後タイムス)

シャツはつくろいにつくろいをかさね、ぞうきんのようになっても大切に着了。洋服はあてつぎのあるのが普通となった。やっと配給になった服は大豆が原料とかで、ネズミがかじるから気をつけろという声がある。すぐよれよれになってそで口、すそまわりがむしったようになる。街をビーターパンがゆきかう。危機打開はみんなの願いであった。しかし、その時のくるのがおそい。

この年、マッカーサーの指令による二月十日現在の隠匿物資調査の結果、ばく大な繊維製品の退蔵が摘発された。うち六千万ヤールは見返り物資として海外へ、残りの二十％は海外引揚者、戦災者に、八十％を緊急物資の生産供出輸送をなす者を優先順位として、一般を対象とする常会配給にする。このため、統制組合、共同販売所や配給所は五月一カ月間を手持ち商品の配給促進期間と定め、在庫品の一掃をはかる。そのあとに、この摘発物資である人絹服地麻のシャツ類等が配給されることになった。柏崎刈羽への配給分は約七万点で、二人につき一点の割であった。

このニュースに人々はホッとする思いをした。縫い針の配給すら二十一年二十二年の二年間に一回しかなかった。それも一人三本四十銭というものだった。だから多くの人は竹の針を使った。生活が文明開化以前に戻った。柿は進上してもいいが忙しくてもいでいられぬというのに対して、こちらでもぎますからと農家へ柿もらいにいくのに、ナント人足をつれていって一本丸坊主にしたという話がこのころあった。根性がきたないといわれてもがまんできる。着るものがないのはがまんしにくかった。

学校配給の学童服も数がきわめてすくないから抽選よりなく、なげきが多い。隣組配給も同様でトラブルが起りやすい。配給衣料の公平な分配を考えねばならないと、二十一年十一月、柏崎市衣料品配給委員会が発足した。第二、

四半期分(九、十両月)の割当から活動。委員は柏崎署経済主任、商工会議所から一名、市から三名、組合業者から三名、消費者側から九名という構成であった。婦人代表の名が三名見える。

二十一年の日記にこう書いた人がある。

一月二十七日、銭湯地獄。

人々の道義感など爪のあかほどもない。銭湯はその縮図だ。げたはなくなる。雨具は消える。赤ン坊の着物や腰巻までかっぱらっていく。裸で帰った者もあるという。

ひとしきり入り口に行列を作った姿は見えなくなったが、湯ぶねを囲んで順番を待たねばならない。裸像の行列、そして押し合い、へし合いして、やっと浴槽につかっても落ちついて温まってなんかいられない。シャガムことでもできない。無理してシャガンでも前の人のお尻が鼻っ先きにある。湯もぬるく、すくなく、まさに足湯だ。皮膚病が流行するのは当然のことだろう。

すべて混雑時代、行列時代であった。配給行列、買いだし行列は早朝風景なのだが、銭湯行列は午後から延々と続いた。だから働いている人たちは行列におそくなり、ドロリと汚れきった足湯がせいっぱいとなって、疲れをいやすというわけにはいかなかった。入り口行列がだんだんなくなってきたのは、週一回きりの開湯が二回となり、三回となり、休湯がすくなくなってきたからであるが、燃料の不足がこんな街頭スケッチを描きだすにいった。

燃料不足の状況を、市民にとっておろそかにできない越冬燃料に例をとってみよう。

二十年から二十一年にかけては、十九年に劣らないたいへんな豪雪にみまわれたのだが、この冬のために配給され

る燃料事情について、十一月、その見込みについてこう語られている。

木炭。県が市に対する配給割当十八万三千九百五十九貫のところ、約八万貫の入荷が見込まれているが、昨年度の未渡し分一万貫を含んでいるので実際は十万貫を確保しなければならぬ。市としては、市民個人には二貫匁台(半俵)を割ることはないと言明しているが、いよいよ少量となった。

代用燃料。練炭、タドンを含め、割当九万六千七百二十貫は確保の見込みであるが、タドンが大部分であろうとのこと。昨年の割当が十三万貫であったことを思うと、これもすくない。

たきぎ。割当一万八千六百五十三石のところ、十月末までに五千五百石入荷。今後順調にいても千五百石入荷が頂上とすれば合計七千石で、これもきびしい。昨年は二万四千石割当に対し一万二千石入荷、その上少々ながら市営生産もあったことにくらべると、この冬はきついと思わねばならぬ。

昨年は戸数五千五百戸、この年は七千六百戸に増加していたから、入荷量の減少と戸数増加で不足度は更に高くなる。一戸当りの配給量は木炭約十貫、代用燃料約十二貫、たきぎは小束もの約十五束であった。これで四カ月の冬を過さねばならない。裏庭の片すみで簡易自家製炭を工夫する人もある。軽石といっしょに炭を使う方法もあみだした。コタツのなかに二つ三つの炭火といっしょに、十センチほどに折り割った木片五、六枚を灰のなかにうずめた。

自家製炭をしながら暖をとろうという寸法で、煙がコタツふとんのすそをくぐってでたり、部屋のなかがすぶれ臭くもなった。集会は炭持参が会費と同格の条件となったが、その炭がもったいなかった。

市当局の燃料確保の努力には涙ぐましいものがあった。県に対しては割当増額の必要を力説し、柏崎を供給圏の主力とする岩船郡に対しては日参といつてよいほどに懇請をつづける。翌年の越冬燃料の割当は木炭二十九万一千貫と

なり、岩船より七割出荷の見通しが確実となる。しかし、公価では生産者が採算割れとなるので、その補償問題をめぐって県との交渉が残る。これがうまくいけば一人から二人家族は十貫、三人―五人十六貫、六人―十人二十貫の配給見込みとなるので市民の期待がかかる。たきぎは、割当三万五百六十四石の大部分が刈羽郡からの出荷によるのだが、市内に横流れしている闇値が障害となって、順調な入荷は極めて困難な情勢となる。この割当供出を精算する公定価格と闇値の開きが強くなっても、それを補償するてだてを認められないことが適正配給のさまたげになる。こうしたことが他の場合にも再々にわたって生じた。

十八年八月七日、全国にガスの消費規制が実施された時、特に但し書きで、柏崎だけは例外としてこの規制を受けることはなかった。その自慢であったガス事情も、この段階にはいって例外でない事態となってきた。

燃料事情の悪化からガスに対する依存度が急上昇する。それにつれて盗用がひどくなる。終戦と同時に、軒なみに閉鎖した家庭工場でも、ガス配管は太い管がそのままなのでいくらでも消費できる。そのために末端線はお湯をわかす位がせいぜいというありさま。二十一年五月一日、柏崎としては最初の消費規制にはいった。一カ月の割当量は一八十五立方メートル、二人十八立方メートル、三人二十四立方メートル、五人三十立方メートル。無制限使用に慣れていた市民にとって、よほど自粛しないと翌月供給停止の罰則が課せられる。

九月、西山の新ガス井成功により使用量家庭用二倍、業務用五割増、台所への朗報であったが、その直後九月六日「帝石闘争にはいる」のニュースが案じてただけに市民の心をいらだたせた。スト突入となれば、ガスの供給が全面停止になる。これは市民にとってたえられないことだった。市議会は十月三日、緊急協議会を開き、三井田市長、巻淵議長、前田副議長、斎藤準次、泉三郎の各氏を調停委員に立て、円満解決を要望して奔走したが、五日完全スト

断行となってしまった。

帝石ストはガスの供給停止となり、市民は二重三重の苦しみを味わわねばならなかった。十七日午後五時四十五分、ストは妥結したのだが、この十三日間、市民の背負った重苦しさは想像以上のものであった。

冬季用として僅かに配給された薪炭を費消してしまつて、越冬用の補充のあてがないことからの不安が大きい。薪炭の需要が急増することから、闇価格の値上りが奔騰する。

電熱濫用の傾向、電気消費量の激増で電圧が低下、六十ワット球でも本が読めない。

電圧低下は映画館、病院、家内工業等を能率低下でなやまし、四球ラジオの聴取すら困難となる。

工場用燃料ガスもストップとなったから、生産活動に対する影響が甚大。

バス、トラック、ハイヤー減が大衆の足を奪い、生活物資等の輸送が停滞する。

それでもなくてもガソリンの不足は輪タクなる新車を生み、自転車の横にほろ付きの箱をサイドカーよろしく取りつけ、脚力三輪車で用を便じていた時である。中越バスは他の路線から木炭車を動員したが、郡市を結ぶバス運行は半減運転となってしまった。

三井田市長ほか四氏による調停委員は市燃料ガス対策委員と性格を切り替え、争議中、ガス事業を市が代行する案をたてた。市民の困窮を救おうとするこの案に対して会社側は同意したが、業務管理を主張する組合側と話し合いがつかない。

一方、木炭の配給増にも腐心する。岩船郡に対する出荷の懇請、県に対しては採算割れの生産者公価補償についての要望、そして十七万貫の入荷見込みをとりつけることができ、市、市会、町会による柏崎市新炭運営協議会を結成したのが十日だった。

燃料不足が急迫してくると、電熱の濫用となるのは自然であった。炭のかわりに電熱器をコタツに入れる。裸電球で暖をとろうとする。粗悪な電熱器が街にはんらんした。そして月末の電気料三百円と聞いて青くなる。電圧は極度に低くなる。八十ワットの電球でもうす暗く、針のミゾが通らない。

そこへ節電危機突破対策が叫ばれた。渇水期と石炭不足による電力制限問題が深刻になってきたのは二十一年後半からであった。火力発電用の石炭は皆無で、本県一日の平均電力不足量は二万五千ワットに及んだ。ついに十一月二日休電制実施となった。一日五十キロワット以上使用の工場は一日の使用電力七、八月両月の平均実績の三割を制限、その上、週三日間の休電、一般家庭は週一日の休電、さらに、この制限は強化の一途をたどるのでないかとみられただけに重大問題となってきた。この時制限を受けた工場は理研、帝石鉱業所、新潟鉄工所、日石製油所、柏崎圧縮ガス、柏崎産業、東北工業、日本鉱機、日本油機、理研電機、理研農工、北日本産業、西川鉄工所、桑山興業の十四工場であった。

たしかに石炭不足はひどかった。国鉄を半身不随にして二十年十二月から運行五割縮減、切符発売半数以下、申告制にしてしまう。学校のストーブは燃えの悪い亜炭にたよらねばならず、手当りしだいに廃材をさがしだしてはストーブにくべる。

石炭ききを克服するために炭鉱夫の募集に力が注がれた。二十年十二月八日の新潟日報の記事にはじめてあらわ

れた。柏崎の炭坑夫送出責任割当は百十五名で、十五日までに北海道、福岡、福島各炭鉱へ送出することになっている

が、現在では予定の三分の一を募集済み、期日までは充足可能との見込みである。

刈羽郡各町村とも非常な熱意を示し、鶴川村のごときは割当四名のところ、率先十三名の申込みあり、柏崎国民勤労署の署員を感激させている。

戦災疎開者や復員軍人、失業工員等を応募資格として炭坑要員をつのったのだが、待遇条件は月収四百五十円位、それよりも主食の炭坑加配が大きかった。本人六合、家族三合。一日二・三合でガツガツしている時である。いかに炭坑復旧を重要問題としたかを知ることができる。この主食加配に、妻君が乗り気になって弱気の主人の尻をつつくというのも、笑えぬナンセンスであった。

しかし石炭事情はなかなか好転しない。窮迫するばかりで、二十一年十一月十日には、またまた列車削減の新ダイヤとなり、乗車券発売制限という事態となった。敗戦直後の八月二十二日に武装解除部隊の移動にともなって、乗車禁止区域や乗車券発売停止制限が従来の一部制限を強化したが、これはまもなく解除となった。こんどはちよつと事情がちがう。柏崎駅の列車ダイヤを見ると、信越線より七本、うち新潟上野間一本、新潟大阪間一本、青森柏崎間一本、長岡高崎間一本、あと三本はローカル線。下りは六本、新井大館間一本、富山新潟間一本、高崎長岡一本、上野長岡間、上野新潟間各一本。越後線柏崎着の上りは五本、柏崎発の下り六本。これも二十二日には、更に上り下りとも各一本削減となるありさま。

柏崎駅での乗車券発売制限は、各列車毎に上り二十キロ以内（柿崎まで）四十枚、二十一キロ以上三十二枚。下り二十キロ以内（塚山まで）五十枚、二十一キロ以上三十三枚。局外行は前日申告制となって上越線石打以遠行三十枚、信越線軽井沢以遠行四十枚、北陸線泊以遠行六枚、中央線塩尻以遠十枚、若松福島陣場以遠二十四枚。申告時間

の九時から十時と十三時から十四時までのために長い行列ができ、切符行列でしびれをきらし、列車は窓からの割り込み、混雑時代となってしまった。

各界体制の新しい性格の形成と再建復興を課題として背負う新生期は、生活必需物資の不足窮乏と精神的な動揺による不安な日常のうちに経過していく。消費を美德とする昭和元祿の世代では想像もできないことであろう。そういう世界がわずか二十年前にあったとは考えも及ばないことにちがいない。さらに、後章で述べる「食糧危機」の苦難がうずまき、新生期は言語に絶する市民生活でつづられた。

しばしば闇価格というこぼを使ってきたので、二十一年の県商工経済会調査資料のなかから柏崎の分をみよう。

品名	単位	公定価格	闇取引価格
白米	一升	二円六三銭	三五円〇〇銭
小麦粉	百匁	七六	一二・〇〇
大豆	一升	一・五〇	三〇・〇〇
小豆	一升	七〇	二八・〇〇
馬鈴薯	百匁	一二	三・八〇
大根	百匁	七〇	一・八〇
雑鮮魚	百匁	四五	三・〇〇
醬酒	一升	五・〇〇	八〇・〇〇

味噌	百匁	八〇	七・〇〇
清酒	一升	二三・〇〇	二〇〇・〇〇
晒木綿	一反	六・一六	一八〇・〇〇

四月資料の一部をあげてみたのだが、十倍、二十倍という閾値のすさまじさを知ることができよう。これでも新潟長岡、三条、高田よりは、全体的に安かったのだから驚く。二カ月後の柏崎支部の調査をみると、更に値上りしている。白米は五匁のあがり、小麦粉は三匁、大豆は七匁のあがり、小豆の十二匁あがりや大根の六匁四十匁あがり、醤油の十匁あがり大きい。

こうした物価のあらしとなつては、家計をどうやりくりすることができらうか。四月にこんな例がある。牛肉も鶏卵もビールも緑茶も、すべて返上した一カ月一人分の食生活計算である。

品名	配給量	不足量	不足分購買
白米	六升	三升	一〇五匁〇〇
味噌	二百匁	三百匁	二一・〇〇
醤油	一合	一升四合	一一二・〇〇
野菜	一貫匁	二貫匁	四七・二〇
雑鮮魚	十回		
木炭	なし	四貫匁	四八・〇〇

配給品公定価格購入分が四十二匁二十八匁、不足分購買分が三百三十三匁二十匁、合計一人分の食費三百七十五

匁四十八匁となる。家族五人かかえて教職十六年が俸給八百匁の時だった。だから実際は腹がへつても買えないのだ。

商工経済会柏崎支部が、二十年六月から二十一年五月まで一年間の、五人家族借家住まいの給料生活者の家計状況をしらべたものと、収入合計五千八百八十七匁八十匁、支出合計八千八百二十一匁で、赤字二千九百九十四匁三十一匁を示している。エンゲル系数数年平均四十四、五となっている。偽らざる生活の告白とみだしがついているが、家庭経済の破たん以外にない。

加えて予金封鎖、新田登場と追い打ちをかけられた。終戦時の八月に日銀券発行高は三百二億匁だったものが、十二月末には五百五十四億匁にハネ上ってしまった。この悪性インフレをおさえるために、翌年二月十七日金融緊急措置令実施、この日現在、一切の預金は封鎖、十匁以上の紙幣は三月六日までで廃止、翌七日から新紙幣を使うというもの。旧券は使用禁止の大手術であった。封鎖予金の払い出しは世帯主が月三百匁、家族は一人百匁、俸給も現金は五百匁まで、それ以上は封鎖予金にされる。三人世帯なら予金があつても月に千匁、予金がなければ月五百匁生活となる。

ところが、五匁以下の小額紙幣は封鎖されないで、五匁札、一匁札を退蔵したり、買物は十匁札以下でしておつりをもらおうとする、商店ではつりを出さないようにする。そのためのトラブルがあつちこちに起きる。結局は五匁札も封鎖対象となり、三月六日には新田印刷が間にあわず、旧匁の右肩に切手代の証紙を貼って新匁の代りとすることになった。

一般市民は購買力をひきしめられて更に苦しくなる。新田の年三月三日には、米と石炭の価格を基準とした新物価

統制令が公布される。公定価格④、認可価格⑤、許可価格⑥、自由価格無印の四本建て。食品以外の全商品は価格、種別、税の表示をする。大体五割以上の純益は暴利とみなす。金銭以外による売買方法はすべて禁止。物々交換も許されない。物交は禁じられても蔵書を金に換え、衣類を代償にしなければ家屋の修理も、食料も燃料も入手できない。リュックでかつぎだす程の岩波の哲学辞典が二十四坪のトタン屋根の雨漏り修理代になった。十一月一日に物価監視の柏崎地区委員会が構成されて、市民自らの手による物価秩序を、自らの意志と責任において確保しようとする動きとなった。

ポロきれでがまんをし、なりふりおかまえないしの最低生活でこらえる新生の朝であった。

食塩価格統制撤廃二十五年一月一日。一千品目統制解除二四・八・二三。重要物資統制大幅撤廃二四・一二・二〇。繊維品、印刷用紙価格統制撤廃二五・一・一。綿製品自由販売二五・四・一。衣料切符制度廃止二五・九・二〇。国鉄制限解除二二・九・八。野菜統制撤廃二四・四・一。酒自由販売二四・五・六。魚類自由販売二五・四・一。みそ・しょう油自由販売二五・七・一。煙草家庭配給廃止二五・四・一。八年ぶり、九年ぶりで統制解除にまでこぎつけた。それにしても新生期の苦しみは長かった。

「敗戦以来、政治に、経済に、思想に混迷を続け、生活の安定を失い、道義は退廃し、まさに満目荒涼」と式辞に述べなければならぬような時に、しかも、この月から電力制限が市内各工場に実施されることになり、工場休電日が一月に十日間となるニュースに、いんうつな空気がよどみがちな二十一年十一月。その三日に、六カ月後を実施期として新憲法が公布された。

学童はこの日を祝うために、早くから作品作りや練習にはいていた。何か明るい日がやってくるような期待に、胸をふくらませるような思いで口笛を吹いた。市内五国民学校の記念連合音楽会が、比角国民学校を会場にして開かれたのは十月二十八日。疲れた空気をゆすって、戦後はじめての童心躍動であった。十一月二十日、二十一日は柏崎国民学校を会場にして記念合同展覧会が開かれた。ブックケースをバラしたり、写真をはぎとった台紙利用の厚紙細工、廃物利用の木工、塗装は柿渋というようなものだったが、お座なりの作品はみあたらない。腹をすかした子どもたちなのに、希望をたくしたヒューマンネーチャの表現とみるべきものであろう。この両日、市立青年学校や女子商業学校も作品を展示した。ポロキレ手芸の見事さが人の心を打つ。女子商業は二十三日に記念芸能発表会も開く。学童を喜ばしたのは、祝賀のためにビスケット一人三十枚の特配があったことだ。六十才以上にはようかん四十枚があった。そのほかの祝賀特配は、清酒、男世帯四合、成年男子一人増毎に三合、女世帯二合。煙草（光）、成年男子十本、同女子五本。今日からみればお笑い草だが、これがデラックスな配給なのだ。これをも物交用に保存しなければならぬ人もある。そういう新生期だった。

今日、惨敗のうき目を見、国民は塗炭の苦しみにしんぎんするの結果になったのですが、新憲法は自由平和の国家を建設せんとするもので、いかに立派な憲法ができて、これを運用し、活用する国民に、これを実現する誠意と努力と反省がなければ、国運の再建は期待できません。

当日の祝賀式典での三井田市長のことはある。ともすれば虚脱状態となり勝ちな時に、再建活動に立ち上った人々には、深い共感を呼んだことばであった。

自治功労者表彰式。当日午前八時半、市長より十二年以上の勤続者として表彰されたもの、市議員二十八年三カ

月の洲崎義郎氏ほか十名。町会長二十一年の宮木善吉、中村吉蔵両氏ほか二名。民生委員十八年の田辺松巖、歌代清蔵、山田策三の三氏ほか四名。市吏員三十五年の田村子之吉主事ほか十五名。警防団員三十四年の本部内山栄五郎氏ほか六十三名。合計百二名。

市記念講演会、十一月十七日、会場柏崎校西運動場。講師、衆議院憲法委員荆木一久氏。

帝石本社はこの日、柏中グラウンドを借りて記念運動会で氣勢をあげ、柏崎国民学校は翌四日に祝賀大運動会を挙げる。

各町内おもしろい行事計画がすすめられたが、田町青年会の記念行事は特異だった。十日、西福寺で田町戦没者の慰霊祭をあげ、元華北新報済南支社長大場松吉氏を講師として支那事情の講演会を開き、夜は町内復員者八十名を囲んで座談会を開く。「民族の祭典」と評された新憲法の公布を、こうした形で受けとめようとする。

和田幸子さんを理事長とする柏崎市連合女子青年団も、この日を期して、柏崎校西運動場で結成式をあげた。村山沼一郎氏が「新憲法と女性」と題して講演したのは、この時である。

越後タイムスは、その週間展望で「新憲法の精神を遵法するために、今後あらゆる困難を克服して努力と精進を怠ってはならない。いかに条文が善美であろうとも、国内に国民が相克摩擦し、暗と暗がせりあい、兄弟垣にせめぐがごとき愚をいつまでも続けているようでは、いたずらに世界のもの笑いになる以外の何ものでもない。社会道徳なくして、何の国際信義ぞや。発布された以上、国民は立派に運営していく厳肅な責任と誠実をもたなければならぬ」と、祝酒を口にする前に、先ず深い反省と心構えをもと市民にアピールした。

柏崎吹奏楽団は南町広場（疎開地跡）と公会堂前（帝石本社前）で、野外演奏会を開いてその雄々しさを示し、そのあと、午後の安静時間のあける療養所を慰問する。吹奏楽団は前月の二十五日夜にも祝賀演奏を実施している。刈羽地方事務所（現セントラル劇場）前広場の電灯が明るかった。キラキラと楽器があざやかに光を反射する。この楽器は、この比角一区の町会が寄贈したもので、それによって再建できた吹奏楽団の感謝演奏の気持ちも含まれていた。深みゆく秋の夜空に流れ渡るブラスバンドのメロデーが、暗い生活にあえぎながらも、あすを信じようとする市民の胸の中にしみとおっていく。

ただ、現実だけがきびしかった。十月十二日に日本史の授業は再開されたがスミぬり教科書だった。二月二十八日にはじまった公職追放の枠がだんだんひろげられてくる。十一月八日には地方選挙の追放範囲、資格審査基準が発表されて、街のうわさに輪をかける。前年九月二日以前から引き続き市町村長、助役、町内会長の職にあったものもその公職を一任期間、新しい人にゆずらなければならぬ。このために退陣する公職者は、柏崎の町内会長五十二名刈羽郡町村長十八名となった。これが百年史第二の夜明けの姿であった。

食糧危機

終戦の年十一月の街で拾った話である。

わたしの家は四大家族ですが、九月二十一日から十一月三十日まで七十日間、三十キロの配給米でおくらなければなりません。一人一日七・五勺です。これで弁当を毎日三つ用意しなければなりません。三日に一度は五つの弁当です。夜勤があるからです。

副食物といったものが配給されたのは、九月十日以後トウモロコシが二百匁、大根のカキ菜五十匁、さつまいも三貫七百匁だけです。このいもの分だけ米を差し引かれました。これで、どうしてやっていけるでしょう。それに、六月、さつまいも苗を十本配給してあるはずだから、さつまいも百二十匁を供出せよといってきました。ただ今、わが家にはさつまいものシッポありません。

家庭菜園を奨励して配給した数本の苗についてまで、収穫供出の指示が常会を通じてきたのだから驚いた。非常識のようだが食糧事情の急迫を思いしらされる。この一日から米の配給は二勺増ときまり、一日一人二合三勺となったものの、二勺の増配分はイモ類で、二合一勺も米だけでなく、麦や雑穀でというのであった。

二十年度の米作が凶作だったことが第一の要因であった。ころみに柏崎刈羽の年別実収高をみよう。

一四年 一九三、九一四石
 一五年 二一四、八六五石
 一六年 一八八、八五二石
 一七年 二三七、八九七石
 一八年 二〇五、九六六石
 一九年 一九〇、九九七石
 二〇年 一三五、六二六石

平年作十九万九千石をはるかに下まわる不作だった。ところが収穫予想高を十五万八百石とみた供出割当計画だったから、一万五千二百石の不足となる。これを一万三千戸の農家の保有米から割りだしてもらうことになっていた。

これは保有米の二割二分をさくことになるのだから、供出が難行するのではないかという不安があった。しかも、郡市合計七万九千百十石の供出量が百%完納となっても、食糧危機が六月にはやってくる、そういう暗い予想がよこたわっていた。

二十年度産米の供出期限を本県は二十一年三月十五日としたが「供米完納を急げ」の声が、市民の祈るような気持ちこめて湧きあがっても遅々として進まない。高柳が五日に完納のトップをきり、南鯖石が十一日、横沢が十四日とつづき、石黒、上小国、中里、七日町、千谷沢、武石、山横沢、中鯖石、高浜、荒浜と完納をみたが、全体としては六十三・二%という不振。この日になっても三十七%しか供出できない村もあり、五十%以下が六カ村、五千石から八千石の供出を担当する平場地帯の大どころに難色がある。

完納勧告状がだされ、要請がくり返される。供米報償物資が農家に配給される。四月十四日の分をみると、肥料十萬四千八百六十九貫、かま八千三百二十四丁、くわ四千三百九十四丁、除草機九百九十台となっている。この下旬には煙草五十四万本が配給される。鮭のかんづめ五万八千八十個、木綿八千三百四十八反、釜六百五十個、菅笠千個も特配される。一方に思わぬ事態がおきてきた。高田村の飯塚要助村長が供米不振の責任をとられて四月十一日辞職される。高浜、荒浜、中鯖石、石黒、二田の各町村長も辞職、供米危機は意外な面にまで波及していった。

四月十五日現在で、郡市供米八十一・五%までに漕ぎつけたが、このあとが思うようにすすまない。通例、供出高は保有米を差し引いた残りであるから、実収高の五十九%くらいにあたっていた。それが、この年は凶作で絶対量が減少しているところへ、実収高の六十六%をこえる供出となったのだから難行する。しかし、すこしでも前進させなければ危機が早くなる。重症状態となる。

六月三十日、柏崎市食糧営団の在庫米百十俵。

七月二日、北条村より十俵、武石村より二百俵入荷。合計在庫米三百二十俵。

柏崎市民一日分の消費量として必要とする米は、郡一般配給量に匹敵する百七十俵といわれていた。在庫は二日分もない。端境期まで六千五百石は必要とするのに、これでは見込みがたたない。ついに七月から九月にかけて飯米配給十五日分を欠配せざるをえなくなる。それでなくても主食不足の毎日なのに、十五日分の米がたな上げになるということは苦しい。それをしのんでも、まだ四千四百石不足、うち三千百十石を救援米として、供出不振の一市三村へ再割当、千四百二十石は中頸城からの移入を期待することになる。しかしこれは、市長、地方事務所長、岡田町会長、会会長、内山市議代表の声涙くだる懇請もむなしく実現できなかった。

主食を補うばれいしよ、南瓜の供出にも力を入れる。一番南瓜は豪雨にたたられて不良、二番南瓜三万貫は出荷時期がおくれそう。ばれいしよは幸いに順調で八月二十一日七十六・九%に達した。二田の百九十五%、七日町の百七十二%を筆頭に、荒浜、高浜、武石、南鯖石、横沢、中鯖石は完納、鶴川、北条、中通、石地は九十%をこえ、更に供出がつづけられる。やがて二十二万九千貫のばれいしよが米に代って配給される。

八月中下旬にかけて、連合軍放出食糧トウモロコシ四百三十六石（六日分）グリーンピース四十トン（四日分）が入荷し、小麦粉、未利用資源粉（残葉粉、海草粉、いも茎葉粉）など二日分、乾パン四食分が用意される。

七月十一日分、八月七日分、九月七日分の欠配のほか十日間の遅配となり、県下五市中最下位の苦境にたった。

二十年、二十一年、二十二年と野草食の時代が続いた。あらゆるものを利用して主食の補いをしなければならぬ。

子どもにはできるだけ米の部分を与え、親はモチ草を食べ、セリを摘み、イタドリの子葉をたきまぜる。田のあぜに緑の色を見ることができない程に、摘みに摘んだ。カボチャやサツマイモのつるや葉はもちろん、ドングリ、海草スベリヒユも食べる。軒ごとに熱湯処理をしたイナゴをほす風景が見られ、まるごすとポリポリとかみ、粉にして食べる。サナギも同様であった。

学校もワラビ、ゼンマイ等の山菜取り休業を実施する。消化はどうか、栄養はどうか、問うているひまはない。空腹をみたさなければならぬ。すべて栄養失調となって、だれの胸もやせさらばえ、ゴツゴツした洗たく板のようになった。さかんに粉食が奨励された。消化率は玄米食なら八十三%だが、粉化すると八十九%になり、パンにすると九十五%になると指導された。そのパンだが、二十年十一月に栄養パンと銘うって、苦心の研究食品が出現した。二つにわると、ボサボサとスジがでてきて、ワラくずのかたまりをかむ思いのするものであった。

このように未利用資源と称して食料化に血まなこになっている時、米は銀メシとたたえられ、一粒たりとも貴重なものになっていた。飯米を差し引かれる外食券を持たないと駅弁も買えず、食堂にもはいられない。宿泊を要する出張旅行には家族が犠牲になった。米を持たなければ旅館の客となることができなかつたからである。

二十年八月の刈羽郡病院の診療記録がある。大腸カタル五十六名、胃カタル二十三名、胃けいれん十四名、気管支炎二十三名、肺浸潤十三名、肺炎二名、肋膜炎二名、感冒十七名、かっけ四名。胃腸疾患が九十三名で総数の五割強を占めている。診療日数も長びく。大腸カタルで最高十六日、胃カタルで三十一日というのがある。胸部疾患も四名で二割強。これが郡病院としては一番ひまな月なのだという。粗食のおそろしさも日常のこととなり、抵抗力は衰えて、一歩つまずけば悪疾になやまされる。二十一年一月から傷い軍人新潟療養所を改称した国立新潟療養所は、ベ

ット数八百が満床となり、入所申込みしても、一年以上も待たねばならない待機患者が激増する。

軒下まで家庭菜園にし、庭の松にまでカボチャのつるをはわせたが、畑荒らしには手のつけようがない有様となった。粒々辛苦の大きなカボチャが一夜にして姿を消してしまふ。人道上的問題だと息まいても跡を絶たない。学校園の被害も例外でなく、職員が不寝番までする。荒浜では植えこんだイモ苗をゴッソリさらわれて、畑を裸にされる。中通配給所では一石四斗の米を徒党を組んだ一味にしてやられる。

学校では弁当が盗まれた。育ち盛りにじゅうぶんに満たされない子どもたちのあわれさ。自分の弁当を半分だけ手をつけて廊下の片すみに置き、それとなく子どもに与えた教師がある。戻された空弁当を持って帰るのが、先生がなし得たせめてもの愛情であった。グラウンド裏のグミ林（現一中校地）に、盗まれた弁当がからになって投げ捨てられていた。十数個さがしだすことが常であった。

やみ米、やみ屋、やみルートで、農家へこっそり米の買出しにもてかける。衣料を代償に、そしてやみ値である。

㊦でも二十二年を例にとると、二月三十三円の二級酒が四月八十九円、八月百二円の倍々式値上り、四月四円の煙草光が十二月五十円、七月十キロ九十九円七十銭の米が十一月は百四十九円六十銭と物価急上昇。やみ値のすごさは想像以上のものがある。市民のタンスはからになり、本箱はスキだらけになる。だから、やみ太りの農家、さかさまの世相と新聞記事に残る。市中に散見する美しい姿は農家の人であり、新円ほしさに物交で手に入れた反物を街に売りにくる。

街はやみ値のあらして年を送り、年が明けるところ、ストライキが各所でつむじをまいた。二十三年には柏崎神社前にむしろを敷いて、税務署職組によるハンガー、ストライキがはじまって市民の目をみはらせた。混乱の世相のなかに

で、人々の心もまたずさんでしまったのであろうか。

経済警察の目をのがれての買出しはひっしだった。市の出入り口の辻や駅で取り締まりにあり悲喜劇がくり返される。そして、かつぎだした米は押収される。二十年十月から二十一年七月十九日までに柏崎署に押収された米は、百七件四十俵と四升。市の食糧営団に引き渡されるが増配とならず、配給計画の枠の中にくり入れられる。

こんな時、原酒造店から営業用に苦心して確保してきた乾燥サツマイモ五千貫の無償提供があった。二十一年七月の欠配十一日の時だった。これが粉化されて主食代用に特配されたのが十月。一人あたり七十匁四十五銭。人心動揺、人のなさけにうるおうことも忘れはてていた時に、まさに干天の慈雨、一杯の粉汁をすすりながら、人々は人間のあたたかさを味わうひとときを与えられた。

この干しイモ製粉には後日談があった。製粉業者と市経済課の間で、一升一円の製粉加工料金が契約されていたのだが、加工料総額が三万五千二百円となるにおよんで食糧対策実行委員会の問題となった。すでに特配は終り、この製粉料が支払いできないというのであった。いろいろ協議がすすめられたがらちがあかず、翌二十二年二月、製粉担当の石塚善治氏が全額奉仕の申し出でをして解決となった。この時点であったからこそ、この人情二重奏は千金の重みがあった。

昭和二十一年二月の農家のおかみさんの話である。

亭主は留守、婆あさんと子どもは寝せつけた。その夜、だれか家のまわりを歩いているような気配がする。オヤッ、妙な不安に襲われる。たしかに二、三人の足音だ。裏庭から勝手口の方へ回ったような、こんどは玄関の方へ回る。「きたっ」と息をひそめているのに、とうとう雨戸をたたきはじめる。

もう血の気がひいて生きて心地もしない。どうしよう。納屋に米が十八俵ある。こんなことなら供出してしまえばよかった。わっと泣きたいようなせつなき。仕方がない、おとなしく渡してけがないように……

へたへたと茶の間のまん中にへばりこんでしまったのに、ナント来訪者は三軒さきのゴロエンの父うさんとあにさん。あすの朝の供出相談の使いだった。町の者が食うのに困って、農家を襲う。そんなうわさが流れていたばかりに、寿命の縮む思いをしたという隣りの村の実話である。笑い事ではなかった。戦前の秩序が音たててくずれたことと、食糧危機の深刻さから人間不信の、きびしくとがった空気が吹き荒れていた。

この年五月一日、「労働歌地方事務所を包囲」と書かれた柏崎市初のメーデーがあった。春雨に煙る街頭を労農三千名の歓呼に沸くと評された。理研広場を發した隊列は理研八百五十人、新鉄三百五十人、油機三百人、西川百三十人、柏崎局百三十人、三共電機三十人、理研無線八十人、東北配電三十人、帝石西山鉱業三十人、社会党、日農二百人、柏崎駅二十人、日共五十人、在日朝鮮人連盟二十人、帝石本社二百五十人、帝石柏崎鉱業五百人の順で、乱立するプラカード、組合旗にいろどられて延々五百メートル、地方事務所前（現セントラル劇場）にいたって大会が開かれた。

事務所の二階ベランダに設けられたマイクを前に熱弁が展開される。歓呼と拍手と熱しきった氣勢のなかで大会決議が朗読される。

大会決議

一、重要産業および官業争議強制調整絶対反対

一、生産管理弾圧絶対反対

一、強権発動絶対反対、農民自主供出の促進

中央ではメーデーに続いて、五月十二日世田谷区民の「米よこせ区民大会」十九日の「飯米獲得人民大会」と、主食の遅配欠配に対する不満と怒りをぶちまけるさわぎがあったことから、後日、この柏崎のメーデーも「米よこせ運動」と見るむきもあるが、ちよつと首をかしげざるをえない。

強権発動というのは、この年二月十七日に施行された食糧緊急措置令によって、主食供出に非協力的な農家に対して強権発動で米を収用しようとするものだった。大会はこれに反対決議をしている。そして自主供出をとなえたが、これは後段で述べるが、このためのあらゆる手段を講じて六月末八十二%がようやくだった。

大会の終りに近く、百川地方事務所長が進んでマイクの前に立って「強権発動は悪質農家を対象とするものであること、強権発動後も自主供出こそ希望すること、供出後の飯米については保証すること」などを強調するのだが、三千の労農大衆の叫喚は耳をかすどころではない。「農民に強権を発動する前に柏崎市内有力者の倉庫を摘発せよ」という怒声が乱れとどろ。所長が農地解放について触れるや非難ごうごうとなって立ち往生、ことばをつづけることができない。

農地解放は前年十二月二十九日に農地調整法が改正公布されて、この四月一日から全面施行となったのがはじまりであった。地主保有面積を平均五町歩と限り、小作料や農地価格を統制する第一次農地改革だった。更に十月の第二次農地改革の準備研究が進められている時であった。この自作農創設のための農地解放なのに、民主戦線万才のどよめきの中に所長の声が無視され、農民代表のすさまじい反対ののしりを浴びたのはどういうことだろう。これが歴史の新しい朝を迎えたということなのだろうか。叫喚と怒声のうずまく群衆の波は当時の人心動揺の世相を反映する

ものというべきものかもしれない。

このメーデーの翌日、遂に強権が発動された。前年度産米の供出が四月末になっても振るわない。田尻村六十四%、中通村六十八%、北鯖石村七十二%、西中通村七十五%、高田村五十八%。強権はこういう地域の農家に対して発動された。

十数名の係官が部屋ごとに、タンスの引き出しから便所のなかまで調べる。裏二階の物置から小豆二升、くるみ二升、石油かんに白米四升、納屋二階のわらのなかから白米五斗、くず米二斗五升、離れの土蔵二階の茶箱の底から白米五斗というように捜し出される。第一のこの家は、こうして飯米だけ残して白米九俵、くず米一俵がその場で収用された。この家は供出割当十四石五斗五升に対して供出は七石二斗で四十八%だった。実収十六石で、残り二十二俵分を昨年十月から食べ始め、現在残りは七俵、一日三升たくので（家族七人）八月下旬にはなくなるという弁明だったが、捜せばこのようにでてる。

調査官の顔を見て、その場で自主供出をする農家もある。村議、部落会長等が急ぎよ会議を開いて近日中に供米完納を決議する村もでる。強権は二日から二十七日までに、九市町村二十二農家に発動された。中浜の一戸だけが事実上の食いこみ、供米不可能の同情すべき点があきりしたが、自主供出五戸で二十四俵半、収用十七戸で白米、玄米くず米等合わせて八十七俵であった。

異常な決断のもとに執行した五月の強権発動であったが、不安な空気をかきたてたわりに収用米は柏崎市民の一日分にも満たなかった。米はなかったのだ。二十年度産米の供出状況が二十一年三月六十三・二%、四月八一・五%、強権に刺激されても六月の実績は八十二%で五分のびただけである。

四月十九日に郡町村長会がこんな決議をしている。

一、現在保有せる米穀を羽羽郡以外に移出せざることを、（これは後日、国の需給計画のため大論議の末、神奈川、愛知両県へ一万五千石さかねばならなくなった）

二、現在人口以外の者の郡内転入を極力防止すること。

三、挙郡節米運動を強行するとともに、ばれいしよ、南瓜その他早期に合う食糧増産に全力を傾注し、郡民をして一人も飢餓せしめざるよう努力すること。

こうした決議は空前絶後のものであろう。前年の大水害と干害、それに戦争による労力不足とゼロ肥料による徹底した減収が招いた食糧の危機であった。街に非難の声が高まるので、柏崎警察署が市内隠匿米の摘発臨検を四月十九日から十日間続けるといふ事態すら生じた。飲食店、自転車店、こうじ屋、その他物交容疑業者等約百五十軒が対象とされ、うち三十軒が摘発されたがうわさ程の大きくはなく、最高三斗、全体で十二石（三十俵）が発見されたにすぎない。

飯米危機非難の声は、やがて自主的解決への気運に高まっていった。五月三十一日、市内各町会長が妙行寺に集まり、直面する危機の突破対策の協議をはじめた。百川地方事務所長のアドバイスが大きいのだが、この危機に対決して消費地の飢餓を救うには、市民自らの手で打開していくより他に方法がないという自覚である。

同じ市民の中にもたとい幾日の欠配にも事欠かぬ用意のあるものもあり、一日の遅配にもろうばいする家もある。隣組の手によって各戸の米びつ検査を行ない、配給米の公正をはかることも対策の一つとして当然でないかと討議される。隣村への融合方策として市民の不急用品や防火用水タンクを農村に贈る。靴の無料修理券を贈り、農繁期には

針と糸の裁縫隊を派遣する。営団のトラック利用で塩水やし尿の提供を円滑にする。近く配給になるニシンや七万点の衣料の中から一部を農村にまわす、人間関係を回復して最悪の事態をできるだけ回避しようという意見が市当局への申し入れとなる。

地主も一人一日二合一勺とし、それ以上の保有米を全部供出せしめよ、隠退蔵食糧の摘発、ゆとりあるものの配給遠慮運動を起せ、こうした声を反映して県の食糧非常宣言が発せられ、刈羽郡食糧緊急運営対策委員会の第一回会議となったのが六月二十七日。農民も飯米をけずって供出に振りむける、なお不足分はばれいしよによる代替供出を促進する。柏崎市民に積極的な食糧辞退運動を要望するという申し合わせがでる。柏崎市食糧緊急運営対策委員会第一回会議は七月二日。市内供出未納分十二石の完納を極力促進する。自家貯蔵米保有者の配給辞退を要望する。農村の供出協力運動を切望する、市供出割当のばれいしよ一万一千九百貫は農家、非農家の区別なく完納するの申し合わせを確認する。

さらに十日には実行委員を三部門に分け、第一部門は未供出分の完納やばれいしよの供出運動、地主保有米の供出等の督励、第二部門は配給辞退運動、退蔵物資の放出運動、第三部門はばれいしよ購入資金獲得運動を担当。異常な努力となった。購入資金は市民税三十円以上の人から、市民税倍額寄附によって五万円の資金をつくることにする。非農家供出の非常識にいきどおりを持ちながらも、ばれいしよの供出は二十日には半分をこえる。二十二日には地主委員が昨年小作米として収得した保有米の三割と十五日間の欠配分計百十五石の供出を申し合わせる。市会議員、町会長は配給遠慮運動に率先垂範することにする。そんな余裕などないから町会長を辞任しなければならぬというさわざも起る。

なお窮迫をつける。遂に八月三日、柏崎市から「刈羽郡一万五千農家の友情に訴える」というチラシがばらまかれる。四日、刈羽郡はこれを受けて「刈羽と柏崎は同じ郷土に育つ兄弟同志だ。兄弟を見殺しにして新日本の建設はない。もはや理屈ではない」と飢餓救援米送り出し運動が発せられた。

九月、進駐軍から放出物資一・八日分がくる。神奈川県からさきの救援米のお礼としてさつまいも一万二千貫がくる。おなじく愛知県から王ねぎ、きゃべつ等の大量出荷の約束がある。北鯖石、上条、刈羽の各村からの救援米百五十俵が入る。石黒村の学童が救援南瓜千二百五十六貫をかづいだす。これは見返り物資をのぞまず、うち二百貫は気の毒な家庭へ無償提供という申し出がついていた。

二十一年度産米の早場米の供出に馬力がかけられる。さいわいにこの年は前年度より六万石の増収が見込まれる作況だった。九月十八日現在早場米供出柏崎の千五百七十七俵を筆頭に刈羽郡を合して三千六百二十五俵。二十七日一万三千七百三十俵に達する。十月二十一日、高浜町は七十五石の供出完納、県下供出史の新記録第一位。郡全体としても早場米割当二万九千石を五百二十八石うわまる成績で、全供出割当の三七・七%の好成绩。十二月八日郡八十五%、柏崎八八・九%に達し、二十二年四月十日には一〇〇・三%。しかし、全国的に作況が食糧危機を脱する状態ではなかったから、七月には料理店一斉休業の非常措置も生じた。二十六年一月の米屋登録制となるまでの食糧難は長かった。

徒手刻石

物心ともに貧相な最低生活の新生期は、よりどころを失った虚脱期といわれた。第三等国になりさがって人々は氣力をなくし、乗車券購入の行列に、第三国人が無法に割り込んで卑屈なまなざしをおくるだけだった。理不尽な暴力を目の前にしても人々は無関心をよそおった。だれもが正体をなくしてバラバラ、群れ動いただけだった。悪徳が悪徳でなく、汚れきったみにくい世界に身を投じて、そこから美しいものをさぐりだそうと公言する者まででできた。

しかし、この風潮のなかで自らの手で希望の灯を点じようとする、苦斗の記録がつづられ始めていた。名利をこえて生きがいを求めようとした百年初期からの命脈が躍動しはじめていた。その道は石を刻むににて、屈することのない忍従と、ひたむきな精進によってきりひらかれていく。同志的な信条と友愛によって結実していく。建設のおの響きは、ともすれば街の騒音にかき消されそうになっても、息ながくなければならなかった。その資料を以下数章にわたって記録しておきたい。

いの一番に起きた運動は社会体育活動だった。戦後処理に、去就に迷い、人々が右往左往している二十年九月、柏崎市特別体育訓練会の仮称のもとに口火がきられた。市民がぬけがらのようになっていても、あやしむことができないような時であったことを思うと、市内体育関係を一丸として構想を練るという、この氣力は偉大なものといわざるを得ない。事業の内容にすもう、水泳、海洋特技の訓練、運輸機関分解組立操作、訓練、模型製作、スポーツとしての柔道、弓道をあげ、剣道は特別指示あるまで行なわずとしてある。体育人の体支配性を更に中広い領域に向けて、

人間性を磨くという角度づけであろう。

追いかけて、視野をひろく北陸体育の共通問題を研究し、話し合う北陸体育人会結成の動きとなり、各県民間体育人三名ずつが準備委員、本町七丁目の一角に「柏崎市日本体育会北陸連絡事務所」の看板が掲げられたのが十一月。その二十六日には第一回北陸体育研究会が開かれている。

翌二十一年一月には米峰体育人会が発足する。郡市の教職員によって組織されたもので、一年後の名簿でみると柏崎四十名、刈羽郡百八十名、郡外五十名、県外十名、会員二百八十名となっている。かって昭和六年、十名の二十才台教員が銀鯨クラブを作って、解散を命ぜられるまで十年間「子どもたちに必要な体育とは何か」と真体育の祈りを掲げた時の会員が、多い時でも二十数名であったことにくらべれば、すばらしい盛況である。

バスケットボール、排球の郷別試合やスキー講習会を開き、新しい体育の在り方や教材の研究に口角泡をとばし、年三十円の会費でガリ版会報「米峰」を毎月発行する。この会報がすばらしかった。紙が手にはいらぬ時だから、何とかくめんしたザラ紙は黒っぽく、校務の余暇をみてのガリ版はお世辞にもきれいとはいえない。だが、紙面には体育向上への熱意が火花を散らして交流していた。教材研究にはなくてはならないものだった。

十月一日には体操クラブや体育団と三者共催で「体操と舞踊と音楽の夕」を開催した。十二月十二、十三日、他の四団体と共催した柏小会場の研究会は戦後のはじめの大きなものだった。みぞれまじりの暴風雨の猛威は鉢崎青海川間は線路流失、石地、高浜では家屋倒壊七戸、避難さわぎとなる日だった。鯨波、岬町の製塩工場十数棟流失、鶴川尻護岸も激浪にのまれて破壊、そういふなかでの研究会、山形、富山からも参会者があり、四百名出席という熱心さ。会員五名の研究発表、実地授業は柏小、比角小、枇杷島小、荒浜小の学童が集まって六学級分、それに研究討論

という内容。比角小の公開授業は三年生の虚弱児童を使って、研究をはじめていた「筋骨薄弱者に対する体操指導」を発表したもので、ますます自信を深めていく。

自らの手で開こうとする主体性が躍動しはじめていたのであった。民間社会講座も続出する。二十一年に開講されたものだけでも次のように列記することができる。

一月、田町常福寺を会場とする英語講習会をトップに、三月、二田村庭山信郎氏を中心にする農村自治大学講座。主任講師に寺田弥吉を招き、月三回以上開講、会費月一円、民主主義の本質、農村自治の研究、孟子の政治哲学から農村民芸、農村医学等十二講座を内容とした。この月四日から一週間、柏崎市の勤労学級が開設されている。工場、会社、事業所、農家等の指導的立場にある勤労者を対象。会場は市立青年学校。市内専門家を講師とする八講座。体操、音楽をとり入れる。四月十三日民主学園開講。松原伍一郎氏主宰。教科は英語、数学、物家、民主講座。修了期間三カ年。昼間部と夜間部あり、受講料月十円。会場は常福寺。六月十五日より毎土曜日開講の土曜講座は柏高女同窓会の主催。第一講座は第二、第四土曜、民主主義の歴史的展開を寺田弥吉講師。第二講座は第一、第三土曜、現代思潮についてを戸川良運講師。各講座七、八回連続。会費十円。受講は同窓会員に限る。七月五日から十日間、夏季労働講座。民主学園主催、講師は三宅正一氏以下九名。八月三日から毎日夜、駅通り亀井算道跡で実務学院。英語書道、珠算を輪番教授。十月十三日文芸大講演会。文化の反省（会津八一）良寛の現代的意義（吉野秀雄）越後タイムス主催。十一月二十三日、第一回柏崎美術会総合展覧会の開催はすばらしいことだった。大場通路氏の俳壇指導がはじまったのも、この年からである。

目標を失って、何をしてもいいのかわからないような虚脱期のなかで、きょうじんな青少年活動が台頭してきた。二十一年九月に起った社会体育運動につづいて、二十一年には更に進展する。この年、組織されたものを拾ってみよう。一月七日、柏崎女性文化会発足。強い身体を作るとともに科学、芸術、経済、政治等の勉強をして自信を高め、従来の依頼心を一掃して新日本再建につくしたいという願いをもって、家庭にある女子中堅どころ四十名の集まり。リーダーは布施達子、吉田直子、渡辺かおる、三井田とく子、宮川スワ、佐藤トリミ、阿部房子の各氏。お茶の会、音楽鑑賞、婦人参政権問題や政治座談会、婦人論から小切物の利用研究等の事業をすすめる。

二月十一日、柏崎女子青年会が柏崎校を会場にして結成式をあげる。会長に神林君子、副会長に大須賀美智子を推す。

二月十四日、新日本婦人同盟刈羽郡支部が西学校町曾田医院宅で新発足。支部長に田中きん子就任。本部の市川房枝女史を招いて、婦選に対する啓蒙運動を計画する。

二月十五日、かつての柏崎健児音楽隊の有志により柏崎吹奏楽団結成。団長山田英一。

二月十七日、日本児童文化研究会第一回事業「ひふみ会」比角校で開かる。

二月二十三日、らん（あい色のアイの字）洋社、タカラにて発会。

三月十日、第一回演劇研究会、午後二時より比角校にて開かる。会費三円。中心題「これからの演劇とらん洋社文化祭について」

この月、帝石混声合唱団五十名編成、新生女子青年会合唱団三十名編成、高女専攻科女声合唱団三十名編成が生まれる。らん洋社文化祭に出演するため猛練習開始。柏崎では始めての混声合唱団の出現である。

四月、声楽研究会発足。小熊哲哉、小山和子両氏を委員として男十名、女八名で発演。指導者は枇杷島校滝沢竹治先生。前者は職場合唱団として柏崎最初のものであり、これは研究同人による混声合唱団として、また本格的な研究団体として当市始めてのものであった。

五月四日、五日、比角の青年団、女子青年、少年団、養勇会（比小出身男子中等学生）呉竹会（比小出身女子中等学生）高勇会（比小出身高等科生）等の連合で「春の芸夢大会」を開催。

五月二十四日、二十五日、須田七郎氏主宰の「野ばら会」第一回の音楽発表会を諏訪町青木スタジオにて開く。

九月一日、柏崎市連合少年団結成。理事長西巻達一郎。この年一月九日、旧青年団幹部と旧連合少年団幹部が会同して少年組織について話し合ったが、政治教育を基調とする健友社を結成して運動を展開しようとする意見と、あくまでも少年の活動として健児道に精進すべしとする意見が対立して結論を得ない。更に十三日、引き続き結成準備会を開くが具体的な発展をみる事ができない。そのうちに柏崎健児団がいち早く復活する。二月十一日には本四昭和少年団が再発足する。つぎつぎと再建がすすんで、この連合体結成となったわけである。

十一月三日、柏崎市連合女子青年団結成。理事長和田幸子。

こうしてみると、窮乏生活を重くになっているはずの婦人の活動が特にきわだっている。

二月に発足したらん洋社の願いは、清純な文化活動を守りたて、少年のみとりにすることによって、地方文化運動への一翼に参じようというものであった。発会記念行事に文化祭をとりあげたのも、野火のようにひろがっている低級下劣な青年芸能に恥じ、伊奈の勘太郎や広東の花売娘から一日も早く、離乳する時がくるようにと願ったものである。自らを高めようとする者の結束に役立ちたいと念じた。

四月十四日、文化祭「音楽と舞踊の夕」は柏小西運動場に二千名が会し、四氏八団体が出演。芸術的香り高い雰囲気陶酔したと記されている。入場料一円による純益四百九十九円十銭は、社会事業助成金にと市に寄附。

このらん洋社の結成委員を列記しておく。

近藤祿郎、神林栄一、小林治助、松田政秀、月橋套、洲崎恒一郎、笹川芳三、星野徳一郎、三宮勉、西巻達一郎、長納円信、萩野秀雄、山田英一、渡辺廉造、高橋芳造、岡塚亮一、有居政治、松村正吉、大橋士郎、中村徳衛の二十氏だった。

今日の柏崎市演劇連盟の母体となっている柏崎演劇研究会には、三人の生みの親があった。近藤祿郎、寸土栄都、小熊哲哉の三氏である。寸土氏がその児童文化研究会の効を急ぐのあまり、青年演劇を再興し、その正統を高めた名指導者近藤氏を疎外することになり、結果的には、近藤氏は比角羽森クラブ、ボーイスカウト、ガールスカウトの演劇活動を盛りあげ、演劇研究会のよき理解者として協力助言する立場に立ち、寸土氏は第一回公演はどうか切り抜けたが、小熊哲哉氏に助を求めねばならなくなった。以後、小熊氏を中核として今日まで、演劇による人間性の追求が経済的にも自主自律、会員の親密なスクラムによって続けられてきたものである。

第一回公演は「乳」。この年四月二十二日、二十三日、柏新社主催の芸能祭における柏崎映画劇場のステージであった。記念すべき初練習は三月二十七日、近藤氏の指導による浄土寺本堂においてであった。このあと寸土氏が手を使ったわけである。

全国優勝を数度記録し、四十三年十一月二十四日、公演二百回を記録する。職場を持つ人々たちによる伝統創造の結晶である。

子どもへの構想

戦後、柏崎の三奇人とささやかれた人があった。ひとりとは古銭に一生をかけた内山無磨庵老、ひとりとは「名も無き民間人にすぎないが、軍から将官扱いされて川上参謀と呼ばれた」と自称し、日共系の婦人の革命は歴史的必然だと思いますが」という質問に「あなたは聖徳太子のキンサン主義をご存じか。マルクスも孫文の三民主義も、この亜流でしかない。これを知らずして共産主義を信奉するのは笑止」と煙にまぎ、途方もなくデカイ話の講演が好評だった保険の川上氏。もうひとりとは日本児童文化研究会活動をおこして、N JCSのバッジを柏崎のシンボルであるかのように輝かした寸土栄都氏である。

戦時中、中島飛行機の部品工場だった本二の高熊家へ長野から会計係としてやって来て、いくばくもなく解雇、そのまま在柏。日大芸術科中退だそうだが、出身は大阪ということだ、という程度を知らずして、どんな経歴の人か、だれも知らない。その人が柏崎の文化史上に大きな足跡を残すことになった。

戦後の混乱のなかで、子どもたちは着る物もじゆうぶんでなく、はく物もなく、食べる物もない。読むべき本もなく、遊ぶ道具もない。目にし、耳にするものは精神的に荒廃した風土だけである。浮浪児のように汚れていく子が目だってくる。この子どもたちに新しい生命の創造を期さねばならない。そして、そのためには青年を文化的に組織しなければならぬ。これが寸土氏の発願であった。

寸土氏が児童文化研究会としてスタートをきったのは二十一年二月十七日、比角校を会場として「児童のための音楽と童話の会」を開いた時にはじまる。この記念すべきプログラムは、童話、「粉屋のおばあさん」（大洲校大橋先生）、「山の王様」（商経会高橋先生）、「昭和の桃太郎」（寸土栄都）、音楽、ピアノ独奏（野田校小林先生）であった。これは一、二、三年生を仲間とする童話、音楽、舞踊、児童劇、ゲーム、お話の会で「ひふみ会」と名づける。四、五、六年生の「たちばな会」は四月二十五日、第一回を大洲校で開く。いずれも毎日曜の集会。やがて柏盛座や文化劇場も使用して、ニュース映画や文化映画を教材にする。会費は一カ月五円、前納制であった。子どもたちが遠い道でも喜々として出掛けたのはもちろんである。

会員募集は十七才以上、男女を問わず、会費年額十二円前納、振替口座東京四二三六三番、柏崎局私書箱第九号。花火を打上げるように次々と企画をすすめる。

俳句研究会の第一回は三月二日、毎第一、第三火曜、会場妙行寺、大場通路指導。

短歌研究会は毎第二、四木曜、浄興寺太子堂会場、大橋士郎指導、会費一円および炭ひと握り。第一回三月二十八日。

邦楽研究会、毎第四日曜、会場タカラ、品川正三指導、第一回三月三十一日。

宗教懇話会、会場浄土寺、土屋観道指導、第一回四月七日「宗教とは何か」で開講。

映画研究会、第一回は四月十九日から二十三日まで柏盛座の「若い人」自由鑑賞、会費一円五十銭。第二回二十五日「若い人」座談会、会場浄土寺。

六月二十九日、石井小浪一行を迎えて比角校で新作発表会。八月二日、女子商業講堂で国学院大学植木真一郎教授を迎えて第一回文学研究会。講演「日本古代文学について」会費一円。九月二十九日、公会堂屋上で海王星発見百年

記念集会。やがて芹田氏を講師とする政治研究会が発足し、文学部門は蓮池氏が講師となり、短歌部門に松田講師が加わる。岡塚氏を指導者とする詩研究会がのびる。

会員八百名、県下まれな大組織の文化団体として盛りあがる。郡部町村の学童慰問に童話と舞踊、音楽班をしばしば送る。入場料はジャガイモ二、三個で、これはその部落の食糧に困っている人のために配ってもらう。このために応援出演する人も無報酬、出演費自弁のサービス。石井綾子氏の奉仕が多かった。

柏崎連合青年団と連名で、柏小西運動場にステージ建設運動を起したのは二十二年六月。予定額十五万円、十円募金をはじめ、五カ年返済で賛助者から借り入れる。マイク施設を二万円で契約、この資金も一口二百円の賛助を求め二十カ月返済とする。柏崎第一号のステージは七月末に完成したが、経理関係が、あいまいになってしまった。しかし、ステージがあるために前進座をみることができ、巖本真理、藤原義江、平岡養一、ぶどうの会などの一流に接する機会を持つことになった。

出版活動も「NJCS マンスリー」を発行したり、「かしわざきぶんこ」が続刊され、同人雑誌「北門」発行となつたのが二十四年一月。ところが会費前納の約束の事業が消えてしまったり、経理不明が不信感を招き、岡塚、近藤松田、高橋、小熊氏等の立て直しの苦勞も水泡となり、この年七月以降、自滅のみちをたどってしまった。児童文化を、寸土氏が私物化してしまったことは惜しいことだった。

二十一年七月発刊の越後タイムス社の「子どもタイムス」も、心の糧を子どもたちに送りとどけるものだった。月二回発行、一部五十銭。当初の編集スタッフは柏小五十嵐吉郎、伊部与一、比角小上杉盛勇、大洲小田村孝、枇杷島小藤巻金一の各先生。子どもたちの心を豊にしたいという五十嵐先生の願いがみのつたものであった。郷土の子たち

に郷土人による読み物を、子どもたちの対話の場を、発表の場をと、二十四年十二月、八十号をもって役目を終るまで続けられた。

教育復興

戦時中の二十年四月、帝石本社が二百万円の金を集めて財団法人帝国石油学院を組織し、学院の事業として柏崎鉦山専門学校を開校したことがある。柏商校舎を借り受け、採油科の学生百二十名が募集された。当時、石油事業の高級技術者として毎年、帝大から二十名、秋田鉦専から八十名送りだされていたが、さらに柏崎から百名送りだそうとするものであった。ところが、終戦となって石油機械の生産はポツダム宣言の禁止産業となり、南方資源開発の雄図を抱いて入校した若人の夢も破れ、学院は一年にして解散せざるを得なくなった。志望を新たにする学生は立教理科工業専門学校に転じ、郷土に専門学校の願いは一朝にして消え去った。

同時に襲ってきた生活の危機に、人々はもう他を省みるゆとりを失なっていた。そういう時だからこそ、新たな構想による専門学校を表現させたいと、熱意をもちやす々があった。下条恭兵、三井田市長、石黒武夫の三氏に、西巻達一郎、松村正吉氏等が産婆役をつとめた。そして星野徳一郎、田辺信一の両氏が登場する。

二十一年一月、上京した石黒氏は、下条氏が日本再建のために、日本橋に所有しているビルを利用して私学を興そうとしていることを知り、これを柏崎に持ってきてほしいと懇請したがいれられない。私学の経営は東京ならともかく、地方では非常な困難が伴う。全市的な協力が得られるかどうか。下条氏があやぶむのも無理からぬことである。

二月、再度上京した石黒氏の要望で下条氏も帰郷、西巻達一郎、松村正吉氏等有志と会員、ここに私学建設の決意がかたまる。農科を中核とする専門学校という構想で出発したところに、郷土の立地性と時局認識にたつ独自の地方教育計画の苦心であったことを知る。星野氏を中心にして調査準備がすすめられる。

五月、男女共学制、農科、経済科、土木科の三科、定員百名、九月開校予定で、日本油機製作所職員の星野、田辺両氏を中心に準備事務所ができる。社長の下条氏は東京の会社事務所をそれにあてる。ところが、当時の進駐軍司令部が技術関係の学校新設を許可しないので、経済科を主軸とすることに方針を変更。校舎は理研の松井、伊藤両氏等の好意で理研青年学校を犠牲的な価格で提供してもらうことになる。

九月開校予定といっても、そうはとんとん拍子にはいかない。しかし、教育活動は一刻も早く起したい。それが今日の急務ではないか、すこしでも有用に活動しようという星野氏の発想で、創立事務所内に柏崎高等予備校が生まれた。上級学校入学志望者を対象とし、第一期開講は九月十五日。毎日十二時半から四時半まで授業、男女共学。課目及び講師の顔ぶれは次のようであった。

数学（文理大出身難波常作）、国漢（元長岡中学校教諭田辺信一）、英語、支那語（東京外語出身齋藤浩一、前柏商教諭星野徳一郎）、物象（前柏中教諭村山省吾）

専門学校設立の母体として、下条氏を代表とする基本金五百万円の財団法人柏専学院が組織され、設立認可の申請書がその筋へ提出されたのが九月十九日。書類上の校長は菅原甚一氏であった。氏は秋田県出身、東京府立四中から一高に学び、東大法科を卒業、当時は下条氏の秘書のような仕事をしていた。文部省に対する準備工作には、三井田市長が献身的な努力を続ける。

文部省が示した難点に三つあった。

一、人口三万の町では専門学校存立の可能性がない。

二、資金の問題として、果して継続の可能性があるかどうか。

三、地方にあって教授に人が得られるかどうか。

交通網の将来性と広域性を説き、学校を私物化する意思なく、数年間の基礎づくりが自分の任務であることを力説し、新しい人物地図の可能性を青写真として説得につとめる。

十二月二十二日、創立認可の下検分に文部省督学官来柏。敗戦直後としては各方面の新設校のうちで、最も立派な校舎であるとはめられる。

二十二年三月、文部省より設立認可。初代校長は柏商校長から大連高商教授にすすみ、今回引揚げてきた土田秀雄氏。六月より仮校舎（旧柏農校舎）で授業開始。九月七日、森戸文相の臨席を得て開校式をあげた。

二年後、新学制実施によって短期大学に進むべきか、特殊学校として止るか、二者択一の立場に追いこまれ、前者を選ぶ。柏崎に短大が生まれたわけだが、大学教授の適格証を持つ教授を七、八人は迎えねばならぬ。蔵書が五千冊以上なければならぬ。下条氏が月収の大半を図書購入費に投げだし、坂野教授が上京、神田、渋谷の古本屋あさりで書物集め。経済関係五千冊をそろえる、これは新潟短大史に残る苦心談の一つであろう。

県立柏崎養護学校の前身、新療学園の誕生も療養教員の悲願の結実として記録しておきたい。

療養学童のために学園をという運動を起したのは、二十七年三月二十一日、笹川が教育者療友会の幹事長になった時からである。たんこップを片手に車を走らせ、帰寮しては熱に苦しみ、肋骨を六本きりといった痛い体看護婦に支

えられて新潟にもでる。命がけの運動だった。深夜。文部、厚生省方面への陳情書を起草して、石黒通夫、丸山員弥の三人で誓いを新たにしたりする。近藤祿郎氏等の援助に支えられた六年間の運動だった。

戦後の教育は何をすべきなのか、そうもたえながら教師も人間である、敗戦にうちのめされ、虚脱状態にあえぎ、放心のうずで沈んだ。しかし、その間も成長してやまない子どもがいる。指導理念の百八十度の転換、頭の切り替えに教師は苦悩した。この子らに対する指針は、教師団みずから打ち出さねばならない課題であった。

終戦後二カ月、柏崎小学校の教師団がいち早く、勇をふるって立ち上がった。二十年十月、報道教育の強化に取り組む。今日という視聴覚教育である。校内放送活動を中心に、組織的に取材活動をすすめ、資料学習によって、個人的に弾力性をもった資質の伸長をはかろうとするものであった。課外の活動が盛んになり、十月三十日には文部省教育官岡源次郎氏を招いて、同校科学少年隊の活動を中心にして研究会を開く。

二十二年十二月一日から四日間、北信四県学校放送教育研究会が柏小で開催されたのは、この実績によるものであろう。参会者千名に近く、放送教育研究と技術講習を内容としたが、みごとに柏小児童の放送活動は啓蒙的役割をじゆうぶんに果たした。

柏小と前後して教育復興活動を起した学校が、もう一校あった。この学校の仕事も県内に注目され、その研究内容は東大教育学の研究対象に採りあげられ、文部省の指導要領作成の資料となり、全国的にモデルスクールとしてみられるようになった。二十五、六年ころには関東方面からの視察者が相ついで来校する。そうやってこの研究同人は、はじめて意外な反響に気づいて驚く。ただ念じていたものは、このはげしい現実の社会環境の中で生きていく能力と生き方、望ましい性格と実践力を育成するために、組織された経験の力動的な展開と、それを促進させる正しい方法の示唆を誤りなく伸展させたいという、ひとすじの願いにひたむきになっていたからである。

その学校の名は比角小学校、女教師十二名を含む二十六名の同人が、火の玉のようになっている教育実践であった。二十一年、教育復興五カ年計画の樹立、

施設設備の充実、環境の整美、教育課程の改造を柱にしたが、すべてドン底から立ち上らねばならない。民主社会への教育を志向すべき時とわかって、ザラ紙墨ぬり教科書の時で文献など手に入れるすべもない。自主自発の学習活動を各自の創意工夫によってすすめる。

子どもたちの年中行事を、新時代にふさわしいものに設計しようともした。自作の紙たこを持ち寄る「たこあげ大会」では、いろいろな型のたこが出現し、たこの科学を遊びながら楽しむ。校庭に大きなサイの神をたて、各学級作詩作曲の歌をうたいまくりながらドント焼きもする。

二十二年、子どもを見つめる活動と生活学習の実践第一歩。

他の学校より五カ月早く社会科学の研究実践に着手。はじめて取り組む教科なので、この研究交換や検討は連日おそくまで続けられるのが常であった。

個人差に応ずるための教育診断は、各教科、学習形態から知能検査、情緒安定性検査、向性検査等の各種検査、疲労測定にいたるまですすめられて、ガリ版百枚をこえる上下二冊の「児童調査」の発表をみた。

この年から夏の休暇も返上の形になった。理論的な学習や相互研究、実践検討にたっぷり時間をかけられる期間であったからである。

二十三年、教育目標実践計画と効果判定の基準表作成、

この春、前年度から集成作業をすすめていた学習実践記録を「親と教師におくる、子どもの世界」として、東京牧書房から出版。古谷綱武氏の絶讃を受ける。前年から比角小の客員として文部省井坂行男氏（現東京教育大教授）との交流いよいよ密となる。

新しい仕事は正しい道をとったと信じつつも、客観的に効果を判定するのではなければと、目標実践計画と判定基準表を生む。その上で更に信を問わねばと大研究会を公開する。単に学校での子どもを見てもらうだけでなく、子どもの生活もということ、参加者は子どもの家庭に民泊するというものであった。

二十四年、教育課程の改造一年次案構成。

第二回大研究会を開催、前年同様参加者六百名。改造新課程の発表。この時、批判を請うた内容は生活単元計画、学習課題表、ガイダンスプログラム（生活指導基本計画）、学習能力表、学習活動排列計画、基礎学習における教育計画、効果判定基準表等であった。

九月「学習評価の方法と実践」牧書房から出版。二十二年からの準備はここまできた。

二十五年、第二次案と資料単元作成。

教育課程はたえず実践結果を集積しては改訂を加えていく。だから、この検討作業十二カ月というべきものである。

だれでも、いつでも指導できるようにと資料単元の作成に着手。一単元一冊、四十八冊五千ページをこえる仕事であった。すべてガリ版印刷である。この大事業は翌二十六年にわたる二カ年の労作となった。同じように二カ年にわ

たる研究に標準テストの作成があった。

「この苦吟はわれわれの祈りであった。困難な事情を克服して知る喜悦の道であり、至難にみちた道程でもあった。」と記されている。荒野をひらく血みどろの努力、栄養失調の体にむちうって、寝る間も惜しみ、エネルギーを燃焼しつくすかと思われた教師団、職務と責任の特殊性を自力で確立していく営みがそこにあった。

アンプル精神

終戦の十二月二十二日、第八十九臨時国会を経て労働組合法が公布されてから、翌二十一年にはいると組合結成の火の手が上がり、まず団体交渉権の確立と待遇改善にエネルギーが集中された。労使ともに、直面している生活恐慌のなかで将来への芽を育てねばならない。

二十二年、二十三年と時を送っても、インフレと物資不足はシーソーゲーム。柏小は一夜に窓ガラス二十数枚をはずされてしまう。各校連夜にわたるガラス盗難にはんろうされる。衣類の盗難も続発、二十二年二月の例でみると柏崎市十四件、被害額六万八千七百九十三円、刈羽郡二十四件、被害額二十万九千四百四十二円、破蔵、忍び込み、あき巣である。二十二年九月一日、柏崎青年団が復活第一回県青年団大会の弥彦グラウンドで優勝した時は、女子選手までワラジをはいての力走だった。こうした事例が、当時の市民生活のとぼしさを語っている。

大事な電力事情もますます悪化。二十二年の十一月には、遂に電力使用禁止時間が、住宅および業務用電灯では毎日午前六時半から午後四時三十分まで、工業用および産業用電力では毎日午後四時から午後九時半までとなる。灯数

制限は、商店では二灯まで、一般家庭は一世帯一灯厳守。電熱器、広告灯、看板灯は禁止。これでは産業活動も動きがとれない。

当時、本県の一日所要量は十四万KWなのに、一日供給量は日発割当一万一万三千KW、東北配電の発電分三万—三万五千KW。これでは三分の一しかみだされぬ。柏崎の需要量は理研、帝石の大口を除いても四万八千KWなのに、供給量は二万六千KW。だから十一月三十日、柏小東運に各工場代表や市民が集まって、電力獲得市民大会が開かれるもする。三万ボルトの送電線を六万ボルトに切り替える工事の促進、中小工場の打撃くいじめ運動を議し、各地区に電力自給会を設けて、一灯主義や電熱使用全廃の自粛運動を強力に展開することにする。市会もまた、電力危機突破対策委員を設けて独自の対策に取り組む。新柏崎の建設は、こうした泥沼のなかから出発した。国初のころの修理固成にも似た、陣痛の苦しみであった。

労働争議に長期型が記録されているのも、その一つの事例であろう。二十一年九月六日闘争にはいり、十月五日完全スト断行の帝石争議が解決したのは十月十七日。この時は九月八日、支援大デモと称して十三労組三千名が街頭行進をした。新鉄ストは同じく九月十六日から二十八日までの十三日間。二十二年七月七日からはじまった柏崎産業のストは三カ月たってもおさまらず、会社の存続問題にまで波紋がひろがってしまった。

預金封鎖からくる金融の硬直、原料資材の高騰、入手難、生産流通の渋滞、労働賃金のアップ等で軒並みに経営が困難となる。日本油機柏崎工場の例を二十一年七月二十八日の新聞でみると、二十二日、職員十五名、工員三十二名の人員を整理し、全従業員に二割の減俸を行なっている。二月に工員十二割、職員十割の一斉増俸をしたのだが、経営状況は悪化するばかりで、このままなら全員一率四割の減俸を余儀なくされる。この実状を労働組合に打ち明け、

整理案の骨子は労組自身の手によったものだという。その後、幾たびかの危機も若手社員の歯をくいしばっての努力でぎりぬける。そのたくましさや今日の油機の基盤を築き、支えとなっているのであろう。

戦後、農具家具の製作に転じた荒浜地区柏崎産業株式会社は、二十一年五月から海務型二五馬力焼玉エンジンの試作に着手、八月十三日、第一号作品の試運転。量産計画にはいり、二〇〇馬力エンジンの開発、木造船の建造等をめざす。

二十二年二月、柏崎理研農工では、理研栄養薬品柏崎工場として理研カフェナル、同ビタミンBワン等の製造も担当してきたが、こんどは同社全製品の販売も担当することになり、東北、北海道方面への販路拡張にのりだす。パークテリア利用の合成調味料試作にも成功、企業化が注目される。

こうした自主開発が悪条件のなかで開始されている時、商工会議所の設立準備がはじまる。二十一年九月十日、四銀楼上での準備会には各業界代表六十名が集まる。はじめ二宮伝右衛門氏議長となり、あとで巻洲藤吉氏議長を代行十九名の小委員会を構成して細部の研究をすすめる。十月十一日、創立総会。社団法人柏崎商工会議所発足、会員二百九十四名、初代会頭巻洲藤吉、副会頭泉三郎、笠木恭平。

西川鉄工所とともに、敗戦による賠償工場の指定を受けた理研は、賠償施設のある建物には立入禁止だが、二十二年九月にはピストリング月産十八万本にこぎつける。七月には第一回朝鮮向ピストリング八万本を出荷、九月第二回として四万本、第三回は中国、シンガポール向け十一万本輸出の許可をとり、モンキー、レンチの輸出開発をめざす。

旭物産会社が県下最初の電球製作を計画、月産十万個を目標に活動開始したのは二十一年の九月。そして、天然ガ

ス利用のアンブル製造業が柏崎の新興代表産業の一つとして、全国でも屈指の産地に発展する。不二ガラス、新野、久保田等の有力メーカーを中心にして十数工場、従業員数百人。二十五、六年ころは市の授産対策としてアンブル工養成所まで設けられたが、中央の機械化生産が整備されるにつれて対抗できなくなる。しかし、その開拓者らしい気概と団結と英知は各界に生きる精神となって流れる。工業生産三百億円を突破した郷土の今日に、そのあかしをたてたい。

「柏崎百年を終わって」

きのうまでの「百年回顧」のブームから「百一年」のきよの平常が戻ってきた。人々の足どりもきのうと変わらないかに見える。そう見える足どりに力が加わっていないか。姿は変わらないが、その中に新しい要素が秘められたのであろうか。意識せずとも、活性はい芽が魂の山脈に打ちこまれたのであろうか。やがて爆発する生きがいの意欲となり、英知を、創造する力を、勇気を、結束を生み、人間的な祈りを形成しつつ二百年史への道をきりひらいていく。そういう日常性への期待に、自らの胸をふくらませ得たであろうか。「柏崎百年」の稿を終わって、ふと、そんな感懐にとらわれた。

柏崎百年の起伏は、たしかに過ぎ去った事象の連続である。そして、昔語りを楽しむのは老化現象のしるしであり、回顧趣味は史実を列挙する好事家の満足感を満たすだけだということのも本当であろう。「柏崎百年」で、わたしに与えられた課題はそういうものであってはならないのだと、自戒しながら作業をすすめたいと願った。

315 麻から綿にうつる国民衣料の交代は時の流れであるとしても、悲願五十年の絹産業への開拓には郷土人の意志がひ

らめいている。水道問題の解決が、当時の「人間の責任」として果たされたものであることを、資料が証言している。一年が五年分にもあたる、ちよっと気をゆるめると追いつけなくなる、そういう実感をもってささやかれた戦後の退廃からの再建は、市民運動かともまがうスピードアップによった。人の問題であった。

「柏崎百年」は史実の連続、時の流れというよりも郷土人の働きがうつっている。その人間を見たかった。その一こま一こまは、すでに歴史の一節となっているが、そこにある人間性は、今日の社会に生きているということができているのではないか。その生き方が、人間性が今日の問題に共通するものであり、多くの暗示を語りかけている。わたしの「柏崎百年」は、そういう観点からの対決を試みようとする努力した。

柏崎日報社による「子どものための柏崎物語」では、じゆうぶんな準備期間があった。それすら執筆中に、資料の調査研究に連日苦しんだのだから、不用意に出発した今回の「柏崎百年」は、文字通り陣痛の苦しみをかみしめねばならなかった。テーマは生まれるのに、証言してくれる資料がない。新しい資料を発掘しなければならぬ。山田良平小熊哲哉両氏の助言をたよりに駆けまわり、図書館にはずいぶんと迷惑をおかけしてしまった。おかげで、一期、二期、三期それぞれに、新しい資料を証言として提出することもでき、新しい問題をまとめることもでき、これまでの盲点にいどむこともできた。それだけに別の意味では、同人に対する問題提起ということであろうか。討議資料として、意味づけを深めていただければ幸甚である。

採りあげたテーマの中には、実は、党利党略の小都市的前近代性が渦を巻いたものにくつかぶった。それはそれなりに意味をもったと思うが、わたしの「柏崎百年」では意図したものにより接近するために、そうした類の問題には触れることを積極的にはしなかった。

「筆がすりきれたのか」ここで終わることについて友人は不満のようである。戦後の柏崎史では、まだまだ見つめねばならぬ問題がある筈だから、不満は当然であろう。しかし、第三期の初期に、わたしたちが体験した言語に絶する悲惨な生活があったことを証言できれば、わたしの目的は一応終わりとする計画であった。戦後史はめいめいの胸の中にたたみこまれていからである。

明かるければいい。楽しければいい。面白いのが好きさ、と、あそこを見、ここを見、そわそわと落ち着かず、たましいのありかなど考えたこともなく、そしてあすもまた、同じきのうきようをくりかえしていく。こういう群盲風俗が今日の縮図であってよいのだろうか。きびしく、むごたらしくさらされて尚、気力の郷土生活を、今日にまで前進させた「人間の責任」に心をとめる日を待望してやまない。

「週に五枚か六枚」なら、たいしたことはないと小熊さんに約束したのが運のつき、とうとう二年三カ月書きつづけてしまった。「柏崎物語」の時と同じように、終始夜間作業であったから、精神集注にはよい訓練となったがベースがくずされると大変だった。来客、用務他出となると、ベースを整えるのにひどいことになる。毎日三時間ずつ、他の方より多く起きていたとすると、この期間、わたしは百日余計に仕事をしたことになる。百日分長生きしたことになって、思わぬ余得を得たわけである。最終回の原稿を十日の午前二時に書きあげた時は、さすがにホッとした。いささか疲れもした。これから二年間、資料をだしっぱなしにしていた、紙くずかごのような部屋をポツポツそうじをすることにしよう。二年分といっても、たいしたゴミではなさそうだ。

このたび「柏崎百年」の出版を、柏崎週報創刊五周年記念事業としてお探りあげただけことは望外の喜びである。単に、わたしの書いたものが本になるという喜びよりも、郷土の形成を人間の責任の歴史として読みとり、郷土の意志を体臭をもった生活として語りあう広場が設定されることの喜びからである。同時に、読み捨てられて消え去るのが普通の一市民の労作に対して、社会的使命を持つ新聞社が採算を度外視して、その事業系列に組みこんでくださったことへの感謝の念にはかならない。手にずしりと重みのある美しい本に仕上げるために、企画、準備、進行の一切を担当してくださった柏崎週報の小熊哲哉さん、週報同人のみなさんにお礼を申しあげます。すっかりみなさんのご厚意に甘えてしまって、ご迷惑をおかけするばかりでした。

わたしにとって感慨無量なのは二年有余にわたって、本務関係の仕事をかたづけたあとの、それこそ名実ともに連夜の作業による集積を、このように整えていただけただけでなく、一生をかけた教育界から去る時に「柏崎百年」が美装して誕生するとう奇縁を思うからである。

昭和四年の教育史の教室で「教育は自分をたえず成長させている人でなければ教えることはできない」とルソーのことを耳にした時から、このことばを体現する日常を夢見た青春の祈りの故に、「柏崎百年」をわが人生の道標として自らのげまじとしたい。

この道標をすえるためには、多くの方から資料を提供していただき、アドバイスをたまわり、はげましをいただきたいことを忘れることができない。

ここに深甚な謝意を表するとともに、ご愛読くださる各位に敬意と祈りをささげます。毎回掲載するたびにご注目くださり、特に序文をお寄せいただいた西巻達一郎さん、ご推薦くださった柏崎市教育委員会大橋教育長さん、柏崎

市小中学校長会、刈羽郡校長会、および印刷製本を担当され、格別のご配慮、ご熱意をお示しくくださった合同印刷株式会社の各位に厚くお礼を申しあげます。

昭和四十四年四月一日

笹川芳三

柏崎百年正誤表

頁	行	誤	正
27	11	土地	地土
28	2	郷士	土郷
67	15	貢祖	租貢
67	16	貢祖	租貢
86	10	のか	がの
101	12	小結と	に小結
102	1	あつと	とあつた
166	16	猪藁	股猪
177	12	諸民	氏諸
182	4	水数	質水
198	11	二・	六二
200	11	紙は」	「紙は
202	9	英次	治英
226	3	味樽	噌味
229	15	共国	同共
238	15	駅は。	は駅
257	7	二、二合	二、三合
257	15	半復	復反
258	9	生活とと	と生活
318	10	と う	うい

柏崎百年

定価 一〇〇〇円

昭和四十四年七月十日発行

著者 笹川 芳三

発行者 小熊 哲哉

印行 合同印刷株式会社

発行所 柏崎週報社

柏崎市西本町三丁目三十二四
電話 柏崎(2)三九六二 振替新潟二〇四

柏崎百年正誤表

頁	行	誤	正
27	11	土地	地土
28	2	郷士	土郷
67	15	貢祖	租貢
67	16	貢祖	租貢
86	10	のか	がの
101	12	小結と	に小結
102	1	あつと	とあつ
166	16	猪藁	股猪
177	12	諸民	氏諸
182	4	水数	質水
198	11	二・	六二
200	11	紙は」	「紙は
202	9	英次	治英
226	3	味樽	樽味
229	15	共国	同共
238	15	駅は。	は駅
257	7	二、二合	二、三合
257	15	半復	復半
258	9	生活とと	と生活
318	10	と う	うと

柏崎百年

定価 一〇〇〇円

昭和四十四年七月十日発行

著者 笹川 芳三

発行者 小熊 哲哉

印行 合同印刷株式会社

発行所 柏崎週報社

柏崎市西本町三丁目三十二四

電話 柏崎(2)三九六二 振替新潟二〇四